

海峡

愛媛県

泥臭く文学の真の力を

「紀子姉」の作者藤井総子さんは、同人雑誌「海峡」の草分けの一人です。

「海峡」は今から二十四年前の一九九八年、愛媛県今治市で創刊されました。その名称は今治市の沖合にある来島海峡に由来しています。来島海峡は、その昔、河野水軍や村上水軍の軍船が往来した海峡です。

「海峡」が創刊された当初、同人は二十三人いました。いずれも、かつての文学青年上がりとおぼしき書き手ばかりで、とても活気がありました。私は創刊の二年後に加入したのですが、それまで、小説とか文学に無縁だった私は、隅の方で小さくなっていました。

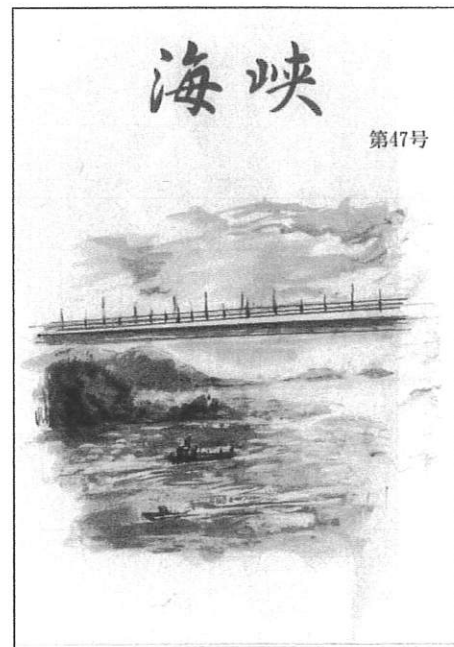
その後、これらのメンバーは加齢や体調を崩して退会したり鬼籍に入ったたりして徐々に欠けて行き、現在、創刊当時のメンバーで残っているのは藤井さんだけになりました。今改めて彼らの作品を読み返してみますと、レベルが高く、力量の程が偲べれます。やはり、彼らは若い頃からよく読み、よく書いていたのでしょう。往時の作品に比べると、最近の海峡の作品は小ぶりになった感を否めません。



『海峡』同人。前列左から、竹田悦子、藤井総子、永野英子、YOKO、西山慶尚、小野禮子
後列左から森本隆を、日吉平、鈴木強、平子一

海峡

第47号



創刊から二十四年、海峡も色々と浮き沈みがあり、現在の会員数は十一名になりました。かつての人数の半分以下ですが、私は十一名もいればやって行けると思っています。「海峡」には、主宰者とか核になる指導者はいません。意識的にそうしているわけではありません。創刊当初はリーダーがいたのですが、彼が亡くなった後、然るべき後継者が育たなかったのです。そのため、「海峡」は集団指導体制を取っており、編集委員も会員の半数に当たる五人です。素人がみんな力で合わせ、手探りで書いている。「海峡」はそのような感じの同人雑誌です。

そのせいもあるのでしょうか、ある評論家から「海峡」は地味な同人誌である」と指摘されたことがあります。その通りで、地味と言うより、素朴ないしは泥臭いと言った方がいいのかもしれませんが。しかし、私はそのような指摘は全く気になりません。なぜならば、垢抜けした作品よりも、素朴で泥臭い作品の方が私の性に合っているからです。これは洗練された作品が書けない者の僻みでもあるのですが、その背景には、地方の同人は地方のことを地方の言葉で書けばいい、という開き直りもあります。

前にも述べましたように、「海峡」は小規模で地味な同人誌ですが、「海峡」の作品は、これまでに「まほろば賞」の候補に二度選ばれていて、今回同人雑誌推薦作として掲載された藤井さんの作品を入れると「文芸思潮」掲載は三度目になります。また銀華文学賞では、最優秀賞と河林満賞をそれぞれ一度ずつ受賞しています。「海峡」の地味な作品がこうして評価されることは、同人の一人として誠に有難く、関係者各位に厚く御礼を申し上げます。

会員の減少と高齢化の波は「海峡」にも押し寄せています。私もかつての教え子などを頼って会員を募ったりしていますが、人口の少ない地方都市では会員を確保することは簡単ではありません。このままでは、地方の同人雑誌や文化団体は遠からず消滅してしまうでしょう。この危機をどう乗り越えるのか、私たちは大きな課題に直面しています。

さて、藤井さんは長い間編集責任者として多忙な思いをして来ましたが、その間も書くことへの情熱を失うことな

くこつこつと書き続けて来ました。今回、それらの作品の中の一つが同人雑誌推薦作として多くの方に読まれる機会を得たことは、たいへんうれしいことです。

藤井さんはこれまでに五十作ほどの短編や中編を書いてきました。いろいろなジャンルの作品がありますが、最も多いのは、家族の間で起こる葛藤や確執をテーマとした「家族もの」です。家族ものは藤井さんの独擅場で、どの作品も、他の書き手の追隨を許さないほどユニークです。

家族ものに次いで多いのが、藤井さんの故郷である高知県の佐川町岡崎を舞台とした「故郷もの」です。藤井さんにとって、故郷は心の原点であり、書かずにはいられない何かがあるのでしょう。そう言えば、愛媛県出身の大江健三郎の作品にも彼の故郷である内子町大瀬が登場しており、内子町大瀬と佐川町岡崎は共に山間の川添いに発達した小さな集落で、そのたまたまいや霧囲気がよく似ています。今回の作品は家族ものですが、随所に故郷ものの片鱗を垣間見ることができます。

「紀子姉」は、交通事故で片足を失った涼子が、志半ばで倒れた姉の遺志を継ぐため、医学部を再受験して小児科医になろうと決意したところで終わっています。

涼子は果たして医学部へ合格したのか。私は久し振りに続きを読みたくなる作品に出会いました。

(西山慶尚)

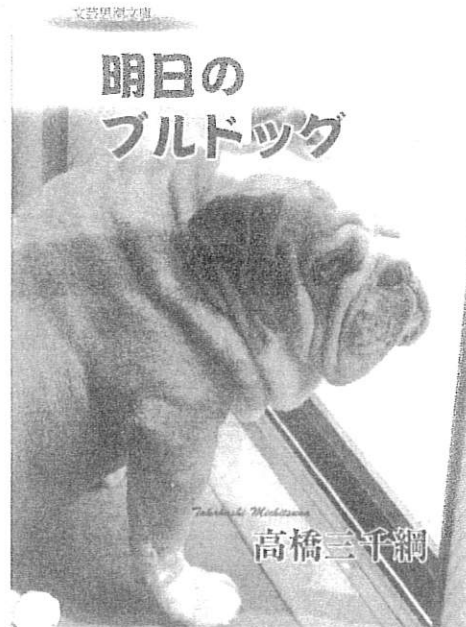
「海峡」

〒799・1522

愛媛県今治市桜井四・二・一八

「海峡」発行者 藤井総子

TEL 090・3788・5207



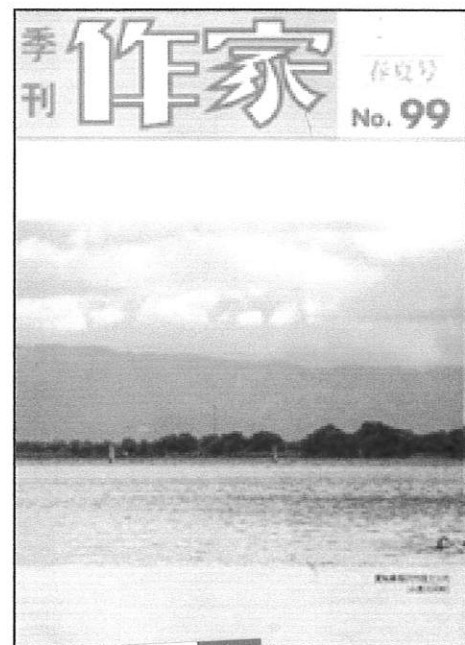
作家高橋三千綱の遺作 500円
注文はアジア文化社まで

85号

門戸は広く 豊かに生きるために

「確証」で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰をしていた芸同人雑誌『作家』は、彼の死により五百十六号で終刊した。小説を発表する場所を失った同人たちは路頭に迷った。小谷氏の薫陶を受けている同人も少なからず存在し、リニューアルした雑誌の発行を望む声も多く聞かれた。

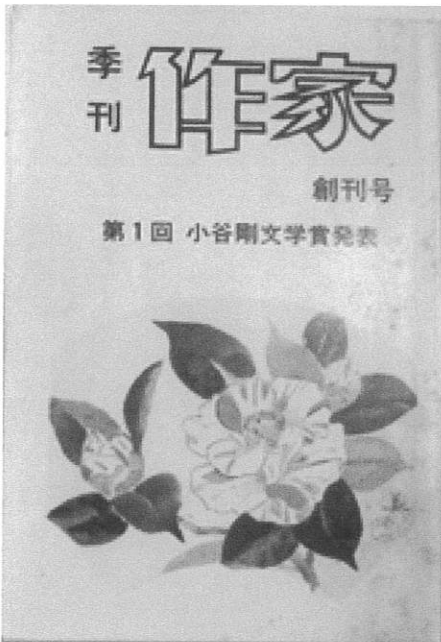
それに応える形で、小谷氏の盟友の『長良川』で直木賞を受賞した豊田穰氏が編集責任者となって一九九二年（平成四年）の春『季刊作家』が誕生した。当時五十七名の同人が参加し、年四冊の発行で始めることになった。毎月発行されていた『作家』は四半期に一冊に減ったが、作品の集まりも資金繰りにも懸念されることはなかった。その後、柳瀬道夫氏、今瀬憲司氏等に編集代表が交代し、筆者が編集代表を引き継いだのは二〇一二年夏号（第七十七号）からで、現在に至っている。本年四月一日に第九十九号を発行し、この間に掲載した小説は六八一余編になる。この十月には百号を発行する予定になっている。創刊号から三十年になる。長い期間のようにも思えるが、過ぎてしまえばそんなに長く感じられることもない。



この三十年の間に、鬼籍に入ったたり施設に入所したり、高齢や病などそれぞれの事情で、離れていった同人は多く、現在の同人数は二十人にも満たない。年四冊の発行も三冊になり、今は二冊となってしまった。同人数も年を経るにつれ一人減り二人減りという状態であり、たまに加入があっても若い人の加入はない。時代が変わり、同人雑誌に小説やエッセイを書こうとする人が減ったのであろうか。創刊時のような余裕はなく、書き手の減少はそのまま原稿の集まりも資金繰りもままならない事態を招いて、危機的状況が続いている。例えば創刊時点での『文藝界』の同人雑誌評に寄せられた雑誌数を調べてみると、百六十余

冊を数えるが、その後を引き継いだ『三田文学』に寄せられている雑誌はその三分の一ぐらいであろう（推測であるが）。むかしは同人雑誌に執筆することにより小説を書く技術を磨き、プロ作家を目指す書き手も普通に存在したが、今はそういう崇高な志を持つ書き手はまれで、読書が好きでも創作することまではいかない、あるいは同人雑誌で修業を積んで作家を目指す人も減少していると思われる（アニメ作家のほうは逆に増えているような気がするが）。だから、同人も増えていかないのだろう。憂える状況は全国的に広がり、多くの同人雑誌も同じ悩みをかかえていると察せられる。わが『季刊作家』も同様で、この先いつまで発行できるか不安だ。

一方、こんな現状にあっても、大手の文芸雑誌の新人賞への応募は、以前と変わらず、否、むしろ増えている文学賞もあるようだ。二千編を超える応募数の文学賞も珍しくない。同人雑誌で育ち、そこからプロの作家を目指すことは困難で、そうであるなら、まずは新人賞を受賞して注目されるほうが手取り早いということなのだろう。最近活字離れが進み、月に一冊の本も読まない若者も多いと聞くが、あにはからんや新人文学賞は若者からの応募が少なくないようだ。そんな若者が目を見張るような傑作を書けるとは思えないのだが。そうであるなら、同人雑誌に加入して、小説修行をする方法もあると思ってもよいだろうが、忙しい世の中に生きている若者は、時間を持って余している老人のように、同人雑誌に小説等の文章を書いている暇などないということか。現代の若者には、小説を書いて自身の能力や運を計り、駄目なら諦めてほかのことを探ろうとするようだ。



「季刊作家」創刊号

悲観的に考えることが多いが、小説を書いて完成し、それを読んでもらうという行為を長い間続けている筆者には、これほど心を湧き立たせる生き甲斐はほかに見当たらない。いつでもスムーズにペンが進むわけではないが、一度味わったら虜になるに違いない。書くことは、いつでも何歳からでもできる。それに手書きだった原稿も、今ではパソコンで書けるようになり作業も格段に楽になった。筆

者も三十年近くパソコンで書いている。

筆者は時折ぶらっとスーパーへ足を運ぶことがある。すると嫌でも多くの老人が、長椅子に腰かけて休憩をしている姿が目に残る。こういう姿をみると、この人もあの人も退屈地獄に病んでここに来ているのだと思ってしまう。豊かに生きようとしている人はこんな所で無駄な時間を潰していないからだ。三年ほど前からコロナという厄介なウイルスが流行しているが、執筆する行為は巣籠り状態で行うものなのでそんなに影響はないと思う。もともと小説を書く行為は、孤独な作業であり、孤独に打ち勝つ強靱な意思が必要であり、しかしそれが作品として完成すると、この上ない喜びとなって報われるのだ。それは、人が、より充実した人生を生きることでもある。

(季刊作家代表／祖父江次郎)

季刊作家

編集事務局代表 祖父江次郎

〒495・0013

愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原八四・二

TEL 0587・97・5472

mail: ch00987@yahoo.co.jp

札幌文学

北海道

北海道の同人雑誌の灯りを守る

全国どこでも同じだとは思いますが、戦後の一九四五年から五年の間に創刊された北海道の同人雑誌は、ざっと数えて五十二誌。その中に私どもの「札幌文学」も加わって一九五〇年一月の創刊。すでに創刊七十一年、現在九十二号発行の準備中という誌歴を持つ道内一の老舗となった。

創刊時の札幌文学の同人は十三名で、編集発行人は西田喜代司。特に文学的な主義・主張も持たず、何の拘束もなく発表させるといふ編集方針だったと聞く。だが、創刊号が出たとき「中央文壇と繋がりを持ったなかで次々と同人を押し上げるべき」とする意見が出てきた。これに対して「文学的に荒蕪の地である北海道に肥料を施す役目を果たせばよい」とする西田編集人とは意見が合わず、札幌文学創刊に大きな役割を果たした数人が脱退した。

このため一時的だが、継続が危ぶまれた札幌文学だった。これ以後、号を重ねるにつれ、道内各地の実力者や有力新人が加わって札幌文学の実績を向上させた。ところが一九五二年、九号を発行する直前、西田編集人が病に倒れ

再び一時休刊となった。この時点で同人は四十名だったが、急きよ、澤田誠一が西田に代わって編集発行人となる。再刊十号の後記にその澤田誠一が次のように書いている。

「北海道で文学する者には避けられない、存命的に意識されている者でありたい」

札幌文学は澤田誠一の後記によって大きな飛躍を遂げたようだ。札幌文学を足場に中央文壇への飛躍を果たした者を含め、梅田昌志郎、橋崎政、真崎晋吾、中沢茂、山田昭夫、工藤欣弥、比良信治、佐々木逸郎、上西晴治、小松山博など、さまざまな人物が足跡を残し、北海道文学の担い手として不動の立場を確立した。当然、いずれも北海道を

舞台にした骨太の作品である。

編集人は澤田誠一から梅田昌志郎、山田昭夫、小野規矩夫、工藤欣也、小松茂、田中和夫へと引き継がれ、現在は坂本順子が担当している。札幌文学の年二回発行は第三十九号まで続いた。昭和四十年代である。釧路の「北海道文学」連載の原田康子さんの「挽歌」が女流文学者賞を受賞し、さらに映画化されたのは昭和三十年代だが、これが機となったのか同人雑誌ブームが全国的に興った。この時代の道内の同人雑誌数は、地方自治体による市民文芸誌も含めて百三十を超えていたらしい。

だが、時代は急速にデジタル化しつつ進む。

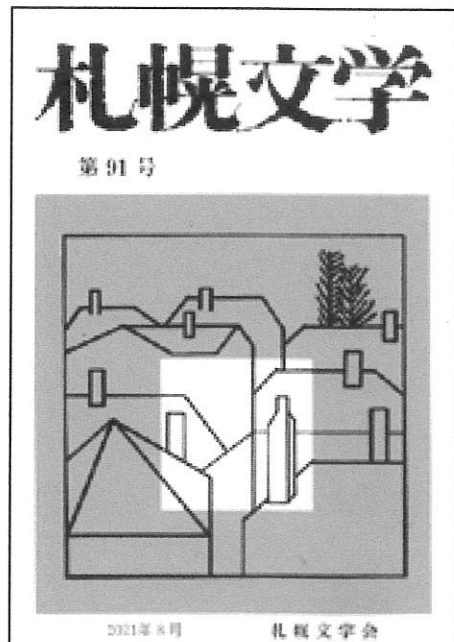
いつの頃からか、活字離れが進み、新聞購読者の激減、文芸出版物の不振、書店の激減——。そして同人の高齢化による同人雑誌の廃刊、印刷費用の負担増による休刊・廃刊——。

つい最近、「人間像」と「文芸と見聞」が終刊になった。歴史があり、優れた作品が載った両誌だった。閉じた理由は同人の高齢化だと聞く。「人間像」は後継者なし、による廃刊だという。

札幌文学は三十名を超える同人が加わっていた時もあったが、いまは往時の半数近くの同人で年一回の発行を継続している。実は十五年ほど前、「実力ある同人の発表の場」という編集方針を「文学を志す新人に広く門戸を開く作品



札幌文学会例会（懇親会）札幌すみれホテルにて



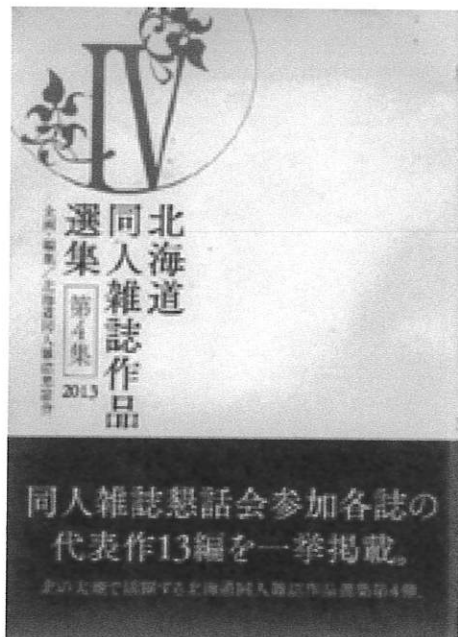


北海道同人雑誌懇話会／加入同人雑誌の代表会議 札幌すみれホテルにて



札幌文学会例会（合評会） 札幌すみれホテルにて

「札幌文学会」 代表・田中和夫 編集発行・坂本順子
〒001-0034
北海道札幌市北区北34条西11丁目4・11
坂本方 TEL011・746・5802 209



そして「北海道の同人雑誌の灯かりを守る」と自分に言い聞かせながら、私どもの強靱な信念は、今も、これからも決して崩れることはない、と再び言い聞かせてしまふ。

（文責／田中和夫）

「北海道地方同人雑誌作品選集」は、当初の予定通り第五集で終了した。

五年にわたる選集刊行とパネル展開催で知ったのは、小説や随筆を書きたいと思っている人が非常に多いことだった。その思いは様々だが、そのシーンに出会うごとに同人雑誌に関わる周りの仲間たちを見回してしまふ。

発表の場」に改めた。そして同人費は年間二千円。宣伝をしたわけではないのだが、これまで男性中心だった札幌文学はにわかには女性同人が加わって、彩り豊かな文芸同人誌に変貌した。これも同人雑誌の裾野を広げ、新しい方向に進む発展の一つの道だと納得している。

これもまた古い話だが十年前の春、「江別文学」と「鉄道林」の編集者に声をかけ、「札幌地方同人雑誌懇話会」を立ち上げた。やがては北海道内の同人誌間の交流を図り、それをバネに互いの活性化を図りながら同人誌の継続発行を願う企画だった。参加は当初、札幌圏内の十八誌で、連絡会を重ねることに参加が増え、翌年には「札幌地方同人雑誌作品選集（第一集）」を刊行するまでに発展した。掲載作品は各誌を代表するもので、各誌に委任だった。紀伊國屋書店札幌駅前本店ギャラリーでの「同人雑誌フェスティバル」も決まった。同店二階ギャラリーで開催の「パネル展」も大入りだった。その翌年、「札幌地方」を「北海道」に改め「第二集」を刊行した。

「北海道地方同人雑誌作品選集」は、当初の予定通り第五集で終了した。

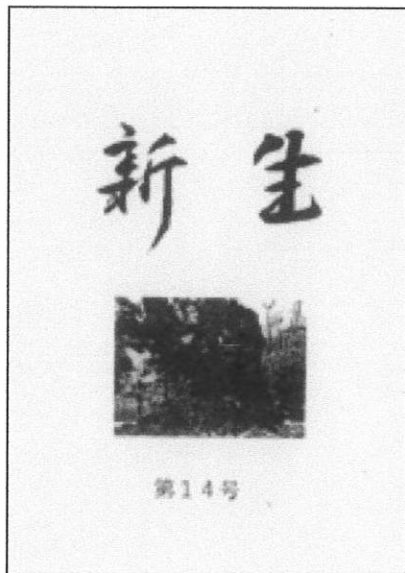
新生

東京都

将来世代へ遺すメッセージ

同人誌『新生』を発行している新生の会は由緒ある同人誌のグループとは異なり、今や極少の会員で成り立っている。会の生い立ちを説明するには、創立以前の経緯を語るなければならない。

一九九八年介護ボランティアをしていた印刷会社の社長が老人ホームで高齢難病者の現役時代を綴った原稿が眠っているのを知り、是非本にしてあげたいとの動機から端を発し自分史を作る自費出版を始めた。自費出版友の会「下



田会」である。

二〇〇一年朝日新聞に折り込みの「定年時代」で、自分史ブームに乗って定年を迎えた世代、業種多彩な約八〇人の執筆を応援すべく下田会は三カ月に一回開催され、その会合はさながら異業種交流の場ともなるユニークな活動であると紹介された。将来世代へ遺すメッセージとして己が歩んだ道を執筆するための手解きを授けた。六年後の登録会員数は二四〇名、書籍化された作品は百五十一人と記録に残る。後年主宰者の不祥事で下田会は会員の決議で終局を迎えた。それが以前に退会していた筆者は詳細を承知していない。だが聞く処、少なからぬ会員が出版を反故にされ支払代金を踏み倒された由だ。

下田会の同人誌『皆楽』の編集委員を務めた経緯から、虎の子詐取は論外だが、思うに下田会はそれなりに有意義な活動であった。編集委員は四、五名だったが、記憶では定例会の司会役深津泰蔵氏(故人)に現役時代社内誌編集に携わった山野繁氏と三人の持回りで校正を担当した。

下田会の解散で創作熱意の捌け口を失った十名ほどが新しい発表の場を求め二〇一四年に「新生の会」を起ち上げた。来年で十年目の節目を迎える事になる。結成への中核として運動された深津氏は佐藤忠正氏を会長に担ぎ出し、佐藤氏は以降五年間会長として会の基礎を築かれた。当初印刷・製本等に精通している者はなく、会長は並々ならぬ

苦勞をされ、剩え財政的な支援もされた様である。発足時役職を担ったのは副会長中尾幸造(現会長)、会計大崎健吉(故人)、会計幹事庭野隆雄(退会)の諸氏である。深津氏は顧問に就任し、何くれとなく運営の調整を図られた。弊誌名『新生』の名付け親でもあり、投稿常連者でもあった。共に編集に携わった誼で筆者を新生の会の創立時に会に引き入れた。

いまま少し紹介すると、佐藤氏はバイオニアの会社で社史編纂を担われた。中尾氏は発足時より会長の脇を支え苦勞を共にしてきた。『新生』第十六号完成を以て筆者のあと第三代目の会長に就任した。テイラー師匠を生業としてつ文献を閲し執筆する素人離れの技量は異色の存在だ。大崎氏は数学教師歴を持つ豪傑肌の登山家で編集をも担当された。山中遭遇した熊と格闘し重傷を負い、恐らくその武勇伝が遠因で亡くなられた。庭野氏は投稿常連者で独特なお遍路紀行文や国の会計問題を主に論じておられた。

『新生』の表紙の題字は長年小学校の校長を勤められた石井和子氏(故人)の揮毫である。

当初の会員二十二名のうち初志を果たせぬ退会者が続き会員は半減、現在九名のうち創立会員は五名に減り勢い初期の熱気は冷め加減、新人投稿者に待望する処大である。

新人会員の力量で次の時代に向け、体質は徐々に変化の兆しあり。会員減少の原因は高齢化である。八十歳代六名

と高齢化は否みようがない。若年層不在は不活性の原因だと認識はしている。だが、最早手に汗を握るような熱血小説などは期待できなくとも、見方を変えれば、長い人生経験に照らし得られた知見を執筆に反映できる利点があるというものだ。他人が手を付けない、付けたがらない端境期の問題でも綿密に考証を加えたり、時事問題を深く考察し

「新生」15号目次

Table of contents for issue 15 of 'Shinsei'. It lists various articles and their authors, including 'ワイルドな人生' by 井和子氏, '山に遭った熊と格闘し重傷を負い' by 庭野氏, and '下田会' by 下田会.

たりと、文芸とはニュアンスの異なる分野での問題提起もウエルカムと、視線を転じ海外情報や体験記をも含めジャンルの間口は広がりがつつあり、誌面に若さと知的な香りも求めたい。

発足時、既に高齢者集団で集まりが悪く、且つ慣れない運営も加わり、熱の籠った批評座談の機会を逸し、今や少数の利点、合評等のスキルアップはコロナも加わり夢の夢。問われれば非常に異質な同人誌集団と申せましょう。

会誌の紹介が疎かになったが、『新生』は偏に執筆意欲ある人たちに投稿の場を設けることに尽きる。

年二回の発行で百八十〜二百頁を毎号百部刷り、定価は八百円、販路なし。製本方法は提出原稿を複写し製本する至極プリミティブな手法に頼っている。全員が必ずしもパソコンを操作できないためである。会員は年会費二千元。掲載料はA5原稿一枚三百五十円、原稿の書式は、余白以外は自由、故に縦書き横書き作品が混在し不統一感は否めない。編集者の意向に反し、投稿者の主義に従う限り読者に不評であっても敢えて混在は続く。抱える課題多しだ。

今般、当会員 松尾晃氏の「風に吹かれて(4) ヨットと水素利用」が御誌の推薦作に選ばれ新生の会として誇らしく、今後の活動に大いなる励みになった。更なるご鞭撻をお願いする次第だ。

(文責/篤一夫)

新生



第16号

●「全国同人雑誌評」より

「新生」は知識雑誌の風体がある。その内容は高度な知見を多く含み、学ぶことが多い。巻頭言での篤一夫氏の論評も、朝日新聞などメジャー紙の論説文よりもレベルが高い。見るべきこと、言うべきことを確固と打ち出している。稀有な、珍重すべき同人誌である。

新生の会

〒206・0803

東京都稲城市向陽台四・二 C710

篤一夫方

TEL042・377・5860

素粒

富山県

素粒の来し方行く末

私にとって『素粒』について語るといことは、この二人について語るといことと同義だ。ひとりには兼久文治。もうひとりは大黒恵子。二人ともとうに鬼籍の人だが、どれほどの年月を経ようとも、『素粒』においてその存在が薄らぐことはない。

兼久文治は一九二五（大正一四）年生まれ。没年は二〇〇二年すなわち二〇年前になる。兼久文治に創作を教わっていた八名が作ったのが『素粒』、という繋がりである。兼久文治の勉強会は、はじめはカルチャー教室的なものだったが、じきに枝分かれした。教養を目指すのではなく、文学を目指したいというその分派には、創作の前では誰もが平等、対等、というびりつとした空気があって、五年遅参した筆者にも心地よかった。兼久文治は弟子が書いてきたものに対して基本的にけなすということをしなかった。ほめる際には具体的に過不足なくほめた。ほめられた当人は師の期待がひしひしと伝わり、理解されていると思えた。そのあんばいが絶妙であった。兼久文治は富山



2022年現在の素粒の会合。男性同人一名が来る予定だったが、仕事の都合で来れなくなった。いまはほぼその4名での活動

県内の地方紙北日本新聞（県内購読シェア約六割）の朝刊コラム「天地人」を二二年間七〇〇編超執筆した人であり、筆者は結婚で富山に来て、この地方新聞、コラムだけ全国レベルだ、と感じ入っていたところ、奇遇にもその執筆者の勉強会に巡り会ったのである。

兼久文治は富山県内のアマチュア小説書きを底上げしていった人で、富山県の地方紙北日本新聞の文化部長になったのが昭和四〇年。翌四一年に兼久文治は（世間的には北日本新聞社は）「北日本文学賞」を創設する。三〇枚の短編小説の全国公募文学賞だ。おそらく地方文学賞の魁（きさか）ではないか。選者に丹羽文雄（1〜2回）、井上靖（3〜24回）というビッグネームを招聘する（25回から現在までは宮本輝）。その経緯は芥川賞作家の津村節子のエッセイ「蘇る思い出」（『とやま文学』28号、特集「兼久文治・松原敏の時代」）に詳しい。津村節子の夫は周知の通り『高熱隧道』の吉村昭。兼久文治は夫妻に相談したうえで中央文壇の重鎮丹羽文雄に選者を依頼し、二回目までならという条件で了承を取り付け、夫妻も驚いたというのだ。だが勉強会でそのような手柄話などはしなかった。

昭和六三年に兼久文治は北日本新聞社高岡支社にて創作の教室を始める。そこに生徒として参加していたのが大黒恵子だ。彼女がいかに兼久文治に薫陶を受けたかは、平成五年からともに学んだ私自身がこの目で見ているが、前出



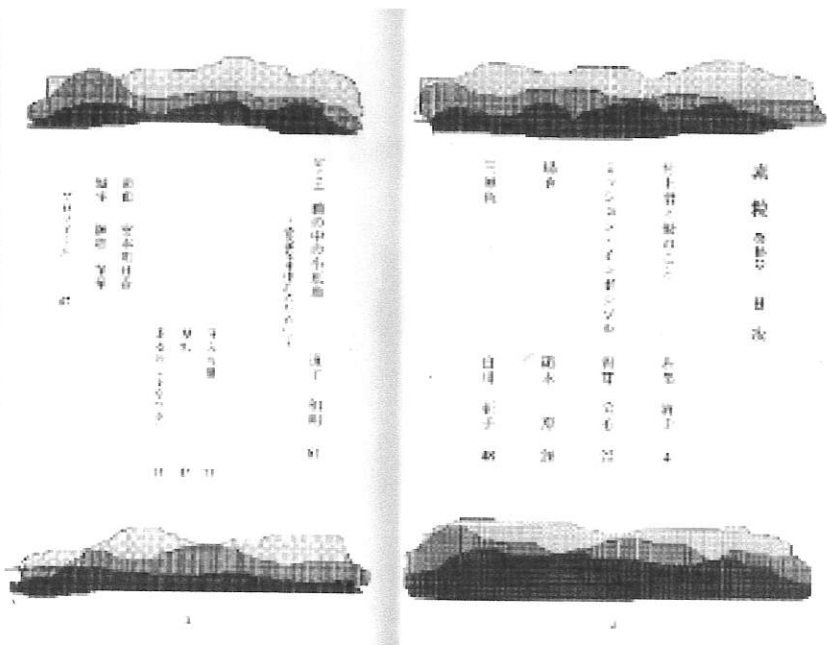
1994年の兼久文治、大黒恵子、筆者がいる勉強会のスナップ



の「とやま文学」二八号にも弟子の代表といった体で「かの地での先生に、一生徒から」というエッセイを寄せていて、「書く、ということとはこういうことなのかと、慄然とした記憶があります。世界が変わる思いでした」と述べている。こういう感受性の人だから、当然弟子仲間の精神的支柱であった。筆者が大黒恵子のいる月一の勉強会に参加して六七年も経ったころか、兼久文治はさかんに同人誌を作れと言うようになった。だが「私たちは誰一人まともを受け止めようとはしませんでした。精神の有りようも含め、簡単には手の付けられない、大変なことのようになっているのです」（『とやま文学』三一号 特集富山の同人誌Ⅰ 大黒恵子「素粒」過ぎ去った十年と、これからと。）。そんなわけで弟子たちが何の行動も移さないでいるうちに師は病に斃れ亡き人となった。「葬儀のあと、言い合わせたように生徒、数名が集まり、お茶を飲みながらの想い出話の最中、ふいと思いつき、どうします、同人誌、やりますか、と問い掛けました。その場にいた全員が、即座に、やりましょう、そう答えました」（同）。私もその場にいた一人だった。こうして、二〇〇二年に師を喪って、二〇〇三年に八名の弟子で同人誌を作った。「素粒」という名は大黒恵子が提案し、即決だった。兼久文治がいないという事実の中で、勉強会が存在するわけがない。このままこの会が散会、雲散霧消するのは耐え難い、いや、もっ

たいない、教わったことも、人のつながりも。同人誌創刊しか選択肢はなかったのだ。同人の中心はむろん大黒恵子であったが、彼女はかたくなに主宰という名称を拒んだ。せめて代表とは名乗ってくれと頼んだ。年に一号発行するために、何ヶ月かに一度集い、草稿を批評しあった。師がない。教わったことを思い返しては、先生はこう言われたよね、というふうに励まし合った。子曰くとはこういうことかと論語が身近に思えた。その後同人は増えたり減ったり、長くやっていけば誤解も齟齬も往も来もあった。二〇一四年四月、『素粒』は大黒恵子を病により喪った。大黒恵子が『素粒』のために書いた作品は第一号の五枚の短編で最後となった。

正直なところ、大黒恵子の死で『素粒』は終わったなと思った。孤児のような気分だった。その気分は今も続いている。『素粒』が継続しているのはなぜだろうと考える。創刊時から事務局を請け負っている流れで、原稿が集まれば発行にたどりつく。原稿が集まるのは締め切りを設定するからである。締め切りを設定するのは、大黒恵子が締め切りを設定していたからである。ということは、冒頭に書いた、記憶が薄れ、締め切りのことを誰も言い出さなくなるとき、『素粒』はその役目を終えるのだろうか。とりあえずは片手ほどに残った同人の誰かしらが、締め切りのことを切り出すのである。（文責 白川荘子）



「素粒」事務局 〒939・8055
富山県富山市下堀八・一七
道正央子方

TEL076・423・7507

ゆるいスタンスで三十五年

同人誌を立ち上げる時は、大抵その誌名に『文学的志』のような強い思いを込めるものだ。ところが、一九八八年に創刊された「朝」という誌名には意味がない。つまり、何物にも規定されず、ただただ文学が好きで、書くことが好きな人が集まって、冊子を出そうという、当世風に言えれば、ゆるいスタンスで始まった。

発起人は、同人誌「文芸首都」や「公園」で中堅を担っていた宇尾房子氏とその同人仲間。そして千葉県浦安図書館館長の竹内紀吉氏だった。

それから月一回、浦安図書館の会議室や浦安の公民館で会を重ね、年に一回か、三年に二回のスローテンポで、細々と同人誌を出し続けた。

原稿の締め切りは、その都度決めていたし、「朝」時間などという言葉がまかり通って、原稿が集まるまで、一週間から三週間くらいは、平気で延長された。

それでも何とか冊子を出し続けられたのは、月一回の会合と、そのあとの飲み会で、文学や政治について熱く語り合い、時には一泊旅行へ行ったりすることがこの上もなく



「朝」同人合評会 2022年5月15日 飯田橋ルノールにて

楽しかったからに違いない。

そんな中で、何人かの人が入会し、退会し、そして何人もの人が、鬼籍に入ってしまった。そのたびに追悼号を出したが、

「最近では、「朝」に追悼文しか書いていない」

などと、悲しいことを言う同人もいた。

発起人の一人、竹内紀吉氏が亡くなると、会合は東京の喫茶店に移され、その後ネットで調べた会議室などを、難民のように転々として、最近では飯田橋のルノール会議室に落ち着いている。

その間、同人の吉住侑子さん、千田佳代さんが相次いで

小島信夫賞を受賞するという快挙もあった。

その後、会の要だった宇尾房子氏までもが亡くなり、会の存続が危ぶまれたが、ゆるいスタンスゆえに、発行人や編集人をめぐってもめることもなく、元刑事という変わり種の高橋俊輔氏が発行人と編集人を引き受けてくれた。さらに二〇二〇年、体調を崩した高橋氏が休会し、発行人村上玄一氏と編集人中村桂子にバトンが渡された。

いくつかの出版社で編集の経験があり、日大芸術学部研究所の教授をしていた村上玄一氏が入会してから、会の構成員が一変した。村上氏がゼミで教えていた若者が、次々と入会してきたのだ。二十代、三十代の会社員、四十代の子育て中の主婦、そして何と現役の女子大生まで、上は八十四歳から下は二十一歳という幅広い年齢層を抱える会となった。若者達が、廃れつつある紙文化とどう向き合っていくのか、今後が期待される。

因みに、今回同人雑誌優秀賞に選ばれた天野いずみさんは、「朝」の発起人だった宇尾房子氏の娘さんである。彼女は理系女子だが、宇尾房子さんの追悼文を書いてもらった縁で、「朝」に入会した。奇縁である。

新体制で出すことになった四十二号の編集会議の時、毎回何かテーマを決めて、小説やエッセイを書いたらどうかという案が出され、承認された。

時は二〇二〇年。会はコロナで休会続きたったが、冊子



だけは出そうと、テーマは必然的に「コロナ禍」と決まった。

ところが、「それぞれのコロナ禍」というエッセイもそれ以外に集まった作品も、それこそコロナ禍のせいかみんな短めで、それはホチキスで止められるほどの薄っぺらさだった。

そんな時、助っ人が現れた。以前編集人と同じ同人誌に属していたAさんから、読んでほしいと原稿用紙百五十枚の小説が送られてきたのだ。それは大船渡出身の彼女が、東日本震災の津波で、四人もの肉親を亡くした鎮魂歌だった。テニヲハを超越した、破天荒ともいえる独特の文体には、妖しい魅力があった。こういった作品を取り上げ、発表するのが、同人誌の一つの役割ではないか？わたしは迷わずAさんに連絡し、「朝」に寄稿してもらおうことにした。かくして、四十二号の特集は「それぞれのコロナ禍・東日本震災から十年」となった。

そして不思議なことに、四十三号の準備に取りかかっていたわたしの元に、またしても原稿が届いた。それは、大学の文芸サークルの先輩Kさんからの「三島由紀夫論」だった。彼は、卒業してから文学とは無関係な仕事をしてきたが、文学が好きで、文学論が好きで、ずっと三島由紀夫に拘っていた。その三島由紀夫論の行間には、これだけは書いておきたいという気迫がみなぎっていて、圧倒され

た。

その瞬間、Aさんの時にはまだ曖昧だったわたしの編集人としての思いは、同人でなくてもいい、一生に一度、どうしても書いておきたいという作品を積極的に載せていこうという、強い意志が変わった。さらにKさんの論文に触発されてYさんが書いた三島由紀夫論も同時に寄稿してもらうことになり、それは相乗効果を生んで、四十三号の特集は「コロナ禍ふたたび・三島由紀夫論」二編」と決まった。

この同人以外からの寄稿という企画がいつまで続くかは不明だが、同人誌の一つの在り方として、その方向性は間違っていないと思っている。

(編集人・中村桂子)

朝

朝の会

〒196・0021

東京都昭島市武蔵野三丁目三・四

村上方

TEL 042・848・2745

122

飛火

東京都

『飛火』の半世紀

飛火、と書いて「とぶひ」と読む。うっかり「とびひ」と読んでしまいそうだが、それでは怖い皮膚病のトビヒを思いだしていけない。あるいは、「街の暴動がクーデターにまで飛び火した」なんぞとなれば、いかにも物騒だ。私たち同人は、そういう危険な、凶々^{まがまが}しいものとは縁がない。どこから見てもみな穏健派ぞろいである。いや、少なくとも外見においては、と一言付け加えるべきか。なにせ文学をやるくらいなのだから、内側の本当のところはわからない。もしかしたら、同人めいめいが、名状しがたい熱いマグマを心の深層部に秘めているやもしれぬ。その深みからやがて、水到りて渠成るとやら、何ものかが流れ出て作品をなす——それを信じたいと思う。

『飛火』の五〇号が出たのは今より六年前、二〇一六年の夏であった。これを記念すべき慶事として、同人内外の諸氏から寄せられたもろもろの文章が誌面を飾った。さかのぼること四〇年余りの創刊当時（一九七二年）を回顧した話などは、じつに興味が尽きない。会の発足時からずっ



一泊の温泉旅行（2002年・新潟）

争を思わせるものは何もなかったけれども、同人一人一人が、半世紀近くにわたり、見えない世界の人々に向かって、飛火をあげ続けてきたのはたしかだ。」

もう一人、当初からの同人に白田絨氏がいて、白田さんの述懐によれば、事の起りは大学の研究室に集う教員たちの雑談にあつたそうだ。その折に、雑誌名の提案が竹内勉也氏から出て、なんとなくそれに決まったというのである。竹内さんは自由にも書くための雑誌づくりをめざしたわけだが、この「自由」を渴望するところに本誌の性格がおのずと顕われているようだ。大学の教員でも、やはり人間である。同人の全員が教員ではないまでも、全員が人間である。だから、一個の人間として書きたいことを書く。紀要論文などにはどうしたって書けない自由なスタイルでものを書きたい。こうして始まったのが『飛火』である。

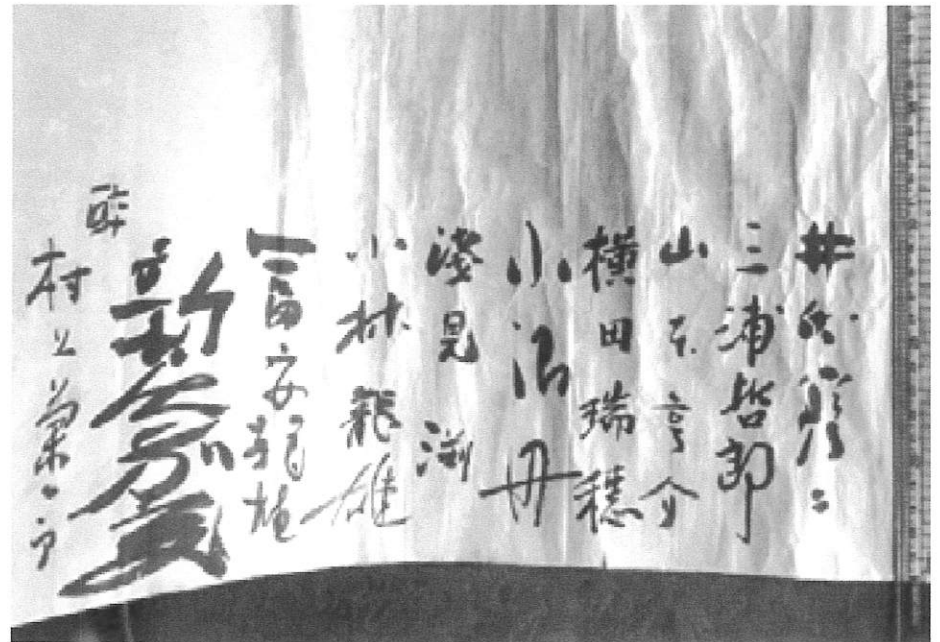
私たち同人は合評会などやらない。思うに、文学は所詮、自分一人の仕事だろう。その成果も責任もすべて自分一人の側にくっ付いている、というものだろう。みんなが集まって、わいわいガヤガヤ騒いでどうなるものでもない。

しかし、それとは別に、同人どうしの交流というやつがある。折々の飲み会やら、ときには一泊の温泉旅行などもやってきた。そういう場では、よもやま話に花が咲くわけ



と同人に残っている岡谷公二氏の一節を、ここに引用させていただきます。

「飛火とは、電話などの通信手段のなかった昔、緊急事態が発生した時、高所で火を焚いて、遠隔の地にそれを知らせる手段、すなわち、のろしのことだ。雑誌の雰囲気に戦



載っている。各号の発行年はもとより雑誌のページ数と、作品題名、作者名とが一覧できる。これを見てみると、くさぐさの想いが湧く。雑誌は六〇ページや七〇ページのとさもあれば、二〇〇ページ近くにも及んだときがあった。書き手のなかには、すでに遠い過去の人となり鬼籍に入っただ人もある。当の四一号にしても、「浅原義雄追悼号」と銘打っており、故人の生前の笑顔がありありと偲ばれる。浅原さんは温泉博士の誉れ高く、同人の旅行では各地の名泉に連れていってくれた。他にも数名の同人が亡くなつて、雑誌も淋しいものになろうかと心配されたときもあったが、近年では新人の加入もあり、八名前後のメンバーが変らずに保持されている。今年に入ってから五〇代と六〇代の男女それぞれ一名が加わって、『飛火』の新しいページがまた開かれようとしている。

(代表・梅宮創造)

「飛火の会」連絡先

〒3352・0014

埼玉県新座市栄五・七・一三

梅宮方

だが、目尻をつり上げた議論などはしない。飲み会は永らく大久保の「くろがね」に場所を定めていたが、いつぞや店が閉じてからは他の酒場に移った。くろがねが閉店したあと、飛火の会に記念の一品が贈られたが、これはちょっといいものである。くろがねでの一夜、錚々たる文学者のみなさんが酒卓を囲んで、ほどよく酔いがまわった頃、興の赴くままに一人ずつ自筆のサインをしたためようという話になったらしい。「おい、おかみさん、紙をくれ、手ごるな紙を」。硯と墨と筆は、かたわらの小卓の上に常備してある。長い和紙の巻ものが来た。上質の障子紙とも見える。この長い紙の端からそれぞれ順番に筆をおろす運びとなる。まずは筆頭に井伏鱒二老師から、となつたようだ。師匠のとなりには三浦哲郎氏がすわっていたのだろう。三浦さんのサインが二番目につづく。そのあと二人おいて小沼丹氏の洒脱な筆づかいが見える。浅見渕あり小林龍雄あり、そうして殿が村上菊一郎しんがら氏の名で終っている。村上さんは頭の所に「酔」の一字を添えているが、これはお愛嬌というものだろう。今ではすっかり黄ばんだ紙面に総勢十人の顔ぶれが並んでいる。何だかまぶしいようだ。くろがねは、開店の昔から井伏さんがずいぶん肩入れした店であった。

『飛火』五〇号の前には、これも一つの節目として四一号があり、その巻末に、創刊号から四〇号までの総目次が

※編集部注／故村上菊一郎は早大文学部仏文教授。ボードレール「悪の華」などの翻訳がある。

「木木」とともに歩む

私にとって「木木の会」とは何だろう……。いつの間にか、三十数年経った。だから私達会員は、それだけの長い年月、交友を持ったことになる。よくこれだけ長い年月を共有し、切磋琢磨し、作品を作り続けることが出来たなど感無量になる。会員皆同じ思いではなからうか……。

「玄海派」を主宰しておられた松浦先生の指導で、「木木」が誕生した。先生なしでは「木木」は生まれなかった。先生が「木木」の生みの親である。

今まで「木木」は、代表が五人代わっている。五人目が私である。同人誌の一号を見ると、先生の指導で発行したので、代表の名前は記載されていない。一号を出した後、先生が一号だけではもったいないと言われ、二号からは代表を決めて発行してきた。

二号から六号の代表が木山葉子さん。七号から一五号が松原夕子さん、一六号から二六号までは小松陽子さん、二七号から三〇号までが井上幸子さんとなり、現在代表が私で、会計が稲葉けいこさんとなっている。私は、一六号から三〇号まで、会計を務めた。会計のほうも、日下部さ

ん、西原孝さん、林さん、稲葉さんと四名が交代している。松浦川の河口近くに住んでいた木山さんが、岡山に移られたために、七号からは松原夕子さんが代表となられた。木山さんが代表をしていた時は、「木木」の当初でもあり、会員が大勢集まって編集をしていた。誘われ、また興味もあって、私も一、二度はお宅へ手伝いに伺ったが、若い私が出る幕でもないように思えた。それほど多くの会員が集まっていた。皆興味があったのだろう。同人誌の当初の号を見ると、講座を受講した全員の名前が並んでいる。「玄海派」の同人の方で、講座を受講し、「木木」の同人にも参加している方も何人もいて、現在の状況から考えると、うらやましいような気がする。当初は先生の指導で、原稿用紙五枚だの、十枚だのと割り当てられた。先生から夜によく電話がかかってくる。あの文章はこうしたほうが良いと助言されるのだ。

電話を受けて、目をかけて下さっているのだな、親切な先生だなど、ありがたいと思う反面、三十二歳の、たいした経験もない、未熟な私には、七十歳ほどになれる先生の頭の中にあるような文章は書けないなど、先生とのどうしようもない距離も感じた。私は今の未熟なままの頭と心でしか書けない、そう思うのだった。

木山さんが代表である時、私は、家が近くだったので、よく原稿を持って行ったものだが、木山さんのお宅からは、それから小松陽子さんが、代表を務め、私が会計となった。小松陽子さんが「木木」への参加をやめ、井上幸子さんが代表となって、私が会計を引き続きおこなった。現在は私が代表で、稲葉さんが会計をおこなっている。私が代表になったということは、皆が高齢になられたからだ、つくづく感じる。

会計のお手伝いくらいは出来ると思って始めたことなのだが、会計だけで一五年が経った。代表が交代する中で、一人減り、二人減りと去っていき、またあの人もこの人もと、亡くなった。現在会員は八名、当初の二十四、五名から比べると、本当に少なくなった。何も考えずに、多くの会員とともに、書いていた時が懐かしい。書きたいことだけを書いていた時が、幸せな時だったとも思えるのだ。

毎日テレビでコロナの状況が報道される。高齢者が多いために、次回の「木木」は、原稿の締め切りを少し先延ばしにしている。

「木木」をこれからどう繋いでいけばいいのか、新しい人が入ってくれるのか、考えさせられてしまう。会員が増えな



松浦川に向けて開いた窓から、川の中にある岩が見えた。干潮の時には大小の岩が幾つも見え、カモメが休んでいるのを目にした。

そのあと代表になった松原夕子さんは、私の中学二年の時の国語の先生だった。気持ちの細やかな優しい先生だったが、中学三年の時に、家庭の事情で退職された。「木木」で一緒にすることが出来て、私はこういう縁だったのかと、再び会えたことに感謝した。私の大好きな先生だった。

れば、先細りになる。食事会の席上で、「木木」があったから、生きられましたという声が聞こえた。私達会員にとつて、「木木」は常に傍らにあり、なくてはならぬものになっていたのだ。私がこれまで安心して書き続けられたように、会員の意欲がある限り、私は「木木」を発行し続けようと思っっている。これは一番最後に代表となった者の運命かもしれない。

自分を振り返る時、確かに「木木」は、生活の折々に、



いつも傍にあつた。私は三十二歳の時に、松浦先生の小説入門講座を受講した折り、先生の指導で、「木木」に参加した。二つになったばかりの三女を、膝の上に乗せて話を聞いたことを思い出す。

私は高校三年の時、国家公務員の試験に合格し、公務員として、建設省（今の国土交通省）で、退職まで働いた。建設省が国土交通省に変わったのは平成十三年。建設省、運輸省、国土庁、北海道開発庁が一つになった国土交通省は、本当に大きな省庁となり、私は、面白い体験をたくさんさせてもらった。

新規採用職員として入った武雄河川事務所では、潮止堰が造られていた。陽にあたり、川風に吹かれながら眺めたことを思い出す。

私は三人の子供に恵まれた。子供を託児所に連れて行き、保育園に送り、病気をすれば、夜中に電話をかけ病院に連れて行つた。薬を持たせて保育園に送つた。雨の日も、風の日も、雪の日も、炎天下の日も、歯を食いしばるような日が続いた。そして子育てと同時に、国土交通省のそれぞれの現場を歩き回ること、私は人生を二度生きて、味わっているような気がした。雪の日、小さな子供を連れて保育園に行く。園庭の雪に雲間から射した朝日が当たっている。私はせわしなく毎日を生きていたが、幸せに満たされていた。山々は、山水画のように美しいのだ。それを「木

木」は、教えてくれた。「木木」はいつも傍にあつた。子供と公園で遊んでも、いつのまにか物語になっていた。

河川の事務所、道路の事務所、ダムの手事務所と転勤して回つた。敵木ダムでは本体工事に着手する年に転勤し、それから定礎、竣工式と経験した。着物を着て、テープカットの録を、黒塗りの盆に乗せて渡したこともあつた。嘉瀬川ダムに転勤した時には、地権者の移転が済み、取付け道路やダム湖の上に渡す橋梁の橋脚を造るのに、職員一丸となって奔走した。それもまた「木木」の小説作品の題材となった。海の中道海浜公園では、誰よりも早く大きな水槽の中で泳ぐ魚を見た。吉野ヶ里歴史公園では、発掘現場を見に行った。縄文終期から弥生時代、大きな環濠集落が形成され、甕棺がたくさん埋まっている。佐賀空港が出来た時は、国土交通省のヘリコプターに乗り、佐賀県の上空を飛んだ。有明海や北山ダムのある背振山系、佐賀市や唐津市街の上を飛んだ。普賢岳が爆発し、復興事務所が出来た時は、火砕流が流れる普賢岳を見に行った。

嘉瀬川ダムや佐賀国道に通勤するようになった時、子供たちは大学生になっていた。私は毎日、朝六時半に家を出た。現在、西九州道路や、有明海沿岸道路が着々と造られている。道路は出来上がった区間が供用開始され伸びて行く。私は今、それらを享受している。退職する年の最後の式典は、道路の開通式だった。職員皆で、開通式を行なつ

たことが懐かしい。

私はその折々に経験したこと、感じたことを「木木」に書き続けた。木木はいつも共にあり、人生そのものではないかと思う時がある。それは会員にも同じように当てはまるだろう。それぞれの人生があり、「木木」があり、私達は、共に歩いてきた。「木木」を介して寄り添い、書き続けた。食事会の席上で、「お義母さんがきつくてねえ」とはしゃいで、皆が笑っている。「木木」があつたから、生きられましたと言っている。「木木」は私達の心を浄化し続けてくれたのだ。

私は今、代表をしているが、一番年若いというだけである。誇れるものはない。これからも自分の心に真摯に向き合い、ただ書いていくだけだ。木山さんが、今回も「水水母」で優秀賞を取られたと連絡を受けた。同じ会員として嬉しい。それは私達に継続と意欲という力を、限りなく与えてくれる。

『木木』の会

〒847-0022

佐賀県唐津市鏡六・一
TEL 0955-77-4156

林 絹子方

海 第二期 福岡県

個々が独特のオンリーワンを目指す

一、「初期『海』」の終刊と「『海』第二期」の誕生
『海』第二期の創刊は、平成二十二年（二〇〇九）六月である。どうして第二期の誕生となったのか。

初期「海」は、昭和六十二年（一九八七）九月、詩人の織坂幸治が編集発行人となり創刊し、以後二十二年の間に第六十七号までを刊行した。

常に同人・会員三十人以上が集う意気盛んな「熱い思いの文学を語る誌」であったが、第六十五号（二〇〇七年十二月）刊行時に一挙に二十人近くが去る、という大時化に見舞われた。このあたりのいきさつは、当時十五年も在籍していながら、私にも経緯がよくわからない。この二号後の第六十七号（二〇〇八年十二月）をもって、「海」は設立の目的を達成したと発表し、終刊となった。

遠浅の砂場で、のんびり見物を決め込んでいた私が我に返ったのは、「発表の場がなくなったのだ」ということに気付いて、「どうしよう?」と砂場を行きつ戻りつし始めたのだった。そんな動きを（私よりよく知る）発行所であ



『海』第二期同人。左から、上水、高岡、仲西、有森、井本（2017年3月）
右は「評伝・人間織坂孝治」（井本元義著）

る花書院社長の仲西佳文が、織坂や、残った私たち数人を取りまとめる形で、相談の場を設定してくれた。最初は気乗りのしない態であった織坂も、数度の話し合いの挙句、「やりたければ、やればいい。ただし、君が全部やれ」と、私を指名したのだった。是非はともかく、『海』は第二期（を名乗ることを織坂が了承）として、九人の少数で船出することになった。

話を初期「海」に戻す。それには、織坂幸治という「詩魂の人物」を語らねば始まらない。

織坂は、予科練に入隊したが、やがて終戦となり、十六歳で右足首負傷の傷痍軍人として帰還した。西南学院に復学したものの、昼夜のアルバイトと酒と喧嘩に明け暮れた。もともと読書好きであり、古本屋で織田作之助、太宰治、坂口安吾などに会い、作家になろうと三人の字を一字ずつ

つもらい、織坂幸治と自ら名乗った。

以降、織坂は作家としてというより、詩人としての道を歩み出した。仕事は、本の卸、印刷会社、屋台引き、映画配給会社、看板屋等々を経て、十年務めた電通を退社し、四十四歳で「珈琲亭ほんくら」を開いた。

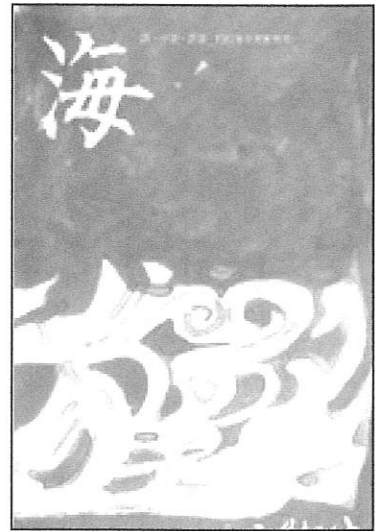
当時、「博多春秋」からのエッセイの依頼があり、ラジオのパートナリテイも務め、詩人としての力を着実に蓄えていった。「ほんくら」には、能古島に住む檀一雄も訪れた。

檀亡き後、文学記念碑建立の計画が出て、檀を無二人と尊敬する織坂は奔走した。一九七七年に碑が建立され、「第一回花逢忌」となり、今日に至るまで続いている。

「ほんくら」は、文学青年淑女の集まりの場となり、熱心な文学談義が交わされた。織坂は、一九八七年、同人誌の発行を決心した。名前は「海」である。『海』は見知らぬ世界への道であり、憧れとロマンの象徴であるとした。

「評論と詩」を主体とするという、この「海」の趣旨に賛同したメンバーは、荒木力、山口要、柿添元、黄村葉、月岡祥郎、兼川晋、宝生房子、徳永恭子、上野真子、田代茂などだった。後に、有森信二、杉山武子、長野秀樹、武田芳明、牧草泉、赤松健一らが加わった。

織坂幸治の言葉「人間は、^{歩く}歩くことなしに自己を知ることにはできない。意識もまた歩くことなしに、言葉を生み出すことはできない。」



『海』創刊号（1987年9月）

き摺るといふ凄まじいものであったが、「ノーサイドの美学が根底にあり」と殆どの場合、スマートフォンに散会した。「海」からは、次々に福岡市文学賞受賞者が出た。詩で山口、荒木、月岡、上野、評論で織坂、杉山、小説で有森である。

織坂は、「言葉は、人間にとって風景である」に始まる「言語風景論」を二十二回にわたって連載したが、古典、古今東西文学、古代インド、中国、聖書、現代文学にいたるまでの多くの資料に学び、真摯に考察した人間論であるともかく、織坂の「海」の統率力と真剣さはどうも真似ることはできないし、織坂自身多数の本も著した。

二、『海』第二期の歩みと今後

第二期をあくまでやることになったが、何からとりかかるべきか分からないことだらけであった。第一に、文学・文芸をともに語れる自分がない。となればと、まず「形から入る」ということから始めた。電子情報の活用、ホームページの充実、編集作業の自動化、個々には過度に干渉しない、という他愛ないものである。

原稿の作成・送付・校正などは電子メールを用いることを原則とし、市販の編集ソフトのやり方にならって編集担当者が「印刷用フォーマット」を作成し、割り付ける。事務連絡や外部からの評などの内部への伝達も「交流揭示

表する、安価で」を目指し、自ら「発自安」と呼んでいる。「海」第二期の発行は第二十六号（「通巻第九十三号」）を数え、個々の向上意識の変化が発行毎に感じとれる。それは、優れた書き手が加わり、その存在をリスペクトするという、初期「海」以来の「真剣に憧れとロマンを求め」新たなハードルを越えようとする、【独特のオンリーワンの考え】が生み出すのではなからうかと思っている。

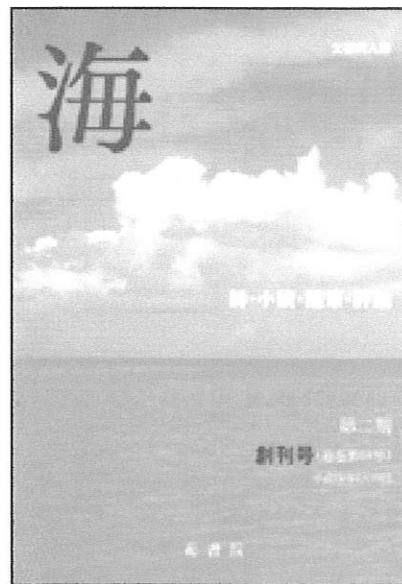
現在の構成員は、赤木健介、有森信二、井本元義、上水敬由、川村道行、笹原由理、神宮吉昌、高岡啓次郎、仲西佳文、長野秀樹、牧草泉、群青（五十音順）という少数ではあるが、それぞれの力量は水準以上であると見ている。紙幅の関係もあるので三人に限定し、実績を挙げてみたい。なお今後は、他誌との垣根をなくし、個々の実績をより伸ばし、さらに積み上げていきたいものだと願っている。

○井本元義

専門は詩であり、作品の鮮やかさには目を瞠る。小説は二十代に新潮新人賞佳作を得たが、家事都合により中断。最近になって始めたというが、詩人の言語感覚が巧みに生かされ、深い心情の表現ができる。

主な賞歴・まほろば賞（第九回「トッカータとフーガ」）、新潮新人賞佳作、福岡市文学賞、フランス語俳句入選など
○高岡啓次郎

斬新な切り口の、かつ、展開の鮮やかな小説を多産する。

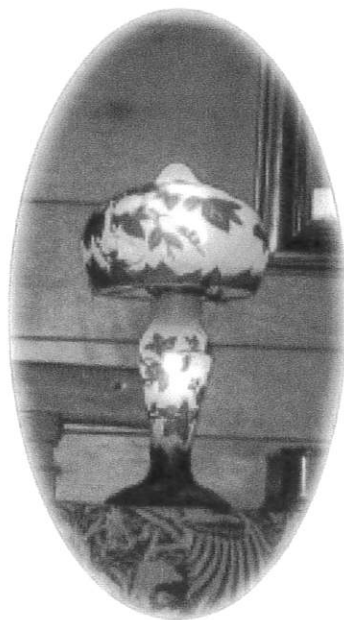


『海』第二期創刊号（2009年6月）

板」により行う。編集委員会制度を生きたものにする。言うなれば、そんなところになる。それらが一朝一夕にできたわけではないし、これがベストだとも思っていない。もっとも精力を注いだのは、視野を広げるために他誌への参加を可にし、文学賞などへの応募も呼びかけた。

次に、「表現する、発表する、到達する、生涯現役、山を移す」というスローガンを設け、【理念、指標など】として、「一、海は文芸作品を発表する場である。二、海は作品を、広く遠くに運ぶ場である。三、海は文芸を志す者同士の交歓の場である。四、海は生涯にわたり文芸にかかわっていくための場である。五、海は同人個々をもって主人公とする。六、海は文芸を志す者に、広く門戸を開放する」という、どこにでもある目標を掲げたに過ぎない。

これらの考えは極めてシンプルで、「自由に表現し、発



井本の「まほろば賞記念ランプ」
(2015年)

主な賞歴・銀華文学賞特別賞（第十回「凍裂」）、立川文学賞市長特別賞、北九州文学協会文学賞小説部門大賞、長塚節文学賞優秀賞など

○笹原由理

専門は詩であり、作品は四行ないし五行という短いものであるが、宇宙空間を見通しているのではないかという、繊細で深い内容を表現する。

主な賞歴・NHKハート展に毎年のように入選

（文責／有森信二）

『海』第二期

〒818・0101

福岡県太宰府市観世音寺一・一五・三三 松本方

『海』第二期編集発行責任者 有森信二

TEL 090・1976・8119

茶話歴談

大阪府

歴史・時代小説の同人誌

数多くの著名作家や同人誌を輩出してきた大阪文学学校。その校内で歴史小説を愛好する者たちが集まり、歴史研究会が誕生しました。やがてその会の中で、歴史・時代小説を発表する場を作ろうという声が高まり、生まれたのが「茶話歴談」です。

茶話歴談の編集部が発足したのは二〇一七年。三十代から七十代まで、幅広い世代の書き手が集まりました。元社会科教師やゲームシナリオライターなど、それぞれの身上もバラバラ。同人誌作りもほぼ初体験で、手探りでの本作りになりました。ですが、全国でもあまり見られない歴史系専門の同人文芸誌の立ち上げに全員が情熱を燃やしていました。

私たちが最初に決めたのが「何のために同人誌を作るのか」でした。ここがブレると必ず諍いになり、空中分解するということは同人誌づくりの諸先輩方から伺っていました。私たちは同人誌作りの目的を「茶話歴談メンバーの創作のモチベーションを高めるため」としました。同人誌の発行というメ切があるから、年に一作は書き上げる。より

多くの読者に読んでもらい、たくさん感想をもらうことで、それを自分の創作に役立てる。読者がいることを実感することでやる気が出て、より面白いものを作ろうと打ち込む。だから同人誌を作るのだと。

実際、創刊号を作るまでは（作ってからも）何度も編集部内で意見が分かれ、議論になることがありましたが、そのたび「何のために同人誌を作るのか」に立ち戻ることでも歩みを進めることができました。茶話歴談は現在四年目で第四号の編集作業を進めているところです。他の同人誌に比べれば短い歴史ではありますが、それでもここまで続けてこられたのは、最初に皆で同人誌を作る理由の原点を決めることができたからだと思っています。

歴史・時代小説は根強いファンがいる一方、現代では読



合評会

むハードルが高いジャンルになっています。小難しくても知識がないと楽しめないと思われがちです。いくら本を作っても、読者がいなければ創作する甲斐がありません。知り合いしか手に取らない本にはしたくない。そう考え、私たちは幾つもの工夫を凝らして新たな読者と出会おうとしました。

一つは、相互広告ページ。商業の文庫本のように、他の同人誌の広告を設置しました。広告を載せる同人誌にも、同じページを巻末に掲載してもらいます。こうして十を超える同人誌の広告を二ページにまとめて掲載し、同時に私たちの本を十以上の同人誌で紹介してもらうことができました。

SNSの広報活動やネットショップでの通信販売、プレゼント企画、電子書籍化、書店での委託販売など、知り合い以外の耳目に触れる活動も積極的に行いました。おかげさまでいくつもの新聞で取り上げてもらい、創刊号は瞬く間に完売、その後も重版を重ねています。

もちろん、掲載される作品の面白さがなによりも重要です。共に研鑽しあい、日々創作の腕を磨き合っています。その中の一作品を今回「文芸思潮」に取り上げていただけなのは幸甚の至りです。

コロナ禍の現在、顔を合わせての創作談議が難しい状況になり、同人文芸誌の活動は困難になっています。私たち



「文学フリマ」への出店



オンライン合評会

はチャットツールを導入してオンライン合評会を行うようになりました。うまくいかないところや残っている問題点もありますが、試行錯誤のすえになんとか次の号の編集作業をスタートさせることができました。

歴史・時代小説は、伝統を重んじる面と同等に、歴史の最新研究を反映させていく面もあり、古さと新しさの両方を樂しむ文芸活動だと考えています。「茶話歴談」という書名には、茶話のように気軽な形で歴史を樂しめる本でありたいという思いが込められています。今後も固く構えることなく、古さと新しさを両方大事にしながらこの会を続けていけることを願っています。

最後に。「茶話歴談」は新たな仲間をいつでも募集しています。今はオンラインでの活動が主流なので、関西のみならず関東や東北の方も参加しています。全国の歴史好きの創作者の皆様、ぜひともご一考ください。

(副編集長／真弓創)

茶話歴談

〒573・0087

大阪府枚方市香里園山之手町13・29

澤田聡方朝倉昂

sawarekidan@lepton-inc.com

じゅん文学

愛知県

自由に入会、気ままに退会

創刊は一九九四年六月一日である。年間4号発行して一〇〇号まで二十五年かかった。始めはそれでやめようかと思っていたが、同人の大半がもつと続けたいという意見だったので、一一〇号迄、年三号ということにして、現在、一〇六号を制作中である。同人数は三十五人。

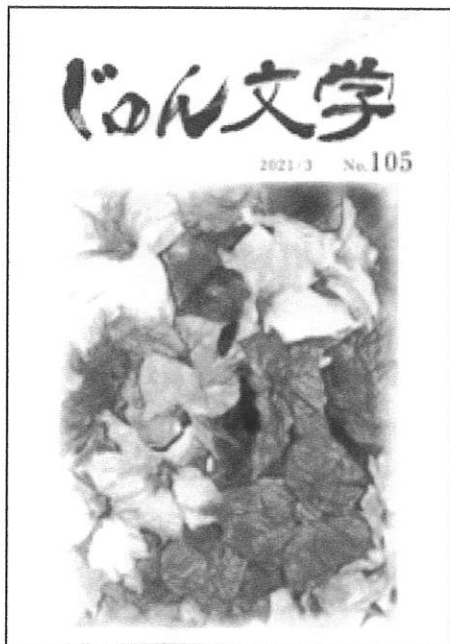
私は二十三歳で小谷剛主宰の同人誌『作家』に入れてもらった。小谷剛とは戦後第一回芥川賞受賞者であり、その受賞作も『作家』十一号に掲載された作品である。当時の芥川賞は同人雑誌からの推薦作が多く、商業誌の新人賞から選ばれるようになったのは一九七六年の村上龍氏あたりからではなかったか。小谷剛の両親はともに享年九十歳以上だったので、小谷主宰も長生きされるだろうと、安心してしまっただが、突然、結腸癌にかかって、六十六歳で逝ってしまった。月刊で四十四年、五一六号で終刊。

『作家』での私は約三十年で三十一の作品を発表したのだが、終刊後、どうしようと思った。私は時々『文学界』などの同人雑誌批評で褒めてもらうだけで満足していて、新

人賞に応募する意欲も実力もなかった。

それでも幸運なことに、当時は名古屋で経営していた出版社が、『作家』に掲載された小説を本にして出版してあげると言ってくれた。自費ではなく商業出版してくださったのだが、売れなくて評論家の目に留まることもなく、作家デビューすることもできなかった。だが、取り敢えずは、同人雑誌に書いていても、読んで認めてくださる人がいるとわかって嬉しかった。

結局はこれからも同人雑誌で書いていこうと思ったのだが、そのためには、同人雑誌を創刊しなければならぬということでもあった。小谷主宰が病気になる前から、私はカルチャーセンターの講師の代役をしていて、その受講生



80号

80



25周年・100号記念祝賀会

が発表の場を求めていた。つまりその人達にも発表の場が必要であった。幸いに私は『作家』時代に編集の手伝いもしていたので、何とか自分で同人雑誌を創れるだろうと一念発起した。

『じゅん文学』という誌名は最初の同人十人くらいで決めた。同人の中には、いわゆる純文学を書く人ばかりではなく、直木賞受賞作のような読み物作品を書く人もいたので、平仮名の「じゅん文学」にしたという次第。

次は創刊号の「あとがき」だが、まったく自信のない文章で恥ずかしい。

「同人誌は無理に続けようとしていたり、惰性で続けるものではない。仲間がいるうちは八年くらい続けたいと思うが（私の定年）、もしかしたら一年も続かないかもしれない。二十一世紀になっても、果たしてひとびとは、文学に対して『じゅん』な気持ちでいられるのだろうか。何事も命と同じで、先のことはわからない」

ちなみに「私の定年」とは、六十歳のことであり、創刊時は五十二歳であった。一九九四年は大江健三郎氏が日本人では川端康成に次いで二番目のノーベル文学賞を受賞した年であった。川端康成のデビューは同人誌からであったが、大江健三郎氏はもう、普通の意味での同人雑誌からではなかった。「じゅん文学」はそんな年に誕生した。

創刊以来、いろいろ大変ではあったが、幸いなことに文

明の利器が救ってくれた。『作家』の頃は活版印刷で、編集や校正に苦労したが、その頃、ワープロというものが出現、一九九五年にはマイクロソフト社のWindows 95が発売され、インターネットが始まった。

早速に、提出原稿は手書きではなくCDかEメールでの添付ファイルで、ということにした。結果、思いがけなく全国的に同人になりたいという人が増え、沖縄や九州などの遠方からの入会もあった。自由に入会できて、気ままに退会を許可したので六十人以上の同人がいた時もあった。

十年二十年と続けているうちに、優秀な書き手がたくさん入会してきた。合評会などで切磋琢磨したからか、各方面での文学賞を受けたり、新聞や雑誌で高評価を受けた人も多い。

そんななかで終刊を決めたのは、私も来年は八十歳だからである。視力も体力も弱ってきて、急に倒れた時のことを考えると、元氣なうちに終わったほうが良いと思った。

他の人に頼んではと言ってくださる方もいるが、パソコンでの書式設定や編集作業など、ひとりですべてやってきたので、今さら依頼することは難しい。

紆余曲折はあったが、終刊まであと5号、何とか無事にたどり着きたい。終刊近くになって「文芸思潮」さんに紹介されることになり、最高の思い出になった。謹んで御礼申し上げます。

(主宰／戸田鎮子)

「じゅん文学の会」

主宰／戸田鎮子

〒463・0003

愛知県名古屋守山区下志段味字西の原八九七

電話・FAX 052・718・1493

Mail = sadot@getv.nc.jp

群青 東京都

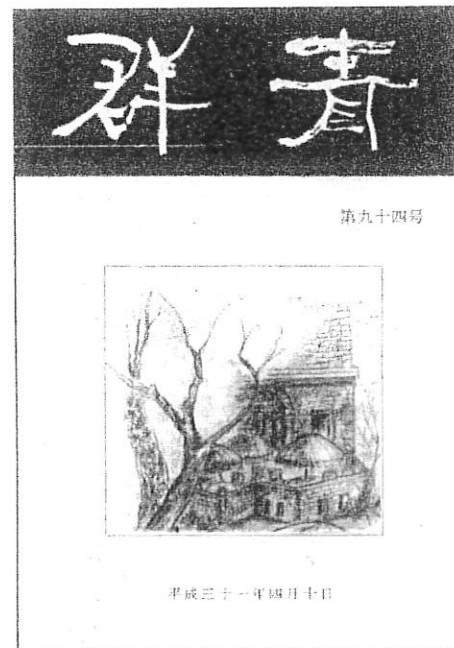
文学が好きでたまらない母体

「群青」はもともと大塚雅春先生が創刊されたもので、大塚先生は若い頃は時代物や大衆小説を書いていたが、中年になって、シベリヤ抑留記や幼き日の思い出などをどうしても書いておきたくなって、同人誌を出すことにしたそうだ。

私は7号から参加したが、そのうち大塚先生が心臓を悪くされ、おまけに千葉のほうへ引っ越すことが決まり、25号から「群青」の編集と発行を頼まれた。

大塚先生が千葉に引っ越されてから、年に二回の合評会は千葉の先生宅で開かれることになった。先生は千葉までやって来る同人のため、お寿司を取りビールを用意してごちそうしてくれた。私たちが申し訳ないと三言つと、「軍人思給はほくのお小遣いに使つていいことになつてゐるが、他に使うことがないので」とおっしゃっていた。

そして「群青」を隔から隔まで丁寧に読んでいて、早速批評がはじまる。そういうときは本当に生きいきとしていて、文学が好きでたまらないようだった。私も多くの人と会つて



ましたが、大塚先生ほど純粋に文学を愛していた人を他に見たことがない。私などは到底その境地になれないが、そういう人と出会えたということだけでも幸せだったと思う。

私が編集するようになってすぐ、河林満さんと小浜清志さんの二人が「群青」に入ってきた。二人とも立川に住み、親友で、それぞれ職場の機関誌に作品を発表していた。それを読んだだけで並々ならぬ才能は感じていたが、河林さんが持つてきた「黒い水」には感動した。死者を一旦土葬にし、何年か経つて掘り返し骨を洗つて埋葬し直す。幼き日に亡くなった母親の骨揚げの行事に立ち合う作者の母を恋うる気持ちがいままでに出ていた。

私はその作品を巻頭に載せることにしたが、作品を読ん



房総の浜辺を散策する同人たち

でない大塚先生は新しく入った人の作品を巻頭に置くことに懸念を感じ、同人誌での巻頭の作品の重要性を言ったが、「大丈夫です」と私にしては珍しく胸を張って答えたことを今でも覚えている。

小浜さんはそのときボクサーの話を書いてきた。その作品も悪くはなかったが、私はあえて「ボクサーのことなら、私だって調べればこれくらいのことを書けるわよ。どうして沖繩のことを書かないの？」とボツにした。

座談の名手と言われる小浜さんは沖繩の話で、いつも私たちを楽しませてくれていた。私はそれを書いてほしかったのだ。しかも沖繩と言っても多くの人が書いている戦場になった沖繩本土ではなく、遠く離れた八重山諸島の話である。

私の要望にこたえて書いた「赤いカラス」は名作で、次号の巻頭に載せた。これは文学界の同人雑誌評で大河内昭爾さんに絶賛された。

二人はそれぞれ「群青」に一作ずつ載せただけで、そのうち二人とも文学界新人賞を取り、卒業していった。私との交流が二人のために役だったことと言えば「高橋さんが取っているんだから、大したことはない。俺たちが本気になって書けばすぐとれる」と、新人賞に対して敷衍の高さを感じなかったことではないかと思う。

それから「群青」が他の同人誌と違うところは、掲載料



大塚先生宅での合評会

を一切取らなかつたことである。掲載料を取ると、つまらない作品でも載せないといけなくなるのが嫌だった。しかし今になって見ると、これがよかつたのか悪かつたのか、私にもわからない。

作品を載せるか載せないかの判断は、私の独断で決めさせてもらっていたが、いつもいい作品が集まるわけではない。ある程度の作品なら載せてくれるとなると、みんなある程度の作品で満足し、それしか書かなくなる。

自分の殻を破つて一段と成長するためには、自分に対する厳しさが必要だし、身銭を切つて掲載するとなると、いつも同じ調子では満足できなくなつて、もつと真剣に作品に向かい合い、いい結果につながつたのではないかと反省している。「群青」は二〇一九年四月、94号で終刊した。書き手も読み手も高齢化し、続けられなくなつたのである。私が編集し始めてからでも三十五年である。その間、休刊も遅刊も一度もなかつたことは誇つてもいいだろう。

国会図書館には創刊号から94号まで全部揃つている。実際に借りだして自分の作品を確かめてきた同人もいる。とにかく一応全部揃つているということで「群青」に作品を寄せてくれた人にも、最低の責任は果たせたと思っている。

〔群青〕主宰／高橋光子

四人 東京都

自分の思ったことを自由闊達に

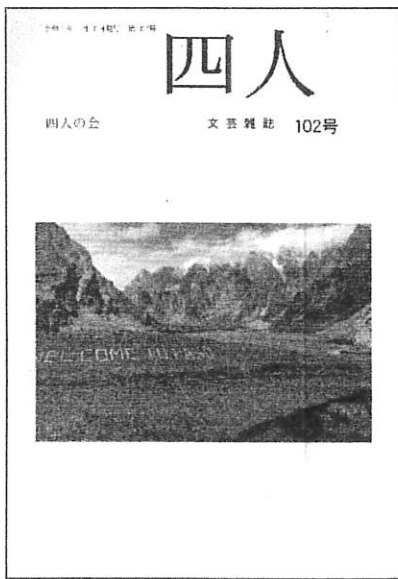
「この五月、六月、七月と、心身の衰弱状態が続き、『四人』九四号のことが気になりながらも、手を付ける気力もなかったが、ある同人から『なんぼしよつとか、怠慢は悪徳バイ』と発破をかけられて、やっとここまでたどりついた」

二〇一四年（平成二六年）二月二十五日発行九四号の編集後記にこう記して、成清良孝さんが編集担当を降りられた。やむなく私が編集を引き受けることになった。

『四人』の創刊は、一九六〇年。『隊商』の残留組——小松郁子、星川道之助、峯島正行氏、辻千鶴氏の四人が始めた。四人が始めたので『四人』と名付けた。

それから三七年後の一九九七年、長く編集を続けてきた永松晋次郎氏が逝去され、六一号から九四号までの一七年間、成清良孝氏が編集を担当された。その成清良孝氏も世を去られた。

ここで少しばかり、『隊商』について説明しておきたい。『隊商』は一九五〇年（昭和三五年）七月に創刊し、一九五九年（昭和三四年）七月に最終号を出している。同



人には、火野葦平や長谷健がいて、編集の中心は永松晋次郎というように、九州出身者が多いのが目立つ。『隊商』や『四人』の編集発行を長く務めた永松晋次郎や、長谷健、成清良孝などは、現在の福岡教育大学の前身、福岡師範学校、福岡学芸大学を卒業、上京して公立の小、中、高校の教師の職に就いた。

『隊商』は、東京で出版されたが、実は九州で長く文芸運動の中心的役割を果たしてきた文芸誌『九州文学』に繋がる同人が多かった。同誌周辺で新たな雑誌の創刊が発議された時、火野葦平、長谷健の親身な協力を得て『隊商』は誕生したのである。『隊商』二三号（昭和三三年三月）は、長谷健追悼号であるが、その編集後記には、「火野氏をおやじに、長谷氏をおふくろのように考えていた」と記されている。

昨今は、社会の高齢化が進み、後継者不在による廃業が増えてきた。出版の世界については、さらに紙・活字離れという現象も悪い要因として働いた。

同人雑誌全盛の時代には、多くの逸材が同人雑誌から輩出した。『四人』についても、その六〇年の長い歴史の中には、有名な文学賞を受賞した方や候補になられた同人が多く加わっていた。今は、昔と違って同人雑誌からばかりではなく、いろいろなきっかけで職業作家が生まれる世の中になった。

私が編集に携わるようになってからは、それまでの同人誌出身の著名作家の系譜につながる方々ばかりではなく、働き盛りの時には適わなかったが、退職後に書き始めたという同人も増えてきた。

最近、嬉しいニュースがあった。『四人』に「鎮魂ハルの生涯」を五年間連載してきた古川貞二郎氏が自費で単行本を出したところ、NHKや新聞で評判になって、意外にも自費出版では珍しい、即、増刷という現象が起きている。一つの例を挙げると、読売新聞一月二日朝刊は、「胸迫るほど母思いに満ちた自伝的小説が出版されました。（官

僚のトップ）内閣官房副長官を八年七か月も務めた古川貞二郎さんの『鎮魂ハルの生涯』です」と写真入りで書評を出した。

ゴーストライターが書いた政治家や官僚の自叙伝は多いが、忙しいスケジュールの間を縫って、こつこつと自分自身の指と筆で書き進めて行った自伝的小説は数少ないだろうと思う。

誰にも干渉されずに、自分の思ったことが自由闊達に書ける。こういうことが同人雑誌のよいところだろう。本誌は、編集者が作者の作品に筆を入れない、校正は作者本人が責任をもって行う、という編集方針をとっている。他者が筆を入れることによって作者の意図を損なうことを恐れるからである。

（山本悦夫／『四人』編集発行人）

四人

九州出身者が多い高レベル誌

「四人の会」

〒一〇三・〇〇〇四 東京都中央区東日本橋一・六・五
佐藤ビル1階 インターナショナルセイア内
☎090・22203・2434



時代と共に、時代を超えて

わが同人誌「文芸復興」が創刊されたのは、昭和十七年（一九四二）二月のことである。終戦を挟んで十年余の空白があるが、今年（二〇二〇）で、創刊から七十八年の歳月が経つ。

簡単にその歴史を紹介したいと思う。

昭和十六年（一九四一）一月、同人雑誌が大同団結して、日本青年文学者会が結成された。その呼びかけは国策協力団体日本文学者会からなされた。日本青年文学者会の結成と共に、五十余誌あった同人誌は八誌に自主統合された。国家側の文芸統制に呼応するような形で日本青年文学者会が結成され、同人誌が統合された事に対する批判もあった。しかし、商業誌は言うに及ばず、文学同好会、同人雑誌グループの中には、摘発、検挙を受け、廃刊に追い込まれたものも多くあり、統合は時流に押し流されない為の自己防衛という側面があった。

統合されて残った八誌は次の通り。

「文藝主潮」「辛巳」「正統」「文藝復興」「新文學」「新

文芸復興

38

通神 文芸復興

2019・5 / No.138

作家」「昭和文學」「青年作家」。(高見順「昭和文學盛衰記」より引用)

統合された五十余誌のうち小説界、青衿派、文學陣、季節、裸木、現實、樹林、クローノスの十誌は「文芸復興」という誌名で、昭和十七年二月に創刊号を発刊した。編集長は城野政夫、編集発行人細野孝二郎。私の父上野壯夫は八誌の上部組織日本青年文学者会の委員長となり声明文を「文藝復興」と「新文學」に掲げた。

「(略)私どもは永らく分散孤立の状態におかれていた純文藝同人誌の自發的統合を成し遂げ(略)同志的血盟を誓ひつつ力強く出發することとなりました。(略)惟ふに、私どもは國家の光榮ある世紀に遭遇し、祖國の理念と現實

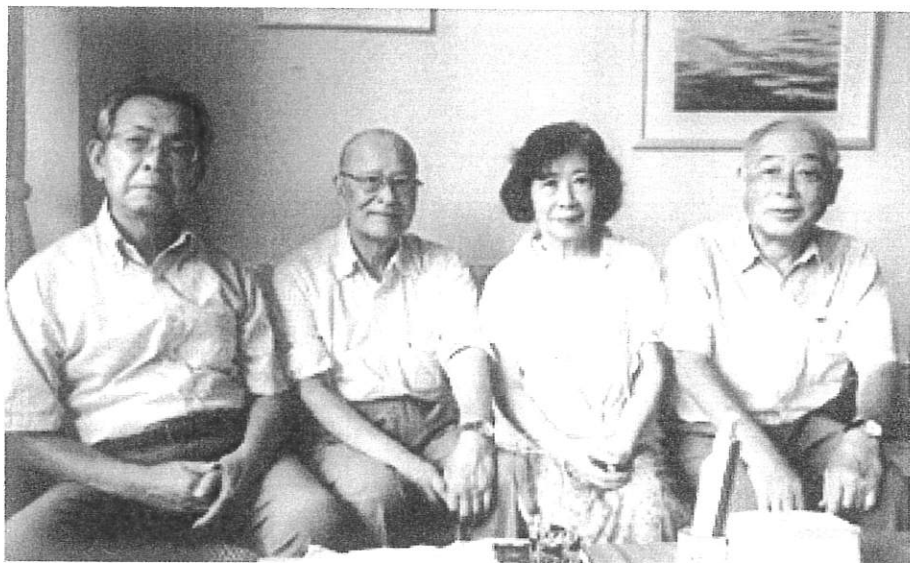
とを身を持って生きることにより、當面する世界的革新に寄與されるべく要請されてゐるのであります。」

国策に添った声明文である。厳しい言論統制下抵抗は許されなかったが、文学者魂は健在だったことが、「文藝復興」に掲載された作品に垣間見られる。十八年五月号の編集後記で、「青年文学者會所属の他の七誌とともに賣上の全部を擧げて帝國海軍に献納することとなった」とも上野は書く。この号には、伊藤整、上林曉、上田進、浅見淵なども執筆している。昭和十九年一月、八誌の同人誌も「日本文學者」一誌となって終戦を迎えた。

第二次「文芸復興」は昭和三十一年に発刊された。表紙は洋画家麻生三郎が描いた裸婦の素描。一集から百集までの編集長が落合茂。第三集(昭和三十一年六月)は、五十余人の在所帯となった。その後、宮地嘉六、細田源吉なども同人に名を連ねたが、戦前に多くの作品を発表した二人もこの時、六十代後半から七十代。総じて同人の年齢は高かった。

当代の文芸評論家平野謙は、「文芸復興」のことを、「どうしても文学を断念することのできぬ一種の執念みたいなものから、相当年配の人たちが出している雑誌」(「文学界」昭和三十三年五月)と評した。

これに対し、同人の上野壯夫は「売りものにならない小説や詩を書く者がいなければ、強力なマス・コミ商業政策



「文芸復興」同人

左から西澤建義、森下征二、堀江朋子、丸山修身

の中で、文学はだんだん衰え、末枯れてしまうだろう」(「文芸復興」第九集昭和三十三年)と反論した。
 第百集(一九九六(平成八)十一月)は落合茂が代表・編集となつているが、発刊直前の十月に急逝。第百集に添えられた同人一同の挨拶文には「ここに「文芸復興」は記念すべき一〇〇号をもって、新しい旅立ちを期し、完結いたします」とあった。

第三次「文芸復興」創刊号は、一九九七年(平成十一)六月に会田武三が代表兼編集長となつて発刊された。発刊までには様々な思惑や逡巡があつたと思われる。廃刊も視野にあつた。創刊からの同人は、現在上原アイのみ。堀江朋子は第二号から正式に参加した。第五号から現編集長の西澤建義、その後、森下征二、丸山修身、多門昭、松尾鶴舎、松元真などが参加。二十二号(二〇一〇)から、会田武三に代つて堀江朋子が代表となつた。長谷川龍生、吉田真規子(真木侑)、稲垣美和子、小田怜子、中嶋英二、坂本満津夫、南みや子が参加。死亡、退会があり、現在の同人は上原アイ、小田怜子、坂本満津夫、中嶋英二、西澤建義、丸山修身、南みや子、森下征二、吉田真規子、堀江朋子四十一号(二〇二〇・十一)から垣花理恵子が参加予定。
 以上、「文芸復興」の歴史と同人について記した。特筆すべきは、二〇一二年十二月の創刊七十年記念特集号では、作家辻井喬氏のインタビュー記事を掲載し、二〇一七年

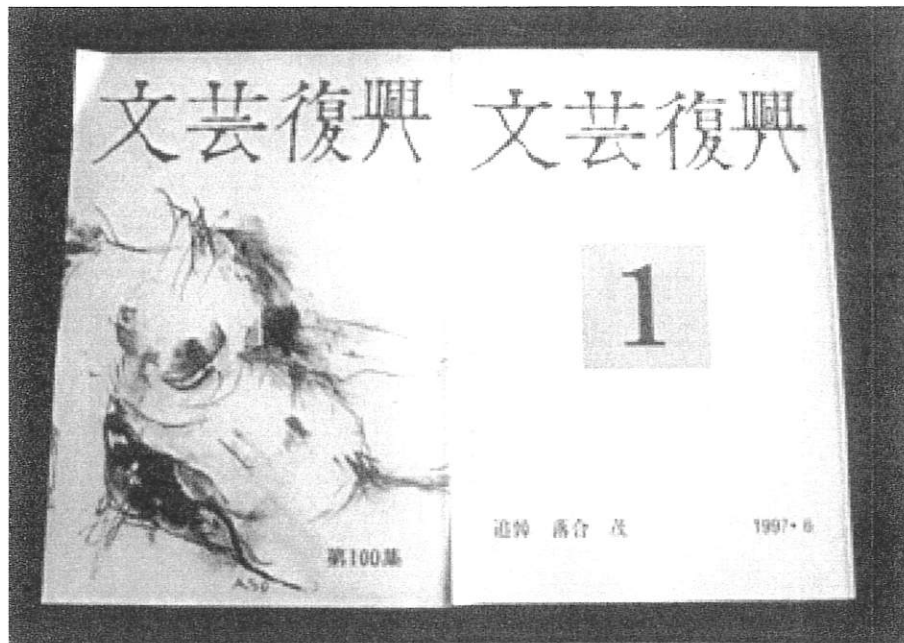
十一月の七十五年記念号で、文芸評論家志村有弘氏の寄稿を得たことである。

「文芸復興」の歴史を振り返つてみて、激しい言論弾圧のあつた戦時下、細々と文学の灯を灯し続けた先達の苦難を思い、再びそのような時代が来ることを願つた。さらに、平野謙と上野壯夫とのやりとりを読んで、何の為に書くのか、文学とは何かという問いを改めてつきつづられた気がする。

今も、「文芸復興」同人の年齢は高いが、みなかなりの力量の持ち主である。第一に書くことが好きなのだ。文学に対する執念とは違つた次元のものである。第二次「文芸復興」創刊号の表紙を描いた麻生三郎は、「ものがながくあることが、存在していること、美しさが、なんであるか」の意味を、今の人が省みないとしたら、「今の人達」の精神構造を未来の青年たちはわからないでしまうことになる」と書いている「一九三〇年代―青春の画家たち」。私は、「ものがながくあること、存在していること」という文を「伝統」と解釈した。

「文芸復興」は、戦中・戦後、昭和という時代と共にあつた。そして、平成、令和という時代と共にある。時代は変転して行くが、変わらないものがある。時代を超えて美しいもの、人の心を打つものがある。

変わらないものを求めて、人は文を著し絵を描く。私は



そう思っている。なにか、大上段に振りかざした結論になつてしまつたが、畢竟、「好きだから書いているだけ」が一番正しいかもしれない。

(代表/堀江朋子)



文芸復興

〒169・0074

東京都新宿区北新宿二・六・二九・415

文芸復興社 堀江朋子方

TEL03・5386・4232

たまゆら

京都府

百号を超えた「たまゆら」

「たまゆら」という語句は「玉響」と万葉集にも記載されている雅語で、珠玉が触れ合い、一瞬かすかな音を発すること、の意である。小誌命名の折「はかなくもささやかに」と人生そのものに重ね合わせながら、多分この雑誌もそうなるだろうと予感していた。

ところが、令和二年四月時点で第一一七号にまで達したのである。その原動力といえば、いうまでもなく私の文学熱であり、まとめた冊子を世に遺そうとする執念に他ならない。そこに至るまで幾つかの節目とか契機があった。私が二十代で同人誌『関西文学』に入会したこと、そこに拠る有力同人を誘って『半獣神』を創刊したこと、平成元年に毎日新聞社を繰り上げ定年退職した後、大阪文学学校の講師に就いたことなどが挙げられる。

当初は摂津市で読書会や文章教室を開き、程なく会員の短文を集めて、平成二年に小冊子『たまゆら』を発刊した。かくして種子は播かれたのである。時経て節目節目で、少なからぬ文学愛好者と出会い、次々と同人が加わり、また

去っていった。今回受賞された桑山靖子さんも大阪文学学校で知り合った一人である。『たまゆら』を主宰しながら、同校の講師を十年、文芸誌『樹林』の同人誌評子を十一年、大阪芸術大学の講師を三年務めて勇退した。

私は結婚後の家庭事情で摂津市から高槻市へ、更に東近江市へと転居を重ね、その間も営々として『たまゆら』の発行に努力すること三十年近く、何かと曲折があり、辛苦のほど、エピソードの数々など筆舌に尽くせるものではない。

『たまゆら』のモットーとして簡潔に「より高く、より楽しく」を標榜した。小説が中心だとしても、雑誌というからには五日飯、幕の内弁当の旨味がなければと常日頃から唱えていたので、随想や思索的色彩の濃いエッセイ、評論、詩、俳句、短歌、戯曲などあらゆるジャンルを受け入れていく。

現有同人の内訳は創作同人、購読同人、特別購読同人併せて二八名、切磋琢磨の好機となる合評会は欠かさず、私は第一一四号まで季刊で主宰、それ以降は京都の中川一之さんが年三回発行で編集代表を務めている。本号に転載された桑山靖子さんの「当麻曼陀羅」は、私の主宰役最後の第一一四号に発表された力作である。彼女とは前述した通り大阪文学学校時代に接点をもって、彼女は古典文学や芸能を素材とした作品の多い中長篇派、著書に「能面」



合評会にて同人メンバーと

(鳥影社刊)がある。

なお、同人の文学活動でつけ加えるなら、有志それぞれに単行本上梓がある他、榊原隆介さんの「内田百閒文学賞」、杉本増生さんの「関西文学賞」「神戸エルマール文学賞」、私はかつて『文學界』『すばる』『季刊文科』に作品を発表したことがあり、「北日本文学賞」(選者・井上靖)「神戸エルマール文学賞」を受賞した。

同人誌の世界にも高齢化の波が押し寄せている。それは知的遊戯の側面があるにせよ、やはり文学樹の根となっているのは明らかであり、活字文化が衰えれば文化は廃ると強調しておきたい。その点、『文芸思潮』は私たちにとっては何がたい応援軍、私も平成二十三年に第八回「銀華文学賞」佳作を頂いた御縁があり、今回の桑山さんの快筆を得て、ますますその感を深くした。

ドストエフスキーは長篇「未成年」の中で「人間というものには実に複雑な機械で、ときとすると何が何やらわけのわからぬことがある」と記している。まことにその通りなのだが、さればこそ例えば純文学なら、人間という未開の密林へ、未知の巨峰へ新機軸の文体で挑もうとするわけである。そこに途方もないむずかしさと、えもいわれぬ面白さがひそんでいるといえよう。私如きはそれらの麓でうろつくばかりだけれども、いつも痛感するのは、私にとつて自作を活字にするという行為は他に代えがたい生甲斐、達

76

成感が得られるということだ。それでいて同時に、「言葉というものは何と不完全なのだろう。それ故に言葉を探せ、但し書き急ぐな」という自戒の念は忘れたくない。ちなみに、私がお気に入りの章句の中に、ガストン・バシユラーの「文学的イメージは新たな夢幻性で豊かにされなければならぬ」とか、開高健の「文章はメリ、ハリ、テリ、ツヤの四つ」などがある。

現代社会に孤立化と平準化、敢えて言えば映像化も進みつつある。時あたかもコロナ戦争が生起した。この人類共通の敵に対して、今こそ万国が一致団結して世界平和への糸口を見出すべきではないかと思う。せめて私に出来ることはと問いかけてみて、小誌に「同人誌寸評」の連載を決定した。これからも私は珠玉の才を探る旅、創作者にエールを送る旅を続けるだろう。

(前主宰／佐々木国広)

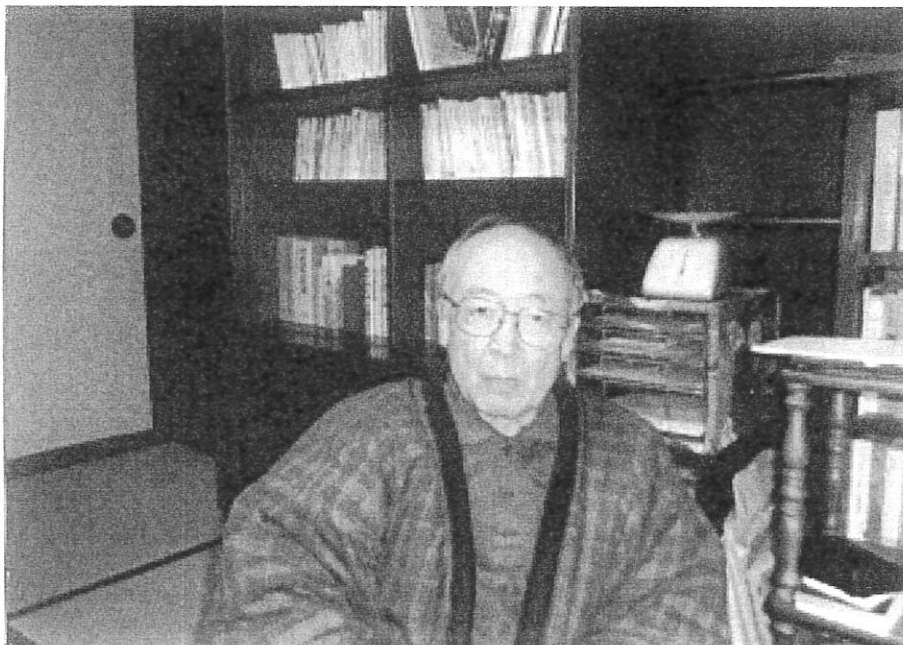
たまゆら 新代表・中川一之

〒612・8358

京都市伏見区西尼崎町八九〇・二 中川方

電話 075・622・3448

Mail = abbeyroadkaz@gmail.com



書斎の佐々木国広前主宰

本気で文学を学ぼう

「季刊遠近」は二〇二〇年三月に七三号を発行したが、創刊は一九九六年一月である。
 確かあの年もネズミ年だった。そしてその頃、私たちが指導して下さった文芸評論家の故久保田正文先生もネズミ年だった。発足の時、こんな偶然を面白がったのを覚えている。

それまで「よんかい」という同人雑誌を出していた仲間が、声をかけ合って集まったのである。中には短歌や俳句を楽しんでいた人もいたが、この雑誌は小説と随筆、評論等、散文に限ろうということになった。いわゆる文学好きの仲間が集まるサロンのような場ではなく、本気で文学を学ぼうという仲間の真剣な研鑽の場にしようではないかという意気込みだったのである。内容は公序良俗に反しない限り、どんな思想を盛り込んでもよいが、あくまでも人間を追究するものでありたいというのが、同人たちの熱っぽい理想であった。

「遠近」という誌名は、久保田先生が考えて下さったもので、今でも私たちは先生の遺産として誇りに思っている。



「私小説千年史」出版記念会に参加した人々



招待客を迎える勝又先生

表紙は、当時現代美術家協会の代表であった難波田元氏が船出へのお祝いとして描いてくれたもので、以来季節ごとに色を選んで使っている。

二年目の九八年、六号で「久保田正文研究」を特集。紅野敏郎先生が御寄稿下さったり、大正大学の小嶋知善先生が久保田先生の正確な著作目録を作って下さった。何より話題を集めたのは、先生が七二年に冬至書房から出された小説「冬のランプ」を転載したことで、各方面から思いがけないほど注文が来たのには驚いたものだ。

米寿のお祝いの後間もなく病に倒れてからも、先生は病床から毎回作品の批評を書き送って下さった。同人たちは、合評会の度に先生から送られて来る温かい手紙と厳しい批評文によって、どんなに励まされたかしのれない。二〇〇一年の六月、そんな久保田先生がついに亡くなり、九月に出た一六号は追悼号となってしまった。

その後を引き継いで、「遠近」の面倒をみて下さることになったのが、勝又浩先生である。勝又先生は当時まだ法政大学で教鞭をとっておられたし、文芸評論家としてもお忙しかったが、恩師であった久保田先生の推薦でもあり、同人からの熱心なお願いを断り切れずに応えて下さったのである。お忙しい中、今も三か月に一度くらいの割で「遠近」の例会に参加して下さい、作品の批評その他色々指導をいただいている。

同人誌

Fznm-0000

神奈川県横浜市青葉区荏子田二・三四・七

江間方

TEL 045・904・0245

勝又先生のご著書は数多いが、やまなし文学賞を受賞なさった「中島敦の遍歴」や和辻哲郎文化賞を受賞された「私小説千年史」は記憶に新しい。また水声社から出版された「山椒魚の忍耐」は、井伏鱒二生誕一二〇年、没後二五年を記念する興味深い本である。

ご執筆のほかにも、一九九一年から二〇〇八年に同欄が廃止されるまで、大河内昭爾氏らと「文学界」誌の「同人雑誌評」を担当されていた。またこの時の四人の担当者を中心に、同人雑誌と文壇を繋ぐパイプとなることを目標にした雑誌「季刊文科」を一九九六年に創刊、今日に至っている。

現在「遠近」の正会員は一四人、購読会員は一六人である。「季刊」と謳ってはいても、実際には年三回しか出ない年もある。が、月一回の合評会は休まず続けている。原則として毎月第一土曜の午後一時、場所は都営新宿線船堀駅前の「タワーホール船堀」(江戸川区船堀四・一・一電話〇三・五六七六・二二二一)の会議室である。少々の雨なら傘が要らないという便利な場所だ。会の後は同じビル内の和食レストランで会食を楽しんでいる。

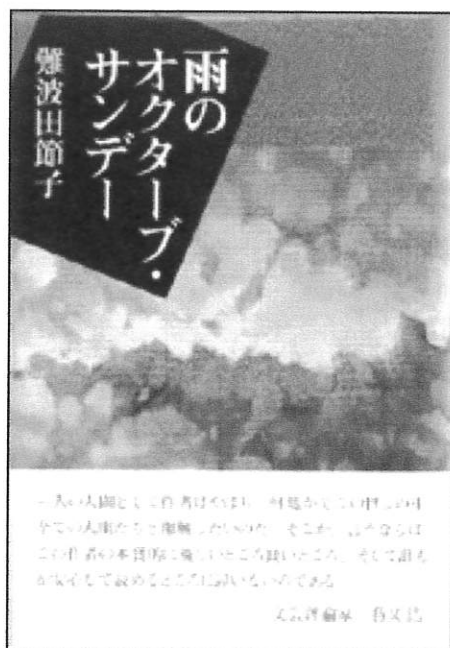
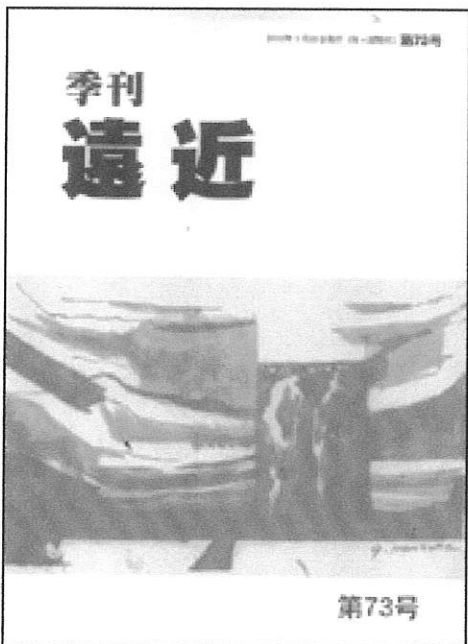
会費は、正会員が年三万円、購読会員三千元、作品掲載料は一ページ一四〇〇円。事務局がしっかり管理してくれている。

同人の活躍について述べれば、二〇一八年に河村陽子が

水声社から作品集「林」を出版したのを初め、花島真樹子が鳥影社から「忘れられた部屋」、木野和子が鉾脈社から「おじよん」を出版。難波田節子は「雨のオクターブサンデー」「晩秋の客」(鳥影社)「太陽の眠る刻」(おうふう)その他を出版している。なお「季刊文科セレクション」大第一集には、難波田節子の「紅い造花」が、第二集には花島真樹子の「鏡の中」が掲載されている。

今回「全国同人雑誌優秀賞」に選ばれた小松原蘭は、過去「よんかい」や「河」に多くの作品を発表しており、「遠近」にも瀬良有為子というペンネームで書いていたが、育児のために一時退会、一七年に復帰、「川向うの子」「西大門」、「SPARROW」ほか、各号にユニークな作品を発表して注目されている。今後ますますの活躍を期待できる作家である。

(文責/難波田節子)



歓談する会員

同人誌相互の交流を軸に

はじめに

「弦」が二〇〇八年に同人雑誌紹介のページを頂いて以来、今回の長沼宏之さんの「睡蓮」の優秀賞受賞に伴い、四度目の機会となった。十二年間に四回というのは、まことに名誉なことである。創刊五十二年、次号で一〇八号を迎える「弦」は中部地方では歴史のある同人誌ではあるが、同人はそれほど多くはなく、どちらかと言えば地味な雑誌かもしれない。いい意味で堅実ではあるが、老人誌であることは言うまでもない。

さすがに四回目ともなれば、会のあらかたは既に書き尽くされた感がある。今回は少し視点を変えて、「弦」と他の同人誌との交流を中心にまとめてみたい。

中部ペンクラブの活動

一九八六年に中部ペンクラブが発足するまでは、「弦」に限らず同人誌相互の交流というものはないに等しかった。結成以来三十五年、中部地方の同人誌のありようは劇的な変化を遂げた。これによって多くの他誌の作品に接するこ

とができるようになり、会員同士の親睦を図るという効果も生まれた。

まず年一回の総会とその後の講演会。今までの講師には村田喜代子、中村文則、堀江敏幸、谷川俊太郎、平野啓一郎、稲葉真弓、吉村萬菴、辻原登、中上紀さんなど著名な作家も多い。講演終了後の親睦会では講師も含めて、交流を深めている。

次に、年一回開かれる「会誌中部べん」を読んでのシンポジウム。中部の同人誌からの公募作品から選ばれる中部ペン文学賞の作品を中心に、会員の掌編小説、エッセイなどについて一般の参加者と共に活発な意見交換が行われる。三つ目は、年二回発行の機関誌「中部ペンクラブ」によ



2013年徳島県三好市での同人雑誌フェスティバル前に中村代表、吉村さん、中央に名村・宇佐美・木戸さんら

76号



「弦」の編集委員、左より木戸、國方、長沼、山田、市川、白井

る情報の共有。会員の作品の批評も掲載される。

四つ目は、押しかけお招き合評と称する合評会。他の同人誌の方々も交えて忌憚のない作品批評を行っている。また、文学散歩と名付けた行事もある。名古屋近郊のホテルに出かけ、文学座談会をしたり食事を楽しんだりする企画である。文芸セミナーでは、小説ばかりではなく他の領域で活躍されている方の話を聞き、見聞を広める機会として

いる。ペンクラブの運営は三田村会長はじめ理事会、文学賞委員会、編集委員会、行事委員会などに属する会員の献身的な活動に支えられている。「弦」からは、五名がそれぞれの会で活躍している。

同人誌による批評コーナー

「弦」では中村賢三代表が、毎号「同人誌の周辺」と題して中部ペンの会員の作品ばかりでなく、他誌の批評もしている。また、豊橋市の「果樹園」では今泉佐知子さんが、「同人誌をちこち」という欄で同じく他誌の批評を展開している。自分の作品がどこかで注目されているということ、は励みになると同時に、多くの人に作者と作品を知ってもらえるという意味でも意義深い取り組みと言える。批評が人を育てるということは、疑う余地はない。

全国同人雑誌会議と共に

第一回全国同人雑誌会議は、二〇〇五年に名古屋市中

開催された。講師に村田喜代子さんを迎え、同人雑誌に向けてのお話をして頂き、「同人雑誌という土俵」をテーマにシンポジウムが行われた。五〇〇名ほどが集まり、大成功であった。

第二回は二〇一〇年、徳島県三好市で行われた。全国から五十誌、中ペンからは十五誌、二十八名が参加した。その三年後、同市で富士正晴全国同人雑誌フェスティバルが開催され、「文芸中部」と「弦」が同人雑誌賞特別賞を受賞。中ペンからは七名が参加して交流を深めた。この選考委員の一人である吉村萬壺さんから「文芸中部」と「弦」の作品批評を直接頂く機会を得た。この時のご縁で中部ペンの文学講演会の講師をお願いしたという経緯がある。

第三回が二〇一九年、池坊東京会館で開かれたことはまだ記憶に新しい。シンポジウム「同人諸家の提言と話し合い」では、予定時間を大幅に延長して熱心な討議がなされた。会議には中部ペンクラブから二十七名が参加し、有意義な時間を過ごした。



『海』100号記念合評会に『弦』などから（押しかけ参加）5名、『海』同人とともに。後列左より、国府・長沼（弦）・宇梶・白井（弦）・白石、前列左より紺谷・山口（富山より）・遠藤・中村（弦）・松島（文炎）

弦の会 〒463-0013

愛知県名古屋市中守山区小幡中3-4-27 弦の会

TEL 052-794-3430



弦の合評会にはいつも20名ほどが集まる

翌日、希望者による東京文学館巡りが、文芸思潮の五十嵐勉さんの案内で行われた。

全国同人雑誌会議により、中部地方での広がり留まっていた同人誌同士の交流は、一気に全国に広がっていった感がある。遠隔地の同人誌と雑誌交換も行われるようになった。何より全国にこれほど多くの文学を愛する人々がいるという目をの当たりにして、勇気と力を与えられたような気がする。

文芸思潮の存在

「弦」に関して言えば、二〇〇八年は青梅市、二〇一六年は東京太田区民プラザ、二〇一九年は東京池坊会館での表彰式に参加させて頂いた。誌上で名前しか知らなかった方と直接お会いして言葉を交わすことができるのも貴重な体験である。ここにも文学を愛する多くの人々が参集し、いつも刺激を受けている。個人的には二〇〇八年、青梅市での表彰式の

翌日、五十嵐さんの案内で多摩川沿いの川合玉堂美術館を訪れたことが心に残っている。

特に文芸思潮の同人誌評が、同人誌活動をしている者にとつてどれだけ励みになっているか計り知れない。同時に毎号発表される作品群はどれも魅力に溢れ、読む楽しみだけでなく創作活動に力を与えてくれる。多くの同人誌作家が、文芸思潮の存在に勇気を与えられていることは想像に難くない。そういう雑誌が常に傍らにあるという幸福を噛みしめながら、全国の同人誌の活動がますます盛んになり、交流が深まっていくことを願っている。

終わりに

同人誌活動はいつも順風満帆であるはずもなく、「弦」も何度かいろいろな困難に見舞われた。経済的な問題と同人の高齢化は全国的な問題である。しかし、どんな作品を目指すにしろ、何もないゼロから言葉を紡いで何かを創り出すその喜びを知ってしまった者は、もう文学から離れられないのではないか。感覚を研ぎ澄まし、社会に向かってアンテナを張り巡らし、知的な好奇心を育てなければよい作品は書けないのだという覚悟が、老化の進む脳細胞を鼓舞する。全国に物を書く仲間がたくさんいるのだという連帯感に、大いに元気づけられる。書き続けるしかない。

（文責／木戸順子）

八月の群れ

兵庫県

伸びやかな合議制と安い掲載料

文芸同人誌「八月の群れ」が発足したのは、一九八一年八月のことでした。今年で三九年目、発行号数七〇号、人と言うならば、古希を迎えます。

大阪堂島の朝日カルチャーセンターの講座・芥川賞候補作家竹内和夫氏の「小説実習」の受講生の有志が集まって創刊した同人誌です。誌名は戦争の惨禍を忘れないため終戦の日八月一日を意識し、また大阪堂島で危なげな筏に乗り合わせた人の群れに由来します。

同人構成メンバーは最近では珍しいことですが、創刊当初から男性作家が多く、平均するとおおむね男女半々というところですが、年齢構成は高齢化が進んでいます。今回賞誌から「優秀賞」をいただいた葉山ほずみや「準優秀賞」の山咲真季など若手もあり、書き手の中核です。

当初は受講生だけで立ち上げたのですが、第二号から竹内和夫氏の指導を受けることになり、二〇一七年六月一八日の「父の日」に逝去した氏が闘病生活に入る二〇一三年

六月まで長年、編集責任者として作品の事前審査、掲載順位の決定などを行い、「八月の群れ」にとって大きな存在でした。氏は同人誌と同人誌作家を支援する「神戸エルマール文学賞」、大阪文学学校のチューター、新聞社の同人誌評、新聞社の読者文芸の選者、小島輝正文学賞（4回）、神戸ナビール文学賞（13回）、神戸エルマール文学賞（11回）の選考委員、神戸市など地方自治体主催の文芸祭の審査委員などを歴任しました。その中で、同人誌や同人誌作家支援、発掘を「文学の地下水脈の発掘」と位置づけ、生涯、同人誌の仕掛け人と自称し、情熱を傾け、その功績は偉大でした。ですから、編集責任者の承認なしでは、「八月の群れ」の同人になることも作品を掲載することもむづかしかったのです。実質的編集事務はすべて同人代表がしていました。が、「編集後記」を書くこともできませんでした。もちろん事前合評会はなく、できあがった雑誌を合評する方式です。そうしたなか、一九八九年、突然「八月の群れ」発刊の経緯や掲載作品の可否、同人加入決定等に異議を唱えて一気に創刊同人、中核同人五人が、退会したのです。

その結果、「編集後記」は代表と編集同人の持ち回りとなり、竹内氏は作品を読み、掲載順位を決定することだけとなりました。その後、この体制は五六号まで続きます。彼が入退院を繰り返していた二〇一三年九月（五七号）



「八月の群れ」合評会後の懇親会風景

から「八月の群れ」の編集はすべて「編集委員会」の合議で行うことになりました。掲載を希望する同人は、五人の編集委員にメール（郵送は一人のみ）で作品を送り、各編集委員は読んでその批評を作者のみならず編集委員全員にメールで送る形式です。すなわち紙上合評会です。各編集委員はすべての批評を共有したのです。掲載順位も巻頭、巻末、第二番目と決定し、合意で行うとともに優れた作品優先、若手優先が編集委員会の総意でした。

同人全員での合評会は、過去の経緯から各号発行後に行いますが、優しさのなかに厳しさが込められており、特に付度は一切ない重鎮の女性の批評は、一週間は立ち直れない優しい厳しさです。しかし、間違っていないため恨むことも出来ないのです。「八月の群れ」は一見優しい群れに見えますが、彼女が元気でいるかぎり怖い群れかもしれません。

しかし、合議制の編集委員会方式になってから、ある変化が同人の間には起きたのです。各号ごとの応募作品数が多くなっていたのです。現在八人の同人ですが、常に六、七作品の掲載が続いているのです。これは今まで考えられないことでした。おそらく同人各位が自由に伸びやかに何のしがらみもなく作品を気楽に出せるようになった賜たまものではないか、と思います。

それと掲載料が安いことも原因かもしれません。各同人

「八月の群れ」

〒673・0841 兵庫県明石市太寺天王町四・二

代表 野元 正

TEL 078・912・8549

の自己負担をできるだけ少なくするため、誌発行費も原稿料はもちろん出ませんが、年会費は月1000円、ページ当たり(一二〇〇字)掲載料は200円です。四〇〇字詰め原稿用紙一〇〇枚の作品で約6800円なのです。

どうしてそんなに安いのでしょうか。それは、校正は作者責任で行い、編集同人が版下まで作成して完全原稿で印刷所へ入稿するからです。

また「八月の群れ」に参加するのは人格優先ですが、簡単です。作品を提出していただき、二編集委員の承認があればいいのです。

今、「八月の群れ」は「代替わり」の刻を迎えています。そんなとき、わが若手の葉山ほずみが貴誌の「優秀賞」をいただけることは「八月の群れ」が新しい群れに羽化するきっかけになればと思っています。貴誌に心から感謝いたします。

(文責/野元正)



さあ、これから合評会

高踏的な体質



「北方文学」80号の合評会風景

北方文学
新潟県

六十年続く総合文芸誌

「北方文学」は一九六一年に新潟県長岡市を中心に創刊された。中心的役割を果たしたのは國學院大學文学部を卒業して帰郷し、高校教師となったばかりの吉岡又司だった。創刊号巻頭に載る吉岡の「密室のあなたに」という小説論は、「北方文学」創刊同人たちの文学に対する姿勢をよく代弁している。「密室のあなたに」は、当時デビューして間もない大江健三郎と石原慎太郎の「大衆の平均的趣味の方向への逃走」を批判し、ダダやシュルレアリスムの精神を担った「詩における無償の実験」を、小説へと導入していくことを宣言している。

「密室のあなた」とは、閉塞的な状況を生きる文学の主体そのものを意味していて、それは「北方文学」のいわば高踏的な体質を予感させるものであった。そして、そのような吉岡の詩的で、クリティカルな文学精神が「北方文学」を主導していくのである。創刊同人の一人は後に、「その頃の『北方文学』の同人は依怙地なところがあり、文学グループ付きあいを軽蔑し、狭い世界にとじこもって誇りだけ高かった」と回想しているが、そうした傾向はひよっとしたら、半世紀後の現在も持続しているかも知れない。

創刊時の方向性を、孤高の精神と文学的ポピュリズムへの抵抗と位置づけるならば、それは当然維持すべきものであって、六十年後の今日までそれは連綿と継承されてきたのだと誇りを持って言い得るだろう。後継同人の誰もが文学的矜持の姿勢と、文芸ジャーナリズムへの批判的精神を確固として持ち続けてきたからである。

76号

76

しかし、「北方文学」が文学賞というものとまったく無縁であったわけではない。第四号に掲載された、創刊同人の一人・木原象夫の「雪のした」は、一九六三年の第五十回芥川賞候補作となった。また翌年第五十二回の芥川賞候補となった高橋実を同人として迎えてもいる。さらに文学界新人賞受賞者が二人同人として在籍していたこともある。

同人が受賞した賞として特筆すべきは、大井邦雄が二〇一四年に受賞した、日本翻訳文化賞特別賞であろう。大井は早稲田大学名誉教授となつて長岡市に帰郷して以来、ハーリー・グランヴィルⅡバーカーのシェイクスピア論述に、ライフワークとして取り組んできた。その功績が賞を主宰する日本翻訳家協会に認められたのだった。大井も創刊同人の一人であり、「北方文学」のアカデミックな側面を代表していたが、今年一月に亡くなってしまった。

創刊同人が次々と消えていく中で、雑誌の中枢を担っていたのは、いわゆる団塊の世代であった。彼らは同時に全共闘世代でもあったわけで、創刊同人達が六〇年安保闘争の世代であったことを考え合わせると、「北方文学」の世代論的位置づけを理解してもらえらるだろう。ちなみに私は二〇〇二年から編集発行人を務めていて、世代的には団塊の世代のやや後ろに属している。

「北方文学」の特徴を一言で言えば、あらゆるジャンルをカバーする『総合文芸同人誌』ということになるだろう。詩と

小説はもちろん、俳句も短歌もある。評論の守備範囲も広くて、日本の古典から近現代文学、外国文学もカバーし、さらには音楽論や美術論もある。宗教論もあれば、言語論や哲学的論考も排除しない。また外国文学の翻訳を得意とする同人もいて、現代中国の小説が誌面を賑わせることもある。そうした傾向も創刊時の特色を引き継いでいる部分である。

結局は評論主体の同人誌だと言うことができる。全国に同人誌はたくさんあるが、詩誌を除くと小説主体の同人誌が圧倒的に多いだろう。評論主体の同人誌はおそらく数えるほどしかないと思う。そんな特徴を持った雑誌であり、評論の担い手の興味は多方面を向いているというわけだ。裏を返せば同人の志向するところが、てんでバラバラだということになるが、そうではなくむしろ、個々の同人がそれぞれ自分の領野を独自に切り拓いているということにしておこう。

しかもそのような開放的な多様性が、「北方文学」を長続きさせている要因のひとつであると思われる。それは教条的な単色性への陥落から雑誌を救っているし、他の同人に対する寛容の精神をももたらしていると思う。またそれは受容可能な領域の大きさを示していて、それがより多様な人材を同人として受け入れることのできる素地ともなっている。純粹培養されたものよりもハイブリッドの方が強靱なのである。

高齢化の波は避けがたいものがあるが、現在六十代半ばから七十代半ばまでの同人を中核に、五十代が一人、四十



第 81 号の合評会風景

北方文学会 〒945-0076 新潟県柏崎市小倉町13・14 玄文社内

TEL 0257-21-9261

代が二人いる。同人の創作意欲は極めて旺盛である。「北方文学」は創刊から六十号までは、一年に一号から一年半に一号のペースで不定期に発行されてきたが、それ以降は六月と十二月の定期で、年に二号という着実なペースで発行を続けている。創刊五十号記念号は商業文芸誌なみの四百二十頁という恐るべきページ数を達成したが、昨年十二月の八十号記念号はそれに次ぐ三百四十五頁を記録した。もとより厚ければよいというものではないが、それほど同人数が多くもないのにページ数が増えてしまうのは、雑誌がまだ活力を失っていない証拠ではあるだろう。

発行のたびに、二回の編集会議と合評会の計三回集まりを持つことにしている。一回目の編集会議でお互いの作品を読みあたって、問題点を指摘しあい、原稿の段階で一旦書き手に戻す。これは事実誤認や誤植をなくするためばかりではなく、それぞれの作品の完成度を上げるために欠かせない工程だと思っている。場合によってはボツということもその編集会議で決定している。二回目の編集会議は雑誌の形に組んだ状態での最終チェックのために開いている。合評会がなんといっても一番重要な集まりである。ここでお互いの作品を批評の場にさらすことになるからである。結構厳しく批評しあう。それがなければそれぞれが先に進めないというのが、同人間の共通認識となっている。

（「北方文学」編集発行人／柴野毅実）

北海道最長の同人誌

小誌「人間像」は一九四九年九月二十日(昭和二十四年)

に、故針山和美が立ち上げた同人雑誌である。最初は「路苑」という活版刷りだったが、資金難からガリ版の「道」とし、再び活版刷りの「人間像」としたのが一九五一年からだった。彼は、文章倶楽部、文学集団、文芸首都などの投稿誌の主だった書き手たちに手当たり次第手紙を書いた。これが意外な効果をもたらし、それぞれの個性的な書き手たちが同人となった。さらに、その同人たちが親しい物書きの卵たち呼びかけ、鼠算的に同人を増やしていった。

書きたいことが山ほどあるという連中が集まり、全盛期には三十名ほどになった。しかも、北海道に根を下ろしつつ、ローカル誌というにはほど遠い特異な雰囲気のある雑誌となった。同人は四国・九州・大阪・東京・北海道と全国に跨るため、北海道を本部とし、関東支部、関西支部を設け、三地区で合評会を持ち、内報「同人通信」へ集約した。この内報も三百号に達する。今、読み返してみると、かなり厳しい批評合戦だった。三地区に分かれていたため、対抗意識もあっただろうか。合評についていけないとして、退

会する者も多かった。

やがて、出版社も小誌を注目するようになり、朽木寒三、平木國夫、津田さち子らもプロとして多くの著作を上梓、丸本明子が著名詩人として名をなす。そのほか、古宇伸太郎、瀬田栄之助、千田三四郎も出版社からの呼びかけもあったが、すでにこの世から消え去った。

一七〇号を出した直後、主宰の針山が心筋梗塞で死去すると、予てから終刊を主張してきただけに、三分の二が退会。肝腎の終刊主張者である福島が、残った同人たちの懇願に負けて二代目の主宰を押し付けられた。現在、正規同人は四名である。発行経費の半分は私費を投じている私も卒寿。もうそろそろかな、と思っている。

(福島昭午)



人間像同人会

同人は全国に跨がって

道内の伝統誌

人間像

「人間像」(北広島市)

前身の「路苑」が創刊後、昭和24年(1949年)に、故針山和美が立ち上げた同人雑誌である。最初は「路苑」という活版刷りだったが、資金難からガリ版の「道」とし、再び活版刷りの「人間像」としたのが一九五一年からだった。彼は、文章倶楽部、文学集団、文芸首都などの投稿誌の主だった書き手たちに手当たり次第手紙を書いた。これが意外な効果をもたらし、それぞれの個性的な書き手たちが同人となった。さらに、その同人たちが親しい物書きの卵たち呼びかけ、鼠算的に同人を増やしていった。

「和して同ぜず」遠慮なく批評



「和して同ぜず」遠慮なく批評。この言葉は、同人誌の歴史の中で重要な役割を果たしている。特に、針山和美の「人間像」が、遠慮なく批評を行うことで、同人誌の発展に大きく貢献した。この精神は、現在でも同人誌の運営に活かされている。

「和して同ぜず」遠慮なく批評。この言葉は、同人誌の歴史の中で重要な役割を果たしている。特に、針山和美の「人間像」が、遠慮なく批評を行うことで、同人誌の発展に大きく貢献した。この精神は、現在でも同人誌の運営に活かされている。



「人間像」同人会

「人間像」同人会
〒061-1148 北海道北広島市山手町一・一・一〇
発行者 福島昭午
TEL・FAX 011-372-1776



「小説と詩と評論」合評会風景



森田雄蔵賞授賞式

小説と詩と評論

〒123-0864 東京都足立区鹿浜 3-4-22 のべる出版企画
主宰 野辺慎一 TEL03-3896-6506

小説と詩と評論 東京都

長い年月の同人雑誌

「小説と詩と評論」誌は、木々高太郎（一八九七～一九六九）の主宰で、一九六三年二月に創刊された。木々氏は、昭和十一年に「人生の阿呆」で直木賞を受賞。戦後は、昭和二十一年「新月」で探偵作家クラブ賞を受賞し、その後、同クラブの会長を務めるなどして、多方面にわたる文学者との交流があったという。そうした中で「小説と詩と評論」は発行された。松本清張も本誌の同人であったと伝え聞くところである。

木々氏の死後、森田雄蔵氏（一九一〇～一九九〇）が主宰となった。森田氏は木々氏の思想を受継ぎ、二十一年にわたり発刊を続けた。森田氏は『岳父書簡集』『料亭の息子』などが代表作である。

当時の「小説と詩と評論」は月刊誌だった。そして発行ごとに合評会があった。殴り合いなども珍しくない激しい合評会でもあったという。一九九〇年代に入ると、年一回の発行となった。主宰者は、美倉健治、陽羅義光と変わり、二〇〇〇年からは野辺慎一が受け継ぎ現在に至っている。

本誌は、年会費は無料である。小説や詩、評論などを掲載した場合のみ、一頁当たり四千円の費用負担がある。その金額で、関係機関、関係者などへの配布（四百部）もすべてまかなう。

発行後は必ず合評会を催す。合評会時には、本誌が十五年に亘って実施している森田雄蔵賞の授与式がある。この賞は全国の同人雑誌の隆盛を願い、また、森田雄蔵氏の熱意等に感謝し、創設したものである。送付いただく全国の雑誌の中から選考委員が選ぶ。

今回、嶋津治夫氏が貴誌「文芸思潮」に掲載されるが、嶋津氏は農林文学会の会長である。彼は、勤務先でも地域の農業・農業者の指導者として生きた。そこで培った技術・農民愛、日本農業の課題、農業政策への問題提起など、農の分野の幅が広い。その中で自分自身への反省などもあり、読む者を魅きつける。おだやかな人間性と愛の充満はわれらを氏の虜にする。氏の作品を読み進めるうち、感傷とは違う、生きるという意味をわれらに問うているのだということに気づき始めるのだ。

この頁をお読みの皆さん、ぜひ「小説と詩と評論」にご参加ください。新しい自己に出会えるかもしれません。
(野辺慎一)

73

文芸誌って何だ？

私は文芸誌を二つ発行している。その内の一つは詩誌で、その詩誌は今春に満五十年になった。いささか疲弊気味で終刊することにした。同人に劇団主宰のこしばきこうさんがいる。論客で文章の切れがいい。その彼は『全国同人雑誌』で特別賞と優秀賞を連続受賞した。

驚きはしなかった。特に『ざいん』二十号の「暗い森」の情景描写（特に雪原）に私は感嘆したのだ。北方住まいの私が惚れた表現力なのだ。コトバで絵画のような表しは常人には困難だろう。彼は難なく越えた。私は美術教師だったので、文章のデッサン力の卓抜さに脱帽したのだ。

その彼は終刊号に寄せた添文で「次は『個人詩誌』を死ぬまで出すとよいでしょうね。（応援しますよ）」とあった。そして添えられたエッセイに「詩と詩論とが分裂し詩論が詩を不安にさせてしまうのはなぜか。それは詩が人を選ぶのではなく、人が詩を選んでしまうからだ」と書かれていて、思案してしまった。これまで長く詩誌を出してきたが、「書けなくなった。辞めたい」と何人もがつぶやき、退会していった。これには引き留める術はなかった。こし

礎している。誌是は（主義主張にとらわれず、清新で独創的な作品を生み出す努力をしたい。それを目的とする）となっている。平易だが、「清新で独創的」はハードルが高い。崇高目標ではない。努力目標でもない。やはり、実作目標にしているからだ。

本年も同人の中井ひろしさんが全国同人雑誌優秀賞を獲得した。本誌では連続受賞になる。発行人としてはうれしく誇らしい。まだ次の候補人はいる。親和と琢磨、この相容れない玉虫色に同人誌はある。でもそれは矛盾しない。同人は（同志人）なのだ。競い励む。矛盾するが、この不思議な相互こそ、同人誌の地熱なのだと思う。『ざいん』には、それがある。こしばき人は「『ざいん』に近未来を書いています」と便りにあった。冒険・未知・虚無・孤独と、どこまで届くか。遣り残したくないものだ。自己証明だから、唸って考えたい。

（光城健悦）

「ざいん」の会

〒050・0071北海道室蘭市水元町22・7

発行人 光城健悦

TEL 090・2876・1409



「ざいん」同人 左から二人目が主宰者光城健悦

ばさんの推論には、時折ドキリとする。

文芸誌に入る。私は創作誌『ざいん』の発行人でもある。同人は北海道南部に位置する室蘭と苫小牧に居住している。どちらも大きな港を持ち、フェリーが発着する。室蘭は製鉄、苫小牧は製紙と工場町でもある。これまで文学の往来は乏しかった。そこで三年前、私が呼びかけて『ざいん』と苫小牧の『響』で相互交流をはじめた。人物往来から初めて、文学研修と懇親を重ねてきた。この辺りは胆振地方になり、この市町村には文学同好会はあるが結社ごとにとままり、横の連帯は細い。とりわけ必要度はないから。同好の士は閉鎖しがちになる。

私は同好の由緒を大切にしながら、質的には風穴をあける方策を念じてきた。室蘭で五十年間、文化運動をしてきた。いまは『文芸協会』『港の文学館』が両軸になっている。文芸協会三役はみな『ざいん』仲間だ。その協会の主要取り組みは「文章教室」になって継続されている。顕彰としては協会主催の「室蘭文芸賞」が三十数年続いてきた。顕彰の趣旨は、作品を認め合うことなのだ。その文芸賞が応募資格に工夫を凝らしている。ここ胆振在住か、胆振の文芸同人とある。後者の場合、どこに住んでも文芸誌が胆振発行なら宜しいと。過去に、米国住まいで地元文芸誌投稿で受賞した人がいた。

『ざいん』についてまとめる。年一度の刊行だが、みな切

六十年の伝統雑誌

この二、三年間におそわれた異変をどうして並みのものと云えようか。災厄の「平成」と総括されるのと歩調を合わせたような。そうちゃかして仕舞おうかな。

抑も、昭和三十三年（一九五八）五月創刊、爾来（じらい）の消長に波だちは当然として、激変とみなすほどの危機的な状況に直面したことなく、したがって傍目には安定した、息のながい集団と見えたにちがいない。事実、戦前・戦後の広島において、散文の分野で長期にわたる活動を維持し続けたサークルは他に例を見ないのである。

尤も、持続こそ力と自負し、誇るには足りない。ただ、結束の綻びが纏れみだれたり、四散の憂き目は見なかった。であれば、確かに独自の成り立ちを築きあげたのであった。

昭和三十年代後半は、全国的な文運活発化の上げ潮にあり、地域において個々の集団が競い合い、あるいは連帯の行動を誘い、反目と批判の自由をわが糧になしえる最善の時代であったと顧みる。

それは不思議なほど熱気にみちた時期でもあって、「文



煽られちゃったね)

なによりも長幼序列の排斥に徹した方針のもと、相互の対等を目指す拡大の方策に寛容だった。（地元の新聞が発刊のたびに、気恥ずかしいほどのスペースでもって、喧伝し、月を追うことなまが増えたとってわけ）

年二号の刊行を目標に掲げながら、結果的にはそのような実績を積みかねたとはいえ、また定期的な発行の墨守にルーズだったのは、それなりの弁明をあげ得るにせよ、つまりは自作の活字化を最優先にはしない、暗黙のきまりを互いに認め合う寛容を無下にはしなかったからである。

これらの事柄は、広島地域の、たとえば昭和三十年代後半から四十年代にかけて創刊を競い合ったグループの短命ぶりを逆照射するだろう。

なかには、主宰格の人物が是認しなければ掲載・発刊しない方針を維持し、このため同人たちは別の集合体をつかって創刊、母体の誌名は自然消滅、といった事例もある。

定例の集会のほか、本誌とは別に「会報」の発行を続けた。今年三月現在で650号に到達。B4サイズの四頁を基本に六頁、八頁など時に応じて伸縮自在なスペースが他地域に居住する同人間の交流・発言の場として活用され、また意志疎通の持続がグループ運用にもたらした裨益をも挙げておかねばなるまい。



「安藝文学」もこの時流に乗り、数名の知己が寄り合った喫茶店の一隅から始まった。

半年後、創刊号の薄い冊子の束を風呂敷包みにして、本通り筋の古本屋へ赴いた。十冊ほどなら預かってもよい、納品書を出せ、といった返事を得、最寄りの文具店で「納品書」綴りを買ひ、「納品」を遂げたときの有頂天ぶりは、永いあいだの嬉々たる伝聞となったものだ。（それによ、短期間で完売を見届けたんだ、ヤル氣を一回きりの場面

毎月発行の「会報」は、遠隔の地にある同人たちに待望される音信の役をかねており、メール発信を利用できない向きにもその定期発行が必須のルートになり得ていることへの留意が「結束」の保持と無縁ではないはずだ。

こうしてひとつのエポックを劃したのが、『選集・安藝文学』第一集の刊行だった。ハードカバーの単行本、長期保存を見込んだ企画であった。四〇〇頁。同人二十七名の小説・エッセイ選集。平成二十五年十二月（溪水社刊）

作品は、自選をも受け入れながら、次のような構成に編纂された。

小説の部

第一部 郷土史への視座

第二部 遠きしるべに

第三部 時空を超えて

第四部 情念のまなざし

ESSAYの部 十篇収録

この企ては、その後、継続の要望に添い、二集編纂の刊行企画まで進行、本誌刊行を優先するため、一時、先送りに置かれている。

創刊当時、一〇〇号まで出すというのが目標であった。

その数字は遙か彼方にかぶ陽炎の如きに見えたものだが、いま、八十八号の原稿を揃え、穴埋め等の処理が済み次第、印刷に入る見通しである。一〇〇号の数字がもう間近か、と改めて感に耽るのではなく、先途を急ぐ喫緊の日日を読んでいるのである。

そこへ、近年の異変遭遇ときたのだった。定例の同人会后、二次会へ移動するのが常であったが、予約人員の減少に歯止めがかからなくなった。

転倒、膝を痛めて長期療養に入ったもの。こまめな健診にもかかわらず、癌が発見され、術後には全身転移、ついで早々と黄泉の国へ。認知症の徴候悪化、施設住まいのもの。まるで超高齢層のマイナス症候群一覽にも似た疾病に阻まれ……、無念なことに定期集会は一時棚上げ扱いの、これが異変の正体なれば、この頁に掲げる一葉の写真が昔日のいともご機嫌な面々のみを留めているのも、むべなるかな。

(岩崎清一郎)

安藝文学

同人会事務局

〒七三二・〇〇〇二 広島市東区戸坂山根2・10・25

TEL 082・229・2869

Mail: akibun@songocn.jp



某年の花見の帰り、いまはなきバー「とんがらし」に立ち寄って

海

三重県

『海』の舵手と百号への航海

同人雑誌『海』は、一九六六年六月に三重県四日市市で誕生しました。高度経済成長期の真っ只中で、日本初の石油化学コンビナートが出現した四日市市では、大気汚染による「四日市ぜんそく」が発生し公害の渦中にありました。

『海』の初代の主宰者は医師の間瀬昇です。『海』創刊と同じ年に市内に内科医院を開き、五年後には同じ市内にもう一つの医院を開いて、かけもち診療を行っています。そんな様子を見ると、公害にさらされた当時の市民の健康問題には、相当深刻なものがあつたものと想像されます。

四日市の郊外は、春には暖かい陽差し受けて一面に黄色い菜の花が咲きます。四日市出身の丹羽文雄や伊藤桂一は郷愁の思いをこめて自らの小説にその風景を描きました。

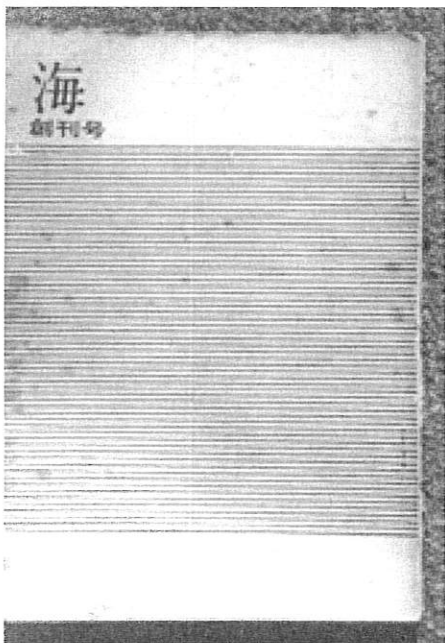
四日市の海から鈴鹿山脈にかけての一带は、温暖でのかな風土と言えます。そこに生まれ育つた丹羽、伊藤、田村泰次郎、近藤啓太郎などは、いずれも自然主義的なリアリズム色の強い作風ですが、これは温暖で恵まれた自然環境と無縁ではないように思われます。先達作家たちの文学的特質は、『海』を創刊した間瀬昇と、八十三号まで牽引

役を担った一見幸次の作品にも窺い見ることができません。

間瀬昇は俳句から出発し、創刊号の編集後記に、『海』は四日市の俳句仲間が「以心伝心のうちに俳句だけでは物足りないものを認め合つて」同人雑誌をやり出すことになつたと書き、続けて次のようにも言っています。

「お互い人間である限り『海』を永久に持続させようとは考えていない。文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふかれてゆくであろう。お互いの信頼を大切に、私はおほつかない舵手の役割を果たしてゆこうと考えている」。

八人ほどの仲間が出発した『海』ですが、五十号を迎え



た一九九四年には間瀬昇が急性心筋梗塞を発症して入院し、休刊の誘惑がたびたび彼を襲います。それでも五十号の編集後記には、「改めて諸兄にお願しておきたいのは、書きたい、書かなければ、という自分の内心の衝迫のこもったものを書いてほしい、ということだ。あまり堅いことを言うことは、現代的でないかもしれないが、誌をサロンやラウンジとしたくはない」と、気を吐いています。

間瀬昇には、私小説的な純文学への思いが格別に強くあり、文学観や作品が同人に与えた影響には大きいものがあります。

間瀬昇に代わって六十八号から主宰となったのは一見幸次で、彼は私小説的味わいを湛えた好短編を多く発表して、常に『海』の中心にいました。しかし一見幸次が残した最大の功績ということになれば、デザイナーとしての力を存分に発揮した『海』の表紙デザインや、海叢書などで示した個性的なブックデザインです。デザイナーとしての才能は、現在でも『海』の表紙の題字の扱いや、目次のレイアウトで知ることができます。

一見幸次の後を継いで八十四号以後は遠藤昭己が編集発行人となり、発行所を四日市からいなべ市に移しました。これまでに九十八号を発行して、百号記念号が目前に近づいています。現在、同人は八名ほどですが、三十六号から掲載同人制となり、作品を掲載したときだけ同人として巻

72



合評会。左から四人目が初代主宰者の間瀬昇、右へ遠藤昭己、二代目主宰の一見幸次



最近の交流合評会。左列奥から手前に遠藤昭己、宇梶紀夫。右列奥から二人目名村和実、その手前に宇佐美宏子

海 〒511-0234

三重県いなべ市大安町梅戸 2321-1 TEL・FAX0594-77-2770

末に名前を記しています。最新の『海』九十八号には、小説の宇梶紀夫、国府正昭、紺谷猛、宇佐美宏子、遠藤昭己、詩の川野ルナと遠藤、文芸エッセイの久田修が執筆者として

て名前を並べています。掲載は、書いた作品（小説、詩、エッセイ、評論）があればだれでも可能なわけですが、一応、掲載するかどうかについては作品を拝見した後に決定しています。

初代、二代の主宰の時代と比べて大きく変わった点は、これまでややもすれば閉鎖的であった『海』が外に向かって大きく開かれ、外の同人誌との交流が盛んになったことです。その中間に、同人の宇佐美宏子、遠藤昭己が活動する中部ペンクラブがあります。中部ペンクラブでの交流を通じて、愛知や三重の同人誌から参加してもらう合評会も実現しました。『海』からも愛知、三重の同人誌の合評会に参加しています。そして、これらの合評会の様子は常に中部ペンクラブの会報で情報として発信されています。

この紹介文に「文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふくれてゆくであろう」という間瀬昇の言葉を引きましたが、私たちのいまの文学状況を見渡すとき、こうした希望的観測は、やや素朴に過ぎるかもしれません。急激な書き手の高齢化と、それに伴う活力や持続力の衰退と枯渇。これに対抗する秘策はどこにあるのか、百号以後を睨んで仲間とともに手探りしています。

（遠藤昭己）

弦

愛知県

文学力を磨き高める共通の拠りどころ

同人雑誌『弦』は一九六五年の創刊。当時の名古屋市内は、戦後復活の芥川賞を最初に受賞した小谷剛が主宰する『作家』をはじめ多くの雑誌があった。その『作家』の有力な同人、曾田文子が指導した文学グループの『新樹』と『草』が合併し『弦』を創った。曾田は一九八三年、病魔に倒れ、小谷も一九九一年に没しているが、同人雑誌を担う人から人へと、その文学は受け継がれている。

『弦』は創刊後もいくつもの同人誌と合併しながら、年に2回発行のペースを守ってきた。文学青年から始まり、何人もがバトンを引き継いできたが、現在の同人もまた、未だ壮年の気概を持って書き続けている。小説を書く同人が主体だが、本好きな人も、詩や評論、短歌、俳句をする人も加わり毎月行う例会では、いつも豊富な話題が飛び交い、笑いがたえない楽しい会である。

『弦』発行の翌月と翌々月の第三日曜日を合評会とし、その他の月は第三水曜日を読書会に充て、おもに純文学系の話題作を取り上げている。芥川賞、直木賞、その他の日本

国内の文学賞や、翻訳された海外の文学賞受賞作も視野に入れている。最近取り上げた作品を挙げると、カズオ・イシグロ「浮世の画家」、ミラン・クンデラ「存在の耐えられない軽さ」、シャーウッド・アンダーソン「ワインズバーク、オハイオ」、堀江敏幸「その姿の消し方」、小山田浩子「庭」、今村夏子「こちらあみ子」、橋本治「草薙の剣」などがある。

文学を志すには、いろんな書物を読むことは不可欠である。読書会では、自分とは違う読み方があることを教えられる。各々の固執した考えを浄化し新たな活力を生む。海外の小説からは、異文化に触れカルチャーショックを受けたり、考え方の違いを教えられたりもする。同人雑誌は合評会で、自分らの作品の善し悪しを指摘し合うだけで済ませてしまつのはいかにも勿体ないと思う。

『弦』の同人は現在一五名、会員は一八名。同人は原稿提出ができる。同人会費は年間二四〇〇円、会員は年三〇〇円。会員の原稿提出には別に規定がある。掲載負担金は、同人はページ四〇〇円、会員一〇〇円。追加の本代は一冊四〇〇円。

印刷部数は永らく五〇〇部だったが、最近の送料費値上がりの関係で贈呈分を五〇部減らし前号より四五〇部になった。

役員は代表(事務局)、編集、書記、会計、監査、各正副。



「弦」105号最終校正での編集委員、左より中村、國方、長沼、山田、市川、白井

編集委員は正副含め八名で、執筆者への校正送付と最終校正まで手分けして行っている。例会の会場は、おもに名古屋市芸術創造センターを使用している。会場係が三カ月前の月初めに抽選会場へ出向き確保する。同人雑誌の維持は同人たちのさまざまな協力があって成り立っているのだ。

弦の会では、二〇一三年にホームページを立ち上げた。二〇一五年五月発行の『弦97号』から、全作品をネット上でも読めるようにした。現在では『弦104号』までアップされている。「同人誌弦」「文芸同人誌弦」で検索すれば誰でも読むことができる。読後の感想や批評などを掲示板に書き込んで頂ければありがたい。同人雑誌という狭い範囲内



ではなく、開かれた中で少しでも多くの人たちに読まれ、評価されることを書き手は期待している。そして書き手は社会的にも通用するものを書きたいと願っている。

小説は虚構の創作物にすぎないけれど、真実を超える力もあるのだと信じている。力不足の原因が文章力であれば、とことん文章を磨き上げたい。テーマが不明瞭ならば、構成から考え直せばいい。人間を描く力が足りないのならば、人の生きざま、心理の表裏まで掘り下げて考えたい。俗にまみれない素直な自分のことばで表現することを心掛けたい。とにかく書かないではおられない心情を持ち続ける場が同人雑誌にはある。

同人雑誌はもはや個々に存在するときではないとも言えよう。お互いに交流を深め文学力を高めて、「文学」という輝かしい目標を共通の拠りどころとする場にこそすべきであろう。幸いにも一九八六年に結成された中部ペンクラブは同人誌に橋を架け合い、交流する役割を果たしている。「弦」もその一員だが、この動きがさらに広がることを願う。

(文責／中村賢三)

弦の会 〒463・0013

名古屋守山区小幡中三・四・二十七 弦の会

電話 052・794・3430



弦合評会 いつも他の同人誌からの参加もあり、和やかに厳しく

彩雲

静岡県

文学に対する強固な熱情

文芸同人誌「彩雲」が、ここ静岡県浜松の地に呱呱文学で地球環境改善を祈る願いの声をあげたのは、奇しくも今から十二年前のことであった。爾来、「彩雲」は今日まで、数ある県内文芸同人誌の最前線に立って、県内のみならず中部圏の文芸誌をリードしてきている。それは等しく衆目の一致するところであろう。

「芸術と文学」を貴重な生命力と自負し、生涯の心の支えとする、齢八十を越しながら今なお精力的に文芸誌の発行に取り組む主宰者に率いられた同人諸氏は、いずれ劣らぬ文学に対する強固な熱情がほとばしる。

年に一度開催される合評会には、遠路はるばる金沢から、何と軽自動車で乗り合わせ来浜の面々を先頭に、一人の欠席とてない同人諸氏たちの口角泡を飛ばす議論は深夜にまで及び、いつ果てるとも知れない。かかる熱い文学論議は同人誌「彩雲」に掲載の作品群の、高レベルにつながっている。時間の経過を超越した延々と続く座談は、文学を志す者たちの集まりゆえ当然とはいえ、その熱気は参加者の文学への更なる傾倒を抜き差しならぬものにして、その



「彩雲」11 回合評会にて 文学論に熱を入れる同人たち

72号

後戻りをもはや不可能なものとするに十分な魔力を持っている。作品に対するそれぞれの批評はいずれも一見識あり、有意義かつ貴重な意見交換が交わされるのが常である。御希望とあれば、同人以外でも参加は全く自由であり、広く認められている。希望のある方は、ぜひご参加を願いたい。目から鱗の落ちること、間違いのないところである。ぜひ、ご参加あれ。

力量ある同人のあまたある中で、既に世にある多くの文芸賞を受賞する者も続々と出てきている。名前を挙げればきりが無い程であるが、一例を挙げれば次のような者たちである。緑町優、阿部千絵、馬込太郎、榎林守、鈴木孝之、その他まだまだ続くがきりがないので、この辺にしておく。いずれ芥川賞の受賞者が出てくるのも間近い、と自信をもって申し上げておく。そのくらい文芸愛好家やその関係者、多くの読者たちに、目を見張らせる存在となつていくことを、改めて申し上げておきたい。

また勉強会と、ことさら大上段には構えぬが、常日頃から絵画、彫刻、書等の造形にも関心を深くし、足繁く県内のみならず首都圏の常設の美術館や展覧会を巡ること、年に幾度あるか、数えることすら不可能である。発行人の心に秘めた座右の銘、文章をものするためには感性が鈍つてはならぬ、の言葉を胸に、常に研鑽に続く研鑽あるのみと、同人誰一人として、新聞紙上の催し物の広告も疎かにはし



「彩雲」11 回合評会風景

彩雲の会

〒431-2103

静岡県浜松市北区新都田二・二・二〇

彩雲の会

TEL 053・428・2892

ていない。過ぎたことだが、顔真卿の書展には心を打たれて、訪問者一同声を失ったのみならず後ろ髪を引かれ、終了時間までそこを離れることが誰ひとりできなかつたことを申し添えておきたい。

以上、「彩雲」誌の紹介とそこに属し、昼夜を分かたぬ峻烈な上にも、さらに研鑽・努力を己が身に課す、同人諸氏の文学に懸ける姿勢の一端をご案内申し上げて、紹介とさせていただきます。

また、文学だけでなく芸術の面でも同人の親睦を高めるために絵画コレクション等も美術館、喫茶店等の空間を活用して開催する活動を展開しております。



同 11 回合評会風景

あべの文学 大阪府

大阪文学学校卒業生が主体

今から十五年ほど前に大阪文学学校の奥野クラスの修了者が中心になって、「あべの文学批評会」（通称、A批評会）が発足しました。A批評会は、芥川賞候補作家で大阪文学学校講師の奥野忠昭先生を指導者とする文学研鑽の会で、会員が書いた作品を中心に合評し合うことを主な活動にしています。A批評会会員の中には他の同人雑誌に所属している方もいますが、いずれの同人雑誌にも属さない会員が作品を発表する場として立ち上げたのが「あべの文学」で、二〇〇四年十一月に創刊号を発行しました。

A 批評会で研鑽

A批評会の勉強会はいつも大阪阿倍野区の阿倍野学習センターで開催していますので、会員の投票で同人誌の名前は「あべの文学」となりましたが、大阪、阿倍野区という地域性は全くありません。会員は大阪、京都、兵庫、奈良と広く関西各地の方たちからなり、作品も多岐にわたっています。

現在、A批評会の会員数は四十代から八十代までの三十名あまりです。活力と若さを維持するために大阪文学学校を終了する若い方々にも順次入会してもらっていますが、

これができることがA批評会と「あべの文学」の強みだと考えています。

「あべの文学」は原則として毎年二回、二月と八月に発行しており、今年二〇一八年二月で26号になりました。幸い意欲的な会員が多いので、今後も年に二回の発行を続けて長く継続させたいと考えています。創刊号以来、作品は色々な同人雑誌で評価され、同人誌対象の文学賞を二度受賞しています。まさに継続は力です。

この度は、「あべの文学」26号に掲載の河内隆雨氏の「隣人」が「文芸思潮」に掲載されることになったことは大変うれしいニュースだと喜んでいますが、会員一同にとつて大きな励みになります。誠にありがとうございます。これを機会にさらに精進を重ねて少しでも優れた作品を掲載していきたいと考えています。

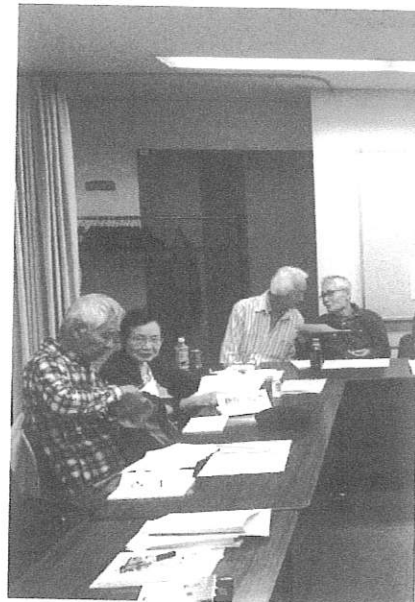
（文責 森口 透）

※註 大阪文学学校について

大阪文学学校は一九五四年七月に創立されました。以後、六十四年にわたって、多くの文学者、芸術家の参加と協力のもとに、暮らしの中に埋もれている文学表現への夢と創作活動にかかわる喜びを求め続けてきました。現在、二十代から九十歳まで四〇〇人以上の生徒が勉強しており、これまでの修了生は一万二五〇〇人を超えています。修了生の中には芥川賞、直木賞の受賞者も出ていますが、この他



「あべの文学」A批評会風景



に、現役、修了生の中から年間二十ほどの大小文学賞を受賞しています。

あべの文学
〒六五四・〇一四二
兵庫県神戸市須磨区友が丘八・二〇一・二八

森口透方

☎078・794・0279

同人雑誌紹介

ガランス 福岡県

創作の真の声を

ガランスは、平成六年に創刊され、昨年暮れ二十五号を発行し、年一回発行のペースを維持して今日に至っています。学生時代文学仲間だった田瀬明子さん（故人）と鈴木比肇子さんが主導して興しました。ガランスはフランス語であかね雲、あかね空の意味です。往年の映画のファンの方は覚えておられると思いますが、「天井桟敷の人々」のアルレッティ扮するヒロインの名前もガランスでした。

会員は、現在十二名です。女性八名、男性四名の、中規模の同人会です。月一回例会を開き、雑誌掲載の会員作品、芥川賞受賞作品および会員が推奨した作品の合評を行っています。いかなる作品も、謙虚な姿勢で読み、真摯な態度で批評することをモットーにしています。

情報化社会の到来で、文学への興味や関心が薄れる一方、文学のイベント化、商業化が盛んになっています。こういう時代こそ、同人誌本来の意義が問われていると思います。人間関係が閉塞化、蝸蝕化している社会で、十人程度でも文学を志す仲間が集えば、肌感覚の意思疎通が図られ、相

互啓発と切磋琢磨の場が生まれ、商業主義に迎合、作の真の声を発信していく母体が形成されます。私事になりますが、大学四年の時五十枚ほどの... いて、当時同人誌「午前」を主宰されていました。先生（故人）に見てもらったことがあります。先生「ぶ川」（三浦哲郎）より君のこの作品ほうがいい、ない」とおっしゃってくれました。次作を期待し上げであったにちがいませんが、先生のこの日まで私に創作を続けさせてきたことも確かです、との出会いがなければ、とくに創作などやめての興味も関心もないゆとりのあるリッチな別の人ていたと思います。

この四年間、新聞やネットサイトで取り上げられた作品を紹介します。

二十二号……「ミッシング」（鈴木比肇子）、「賞はいらない」（ミッコ田部）

二十三号……「蜚虫」（小河原範夫）、「電波塔」（記憶は過去形ではない）（ミッコ田部）

二十四号……「家出計画」（小河原範夫）、「企の前語り」（ミッコ田部）

二十五号……「くるみの翼」（渡邊未来）、「窓辺（野原水里）」、「擬似的症候群」（小河原範夫）、「ミュートス考」（新名規明）、「母と娘のパリ訪問」

多由美）、「ひとりぼっちの評論—戦後美術から原（ミッコ田部）
ガランスに関心のある方は、小河原範夫まで、
☎（090 - 2081 - 5904）

ガランスの会
〒八二・〇〇四四
福岡市博多区千代三・二・一
（株）梓書院内
☎092・643・7075

ガランス 謙虚な姿勢で読み、真摯な態度で批評する



「ガランス」会合風景



星灯 東京都

『星火燎原』

小林多喜二と太宰治の統一をめざす

創刊は二〇一四年十一月、これまでに四号を発行した。それぞれにさまざまな文学活動をしてきた三人が、あの「蟹工船」ブームの中で知り合い、何か面白い雑誌をつくらうじゃないかと意気投合した。あまり先の見通しもなくとりあえず船出したのが「星灯」である。

「闇があるから光がある」

「創刊の辞」では、小林多喜二が恋人タキに書き送ったこの言葉を冒頭に掲げた。めざす文学は、小林多喜二と太宰治の統一。理想をめざす「熱い心」と、現実に傷ついた「冷めた目」の共存である。

「星灯」のタイトルは、中国の古典『書経』のことば「星火燎原」からとった。書家である同人のひとりの発案である。夜空の星のような小さな火が、いつか広い草原を焼き尽くすこともあるという意味である。小さな本誌がいつか日本の文学シーンを変える、そんな見果てぬ夢をこめた。

また別の同人は「星灯」という言葉から、「星の王子様」

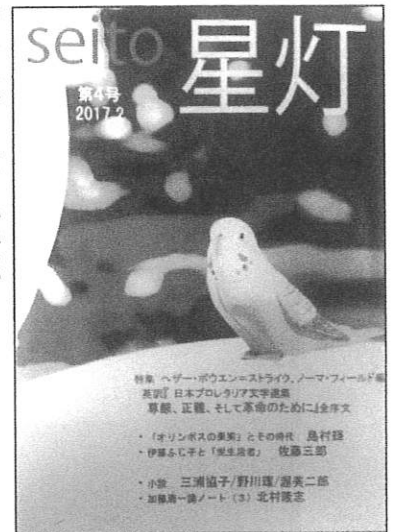
実は編集会議も合評会もしていない。これまでに三人全員が顔を合わせたのは、三、四回しかない。打ち合わせ、意見交換はほとんどフェイスブックのグループですませていく。興味のある方は「星灯のひろば」というグループを検索してください。誰でも見られます。

発行には、その都度、これぞと見込んだ書き手に原稿を頼んでいる。創刊号には「船に乗れ！」の藤谷治インタビュウ、第三号（夏目漱石没後百年特集）には、小森陽一氏の講演を掲載した。第四号には、ノーマ・フィールドさんが編纂し昨年米国で発行した『英語版・日本プロレタリア文学選集』の、ノーマさんと共編者の手になる序文と各章の解説全文を邦訳した。日本プロレタリア文学に対するアメリカでの関心のありかを示すユニークな評論である。

ほかにも同人のつてを頼んで、これまで十四人に評論、小説を寄稿してもらっている。「星灯」の大事な同伴者、サポーターである。

原稿料は出ない代わりに代わり分担金もとっていない。それで一号につき一三〇〜一六〇頁、五百部を刷っている。この発行費用を三人の同人で負担したら大変である。だが、今のところ収支はとんとんである。贈呈・送付している人たちが、貴重な誌代・カンパを送ってくれるおかげである。読者（奇抜な人たち）に支えられて、何とか続けている。

（北村隆志）



の「点灯夫」を思い浮かべた。

星から星へ旅する王子が五番目に訪れたのは、わずか二分で自転してしまふ小さな星。外灯が一つだけあり、点灯夫が夜になると灯を点し、朝になると灯を消している。「この点灯夫の仕事には意味がある、夜空の星のひとつをキラキラさせて、夢をつくりだしている仕事」と王子が感心する。

点灯夫は、夜空の無数の星の中のたった一つの星の灯を点し続ける。その小さな星が誰かにとってかけがえのない星となり、夢となる——
「星灯」にはそんな思いも込められている。

能書きばかり多くて恐縮である。しかし、頭でっかちで言うことは一人前のくせに、実はたいしたことないのがある。同人はたった三人だし、居住地も仕事もバラバラ。

星灯



星灯同人の二人（前列の左右端）と寄稿者たち。来日したノーマ・フィールド・シカゴ大学名誉教授（前列左から2人目）を囲んで= 2016年2月17日、東京・池袋

星灯

〒182-0035 東京都調布市上石原 3-54-3-210
Mail: kitamura@c.email.ne.jp

海峽

愛媛県

自分の言葉で書いていく

愛媛といえはすぐに正岡子規が浮かび、俳句県とおもわれている県民性の中で俳句以外の文学をと、先輩の熱い心で、西瀬戸道(しまなみ海道)の始発点であり終点の地で、タオルと造船の町に平成九年に誕生したのが、文芸同人誌「海峽」です。今愛媛は全国の高校生の「俳句甲子園」や正岡子規生誕百五十年で熱くなっています。

私がこのような県民性の中で誕生した同人誌「海峽」を引き継ぎ、何も知らないままに十三年が過ぎてしまいました。その間に同人の入れ替わりや経費のやりくりを頭を抱えてきましたが、同人たちの支えがあつて今日まで続いてきました。会員もすでに高齢化して平均年齢が七十歳を越えています。年二回の発行には必ず作品を発表するということをモットーにしてきました。同人誌としてはまだまだ未熟ですが、作品に対しての気概は決して他には負けない気持ちで各自持っています。

そんな文芸誌「海峽」で本誌の優秀作品に「海峽」33号の多嶋海彦氏の「花ことば」に続き、この度37号の西山慶尚氏の「最後の海軍飛行兵」が選ばれましたことは大変名

誉なことと喜んでいきます。西山慶尚氏にとってこの賞は海峽」20号の「知覧—六月三日の邂逅—」と二作品目です。

西山氏は四才くらいのときに実兄を予科練で亡くしたと聞いています。その時はまだ何も分らない幼子でしたが長じて兄の無念の死が納得できていないのだと思います。西山氏は「知覧—六月三日の邂逅—」「最後の海軍飛行兵」の他に「最後の帰郷」「六本目の柱」などと戦争ものを書いていますが、彼が戦争ものを書く本当の理由は兄の死が完結できていないからなのではないでしょうか。海軍飛行兵の死体は誰も確認できていないのですから。多くの海軍飛行兵と同じように死体なき死なのです。

この作品を発表した「海峽」37号の後の合評会では西山氏が兄の死を誇りに思っているのではないだろうかなどという意見もでしたが、実際に自分の身内にそういう人がいない者の言うことであつて、戦争で肉親を失った遺族の悲しみはいつまでたつても癒やされることはないと思います。誰が身内の死を誇りに思うものでしょうか。「最後の海軍飛行兵」は実兄と同じように予科練に志願した杉野氏に出会ったことでの作品が出来ていますが、文中の中で杉野氏が語っていることは、或いは西山氏の本心ではなからうかなどと想像もされます。

余談が随分長くなりましたが、文芸誌「海峽」では愛媛文芸誌協会にも二年前に加盟し、その年の第二十六回の愛

っても書く意欲は全員持っています。へたでもいい、自分の言葉で書いていくことをモットーとしています。そして同人誌に作品を発表するということは、商業誌と違って自分がお金を払って読者に提供することですが、それでもいい、自分の書いたものを自分以外のひとに読んでもらうことができる。最小限度でも同人だけにでも読んでもらうことができるのが同人誌です。あまり光のあたることのない同人誌「海峽」に今回もこうして光を与えてくださったことに感謝しています。(藤井総子)

媛同人誌協会賞第一部門賞を「海峽」34号の中から西山慶尚氏の「祖父の遺産」が、翌年の二十七回協会賞第一部門には「海峽」36号の藤井総子氏の「帰省」がそれぞれこの賞をいただきました。この愛媛同人誌協会に入会して連続して愛媛同人誌協会賞第一部門賞をいただいたことはマンネリ化していた同人たちに刺激となりました。さて今年も「海峽」の中からいただけたらと欲を出しています。海峽が三年連続でこの賞をいただいたら神様に感謝しなくてはと密かな期待をしています。

そして今回の西山氏のこの文芸思潮の優秀作品に選ばれた快挙に同人はじめ皆の喜びはいくまでもありません。

文芸誌「海峽」では年二回の発行と同時に合評会を行っています。お互い辛辣な意見交換となり司会者もたじたじとなります。がその後は慰労会として食事会をしています。その時は先ほどまでの唾の飛ばし合いは何だったろうかと思うほど和やかな雰囲気。次回の作品への意欲を与えてくれます。

文芸誌「海峽」では同人誌以外にミニ新聞(海峽だより)を二か月に一度発行しています。会員の皆にお知らせする事項と交代で八百字随想を書いています。第十一回文芸思潮優秀作品に選ばれたこともこの海峽だよりで皆に知らせました。

海峽は会員数こそ十五名くらいと少ないですが高齢にな



「海峽」同人会

海峽

〒799-1522

愛媛県今治市桜井4・2・18 藤井総子方

☎0898・47・3699

南風

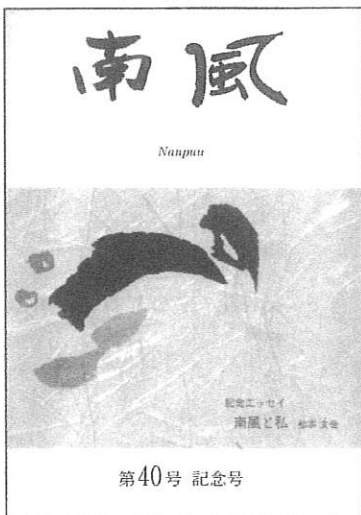
福岡県

唯一無二の世界を創り上げる

福岡市に拠点を置く同人誌「南風」は、平成四年に創刊された。職業作家であった、故中村光至氏を講師にいたたくエッセイ教室の生徒が中心になり、二十人近くの同人が、詩、エッセイ、小説を掲載した。年に一度の発行を著実に重ねていくなかで、書き続ける意思のある者たちに淘汰されていき、十号からは年に二度の発行に決まった。その頃から小説中心の同人誌としての体裁が整い始めた。

創刊時からの同人であり発行人でもあった松本文世は、その実力、人望において「南風」の中心的役割を担ってきた。福岡市文学賞受賞者でもある松本は、同賞や福岡市民文芸の選者も務め、福岡市の文芸の発展に寄与していたが、千葉へ居を移したために一線を退き、現編集発行人の和田信子が後を引き継いだ。

歳を重ねるにつれて少しずつ引退する同人がいて、この五年ほどは八人の女性同人ばかりでの作品の掲載が続いているが、決して女性に特化しているわけではなく、性別、職業を問わず、門戸は広く開放しているつもりである。ただ一つの条件は、作品の質である。「南風」は次号掲載予定の原稿を持ち寄り、同人全員で批



評し合う。その例会では、みな平等で、納得できる意見もそうでない意見もまずは耳を傾ける。その上で、粗の上に上った原稿を持ち帰り、再び推敲を重ね、ようやく最終原稿となる。この書き直しの過程こそがなにより力を伸ばす機会だと、同人はみな実感している。

原稿は、「南風」誌掲載仕様で提出する。以前は手書きだったものがワープロを使い始め、やがてパソコンのワードへと変わっていった。ほとんどの同人が「南風」で必要に迫られてパソコンを習得している。印刷所の担当者は提出された原稿を見て、その紙面の仕上がりが具合に驚く。彼らにしてみれば祖父母の年齢に近い同人たちである。

創刊の頃からこのようなやり方があったわけではなく、現編集発行人の和田信子の熱意と努力によって確立されていった。和田、紺野、渡邊の福岡市文学賞受賞や紺野の九州芸術祭福岡市地区入賞、山口の北九州文学賞入賞、宮脇

南風

の林美美子文学賞最終候補、また発行ごとに西日本新聞をはじめ新聞各紙に作品が紹介されるなど、「南風」誌の充実が他から認められているのも、自他ともに厳しい和田の姿勢によるところが大きい。

和田信子の作品「ミッドナイトコール」は、二〇一〇年の文芸思潮同人誌まほろば賞を受賞した。二〇一二年には、紺野夏子の「マーサの足音」が同優秀作に選ばれ、その時にも「南風」の紹介をさせていただき、今回は三度目である。「南風」は今四十二号を準備中である。福岡市には長い歴史を誇る同人誌が多くあり、まだまだ若い歴史ではあるが、それでも二十年を過ぎてよく続いてきたという思いは強い。

インターネットが世の主流になり、何事も早く便利が一番で、同人誌活動は時代遅れだと言われているが、紙面を文字で埋め、唯一無二の世界を創り上げていく作業は、長年多くの人々が情熱を傾けた営みである。そのかけがえのない作品を発表する場としての同人誌活動も可能な限り続けていきたい。

この六月には、久しく待ち望んでいた新人が二人入会した。一人は五十代、一人は久々の男性で、他の同人誌での創作経験もある実力者である。二人の参加で例会はより活発な意見が飛び交うようになるだろう。新しい風が吹き、ともすれば停滞気味の創作活動の刺激になれば、なにより幸いである。

(南風の会事務局 紺野夏子)



「南風」同人メンバー

南風

〒819・0014
福岡県福岡市早良区弥生二・二・八
二宮義子方
南風事務局

TEL 092・846・0736

ざいん

北海道

清新と独創性

視覚的で歯切れのいい〈表題〉だが、重いのだ。誌是になる。手触りはない。探って朦朧でつかみ所がない。なにやら「誌是」というより、社訓が開発目標如きだが、清冽さの延長みたいで、大いに気に入っている。

文芸やアートはみな「清新で独創性」が目標の意識にある。『ざいん』は創刊からこれが願いであり、頑張り目印なのだ。意識が大きく、底抜けな過大で気に入っている。「ザイン」はドイツ語で「存在・現在」の意味になる。

本年度創立二十一年目になるが、数年来から列車で三〇分ほどの苫小牧市から、新同人が加わってきた。あの街はここ胆振地方の中核市で、人口は一七万人。北海道五番目に大きい。その街の文芸誌「響」と縁を結んだ。

文芸誌に「縁」は必要か。私は必要と思う。二つの誌が結ばれば、その円空は周囲に好ましい波及を及ぼす、と



港町特有の先取がある。同人と

信じている。「文学の出前」を試みたいものだ。創作は孤独な営為だ。厳しさはある。それでも心の連帯は必要だ。もうひとつ、創造のメッセージは時には新風を及ぼす。多岐の表現媒体を膨らませるからだ。

港市には「港の文学館」があり「室蘭文芸協会」が、文学活動の中核を担っている。芥川賞作家を三人輩出している。八木義徳、三浦清宏、長嶋有各氏で、文学への関心は高い町だ。そして、

浅野清「評輪を主軸にしていたが、小説や詩歌にも拡大して旺盛だ。朔太郎の評論で、室蘭文芸賞受賞。現在室蘭文芸協会長。

おだ多朴「歴史小説に傾注してきた。緻密な時代考証を

『縁』は必要/心の連帯

積み上げ、その時代の歴史観を立ち上げる。室蘭文芸佳作受賞。室蘭文芸協会事務局長。

こしばきこう「演出家であり、秀でた文筆家「水槽の女」で全国同人雑誌賞まほろば賞特別賞受賞。旺盛な筆致で、形而上の世界にまで及んでいる。

守谷宏「プロの作曲家兼指揮者。含蓄ある音楽エッセイは重厚だ。音楽の魅力、音楽の懐の深さを示している。

さとう惇子「安定感ある文章で期待できる。北日本文学賞三次通過。開眼は近く、期待通り飛翔するだろう。

井村敦「昨年、北海道新聞文学賞受賞。井村は受賞文で「何があっても『生きる』ことを続け人間の逞しさを描写したい」と書いた。室蘭文芸協会副会長。当誌の編集人だ。

中井ひろし「本年度室蘭文芸佳作受賞。アイヌと開拓武士との交歓を描いた九六枚の小説。

高岡啓次郎「素材は多岐で、才気旺盛。年に数篇（小説）を受賞。近年は、立川文学賞・北九州文学賞と才気迸る。青木円香「まだ三十代と若く、柔軟な文体が魅力。博物館の主任学芸員という専門職だ。（発行人/光城健悦）」

ざいん

実力者ぞろいの豪華メンバー

ざいん 〒050・0071

北海道室蘭市水元町22・7 光城健悦方

☎連絡先090・2876・1409

井村敦さん 第49回北海道新聞文学賞受賞祝賀会



井村敦さんの受賞祝い。中央近くは三浦清宏さん、井村夫妻と青山室蘭市長

カプリチオ 東京都

毒まんじゅうであることを

気づかせずに食べさせる

■最初の名は「世紀末メロン」

ほくが同人雑誌というものに入ったころは、まだ、思想を共有するものが集まって、その思想を主張するための道具が同人雑誌という考えが残っているころでした。ただ、そうした匂いは少しずつ消えて、共有する思想で集まるという考えはなくなりまして。結果、激論とか、殴り合いの喧嘩は少なくなりましたが、年長者が新人の作品に強くあたるなごりはありました。もう、思想的な集団ではないから、思想的なことではぶつかることはできません。中身が抜け落ちたところで、文章が練れていない、とか、自分の体験から、このようなことはありえない、といった文章の表面的なことでもやりとりがされたように思います。はたして、そんな個人的印象などで小説の書き方がわかるのかと思いました。合評が読んだ人の好き嫌いによって左右されているように思えてならない時代を過ごしました。

そこに『カプリチオ』という寄せ集めのグループが忽然

斎藤緑雨 小林広一



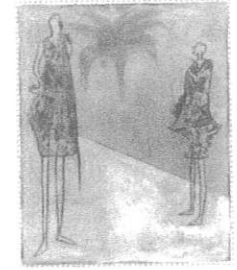
明治文学の草創期に昇星の光芒を放って文芸批評の先駆をなした若き文学者斎藤緑雨。樋口一葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っているのはあなたの大成です」と率直にぶつめた早世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家ここに蘇らせた。翠生の「斎藤緑雨」文芸評論集。

1512円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

小説と評論 カプリチオ

2016年冬 第45号



005 「白く長い橋」 関谷雄孝
006 ニキ美術館の神話-面白いネオサンスに向けて-
007 ニキさんの思想と面白いネオサンスの神話
008 ニキ美術館の神話-面白いネオサンスに向けて-
009 ニキさんの思想と面白いネオサンスの神話

ユダヤ難民を救った男 樋口季一郎・伝



ナチスの弾圧にシベリアを経由で満州に逃れてきた2万人のユダヤ難民を、命を賭けて救った日本人将軍がいた。ハルビン特務機関長樋口季一郎少将。戦中の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英雄の軌跡を辿る歴史評伝。

1512円 (税込/送料共)

■毒まんじゅうの小説哲学

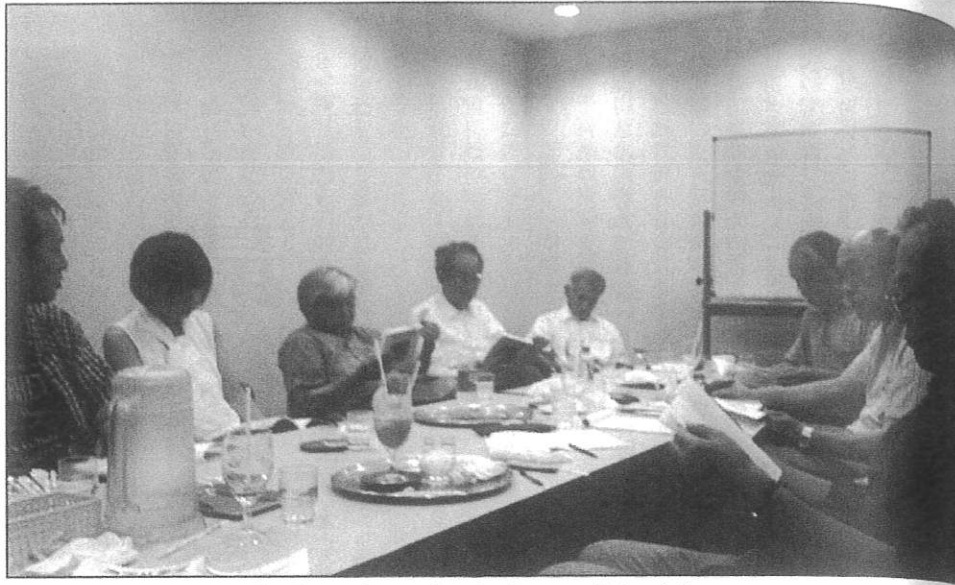
同人雑誌に参加しながら考えてきたことは、人の作品の読み方です。思想が一緒ではないのだから、個人的好みで評価するべきではないというのが、ほくにはありました。そんなことを考え出したころ、ご存じの方も多いいと思います。縁あって、宮原昭夫氏が講師をされている小説学校に通うようになりました。そこで宮原氏から習ったものは、自慢話と、説教話と、押し付け話でやると、どんなにいい

とできたわけです。いろいろな同人雑誌にいた人間が集まり、一斉にはじめるのですから、メダカの学校ならぬ、誰もが同じ立場で、慣習に縛られずに出発できるような気がしました。周囲からはそんなものは同人雑誌恒例の三号で終わるといわれましたが、長い間に主従関係が生まれて、息苦しいなかでやるよりはましと思えました。

最初は「世紀末メロン」の同人雑誌名ではじめる予定でした。数年前に世紀が変わるときで、それまでは持つまい、ということから考えついた名前です。

それが世紀をまたいで、二十年以上まで残ってしまいました。ほくとしては、いまだに在籍していることが不思議でなりません。名前も「カプリチオ」に変更したことも、よかったと思っています。これが「世紀末メロン」でやっていたら、説明が付きません。

67



「カプリチオ」46号合評会風景 7/23 汐留の会議スペース
(左から三人目、関谷雄孝氏)

カプリチオ 事務局
二都文学の会
〒一四二・〇〇四二
東京都品川区豊町六・六・一七
塚田吉昭方 ☎03・6325・1202

内容の小説を書いても、読者は忌み嫌うということでした。たしかに、自分を省みても偉そうに書かれているものを読むと、小物のほくなどは素直になれずに、反発したくなります。それなら、どう書けばいいのか。宮原氏にいわせれば、毒まんじゅうであることを気づかせずに食べさせろということでした。毒、それは書き手の自慢話などのようなものを指すのでしょうか。それをうまそうなまんじゅうのように隠して、気づかせないように喰わせて、自分の考えをひそかに相手に注入することだということです。

今回、関谷雄孝氏の「白く長い橋」を評価していただき、たいへん感謝しています。

主人公は八二才です。戦争を体験した人のひとりです。この時代の人が過去を振り返って鮮烈に蘇るのは、終戦のときの一瞬ということを開きます。当然だと思います。空中から人を殺すために爆弾を落とされたのです。こんな経験は、その時代の人たちが知りません。まして、感受性のいちばん豊かなときに、それまでの価値が一転してしまふ瞬間を経験しているのですから、たいへんな衝撃だと思えます。価値観が変わった後に出逢った数々の人々の姿が、あざやかに立ちあがったように見えました。個人的には、主人公を通して、その人たちの息づかいを感じる気がしました。

はくもそれなりの歳になりましたが、終戦は経験していません。知らない人間に、こうだったと押し付けてきたのではなくて、やんわりと見せたのですから、素直に反応ができたのでしょうか。宮原氏のいう毒まんじゅうとして喰わされたから、素直に気持のなかに落ちてきたのだと思います。

■月の階（小説）の狂想曲

「カプリチオ」は、毒まんじゅうというか、読み手のなかのイメージを触発できるような作品が、ひとつでも多く載せることができたらいいな、と思います。書き手の主張で

はなくて、読み手が素直に受け入れて、書き足りない部分をその人の想像力が埋めていってくれるような作品です。同人雑誌の宿命として、合評会に出るときは、その席で何かをいわなければならぬから、かならず読んでくれます。それゆえに、書き手は読んでくれるはずだという安堵の上にあぐらをかいています。読んでもらうには、時間がかかります。それだけに読む人の時間を無駄にさせないように頑張りたいものです。

この目標はなかなか難しく、月のように遠くで輝く美しいものに似ています。

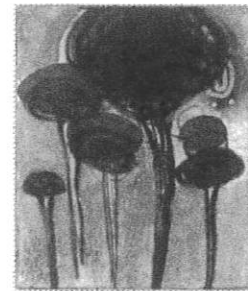
しかし、月の階（小説）を一步一步上ってゆけたらと考えます。理想ばかりを見ているような、阿呆な感じもします。

でも、狂想曲（小説）という意味を持つ「カプリチオ」という言葉にふさわしい活動のような気もしないでもありません。ちよっぴり、頑張つてやろうという気にもなります。

(塚田吉昭)

小説と評論 カプリチオ

2017年夏 第46号



【001】
「月の爪あと」 加藤京子

【002】
Photograph 本郷の坂

カプリチオ 46号

私人

東京都

自由な小説創作の発表の場

「私人」は、朝日カルチャー新宿にある教室が発刊する同人誌です。新宿といえば、都庁とそれに並ぶ高層ビル群を思い浮かべる人が多いでしょう。朝日カルチャー新宿はその高層ビル群の一つにあります。新宿駅から数分、整備された道を歩きます。道のりはコンクリートとアスファルトばかりと思われがちですが、よく見るとホテルの庭や街路樹の緑が灰色の建物群を彩っています。カラスや雀ばかりではなく、シジュウカラやムクドリなどの野鳥のさえずりが聞こえることもあり、都会の自然を感じる事ができます。高層ビルはまわりをささげるものはありません。天気の良い日には、教室の窓から富士山を眺められることもあります。そういう場所に「私人」同人は集っています。

同人雑誌は今では珍しい存在になりました。朝日カルチャー新宿でも同人誌を発行している教室はここだけです。「私人」は、朝日カルチャーからの援助はなにも受けずに、受講生だけで運営しています。講師は「私人」に掲載する作品を選んでいませんし、手を加えることもありません。なので、受講生ならだれでも「私人」に作品を発表することができます。受講生の皆さんは自由に小説を書いて、合評を重ねること

とで腕を磨いています。

講座の名前は「小説作法」といい、講師は尾高修也先生です。尾高先生の著作は多いために、すべてをここにあげることはできませんが、「書くために読む短編小説」とか「必携小説の作法」など、小説を書くことと考える人にとっては、示唆に富む本がたくさんあります。尾高先生は自著を宣伝したりしませんが、熱心な受講生は、これらの本を副読本のよりに読んでいます。

教室は二時間です。最初の約一時間はプロの作家の短編を、教室の受講者が交代で朗読します。短編は毎回異なる小説を尾高先生が選んでくれたものです。尾高先生のセレクションは幅広く、現在も活躍している作家から、今ではなかなか入手することが難しい作家の作品まであります。それらの小説を先生の解説を聞きながら読むと、いっそう豊かな小説の世界を感じることができそうです。

最近では、村田喜代子「月が明るい夜」、角田光代「ふたり暮らし」や、三浦哲郎「添い寝」、阿部昭「子供のために」、永井龍男「花の下」、田久保英夫「夏野」、水上勉「帯川」などを読みました。阿部昭、永井龍男、田久保英夫のよいうな、現代では埋もれそうになっている作家の作品にじっくりと触れることができるのは、文学好きには得難い体験です。表現された世界の奥深さとか、日本語の味わいなど、時代が変わっても忘れたくないものが、それらには詰まっている気がします。よい小説は書かれた時代を如実に反映しているの

尾高修也先生を中心に

私人

で、当時と現代を比べることで、今の社会を理解する手掛かりになることもあります。

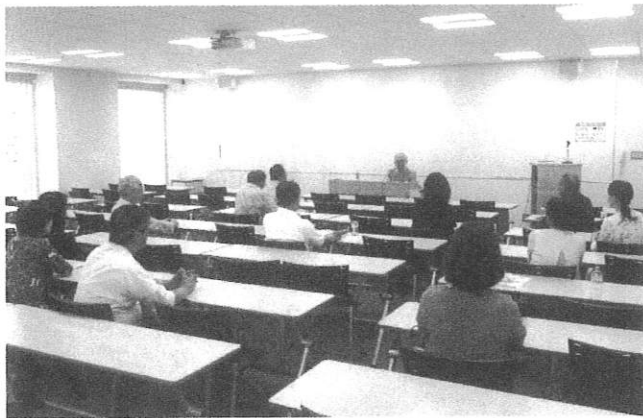
さて、後半の一時間は受講生の小説を皆で合評します。受講生の年齢は高めで、高齢化社会の縮図ともいえそうです。企業をリタイアした人や主婦が多いです。受講生の中には二十年以上通われている人もたくさんいます。新しく入られた人もいて、教室には常に、緩やかな新陳代謝があります。そのため「私人」に掲載される小説は、毎号出される方のもと、新しく入られた人が書いたものがまじりあいます。長く書いてきた人の小説と初心者のそれが並ぶことについて、その質のばらつきを心配される人がいるかもしれませんが、たとえまだ未熟な表現であっても、書かれた内容に優れたものがあれば、読む価値はあると思います。若いころから文章修行をされた人の作品には、一日の長というものがあるでしょうし、小説を書き始めて間もない人であっても、会社員としての経験が広い小説世界を作ることもあるでしょう。

合評は受講生の皆さんが自由に感想を言い合う時間です。ほめることばかりではありません。おかしいところを指摘されることもあります。自分の作品の合評の日には朝から胸がドキドキしますが、そういう体験も大人になってからはなかなかできないものと、前向きにとらえる人が多いようです。

教室の後では講師の先生を囲んで昼食を食べます。その時に、教室では聞けなかったことを、個人的に先生に質問することもできます。食事をとりながら、教室内ではまた違った

意見が交わされることもよくあります。言葉づかいの細かい間違いなどを指摘されるのもこんな時間です。校正ミスはつきものですが、合評を重ねるにつれて減っていきます。しっかりととした日本語がつづれるようになると、成長を感じることがができます。

「私人」の同人はこんな風に小説を書き、合評をしています。より良い作品を目指して、創作に励んでいます。(森由利子)



尾高先生の教室風景

私人

「私人」発行人 森由利子

〒364-0035 埼玉県北本市西高尾 4-133

TEL 048-591-3940

飛行船

徳島県

予想を遥かに上回る成長飛行

文芸誌「飛行船」を立ち上げたのは二〇〇七年、私は古稀を過ぎていた。

何を今さらとの思いは、周囲の者も本人にもあった。長年その実力を誇っていた「徳島作家」が廃刊となり、徳島県内に文芸誌というものがなくなつて一年余、作品を書いても発表する場がないのは寂しい。一念発起して始めた次第である。

始めるに当たっては仲間を募らなければならぬ。まず、「徳島作家」時代からの朋友である松崎慧に声を掛け、二人で相談して人選をした。少女時代からその才能を高く評価されていた齋藤澄子、何か始めるのであれば是非と声を掛けられていた鮎合巧、「阿波の歴史を小説にする会」では一番番手だった藤本好浩、詩誌「逆光」の主催者である宮田小夜子、小説は書いたことがないというが文才がありそうだと睨んだ歌人の松田一美、それに徳島ベンクラブを草創期から支えてきた丁山俊彦を加えて八名が揃った。入会金、会費は取らない代わり、毎号必ず作品を書くこ

とを義務づけた。

そして、私の誕生日でもある五月に、記念すべき第一号は発刊された。小説六編、評論一編、一四九頁の創刊号は、県下文芸愛好家に好意的に受け入れられた。「春夏号」を五月に、「秋冬号」を十一月に、年二回の発刊は続けられ、今秋は二十号である。まず五号までは続けよう、次ぎは十号までと、一号一号辿りながら、いつのまにか十年が経過している。

その後、故あって何人かが退会したが、評論を得意とする大北恭宏、高校の国語教師だった佐滝幻太、長編に挑む菊野啓、創刊時、地元新聞の文化部長として暖かく接してくれた三木田卓郎も、退職をまって入会してくれた。そして東京からはベテランの乾莊次郎が加わり、現在は十四名である。

活字離れの著しい若者の中にも、小説を書きたい人はいるはず、そんな若い人に優しい同人誌でありたいと願い、できるだけ経費がかからないよう、掲載料も取っていない運営であるにも拘わらず、若者には受け入れられていない。そこで一計を図り、五号、五号を区切りとしての「飛行船文学賞」を設定し、賞金五万円で開催をした。応募数は想像をうんと下回り、成功とは言い辛い状況ではあったが、幸い佳い作品に恵まれ、第一回（五号）の授賞者高木純と、第二回（十号）の授賞者正木孝枝が会員となつて定着して

古稀を越えての創刊

徳島県唯一の文芸誌

いる。また、第二回で奨励賞を出した紺野理々が、プロ作家デビューを果たした。

第三回（十五号）は、高校生の安宅星夏が、若い才能を発揮して受賞者となり、地元新聞を賑わした。が、残念ながら大学生となり、県外へ出て行った。記念すべき二十号では、「第四回飛行船文学賞」発表の予定である。

このように遅々とはあるが、我が「飛行船」はゆつたりと成長しながら、予想を遥かに上回つて飛び続けている。

仕事や家事をこなしながら、また、他の趣味も持ちながら執筆を続けるというこ

とは、相当な覚悟がある。一年に二作というのは、少ないようでも本人にとつてみれば負担である。終わつてやれやれと思つたら次作の構想に入らなければならぬ。のんびりとしている暇はない。この窮屈さ、ノルマを課せられるしんどさが、力を育てるのだということを実感する。耐えられなければ止めるしかない。会員でいる以上は書き続けなければならない。この状況に耐えてきた会員の實力は、確実に上がつていると確信する。会員にノルマを課す以上、代表の私がさぼる訳にはいかない。老体に鞭打ち、ない知恵を振り絞つて書いている。書けば何とかモノになる、の



「飛行船」15号発刊記念 第3回飛行船文学賞授賞式 阿波観光ホテルにて 会員勢揃いの記念写真

信念を持つて書いている。

最新の十九号は、小説九編、評論四編、エッセー七編に俳句も入り、二〇三頁という豪華版に成長した。小説を書いたことがないと言いつつ始めた松田一美は、真面目にこつこつと書き続け、「このきつかけがあったおかげで、思いもかけなかつた小説が一九編でできました」と本人が述懐するように、確実な歩みを続け、今回、「文芸思潮」に転載という栄誉を与えられた。

創刊から十年が経過し、私を始め会員は様に十歳年老いた。中央で認められることは最大の理想ではあるが、たとい目の目を見なくとも、郷土徳島に文芸の足跡を残していくことも大切であろう。みんなもう若くはないが、徳島県で唯一の文芸誌である誇りを持つて、これからも飛び続けたいものである。

（代表／竹内菊世 記）

飛行船

〒770・0842

徳島県徳島市通町2・12竹内菊世方

☎088・655・2074

同人雑誌紹介

法螺

大阪府

北河内に花開いた草の根の文学

枚方ひらたかは淀川左岸にある街で、大阪と京都のほぼ中間に位置する。京阪工業地帯のベッドタウンとして宅地造成がすすむ枚方に文学拠点をつくらうと、「枚方文学の会」を結成したのは一九七二年（昭和四七年）夏である。主導的な役割をはたしてくれたのは、当時市役所職員だった吉村康と家電メーカーのエンジニアだった堀内義章。音響機器工場勤めのわたしと三人で、ロシアの三頭立て馬車トロイカになぞらえ、自称トロイカ方式で草創期の会の運営にあたった。互いに三十歳を超えたばかり。泥臭いが怖いもの知らずの、がむしやらの情熱だけがあった。

枚方市はいままでこそ人口四〇万を超える中堅都市で、各種サークル活動も盛んだが、当時は交野・寝屋川を含め、文学的土壌という点で瘦せた荒地だった。文学をやる人はいても、ほとんど大阪か京都で活動し、地域に根ざした文芸同人誌は一冊もなかった。

そんな荒れた土壌を開墾し種を蒔き、文学の花を咲かそうと語り合った。翌七三年四月に「枚方市民文学講座」を

開講。講座は枚方市社会教育課の支援をうけて年十一年間で計三十回おこなった。八十名から百名ほどの市民会館大会議室は、ほぼ満席に近かった。

講師の顔ぶれは詩人の小野十三郎、井上俊夫、金子、福中都生子、小説家の西口克己、北川莊平、正、今江祥智、川崎彰彦、文芸評論家の八橋一郎、正、千頭剛ほかの諸氏であった。すでに幽界の人けれど、いま思えば錚々たるメンバーである。貧乏で一律一万円という格安の講演料にかかわらず、十学校の講師たちが好意的に全面協力してくれたことがあった。当時、大阪文学学校の校長だった小野十三郎、チューター会議で、

「文学の萌芽は大事に育てねばならない。文校（十学校）を飛び立ったタンポポの綿毛が各地に根付くよう、文校はできるだけ力を貸していきたい」と発言されたらと後で聞いた。ありがたかった。

同人雑誌「法螺」が産声をあげるのは会発足からの一九七七年（昭和五二年）夏の終わりだ。風変わり名の由来は「ホラ吹き」の法螺である。若い時期はればかりが強い恥知らずの季節だから、まともな書けないうちから文学賞を獲って小説家になる夢に描いている。酔った勢いで、膨れ上がったホラ唇からこぼれ落ちる。そんなホラの集まりという名前の誌名であった。全国どこにもない誌名なのにながら覚えてもらえると自負している。

創刊号の巻頭に、福中都生子氏の詩「貝」を載す

女は みんな
二枚貝をもっている
おもちゃのような貝のふたを
あけたりしめたりしながらする
たのしいあそびを知っている

これは冒頭の五行だが、女のエロスを大胆に謳った。講座でも「おんなの生と性」を熱く語った詩であった。詩はこのあと「男も みんな貝をもつ」とつづき、終連に向かう。そして、

男はときどき渾身の力をこめて
その貝を吹き鳴らす
ねむっている大地に立ち
きこふらつて字をりちかこぼさる

書くときはいつも青春

がむしやらの情熱の軌跡

法螺



【法螺】例会スタッフ

〒576-0062 大阪府交野市神宮寺 1-26-6
枚方文学の会 西向聡方
TEL 072-810-2469

法螺

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。
- ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞を決定する。
- ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
- ④ 次点には特別賞を授与する。
- ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。
- ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
- ⑦ 読者賞の投票は選考会1週間前までに行う。
- ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
- ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切にお願いするしだいです。

2015年6月24日（改訂）

全国同人雑誌振興会
文芸思潮



神戸エルマール文学賞の受賞会場で

となる。遅く屹立する男性そのものように、京都と大阪の狭間にある淀川沿いの街から全国にむかって雄叫びの法螺貝を吹き鳴らせという激励のメッセージであった。創刊からやがて四〇年、かつての黒髪は短く刈り込んだ白髪頭になり法螺貝も田螺と化した感だ。過ぎた歳月は、多くの同人雑誌がそうであるように、けっして平坦な一本道ではなかった。急斜面のガレ場があり、腐臭の汚泥地が

法螺 58

第3回富士正晴全国同人雑誌賞・大賞受賞

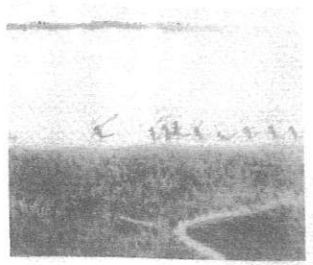


枚方文学の会

「法螺」の受賞歴
・一九九一年 大阪府地域文化振興奨励賞
・二〇〇七年 第三回富士正晴全国同人雑誌賞（大賞）

あり、思いがけぬ陥穽があり、仲間にも助けられて越えた峻険な峠があった。さまざまに刻まれた恩讐もまた同人雑誌の歴史である。遠い昔、小野先生に言われた言葉がある。「きみは枚方で、草の根の文学をめざせ」いつまで継続できるかわからないが、エッセイ教室「えんびつ」の支援を含め、地域密着型で活動を続けてきた同人雑誌『法螺』は、これからも欲張らず、背伸びせず、見栄えはしなくとも豊かな花を咲かせていきたい。文学は年齢ではない。書くときはいつも青春だ。
(西向 聡)

狐 火



第 19 号

狐 火



第 20 号



「狐火」同人

64

同人雑誌紹介

狐 火

きつねび

埼玉県

元「まくた」の六人で発足 書き続けることが才能

「狐火」同人会はごく小さな集まりで、故駒田信二先生の元「まくた」のメンバー六人で十六年前に発足しました。二〇〇一年四月に創刊号を発行、二〇〇五年の一〇号まで年二回発行しておりましたが、その後は年一回となり、二〇一五年の二〇号まで現在に至っております。現在、仲間は準会員を含めて八名。例会や勉強会などはなく、合評会のみ行なっています。

駒田先生の残された言葉を受け継いで、創作に励んでいる日々です。

次のような駒田先生の言葉を、口頃の創作の指針とさせていただきます。

「その人独特の作品世界を感じさせる作家はどうやって自分独自の表現を身につけたのだろうか。小説を書いていくと、作者本人の生活上での呼吸のリズムが文章に反映されるようになる。テーマが他の作家と大きく変わらないものであっても、自分なりの切り口を持つことによって作品世

界は違ってくる。作者が独創性を出そうとすると、さらに自分なりの世界が現われてくる。創造性豊かな作品を常に書こうとすれば、独自の表現世界は必ず現われてくる、と信じたい。そのためには、とにかく長く書き続けることが必要である。

駒田信二先生は繰り返し語った。「書き続けることが才能です」と
(一九号編集後記)

「文章は言葉さがしだとつくづく思う。詩やエッセイや小説、その他の文章にしても、書きたいと思う内部にあるものを表現するには言葉を探し、手練り寄せ、編んでいかなければならない。そして選んだ言葉は熟知し、責任を持たなければならぬ。何度も辞書を引き、参考書を繰る。それでも途方に暮れるときがある。

「カルチャーとは、耕地の意味もあります。自分を掘り起こすことです」

カルチャースクールに通っていたころの駒田信二先生の言葉が思い出される」
(一五号編集後記)

狐火同人会 〒341・0021

埼玉県三郷市さつき平2・26605朝倉方

ご連絡先048・951・8619

故駒田信二の薫陶を受ける

海峽

愛媛県

着実な姿勢が味わい深い文章を生む

愛媛同人誌協会の中軸の一つ

しまなみ海道（西瀬戸自動車道）の終点であり始発点でもある町が今治であり、ここで平成九年に立ち上げたのが文芸誌「海峽」です。南に瀬戸内海、北に低い山並に囲まれた造船とタオルの町です。愛媛といえば正岡子規の生誕の地であり、俳句が盛んな土地柄です。俳句同人誌はたくさんあり、愛媛新聞では毎日のように投稿句が掲載され、俳誌も数えきれないほど発行されています。そして今また俳句ブームなのかテレビなどでも毎週放映されています。

そのような土地柄に、文学の好きな者の集まりとして、俳句以外の文学の表現の場を軸に誕生しました。まだ同人誌としては若く、また活動の方法も手探りの状態です。会の方針として、

- ・原則として年2回同人誌を発行する。
- ・会員は発行の度に1作品を発表すること。
- ・隔月に発行する同人向きのミニ新聞には交代で800字随想を書くこと。



第33号

- ・合評会には参加すること。
- ・昨年より参加した愛媛文芸誌協会に参加すること。などとしております。

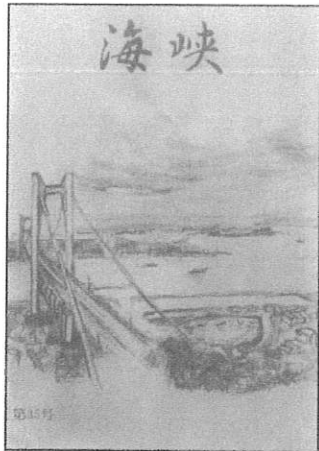
昨年、愛媛同人誌協会に参加して平成二七年度の愛媛同人誌協会賞第1部門を文芸誌「海峽」34号から西山慶尚氏の「祖父の遺産」が受賞しました。（この賞は愛媛同人誌協会と愛媛新聞協賛で愛媛県の同人誌の中から選ばれる賞です）マンネリ化していた同人に快い刺激となりました。

年二回の発行後は合評会をしておりますが、各作品に対して辛辣な意見交換が行われ、意見の対立で知らない人からみればあわや口喧嘩と思われることもあります。それは作品に対しての熱い思いであって各自の見方や感性の違いから出るものであって、その後は和気藹々と食事会になっ

ています。が何分高齢化となり若い同人が少ないのが悩みの種です。

同人参加は住所・年齢・職業に関係なくオリジナルの作品であればいつでも受け付けています。（小説・エッセイ・詩・翻訳など）会員の中には東京・名古屋在住の方もおります。

関心のある方は是非藤井まで連絡下さい。（090-3788-5207）



第45号



「海峽」同人会

海峽

〒799・1522

愛媛県今治市桜井4・2・18藤井総子方

☎0898・47・3699

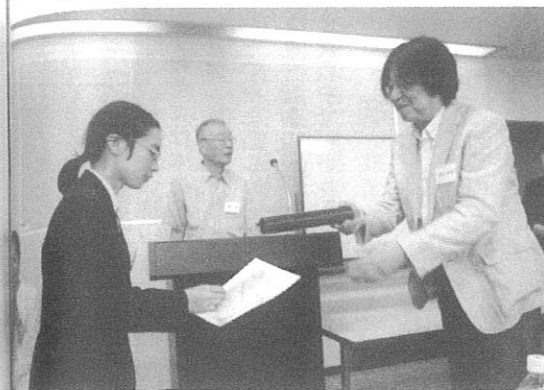
千葉県農業史を語る小説

「馬乗り馬頭観音の里」

昨年に引き続き、再度、「全作家」第一〇一号掲載の嶋津治夫氏の小説「馬乗り馬頭観音の里」がまほろば賞の優秀賞作品に選ばれました。

全作家協会では、掲載作品を批評する会を開催いたし、当該作品の合評を行いました。四十名ほどの当日の出席会員はこの作品について、文芸評論家の横尾和博氏はじめ全員が好意的な意見を述べました。

「馬乗り馬頭観音の里」は、千葉県北部の下総地方の野馬生産を目的とした牧場の遺跡の見学講座に参加する物語です。主人公は、元々この北総地帯をエリアとする県の農林事務所が勤務地だったため、見学地周辺の農業事情に詳しく、農業政策の進捗まで書かれています。



横尾和博氏より文芸時評賞を受ける受賞者

文字通り馬に乗った馬頭観音の石仏を見ます。それぞれが小さな規模で、二十数戸の農家の集落が観音堂を維持しています。そこで、主人公は農業は産業であるとともに生業であるという思いを強くします。

この作品は、北総の農業史を日本の農政もからめ客観的にとらえた名作であるといえます。

全作家協会といたしましても、嶋津治夫氏のみならず、賞受賞に際しまして、選考委員の皆様にも厚く御礼を申し上げます。また、嶋津治夫氏にはお祝いを申し上げます。今後この分野をさらに掘り下げられますことをお祈りいたします。

語は変わり、私どもの「全作家」ですが、創刊は一九七六年です。現在では、年四回発行しており、もう一〇二号となりました。

さらに、全作家協会の主な事業をあげますと、全作家文学賞、全作家文芸時評賞、短編小説優秀賞、出版優秀賞、掌編小説優秀賞、功労賞、ホームページ関連事業などを行っています。

季刊「全作家」、短編集の発行後には必ず合評会を行い、また、年末の忘年会には多くの方が参加します。その合評会などには、毎回、横尾和博氏が参加し、一作ごとについてねいに批評をしてくれます。横尾氏は、全国から集まる膨大な同人雑誌をすべて読み、「全作家」に文芸時評を書いていきます。

私どもは、豊田一郎会長のもと、陽羅義光理事長、野辺慎一事務局長、吉岡昌昭編集長はじめ、役員、会員一丸となって、日本文学の底辺を支える活動をしています。これをお読みいただいた皆様には、今後ともよろしくお願い申し上げます。ともに文学を語り、また書き続けてまいりたいと存じます。

嶋津治夫氏は、そうした私たちの大事な仲間です。嶋津氏のますますのご健筆をお祈りするばかりです。

(全作家協会事務局長 野辺慎一)

「全作家」合評会風景



〒123・0864
東京都足立区鹿浜3・4・22のべる出版企画内
全作家協会 TEL 03-3896-6506

全作家協会

いた。

言葉の意味を反芻しながら家に帰った。ちょうど父と母が外で作業をしていて、遅かったねと言われたので、初めておばあさんのことを話した。

「ダックスフントを飼ってるおばあさん？」

「うん。家はすぐそこ。一人暮らし」

「そんなおばあさん、いたっけ？」

「さあ？このへんでダックスフント飼ってるなんて聞いたことないが。名前は？」

「あ、聞いてない……」

夕方、チョコの散歩ついでにおばあさんの家を探した。表札で名前を確かめようと思ったのだ。ところが、このあたりだと分かっていないのに、それらしき家が見つからない。いつも霧の中、おばあさんに案内されて行っていたから、きちんと道を覚えていなかった。それにしたって、戸数も少ないのだから見つけれられるはずんだけど。あちこち歩き回ったが、ついにおばあさんの家は見つからなかった。

翌朝もまた、見事な霧が町を覆っていた。コートを着てマフラーを巻き、帽子をかぶってチョコと出かける。少し行くと我が家は見えなくなり、私は白い繭に包まれた。立木が幽霊のようにおぼろな姿で、白妙に色を添える。今は冷えこんで、前も後ろも霧に隠されているけれど、これだけ霧が濃いということは、後から爽やかに晴れるということ

とだ。この真っ白い世界では、想像もできないけれど。

霧から紡ぎだされるように、おばあさんが現れた。いつもの乳母車にダックスフント。チョコが吠え始める。

「おはようございます」

私は冷たい息を吐きながら、大きな声を投げかけた。

(「安藝文学」84号より転載)



たけだ じゅんこ

武田純子

1978 広島県生まれ
広島大学を卒業後、会社員を経て結婚
現在は、広島県内の山と田んぼに囲まれた夫の実家で暮らしている
「安藝文学」所属
2012「庄原文芸大賞」受賞
好きな作家は司馬遼太郎、村上春樹、ガルシ
ア・マルケス、アガサ・クリスティーなど

同人雑誌紹介

安藝文学 広島県

半世紀以上の変遷

創刊が昭和三十三年（一九五八年）、この年前後の生まれの同人も少なからず、であれば長距離ランナー氣息奄々（きそあんな）と吐息ついても無理はない現状ではあるのだろう。

周辺をみまわすと、地名を冠したいくつもの誌名の消息が絶えていることに気づく。「讃岐文学」、「金沢文学」、「東北文学」、「日田文学」等々……。それらのなかには、後継者がいないゆえに継続不能、もしくは主要人材の死亡に伴う自然溶解もみられる。

かつて、刊行物の交換は不文律の慣行であり、妍（けん）を競うかのような時期さえあったものだが、いつ知れず途絶えがちとなった昨今ではある。

にもかかわらず、日本文藝家協会刊の年刊資料「文藝年鑑」には、常に数多い小説同人誌の所在が登録されている。鑑（かん）には、常に数多い小説同人誌の所在が登録されている。鑑（かん）には、常に数多い小説同人誌の所在が登録されている。鑑（かん）には、常に数多い小説同人誌の所在が登録されている。

「安藝文学」創刊の半年まえ、狭い居酒屋で、百号まで出

安藝文学



84号

してやろうじゃないか、と気炎をあげ、頷きあつては膝を叩いたものであった。そして現在にいたるわけだ。

されば先途、余すところ十数号。保存資料の収容棚に並ぶバックナンバーを眺めると、その背表紙どもが遠路遙々、辿りついた地点を無機質な表情で指し示すのである。かと思つと、地元の新聞が広いページを使って、同人たちの動向を事細かに、入念に紹介したり、刊行号に要したカネの多寡を論評の対象にあげたり、地域の文芸活動にたいする親切な鼓舞を惜しまない、そういう暖かいめぐみの季節もあつたのだ。

そういう思い出はさておいて、うすっぺらの冊子に存外



安藝文学同人の道後温泉への小旅行会

な経費がかさみ、印刷屋の嫌味な催促に痛み入った。踏み倒して、そのつぐなみにムシヨへおもしろいぞ、などと冗談口を叩く奴もいた。すべて甘やかな追慕の情にまとわれて、感慨をもよほした。重ねた歳月がもたらす功德というべきである。

歳月の重みはまた、「選集・安藝文学」第一集企画を招き、具体化した。自選を主軸に長短不問エッセイを集成、ハードカバーの単行本とし、永を意図したのであった。刊行までの作業がイベン席を設けて祝うことはしなくても、祝意は仲間の間にしたものであった。

刊行までの作業にたずさわって、痛感したことある。それは、仲間うちの相互批評に生じていた等閑にしてはいなかったか、ということだ。

発刊後の合評会には、近隣の知己や相互交流のから招聘した幾人かが加わっているのが通例だが、の或る作品について発言しあったにちがいない。には賛否の極論もあつたはずなのに、だれかの片言とつ覚えがないのであつた。この作品について、どう感想を、批評の言を提起していたか。作業の進行読した作品のいまにして放つ美点が見落されたまま

の眼」をお互いに向けあい、活気づくことから始まると創造への踏み出した。

持統が即力とは信じない方が賢明だ。幸い、高松ケツトはどうか貧血を免れ、雑誌づくりに苦心しただけは薄くなった今、逆に陥りやすいのは情数重であり、戒心すべきは書き放しの満足である。ここでこんなに肩肘張ってみせるのは、われなりに憔悴たるもの、なしとは云えない。けれども、「平に疎くなったおのれを知るにつけ、奮起の掛け声にこそ向きたい一念だけは否めないのである。

(岩崎)

にも伝わっていないのではないか、といった危惧を拭えなかつたことである。こんな優れた文章家の彼・彼女はグループを離れたあと、どこへ行ったものか、と惜しんだりした。「選集」の発刊を今後も続ける方針で、第二集の準備に入っている。継続を定めた理由のひとつは、お互いの営為の産物を再点検する機会を設けることであつた。歳月は読む力をいかようにも蓄え、鍛えるはずのものであろう。そうであればこそ、批評の眼は研ぎ澄まされる。

『未完の平成文学史』（浦田憲治・早川書房刊）の「プロローグ いま、なぜ平成文学史か？」は、「平成の文学はいわば、なんでもあり」の状況が続いている」という観測に立脚している。尤も、「純文学」がエンタメ含みの「文学」に混交しつつあることは、いまに始まったことではない。同人誌が即「漫画同人誌」の呼称であるように、文学同人誌は「文学老人誌」に様変わりし、若年層の多くはネット上に表現の場を得ようとする。

後継者不在をもつて、地域の文学活動の低迷を嘆くのは至極簡単な道理に過ぎず、座して待つ不毛の言い換えに他なるまい。「文学老人誌」に活路ありとするならば、「若さ」を取り戻す以外にない。

「若さ」？ それは若づくりで腐心することでもなく、若者ぶることでもない。永い歳月の積み重ねが蓄えた「批評



安藝文学

〒七三二・〇〇〇二

広島県広島市東区戸坂山根二・一〇・二五

安藝文学同人会事務局 岩崎清一郎

TEL 082・2229・2869

ら、本物の可能性もある。墓はね、北見霊園にあるのですよ。あの丘陵の上の方だ。何だか特等席みたいな場所だ、それはそれは堂々としててね。夕陽を浴びて、大きな丸い石が、あかあかと輝くんた。……ちよつと、あの執念だけは、凄いでしよう」

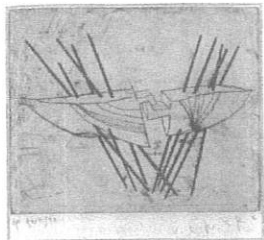
私は両手首から、血が引いていくのを感じた。並んだ飲食店の明かりが、狭い紫色の川の水にゆらめきながら映っていた。

二人はそのまま細い小橋を渡り、酔い覚ましのために、しばらく無言で歩き続けた。

(「カプリチオ」43号より転載)

小説と評論
カプリチオ

2015年冬 第43号



- 「京都の掘井さん」 玉置 伸在
- 「物狂いの石」 草原 克芳
- 「マイ・シークレット・ガーデン」 加藤 京子



草原克芳

くさはら かつよし

1956年宇都宮市生まれ
中央大学文学部中退
広告代理店、制作プロダクション、通販会社に勤務
文芸同人誌『カプリチオ』編集発行
世田谷文学賞受賞(第13回「ドラキュラのいる客間」第14回「夏草の酒」)
作品に『ブラハの人形遣い』『建築家の檻』『アスペラトウス雲』『庭師と四人の女たち』『人間ポンプの女』などがある
評論『地下生活者としての夏日漱石』『砂の女』と『箱男』他 インターネットではGrasshouseの名で電子書籍を公開
2013「下北沢路地裏ツアー」で第6回まほろば賞優秀賞受賞



同人雑誌紹介

カプリチオ 東京都

幻のアンソロジー「カプリチオ傑作集」を夢見て

■「カプリチオ」とは、音楽ジャンルでいう奇想曲・狂想曲のこと。別に特有の形式があるわけでもなく、自由でとらわれない発想による曲を言うようです。イタリア語では「気まぐれ」の意味。したがって、こんな言葉を雑誌名にしている同人誌ですから、内容は、まあ、その、推して知るべし、であります。

しかし、芸術文化というものは、そもそもがイメージネーションの自在性や、「精神の自由」を元本として表現されるわけでありますから、文学にとつては本源的なコンセプト、といってもいいはず。年二回発行、現在は四十四号。同人誌の寿命として、これが長いのか短いのか、よくわかりません。ともかくも「文学の気まぐれ」は、二十年以上持続したわけです。バックナンバーをめくってみれば、なかなかの名作・傑作揃い(同人誌名物の仲間褒め!)。いつの日にか短編アンソロジー「カプリチオ傑作集」でも出せたらいいなア、と愚考しております。

■近々ますます「カプリチオ」同人の創作意欲は旺盛です。長年、下町で開業医をされてきた関谷雄高氏は、これまで

医師と患者の人間的な問題を「外科手術」という極限状況をかためて、芸術家小説を思わせる求道性で追究されて来られた。氏の作品を読むと、現代のパソコン画面を覗んでいるお医者さんより、ずっと患者との関係性が濃密だったと思います。と同時に、一連の作品は、東京下町の戦後史にもなっていた。しかし、ここに来て、八十半ばを超え、刮目の新境地を開かれた。次号掲載「白く長い橋」。関谷氏は、宇宙、魂、神性(特定の宗教ではなく、絶対性を求める人間の心)といった困難なヴィジョンに手をかけ始めた。凄いいことだと思います。

■この「動」の関谷氏に対して、作風としては「静」の石井秋氏。清涼感のあるかつちりとした作風の短編で、私も「灯台」などの読後感をいまだに覚えています。家族で岬の灯台に行つて写真を撮る話なのですが、なんとなく、小津安二郎の映画と同じ、静かな微風が吹いているような……。石井さんは元教育者で、合評会では菌に衣を着せることのできない騒がしいカプリチオ同人の中では、唯一、人権派弁護士役を買っていただけの長老的人格者でもあります。先号では犀利なロブ・グリエ論をものして、われわれを唖らせてくれました。

■「カプリチオ」の実質的な編集長である塚田吉昭氏は、昨年、これまでの短中篇約二〇作をまとめて『迷宮肖像』という単行本を出版。二段組みで全三八七ページ、塚田氏

自由でとらわれない発想

の文学活動二十年の結晶体。傾向が色々あり過ぎて、「せんねんやうなぎ」がいいとか、「名越切通」「白骨温泉」が傑作だとか、「言の葉」が捨てがたいとか、同人の間でも、好みは分かれます。内田百閒とも、ジョイス「ダブリン市民」とも、江戸川乱歩ともつかぬ幻想的な作風は、現実を成立させている公式を、さりげなくひっくり返し、世の不条理性を垣間見させてくれます。お金とお時間のある方は、その……まあ……買ってあげてください。（連絡先／言海書房 TEL 03・5761・9988）

■合評会後の三次会では、華麗なる歌姫に変貌する加藤京子氏は、毎回、新しい作風で驚かせてくれます。以前は、ミュージシャンの生きざま、アウトサイダー達のコミューン、現実社会との齟齬を巡る葛藤、天使的な少年等を描いた感性豊かでファンタジックな作風でした。最近では、緻密な文体を研ぎ澄ませ、ある種のヌーボーロマンを思わせる、静謐でミステリアスな詩的世界を構築しつつあるようです。四十四号掲載『マドリッド その翳りのなかへ』。先日、インターネットの「関東文芸同人誌交流会の掲示板」を覗いたら、作家・評論家の根保孝栄氏が「白黒画面の映画のような沈鬱な町並みの描写」の魅力を評しておられた。これはまったく同感です。

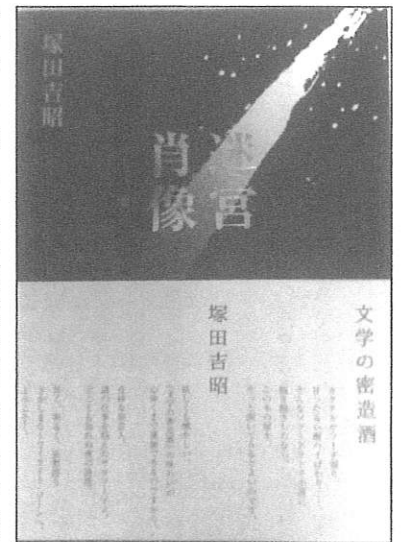
■玉置伸在氏の小説は、内省と行動、抒情性とある種の超越性への希求とが、微妙なバランスの中で均衡を保っている



「カプリチオ」合評会。6/5汐留の喫茶店、会議ルームにて

ます。バイク乗りの青年の破滅的詩情を描いた「夏空のエンジン」、銭湯と火葬場という特異な設定の「八月の放物線」（次号）も好評。芦野信二氏は、詩的イメージのある散文の使い手。とくに故郷の山形を描いた短編「早い流れの川」は、S・アンダーソンを連想させる味わい深いものでした。近いうち、あの名編を超える傑作をものされることでしょうか。作品は書かないけれども、的確で鋭いコメントを吐き、数匹の猫と戯れ、自宅の屋上庭園でせっせと妖しい果実を栽培している謎の怪人が中村豊氏。風貌もロシアの文豪やアナキストを思わせ、そのうち何か、物凄いものを書きそうな気配……なのだけれども。

■新年早々、残念なことに、訃報がありました。長年、カプリチオ合評会のご意見番であった谷口葉子氏が、この二月に癌で逝去。氏の作風は、隅々まで作り込んだメリハリ



塚田吉昭「迷宮肖像」

のある短編で「あふりかすみれ幻想」などは想像力豊かな洒落た短編でした。先に触れた関東文芸同人誌の掲示板で、前号の「深海ホテルへ」や、五年前の作品「冬のとびら」が新たに論評されました。病状の進行があまりに早く、そのコメントを伝えられなかったのが悔やまれます。

谷口さんは病床でも、最後まで自分の文章を気にかかれ、その気迫には「女文士」を感じました。かくわしき名エッセイ「私の心に残る花藤」、集中治療室の幻覚を描いた小説「まぼろしに遊ぶ」が、未完の絶筆に――。

■最後に、出版社として多忙な中で、「カプリチオ」の編集校正作業を担当してくれているのが、言海書房の水野肇氏。ここ二、三号、文学史・出版史の裏事情をめぐる楽しくも辛辣なエッセイを連載。四四号は仮名垣魯文の「安愚楽鍋」です。独特の文体で読ませる社会諷刺的な戯評となっています。

——というわけで、ちゃっかりと、宣伝と販促をかねている「カプリチオ」の同人紹介でありました。

（草原克芳）

カプリチオ 事務局
二都文学の会
〒一四二・〇〇四二
東京都品川区豊町六・六・一七
塚田吉昭方 ☎03・6325・1202

季刊作家

愛知県

書くことに情熱を抱いて

「季刊作家」の前身である「作家」は、「確証」で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰していた文芸同人雑誌である。名古屋を拠点とし、東京、神奈川、山梨、群馬、大阪に支部を設け、日本全国に同人、会員がいた。「作家賞」も設けられ、多くの書き手の目標であり、励みにもなっていた。

小谷氏のカリスマ性は圧倒的であった。「作家」は全国有数の文芸同人雑誌となり、優れた書き手がしのぎを削っていた。小谷氏もその経歴や実力を考えれば中央文壇に進出し作家活動もできたと思われるが、名古屋で医者をしながら、毎月雑誌の発行に精力を注ぎつづけた。

一九九一年に小谷氏が亡くなり、「作家」は終刊となった。発表の場を失った同人たちは、他の同人誌に書く場を求めたり、気の合う者同士で新たに雑誌の発行を試みたりしていた。暗中模索のなかで、同人の半数余りが再出版を希望し、一九九二年（平成四年）の春、「季刊作家」の創刊号が発行された。小谷夫人の意思により、「作家賞」も引き継がれた。

しかし、小谷氏ほどの求心力はなく、主宰がしばしば変わって不安定な状態であった。このことは、雑誌作りがいに難しいことであるかを証明している。

それでもなんとか『季刊作家』は年四回発行された。「作家」を引き継ぐ形で、小説を中心に、エッセイ、詩が掲載されている。発行部数は、四百〜五百部。同人数三十名余、会員数二十名余。本年の春に第八十七号を発行し、依然として全国有数の文芸同人雑誌に変わりはない。毎号同人雑誌評にも取り上げられている。これは同人の努力と小谷氏の指導の賜物である。

小谷氏の著書に『小説入園』という小説の書き方の基本をわかりやすく説いた小冊子がある。その中に書かれている、書き直し（推敲）こそ上達の秘訣であること、先人観・固定観念、経験主義による独断におちいつてはならないこと、同人雑誌の書き手であることに誇りを持つこと、書きつづけることが前に進むことであるなどの教えは、小説を書く同人の中に息づいている。

どの同人雑誌も悩みがあると思われるが、『季刊作家』はこの十年、若い人の加入がないこと、同人の高齢化と同人の減少が悩みのタネとなっている。原稿の集まりが悪いのもさることながら、資金繰りも苦しくなっている。そのため雑誌の発行も、昨年から年四回から年二回に減少した。

小谷剛氏の遺志を継ぐ

こうした事情から、同人費や掲載料を値上げする案も浮上している。そうすれば年金生活者が多いために、退会する同人があるのではないかと懸念される。また、雑誌の体裁を落とし、経費を抑えることも考えたが、現在の雑誌の体裁によって書く気になるという同人も少なくない。体裁より中身を充実させることの重要性は理解しているけれど、体裁を保てば、おのずと書き手の精神が刺激され、充実した誌面になると考える同人も多いのである。

現状を打破する妙案はない。当面はいまの方向で進んでゆくことになるであろう。

昔は、同人雑誌で小説修業した地道な作家もいたようで、『作家』の同人の中にもプロの作家になった人もいた。いまは文芸雑誌の文学賞に応募して、入選して作家デビューを果たすというパターンが手取り早いしほとんどである。大手の出版社の純文学雑誌の読者が減少し、赤字つづきらしいが、そのわりには新人文学賞への応募は昔と変わらないうほど多いようだ。この事実を見れば、文学の道を志す人は昔もいまもそんなに差があるわけではない気がする。ただ同人雑誌に掲載された小説が新人文学賞に入選したほうが、世間の目に留まるのは明らかである。そのために応募する人はそんなに減っていないのであろう。

この先、文学はどのような道をたどってゆくかわからない。価値観の多様化がすすみ小説家になることはますます

険しくなるのではないか。しかし、同人雑誌に集う人たちは、書くことに情熱を抱いている人たちである。『季刊作家』は、書くことに生き甲斐を持つ人のために、また同人や会員、そして一般読者のためにも発行をつづけたいと思っている。

（祖父江 次郎）

書くことに生き甲斐を持つ人のために

季刊作家



合評会后、居酒屋「こたに」の前で

〒495-0013

愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原 84-2

TEL 0587-97-5472

季刊作家



澤つむり
 さわ つむり
 1949年新潟県生まれ
 父の転勤に伴い、各地に転居
 十代後半から埼玉県に居住
 早稲田大学文学部卒。三十代
 から小説教室に通い、同人誌
 「まくた」ほかに所属
 2001年、友人たちと同人誌
 「狐火」を創刊
 以後、「狐火」の同人として
 作品を発表、現在に至る

狐火



第19号

狐火

きつねび

埼玉県

同人雑誌紹介

故駒田信二の薫陶を受ける

元「まくた」のメンバー 六人で発足

「狐火」同人会はごく小さな集まりで、故駒田信二先生の元「まくた」のメンバー六人で十五年前に発足しました。二〇〇二年四月に創刊号を発行、二〇〇五年の一〇号まで年二回発行していましたが、その後は年一回となり、二〇一四年の一九号まで現在に至っております。現在、仲間は準会員を含めて八名。例会や勉強会などはなく、合評会のみ行なっております。編集後記の一部を紹介して、私どもの流れや、書く立場などを見ていただければ幸いです。

「野島千恵子さんが書いた『駒田信二の小説教室』（文藝春秋社1981年刊）と駒田信二先生自身が書いた『私の小説教室』（毎日新聞社1981年刊）を約三十年ぶりに読み返した。小説を書くにあたって、現在でも貴重なアドバイスがたくさん集められている本である。とくに野島さんの仕事は、小説作法として長く歴史に残る名著だと思う。



アジア文化社 1836円(税込)



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

アジア文化社 1836円(税込)

両書を読んでいて、三十年前には縁を引いていなかったところで、今回、大いに注目した項目があった。それは「地声で語れ」、「素顔で書け」という言葉だった。どうしたらそのようにできるかは、どちらの本にも具体的には書かれていない。しかし、こういうことはしない方がいいよ、という注意事項はたくさん書いてある。たとえば地声で語るといっても、野放図な表現になつてはいけないとか、文章で気取るなどか、である。また、ぜひともやった方がいいこととして駒田信二先生の思想の核である複眼的思考の勧めが説かれている。

「何事を見るときでも、自分の狭い先人観にとられずに、その背景の広い部分までもとらえる目、そのもの全体をありのままの姿で深く見つめる目、それが複眼である」(野島前掲書)。それらをまもって書いていけば、地声で語り、素顔で書けるようになるのだろうか。

その人独特の作品世界を感じさせる作家はどうかやってみよう。分独自の表現を身につけたのだろうか。小説を書いていくと、作者本人の生活上での呼吸のリズムが文章に反映されるようになる。テーマが他の作家と大きく変わらないものであっても、自分なりの切り口を持つことによつて作品世界は違ってくる。作者が独創性を出そうとすると、さらに自分なりの世界が現われてくる。創造性豊かな作品を常に書こうとすれば、独自の表現世界は必ず現われてくる、と

60

60号

信じたい。そのためには、とにかく長く書き続けることが必要である。
駒田信二先生は繰り返し語った「書き続けることが才能です」と。」 (一九号編集後記)

「近所の寺へ行く道に沿って、コスモスが咲いていた。満開は過ぎてているが、散歩の途中で寄ってみた。そこで寺の住職と出会った。そのとき「疎開した四十万冊の図書」の自主ドキュメンタリー映画に招待されて試写会に行ってきたと話してくれた。

一九四四年、四十万冊の本を疎開させて守った人たちがいた。当時の日比谷図書館長が中心になって、二十数人が動員され、蔵書を選び、さらに民間人の蒐集している貴重な本を買い上げて、戦火を免れる場所へ疎開させているが、人手も戦地に取りられ、当時の都立一中(現、日比谷高校)の生徒らによって、奥多摩(あきる野市)や埼玉県(志木市)の蔵などに預けられた。ちなみに、住職の蔵にも預けられたが、口外禁止とされてきた。

昭和二十年五月二十五日の東京大空襲によって、疎開出来なかった蔵書二〇万九〇四〇冊は図書館と運命をともにした。

映画になって、口外を許されたのか、住職の顔がとても誇らしげにみえた。

「狐火」も誕生して早一五年、何とか十九号となりました。より多くの方に読んでいただき、率直なご意見ご批評をお寄せいただけたらと願っております。よろしくお願いたします。(営)

狐火

「書き続けることが才能です」

精神の不安が強いことが、小説を書きたいという衝動の根源にあるとおもう。小説を書くという事は自らの不安を文字の形で対象化することだ。客観的に視えるようになることで、不安を自分で見つめることができるようになる。自分の不安の原因を確実にとらえられるかどうかはわからないが、その周辺までたどりつける可能性が高い。書いたものを評価してもらうことで他者の視線もはいつてくる。それらをバネにして、さらに不安の根源を探して、自らをえぐりだす作業にとりくむことができるようになる。これはカタルシス(抑圧された感情や体験を言葉や演技にして外部に表出して心の緊張を解消すること)につながる。心の緊張が解けることで、元気になる、さらに、心の奥深くまではいっていきこうという勇気が湧いてくる。小説を書くことの素晴らしさのひとつはそこにあると想う。」 (一八号編集後記)

「狐火」も誕生して早一五年、何とか十九号となりました。より多くの方に読んでいただき、率直なご意見ご批評をお寄せいただけたらと願っております。よろしくお願いたします。(営)

狐火同人会 〒341-0021
埼玉県三郷市さつき平 2-2-2-605 朝倉方
☎連絡先 048・951・8619



「狐火」同人

私は、雑多になっていく本箱や、段ボールに詰めたままの本を資源ゴミに出すつもりでいたが、いま一度見直してからにしようと思った。本離れなどという風潮に左右されず、本を大切にしなければならぬと、反省したところである。」 (一七号編集後記)

「三十年も前になるだろうか。ある小説教室に参加した。ほくはそこで小説を書いた。その中で、三人掛けのソファを何気なく見つめていると、ソファの縞模様が目につくという描写をした。これは実際に経験したことで、動くはずのない模様が上下左右に動くのに、びっくりしたことを材料にして書いた。ソファがおかしいとは考えられないので、自分の眼か脳がおかしいのだ。この種の体験は一度だけでなく、二、三度あった。印象が強かったので、小説の中に織りこんだのだ。その小説の合評が終わった直後だった。隣に来た女性がささやいた。女性は冊子の中のソファの模様がうごめくシーンを指差した。

「こういうことはね、このクラスにきている人たちはほとんどの人が経験しているのよ。小説を書く人ほどこ変なものよ」
動くはずのないものが動いて見えるような体験は、小説を書くような人は、皆体験しているのだという。本当にそうなのかは、ひとりひとり確認したわけではないからわか

季刊午前

福岡県

斬新な編集を心がける

戦後間もない一九四六年、福岡の地で商業文芸誌「午前」が眞鍋呉夫と北川晃二によって創刊された。その後第2次、第3次の同人誌「午前」を経て、一九九一年に北川が再出発させた同人誌が「季刊午前」だ。

同人は現在（二〇一五年五月末）二三人で、この中から編集委員の中川由記子、西田宣子、廣橋英子、安河内律子、吉貝甚蔵、脇川郁也の六人が企画立案や掲載の可否など合議制をとっている。他に特別同人に岸本みか、原口真智子、宮本一宏の三人がいる。

季刊を謳ってはいるが、掲載作品の質を保持するため発行の歩みは遅く、最新号は第51号（二〇一五年三月）だ。



左から編集委員の安河内律子と西田宣子。右端は井本元義

斬新な編集をつねに心がけており、同人誌でなければできない、工夫を凝らした企画特集を組んでいる。企画作品を創作する中で「ある縛り」を作ることは、作家にとって新鮮であり、時にこれまで感じたことのない新たな世界を見せてくれるものだ。複数の同人が参加することから、「競作」という意識が芽生えることは当然で、刺激的・魅力的な取り組みである。まさしく同人誌ならではの取り組みといえるだろう。

最近の企画特集の内容を簡単に紹介したい。

●企画作品「言葉へ・跳写真」（第44号／11年）

第44号では「言葉へ・跳写真」と題して、同誌の表紙写真を提供している福岡の写真家・古城由香里の写真から一、二枚を選び、その写真から発想連想して小説や詩を作り出した。

条件は原稿用紙三〇枚以内という枚数制限のみだった。九人の作家が参加し、およそ八〇ページを埋めている。

●創刊50号特別記念企画（第50号／15年）

節目の第50号では、「短歌から創

同人誌でなければできない企画特集

季刊午前

「と銘打ち、一首の三十一文字から「創造の冒険に」と謳った。八人の同人が取り上げた歌人は源実朝、樋口一葉、佐藤佐太郎、塚本邦雄、寺山修司、角居典子、江口志計子、大森静佳と幅広く、それぞれの一首からイメージを膨らませて短編小説を創る試みである。一作品五〇枚以内という条件で、一〇〇ページを費やしての特集となった。また同人全員が参加してジャンルを問わず原稿用紙五枚を発表する記念企画「2000字特集」を組んだ。これは発行の節目となる十号ごとに企画している。

「季刊午前」同人会では、創刊以来、毎月第三日曜日に欠かさず例会を開催し、発行号の同人合評会のほか、芥川賞受賞作品などをテキストとする勉強会などを実施している。同人加入希望者の見学も受け付けている。

（季刊午前同人会事務局・脇川郁也）

季刊午前

〒812・0015

福岡市博多区山王二丁目一〇・一四 脇川方

☎092・452・0510



「季刊午前」同人

金作家

東京都

多彩な表彰事業

「地の来歴」を掲載——季刊「金作家」

金作家協会は、昭和五十一年（一九七六）年に創立されました。当初は全国同人雑誌作家協会という名称で、会長に丹羽文雄、理事長に森田雄蔵、事務局長に森下節、常務理事に宮林太郎、森啓夫、大類秀志といった方々がおもな役員でした。

それが平成十二年、全作家協会と改称され、現在に至っております。その間、ずっと発行し続けているのが「金作家」です。もう98号（最初は年一回または二回、平成十三年より年四回発行）になりました。現在は、豊田一郎会長、陽羅義光理事長、野辺慎一事務局長、吉岡昌昭編集長を中心に、「金作家」の発行はいろいろな事業を行っています。

主な事業をあげてみますと、全作家文学賞、全作家文芸時評賞、短編小説優秀賞、年度出版優秀賞、掌編小説優秀賞、全作家協会功労賞などの表彰事業を行っています。また、「全作家短編集」の発行（年一回）もあります。「金作家」や「短編集」を発行しますと、必ず合評会を開催し

ています。さらに、年一回の総会、忘年会（年度出版優秀賞の祝賀会）なども多くの参加者でにぎわっています。最近ではホームページ関連事業にも力を入れています。正会員一三〇名、読者会員二〇名の団体ですが、入会者を募っています。

「金作家」はすでに申し上げましたように年間四回発行しています。内容は、詩、エッセイ、小説とんでも載せません。毎号、横尾和博（文芸評論家）氏に文芸時評を書いていただいています。好評です。この中から、先の文芸時評賞が決まります。

また、毎年一回掌編小説特集があります。今年には百号を記念して全会員の参加を呼びかけています。

「短編集」は今年で14巻になりました。これには30枚前後の短編が約30編寄せられています。基本的には応募されたかたは誰でも掲載されています。

「全作家文学賞」は、協会創立当初から行っています。賞金額などの変更を重ね、平成十六年より賞金三十万円という現在の形になりました。この賞は、会員以外からも広く募っています。

年間事業の概略は以上のとおりですが、当会は、日本文学の発展を底辺よりささえるためなら、これからも新しい企画をどんどん取り入れていく所存です。皆様の今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

さて、今回、嶋津治夫氏の小説「地の来歴」は「金作家」97号に掲載された作品です。もちろん合評会を催しましたが、正確な農村の描写と農業技術の普及事業に取り組んでいる主人公の真摯な生き方には賛同の声も多く上っていました。横尾和博氏も絶賛されていました。

全作家協会といたしましても、嶋津治夫氏のまほろば賞優秀賞受賞に際しまして、お選びいただいた文芸思潮の選者の皆様深く御礼を申し上げます。同時に、嶋津治夫氏に対して、ともに祝いたい気持で一杯です。

（事務局長 野辺慎一記）

前身は全国同人雑誌作家協会

金作家



〒123・0864
東京都足立区鹿浜3・4・22のべる出版企画内
全作家協会 TEL 03-3896-6506

金作家協会

ZENSAKKA



空とぶ鯨

神奈川県

真夏の合評合宿

「空とぶ鯨」同人にとって、毎年一回晴海で開催される夏合宿（関東ミニ文校）は、関東、中部、近畿、四国方面からの文学仲間が集い、さながら学友の同窓会の様相を呈している。また会員の約八割が、大阪文学学校のチューター、生徒、OBであることから、文校関係の非同人有志も参加し、毎回熱い論戦が交わされる。

通常、掲載費を書き手が負担する同人誌の場合、いかなる批評、苦言を受けても、作者の思惑、意向が何より優先される。一言でいえば、作品は作者の書きたいように、ある程度自己本位に書いて良いことになる。

しかし「鯨」の同人はその点みな、謙虚で律儀に批評を受け止める傾向にある。（逆に、もう少し頑固に尖った作品があってもよいかも知れないが）

関東ミニ文校の合評をもとに、各自はそれを反映させた第二稿を仕上げる。原稿は編集委員のチェックが入り、作者は再度見直し、修正をする。そこまで推敲されたものが印刷用のゲラになる。そして最終段階の著者校正を経て、

初めて作品となるのだ。
編集委員の裁量も問われるところだが、こうした地道な努力と研鑽によって、「空とぶ鯨」は刊行される。テーマ、舞台設定、作風はさまざま。その自由な気風を持って「継続は力なり」の志で、これからも文学の海原を駆け、大空を飛べるように、地道に号を重ねて行きたい。

「空とぶ鯨」編集部／辻村仁志

「三頭の悲しい虎が、小麦畑で麦を食べる」

なに？ なに？ と、この長ったらしいタイトルを見た
ら、誰もが耳をそばだてる、いや、「目」をそばだてるの
ではないだろうか。そのうえ、意味がすぐには呑み込めな
い。頭にスツと入らない。三頭の悲しい虎？ 虎は吠える
ものではなかったっけ？

ところがこの不思議な魅力のある小説が、名譽ある「ま
ほろば賞」の推薦作に選出されたのである。作者は辻村仁
志氏。昨年も別の小説で推薦作に選ばれている。昨年に引
き続き今年も選ばれたということは、同人としてもこの上
もない喜びです。選考委員の方々には、心より感謝してお
ります。ありがとうございます。

辻村さんは、「空とぶ鯨」の同人であり、事務局長です。
ハードな勤務の間に、小説を書き、「空とぶ鯨」の事務局

長までやってくたさる。

急に丁寧になってしまったが、ダメ編集長としては、原
稿チェックをしてくれる五名の編集委員に対すると同様に、
大いに頼りにしている人なのです。

「できる人」というのは、えてして周りの人間もできるは
ず、と錯覚している。世の中にはそういう人が結構多い。
だから周りの人にも何の躊躇もなくむずかしいことを要求
する。それが不首尾に終わると、なんでできないんだよ、
とでもいうかのように顔を引きつらせる。

ところが「できる人」であるにもかかわらず、辻村さん
は温厚です。そもそも難しいことを人に依頼することもな
い。それでいて同人を率いていく牽引力があります。

毎年八月に開かれる真夏の合評合宿では、毎回二〇名前
後が集結します。参加者が前もって提出した作品をチュ
ーター、参加者で合評します。そこでの意見をベースに各作
者が自作に手を入れ、書き直したものが「空とぶ鯨」に掲
載されるのですが、合評時に緊張が走るがあります。
厳しい意見も飛び交う中、辻村さんはその牽引力で、多様
な意見の着地点をさぐってくれます。

「空とぶ鯨」になくってはならない人です。

「空とぶ鯨」第15号には最後の方に「14号へのお便り紹介」
があります。同人の森ゆみこさん「蕪ごもり」、市毛孝二
さん「夏」、石川山人さん「千宗旦夜話 宗旦無残（前）」



晴海での夏合宿

弦

愛知県

五十年の節目

「弦」創刊号を世に出したのは一九六五年だから、今年二〇一五年は記念すべき五十年の節目に当たる。

同人雑誌のほとんどは三号雑誌までで終わるとの世評を覆す気概で始めたものが、続けてこられたのは意地と好運が重なったからだろう。踏まれても遅しく生き残るだけが取柄の雑草のような若さがあった。

当時の名古屋周辺には、「作家」とか「東海文学」「北斗」という名だたる同人雑誌が存在していたが、若い「弦」であるうとも、同様に同人雑誌の一つだと、すこしも臆するところはなかった。自分らを書きたいものを力任せに書くことで満足していた。しかし、ご多分に洩れず離反があったり他の同人雑誌「未開地」や「無名」との合流があったりした。その苦難の時期を乗り越える毎に、新しい活力を吸収し、共に歩むことになった。そして文学をするという純な気持ちで、しだいに研ぎ澄まされてきたと思う。

弦の会でたいせつにしてきたことは、自分の作品を発表する場だけで良しとするのではなく、他の同人の作品に対

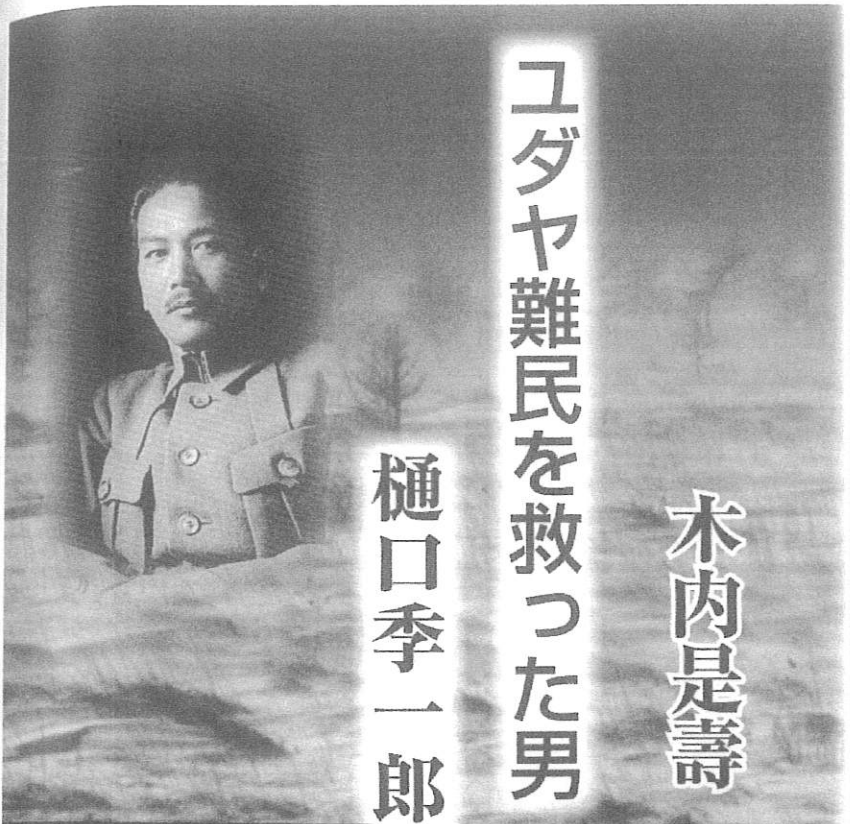


合評会は同人外の人加わる

木内是壽

ユダヤ難民を救った男

樋口季一郎・伝



ア経由で満州に逃れてきた2万人のユダヤ難民を、命を賭けて救った日本人将軍がいた。ハルピン特務機関長樋口季一郎少将。厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

税込1512円 送料サービス
御注文はアジア文化社まで

しても、よい読者となり、個々の作者の推移を親身になって読み込み適切な批評を加えることだった。この連続性が同人の結束を強め、信頼感を増すことにも繋がった。

もう一つたいせつなことは月一回の例会を欠かすことなく続けてきたことだろう。雑誌の発行は年二回で合評会は四回、残りの八カ月を読書会に充ててきた。読書会のテーマは古今の名作を取り上げてきたのは無論だが、その時代を反映し、話題性のある作品も適宜に読んできた。最近では現代の海外文学の翻訳ものに目が向いている。

例えば、アジアの作家、ラッタウット・ラープチャルーンサップは、タイ人の母とアメリカ兵との混血青年の眼で、タイの内情を鋭く描き出していたし、インド・イギリス・アメリカの

60



「弦」合評会のあとで

弦の会 事務局
 〒四六三・〇〇一三
 名古屋守山区小幡中三丁目・四・二七
 中村方 ☎052・794・3430

(弦の会代表／中村賢三)

三国に関わるジュンバ・ラヒリの作品は、インド・パキスタン戦争での民の声が伝わり、悲惨な中にも人間性豊かなものが感じられる小説であった。

このような読書や批評精神を持つことによって、同人雑誌が陥りがちな、身近な肉親のことや自身の身辺雑記を綴る題材を越えて、創造力を掻き立てられる内容や、社会的にも不条理なことを凝視する視点も生まれてきた。我々が書かねばと思う素材やテーマを見つける努力をすることもたいせつなことだ。

そんな中で、小説の技法に話が及ぶのは言うまでもないことだ。文章表現が稚拙では折角の作品の力も半減する。文体の確立は個々の文章力の修練にほかならない。虚構の世界を真実だと思わせるほどに緻密な描写力があったこそ、読むに耐えうるものになる。要は人の心を打つものを書くことが結論であろう。

随分に偉そうに、批評家めいたことを述べていても、所詮は同人雑誌に筆を置く一人ひとりの書き手にすぎないことも確かなことだ。

一九八六年、名古屋に同人雑誌の集合体である中部ペンクラブが結成された。個々の同人雑誌が交流し合い、活動することで繋がりを保持させようという試みであった。弦からも数人の同人が、創立会員に名を連ねた。

この中部ペンクラブも二〇一五年には、創立三十周年を迎えることとなった。中部ペンクラブは個人の資格で参加する会だが、その個人が所属している同人雑誌の数は、五十誌を越え、地域も愛知・三重・岐阜県と広範囲に及んでいる。

中部ペンクラブが主催する活動は、文学賞の公募と選考。会誌「中部ペン」および機関紙の発行。公開で開催する文学講演会・シンポジウム・文芸セミナー・文学散歩・交流合評会など多岐にわたっている。この活動を通してどのよ



木戸順子氏の中部ペンクラブ賞受賞時に、市川しのぶ氏（左）といっしょに

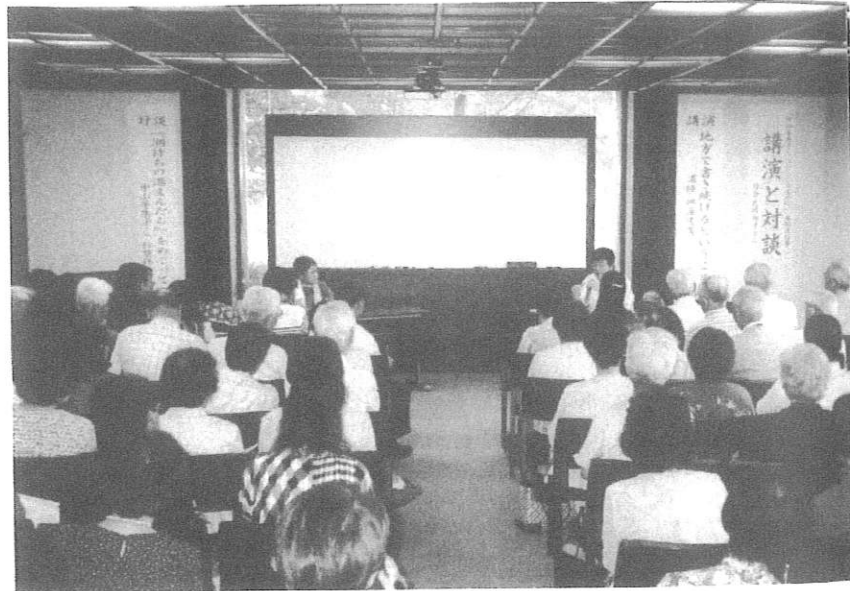
ふくやま文学の近況

ふくやま文学

広島県

戦後、福山には「文芸プラザ」という同人誌が誕生し、月刊で百号以上続いたが、主催者の病没で惜しくも休刊になった。その後、あとに続く同人誌が現れず、「文芸プラザ」を作品発表の場としていた同人たちの声に応えて、新たな舞台として立ち上げたのが「ふくやま文学」であった。小説、児童文学、詩の三部門を柱に平成元年に創刊、年一回のペースで刊行し、今年二十六号を上梓した。この間、会員の高齢化は避けがたく、作品のマンネリ化を案じていたが、二十三号あたりから若い同人が増え、ジャズパーやビストロのオーナー、獣医やオペラ歌手志望の若い女性などの参加で俄然活気が出てきた。

新しい同人の参加理由に、「福山文学館」でのイベントが大きかったと思う。どこの文学館でもそうであるように、この町の文学館も福山を出身地として大成した文学者を顕彰している。だが、彼らの殆どは物故作家である。なぜ、今を生きて精進している同人誌に光を当てないのか。「他者の痛みを共にし、人としての幸せと自由を求めて書く」のであれば名を成した文豪も、修行の途にある自分たちも



福山文学館「ふくやま文学」展での講演と対談



中山茅集子

なかやま ちずこ

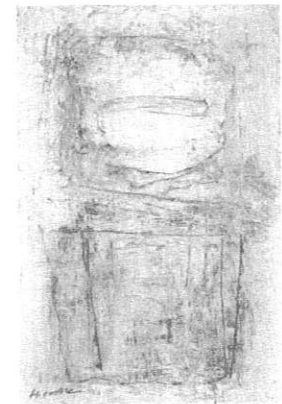
- 1926 北海道札幌市生まれ
- 41 広島県立府中高女卒
- 76 「蛇の卵」にて中央公論第19回 女流新人賞受賞
- 77より97年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
- 88 同人誌「ふくやま文学」創刊
- 97より同人誌「クレーン」に小説を投稿
- 2008「魚の時間」でまほろば賞優秀賞受賞
- 10「もう一つのドア」でまほろば賞優秀賞受賞
- 14「うずみ」でまほろば賞優秀賞受賞

（「ふくやま文学」24号より転載）

「あら、松茸がない」
 女のつぶやきに「松茸？」レジの前の嫁さんが驚いたよ
 うな声を上げた。
 「だって、うずみには松茸がいらんと」
 「へええ、そうなんですかあ」
 無邪気に感心している。
 「でも仕方がないよね、いまどき松茸なんて」
 「そうですよ」
 嫁さんが力をこめて言う。
 「やっぱり豆大福にするわ」
 女はレジへ向かいながら、今では遥か遠い景色のなかに佇む小夜にそっと手を振った。

ふくやま文学

第24号



中山茅集子さんと仲間の軌跡

中山茅集子さんと仲間の軌跡
中山茅集子さん(83歳)、
福山唯一の文学同人誌
「ふくやま文学」の活動
を紹介する企画展が11
日、ふくやま文学館(福
山市丸之内)で始まる。
中山茅集子さんは福井上光晴
さんの文学伝習所で15年
にわたり指導を受け、自
身の創作活動のほか後進
の指導、読書会開催など
意欲的に活動されている。2006年から中国
新聞で小説「潮待ちの港
まんだら」を連載。今年
6月、続編を刊行した。
代表を務める「ふくや
ま文学」は1989年3
月創刊、年1冊刊行し、
今年3月に21号を迎え

郷土と歩む同人文学

福山で草稿や写真を展示
あすから



企画展の準備のふくやま文学館
に集まった中山茅集子さんら。右
に「ふくやま文学」の同人誌。

評が交わされた。以前この場で紹介した毎月の勉強会も続
けている。その中で若い書き手が育っているのも頼もしい。
創立会員である私などは、今どきの若い書き手の文章に戸
惑うことが多いが、話し言葉同様に文章も時代と共に変わ
っていくのだろうかと思しむ。勉強会のいいところは、こ
のように年齢差による時代の変化を敏感に捉えることかも
しれない。一瞬変化に立ち止まっても、突き破る情熱を失
いたくないと願う。(ふくやま文学同人/大河内喜美子)

た。小説、詩、児童文学、
エッセイから成り、毎月
の学習会(作品を持ち寄
る。
会員は約40人。福山市
から事務局を務める藤王
町の大河内喜美子さん
(右)は、働きたい、伝えた
いという気持ちで活動の
支えだった。言葉や思い
の数は、自分自身の歩
みと重なる。振り返る。
「中山茅集子」と「ふく
やま文学」展には、福山
「ふくやま文学」のバックチ
ンバー、同人作家の仲間
「まんだら」の舞台とな
った新聞の写真パネルな
どを展示する。
中山茅集子さんは「文学とは
人間が生きたために自由
と幸せを求めること。決
して文藝だけのものでは
ない。書く目的は、他
地方で暮らす仲間の
存在を知りたい」と
語っている。8月16日未
だ。(伊藤敬子)

ふくやま文学 〒721・0974

福山市東深津町 6・3・58 中山方
☎連絡先 084・922・5864 (中山茅集子)



ふくやま文学合評会

変わるところはないはず。

だが当初、文学館の対応は「同人誌のイベントに誰が足
を運んでくるのか」と冷たいものだった。それでも諦めき
れずに三年もの粘り勝ちで、平成二十一年、遂に同人の夢
が叶えられた。同人の手によるポスター作りから始まり、
真夏ひと月半の長丁場を埋めるのに、「見る、読む、聴く」
を柱としたパフォーマンスを企画した。人を呼ぶための策
として、ともかく楽しいものにしたのが念願だった。

詩、小説、エッセイが言葉の芸術であれば音楽や絵画も
また仲間内だろう。そこで、言葉と絵画のコラボレーショ
ン、朗読と音楽のコラボレーションを取り組めばお客が集
まり、無名作家の作品にふれてもらえるだけでなく、作家
自身も自作品の絵画的性、音楽性について見直す機会が得ら
れるかも知れない。

「言葉と絵画展」では町のギャラリーの協力をもらった。
同人誌作家と画家の作品の取り合わせは、もともとその文
章のための絵でもなければ、絵のための文章でもないのに
不思議と融合し面白い。さらに効果をあげたのは、文学館
の学芸員の製作に成る見事な展示パネルが魅力的なコーナ
ーを出現させたことだ。

「朗読とコンサート」では、文学館に所属する朗読の会
「虹」の協力と、音楽関係では「ネムカカとさい」といず
みさん」という若手ミュージシャン、山本シンさんという
ベテランのブルースシンガーに加えて、世界的に活躍しな

がらも横浜から手弁当で駆けつけたシャンソン歌手松永祐
子さんの友情出演があった。

朗読は同人の自作朗読と「虹の会」のメンバーで行った
が、自作朗読に自信のない私たちを励ましてくださった
「虹」の代表の言葉は忘れられない。

「作者は練習しなくても、作品に書かれた思いを表現する
ことができますが、私たちは練習を重ねないと作品の心に
近づくことができません」

いよいよふたを開けたときは、自作の朗読もそれなりに
作者の持ち味を出して好評だった。すべての朗読に「ネム
カカとさい」といわずみさん」がピアノで、山本シンさんが
ギターの爪弾きでメロディーを流し、いずれもアドリブだ
ったらしいが素晴らしいアイコンタクトだった。足のご不
自由な松永祐子さんは舞台ではなく、作品展示室を希望さ
れ「アカペラで唄うのは初めてよ」と笑いながら熱唱され
たのも異色の友情出演だったろう。

会期中、文学館の危惧を見事に撥ねかえして千人を超え
る来館者があった。中でも九州佐賀の同人誌「佐賀文学」
から大勢の仲間が駆けつけてくださったのも有難く嬉しか
った。今も心に刻まれているのは、来館者の殆どから「文
学館に初めて来ました」の言葉を頂いたことである。
あの日からさらに五年が経つ。今年四月、二十六号の合評
会を行った。例年のように高崎の「クレイン」や「ふく文」
の読者など二十人余りの参加者があり、活発な感想や批

白鴉

兵庫県

大阪文学学校から生まれる

「白鴉」は大阪文学学校で生まれた。大阪文学学校は一九五四年、小野十三郎、松岡昭宏らが発起人となって設立され、現在に至るまで、一九六四年に第五〇回芥川賞を受賞する田辺聖子、二〇〇〇年に第一二二回芥川賞を受賞する玄月、二〇一四年に第一五〇回直木賞を受賞する朝井まかてなど、数々の詩人や小説家が誕生している。

昼間と夜間、詩と小説のクラスに分かれ、さらに本科、専科、研究科と分けられて、週に一度、大阪市営地下鉄谷町線谷町六丁目駅から徒歩数分、空堀商店街にほど近いビルの三階の一室にて、生徒が提出した作品をだいたい二作ずつ合評する。各クラスをまとめるチューターが合評を取り仕切り、各々の意見が出たあと総評を加えたり、作者に読むべき本を薦めたりする。この「組会」が終われば、昼は近所の喫茶店、夜は居酒屋や鉄板焼屋でビールをかたむけつつ文学談義に興じたり、日頃の愚痴を吐露するなどしている。通信教育部も存在し、広く門戸の開かれた学校だ。

この中から各自で各文学賞へ応募するほか、既に誌に入ったり、新しく同人や読書会を立ちあげたり、それぞれ文学活動をつづける基盤を築いていく。一九九七年、この文学学校の夜間専科秋吉クラブチューターの秋吉好を中心とした少数精鋭により「学人会」が結成された。秋吉氏は現在、「白鴉」についておらず、「異土」という同人誌を別に設立し、的に活動されている。

「白鴉文学の会」設立時のメンバーに玄月がおり、の落とし児」で神戸ナビル文学賞、「舞台役者」で小谷剛文学賞を受賞するなど、二〇〇〇年に芥川賞することになる「蔭の棲みか」を発表するまで、目覚ましい活躍を見せていたという。

また、このほか、二〇〇五年「KASAGAMI」一回三田文学新人賞を受賞する高木智規、二〇〇七年もれる」で日本ラプストリー大賞を受賞する奈々といった面々が在籍し、ほかにも各方面での活躍をみき手たちが「白鴉」誌上で作品を掲載してきた。

私、藤本が当時メンバーにいた、現在休会中だったところには玄月氏はすでに芥川賞を知りたい聞いていた人数分の作品のコピーを準備し、見学へ行ったことを憶えている。そこに玄月氏

詩人・小説家を輩出

書き手が寄る集まる場所

白鴉

ず、その代わり、文藝界新人賞最終候補に残ったという人物が出席されていて、いま、自分は非常にレベルの高い書き手たちの中に入ろうとしているのだと、ひそかに興奮していたものだった。例会後の呑み会にも参加させていたが、来月には準備してきた自作の合評が行なわれることになっていくが、日にちを間違えてすっぽかしてしまっただけ、合評してもらおう例会に訪れなかったのだ。

ちなみに無事その作品は「白鴉」に掲載され、「文藝界」の同人誌評にて、名前だけが載ることとなった。

こんなとんでもないデビューを飾ることになってしまった私を寛大に受け入れてくれた当時のメンバーはすでに、それぞれの事情により離れるなどしてもう例会には参加されなくなってしまう。

このあいだ、例会場所は天王寺から鶴橋に移り、印刷所が変わって表紙も二度変わった。また、一時期は毎月の例会に四人しか参加できる人がいなくなったりと、存続の危機を味わったこともあったが、とくに、今回、同人誌優秀作に選ばれた一人である美月麻希の尽力によって新たな書き手が多く入ることになり、「白鴉」は新たな展開へと進むことになる。その先駆けとして、この「文芸思潮」で一度に二人の同人が同人誌優秀作に選ばれることになり、たいへん光栄であるとともに励みになる。

現在のところ、「白鴉」は代表というものを立てず、組織立ったものというよりも、書き手が寄り集るとして機能することを目指している。来るものは拒むもの、追わずが基本だ。ただし、来たら来た品には、たとえ初対面だろうと遠慮なく駄目なもの指摘していくし、しかしそれも書き手を養成するという心優しい理念によるものではないので、まったく心者には厳しすぎる場所となっているかもしれない。それは昨今もはややされる、読みやすく、取っつきやす学のための場所ではないだろう。しかし、私個人として考えている。流行りのゆるキャラばかりつきやすい文学など、私には必要ない。ここはあく私個人の意見なので、これから先、「白鴉」誌に作品が載ることもあるかもしれないが、それでも立派な作品から引き継がれてきている、「納得できる、掲載しない」という方針だけはこれからもずっと守っていくことだろう。（藤本達夫／「白鴉」編集委員

白鴉文学の会

〒661-0985 尼崎市南清水13-3

藤本達夫

E-mail hakua1998@inter

石榴

ざくろ

広島県

個人誌として出発

「石榴」は、一九九九年、新たな純文学の可能性を模索しようという志のもとに木戸博子の個人誌として出発した。

二号から石井あみ、故・松元寛が寄稿し、以後随時、寄稿や参加者を得てほぼ一年に一度のペースで十五号まで発刊してきたが、同人制は敷いていない。したがって会費もなく、費用は各号ごとに精算分担の形を採り、現在は三人の書き手が参加している。ともすれば被爆都市として語られがちな広島の前戦後の知られざる通時的発掘を意図した「アングル広島」という特集を組んで、松元寛、小久保均、岩崎清一郎、山田夏樹氏など、広島在住の書き手に執筆してもらった企画を組んだこともある。

文学のセレクトショップ

「石榴」は五十ページ前後のマイナーな雑誌であるが、脱フェミニズムの評論や異色の長編小説を書く実力派の高雄祥平、篠田堅治、芝不器男賞を受賞した俳句界の新鋭で「藍生」同人の杉山久子、「文学街」「藍生」にも所属し北日本文学賞選奨など幾つかの賞を受賞した木戸博子というメンバーによる雑誌は、多人数の陣容と長い号数を誇る老舗大店の同人誌にはない、いわば文学のセレクトショップ

ユラス、マツカライズ、タレル、スタインベック、パウエーゼ、パフチン、ウルフ、フォースターなどを読んできた。

同人誌というとマンガですか？ と問い返される時代であるが、皮肉なことに今や絶滅危惧種である純文学を目指す「石榴」はマンガ同人誌業界では有名な広島の新鋭印刷で刷っている。刷り上がった雑誌や請求書と一緒に送られてくるのは、「こびとくん」というキャラクターマンガ入りの印刷所への感想葉書である。それを眺めていると、イロニカルな事態への感慨が湧いてきて、思わずドン・キホーテみたいだなと呟いてしまう。そこでは精巧なカラー印刷のマンガ同人誌が、マニュアル通りのデータ入力をすれば廉価で仕上がり、全国各都市で開催される盛況のコミケⅡ同人誌即売会の会場まで宅配してもらええるシステムになっているのだ。

そんな最新鋭システムのなかで、木戸博子は版下までの手作業とデータ折衷の指定マニュアル方式で入稿し続けているのだが、視力の落ちてきた最近では細かな神経を強いられる作業が少々負担になってきた。

大震災と福島原発事故以後は牧歌的な時代が終り、書く姿勢が問われる状況にかかっている。電子機器の発達によって日本語を取りまく環境も人も激変しており、文学もまたよりラディカルな研鑽が問われるだろう。同人誌は

ップとでもいった、小回りのきく小粒ながらもキラリと光る持ち味特徴であろうか。各人の作品は「三川文学」「季刊文科」「文学街」「図書新聞」「文芸思潮」の同人誌批評欄や、「文芸同志会」「関東掲示板」「群系」「狂区」などのサイトでも採りあげられ、一定の評価を受けている。

また本誌は表紙も同人誌の表現と考へ、第一号は木戸博子のエッチング、第二号から八号までは版画家・友安路子のエッチング、第九号からは前田聡美の写真を載せている。発刊後に行う合評会では容赦ない批評を受けて落ちこむこともあるが、それもまた文学への高い志ゆえのことであり、胸を抉られるような指摘も後になって考えられると的を射ていることが多い。合評会では全国各地の同人誌作家などから寄せられた批評や感想も回し読みすることで大きな励ましを受け、新たなものを書く気持ちを高めている。

また、折々の原稿読み合せをするほかには、一〜二ヶ月に一度は「石榴」にかかわる友人たちを加えての読書会をやっている。こちらは各メンバーの一回ごとの裁量制で、よりゆるやかな集まりになっている。

読書会では、樋口一葉、永井荷風、牧野信一、葛西善蔵、森岡外、山田花袋、吉田健一、白洲正子、開高健、堀田善衛、宮本常一、徳田秋声、堀辰雄、原民喜、保田興重郎、中西進、永井龍男を、またアトランダムな読み合わせでは、カフカ、ジョイス、ブルースト、ムジール、プロツホ、デ

仲間内のなれあいに堕し、閉塞的になりがちだが、こうした状況下にあっても、社会性と普遍性のある開かれた作品を目指していきたいものだ。（「石榴」編集人／木戸博子）



石榴 〒739-1742
広島市安佐北区亀崎 2-16-7 秋山方
TEL 082-843-5037

石榴 ざくろ

小粒ながらもキラリと光る持ち味

文芸中部



北川朱実

きたがわ あけみ

1952 秋田県生まれ
20代後半より詩を書き始め
現在に至る
詩集5冊上梓
8年前より小説を書き始める
2011 第5回まほろば賞五十嵐勉賞
受賞
現在「文芸中部」同人

「文芸中部」の現状

文芸中部

愛知県

今回、また「文芸中部」90号掲載の北川朱実さんの「誰もいない部屋の皮膚」がまほろば賞候補として「文芸思潮」に載せていただけるとのことありがとうございます。北川さんは過去にも同賞の優秀賞・五十嵐勉賞を頂戴しています。彼女は今年五月、「詩歌文学館賞」の詩部門で大きな賞を受けたばかり。ですから読んでいただければわかりますが、独特の感性の持主です。ちなみに文学館賞受賞の詩集のタイトルは「ラムネの瓶、錆びた炭酸ガスのぼくはつ」（思潮社）です。

まほろば賞といえばその第一回の受賞が名村和実さん、優秀賞を朝岡明美さんも受けています。朝岡さんは今回、「文芸中部」94号掲載の「カプチーノをもう一杯」で中部ペンクラブ文学賞を受けたところです。以上挙げた人はいずれも比較的最近の同人。といっても名村さんは十年を越すキャリアかな。北川、朝岡さんは五、六年といったところです。

古い同人、「文芸中部」の前身の一九五九年創刊の「東

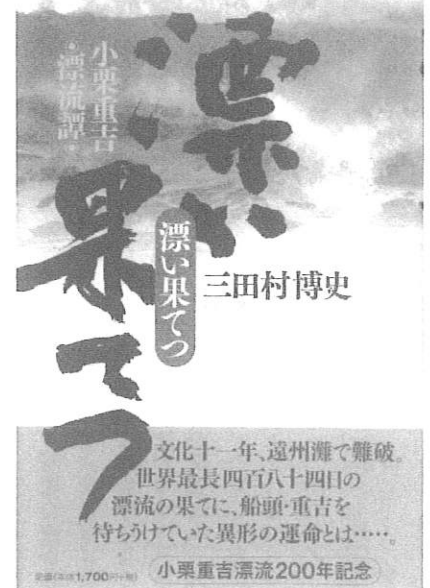


昨年夏、答志島での合評会風景

海文学」以来といえ、堀井清さん、近藤許子さん、堀井さんはこのところ毎号「老人小説」を書きつけています。賞がすべてではありませんが、編集委員の名村和実、福富奈津子、堀井清、堀江光雄、三田村博史はいずれも中部ペンクラブ文学賞受賞者。ほかに北川さんも、主に外国を舞台にドストエフスキーを目標したいという西澤しのぶさんも受けています。「時代小説」にこだわって進境いちじるしい本興寺更さんが楽しみ、これまた独自の世界を構築中の藤沢美子さんにもご注目ください。忘れてはいけないのは蒲生一三さん、この人も「東海文学」以来の同人で多分同人では最高齢でしょうが、若々しい作品や歴史小説で周囲を驚かせています。濱中禎行さんの真面目な態度、時々ですが優れた短編



6月15日中部ペンクラブ総会パーティーで右からロシア文学者・名古屋外国語大学長・亀山都夫、朝岡明美、三田村博史、西澤しのぶ



三田村博史

文化十一年、遠州灘で難破
世界最長四百八十四日の
漂流の果てに、船頭・重吉を
待ちうけていた異形の運命とは……

小栗重吉漂流200年記念

同人雑誌紹介

を寄せる丹羽京子さん、手書きで原稿を寄せる安田隆吉さんの真摯さ、ああ、最高齢は詩を寄せる曾谷道子さんだったかな。戯曲を書く佐藤和恵さんも加わりました。

前回は書きましたが、編集委員が輪番制で各号を責任編集しているのが「文芸中部」の独特なところですね。といって雑誌としての統一性が失われるということはないでしょう。これは各編集委員が力を持っている証左でしょう。しかしながら、これまで通りというわけにもゆくまい。新しい編集委員にも加わってもらおうと思っています。

他の雑誌も同様の企画をしているかは知りませんが「文芸中部」では近年、夏の合宿が同人の楽しみとして定着してきました。合評会だけではなく、読書会も行なう。フォークナーの「八月の光」、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」、今年はサリンジャー「ライ麦畑でつかまえて」などを扱います。この夏は五十嵐勉さんも参加してくださるとのこと、郡上八幡に泊った翌日は山川弘至記念館、谷崎潤一郎「細雪」の蜚蜂りの舞台・川瀬柯亭をも訪ねます。もちろん郡上踊りにも参加しますから、堅いばかりじゃありませんよ。

でも外から見ると堅いかな。論客はいますが、実際は評論がないのが編集委員のひとりとしてちょっと不満です。詩があり、良質のエッセイあり、そして硬質な評論、さらに多彩な小説群の雑誌を目指したいです。そして何かとい

えば同人雑誌は中にこもりがちですが、日は広く世を見ながら書きつづけたというのが希望です。

そう忘れちゃいけない、秋田から時々短編を送る武藤武夫さん、杉浦明平さんの直弟子で「町会生」に実名で出てくる川口務さんがいます。岐阜の雄さんも長い経歴です。

堀井さんは「まず百号」といいますが、考えてみ海文学」が八〇号で終刊後、一九八二年の創刊以来年間、年三回、きちんと定期的に発行してきたのは自賛してもいいかも知れません。それも各同人が頑張ってきた。原稿が集まらず発行が遅延したことってのは不思議です。

よい意味で小説の実験はつづけたいが、でもことなく、いや、少々冒険的でも書き手自身にとつある、読者にきちんとメッセージの伝わる作品をから発信していきたいと思っています。それが同人のためでしょう。

昨年「文芸中部」は「富士正晴全国同人雑誌賞」をいただきました。ありがとうございます。中ラブに加わって楽しんでいきます。

私事ですが、昨年出した「漂い果てつ」（風潮芥川賞作家・吉田知子氏によって東京新聞・中川「2013年私の三冊」に選ばれました。江戸末

輪番制で編集

楽しみな夏合宿

文芸中部



昨年11月、作家・吉田知子氏を訪ねた同人たち
右から吉田知子、三田村博史、朝岡明美、名村和実、本興寺更

洋を四八四日漂流の末、アメリカ大陸を日本人として踏んだ小栗重吉を書いた作品を「これまで読んだる漂流記、この作品は純文学に昇華されている」していただきました。実作者から認めてもらえるうれしいですね。評論家・清水良典氏は直木賞に推さって、落ちはしましたが、これもうれしいです。一月から中日新聞夕刊毎週金曜日に「東海の文学」も連載しています。少なくとも年内いっぱい「文芸中部」の同人費は月一〇〇〇円、会員は五〇〇円、掲載費一ページ五〇〇円。遠くの方でも本気の方ただし合評会に出席する人。お問い合わせください。連絡先 〒477・0032

愛知県東海市加木屋町泡池11・3

三田村

Eメール santam@namediasr

(見本誌は1000円封入して申し込みください。)

「漂い果てつ」は送料とも1700円
(文芸中部／三田村)

文芸中部

〒477・0032

愛知県東海市加木屋町泡池11・3

三田村方 ☎0562・34・4

大阪文学学校の通教生有志の誌

文芸同人誌「空とぶ鯨」は大阪文学学校の通信教育生有志で、二〇〇一年一月に創刊されました。年一回の発行です。横浜市に発行所を置き、大阪文学学校のチューターに作品批評を受けています。文芸同人誌として、小説、紀行、エッセイ、俳句、短歌、詩など幅広いジャンルの作品を取り上げております。

会員は、関東全域から西は中国、四国地方と多地域に及び、各地方の特色（自然や風俗）を反映した作風が多いのも特徴です。

発行までの流れ

同人は、毎年八月の初めに、それぞれの作品を持ち寄っての合宿を行い、文校のチューターを招いて合評を行います。参加者はそこで得た批評をもとに、各自修正して、九月に完成原稿を事務局に送ります。その後編集委員による校正作業を経て印刷。一月に発行の運びとなります。現在、一四号まで発行されています。

沿革

大阪市中央区にある大阪文学学校(文校)は今年(二〇一四

年)、創立六十周年を迎えました。詩と小説のクラスがあり、田辺聖子氏、玄月氏など芥川賞作家を輩出しております。なお今年、第百五十回直木賞を受賞した朝井まかて氏も文校で研鑽を積まれた方です。

文校には通学部と通信教育部がありますが、通信教育部には全国からの生徒が集まります。その通教部(通信教育部)の有志が小説や詩の夏合宿(名称「関東ミニ」)を開始し、毎夏の恒例となりました。それぞれの作品を合評していく中で、同人誌を作ろうという声が上がりました。十五年前のことです。

このようにして産声をあげたのが、文芸同人誌「空とぶ鯨」です。立ち上げ当初はさまざまな不安もありましたが、意欲的な二十三名の同志が集まり、小説十九、詩十という作品が寄せられ、総ページ三百八十ページに及ぶ個性的な創刊号に仕上がりました。

巻頭には、大阪文学学校校長の長谷川龍生氏の「書くことは、二人の愛人を持つようなものだ。一人は人間、もう一人は表現力」というインパクトのあるお言葉。

いまでは、文学学校出身者ではない同人も増え、刺激的な作品を提供してくれています。現在、文校で教鞭を執られる高島寛氏は本誌の創刊時から、同人と執行部を支え、運営面でも多大なるご協力をしてくださっております。

作風

の支部誌・同人誌評で、本誌の作品評が掲載され、それを巻末の「便り」に掲載するのが、編集委員、執行部の励みにもなっています。

御礼

二〇〇六年に高下俊哉氏の「壺中美人」が「文芸思潮十三号」誌上に転載されました。それから八年余り、このたび辻村仁志氏の小説「ゼロ時計」が貴誌に転載される事に加え、「空とぶ鯨」を再びご紹介いただく栄誉を頂きました事は、同人一同にはこの上ない励みとなるものと感謝に堪えません。

辻村氏は事務局を担当しており、関東ミニの手配から、出版までのさまざまな煩雑極まりない仕事を、勤務の傍らしてくれております。いつも笑顔を絶やさない心優しい人。この方なくして、「空とぶ鯨」はあり得ないといっても過言ではありません。

今後もお一層魅力ある作品を提供できるよう、辻村氏共々、執行部として尽力していく所存です。

(発行人/田村けい)

第15回 関東ミニ文校



平成22年8月7~8日(東京浜松町島嶼会館)

特定の思想、方向性、主義といった括りのない、自由な創作をスタンスとした文芸誌です。純文学、大衆小説に依らず熱意ある書き手が集まり、常に新しい風を吹かせる気概に満ちています。

また毎号、「図書新聞」の同人誌時評や「民主文学」等

札幌文学

北海道

六十四年の伝統

多くの作家を輩出——現在は

札幌文学は一九四九（昭和二十四）年十一月、札幌市内に住む同人十三人によって創設され、翌五十年一月に創刊号が出た。文学的な主義・主張は特に持たず、なんの拘束もなく発表させようという編集方針で、創刊号には小説七編が載せられた。その後、号を重ねるにつれて道内作家の実力者、有力新人が加わって実績を増し、創刊二年後の一九五二年までに10号を出した。この時点での同人は四十人を超え、の中には芥川賞を得た高橋揆一郎の名も同人名簿に見える。

10号以降は「北海道で文学する必至さが、存命的に意識されているものでありたい」と説く沢田誠一が発行・編集責任者となった。これ以後、札幌文学を足場に中央文壇への進出を果たした人を含め木野工、上西晴治、小松山博、東直己など、さまざまな人が足跡を残している。同人雑誌は文学人生の縮図だと言った人がいたが、そうした先輩たちによって札幌文学が築かれ、優れた作品とともに多くの作家を輩出してきた。中央公論新人賞、泉鏡花文学賞、伊藤整文学賞、北海道新聞文学賞、北方文芸賞などの受賞が

それであり、受賞は逸したが芥川賞、直木賞の候補に昇った作品・作家も数多く出た。

現在、道内外を問わず同人雑誌は高齢化などさまざまな理由で同人減少が進み、かつての活力は薄らいでいる。実は札幌文学も十数年前、同人わずか七人となって発行も危うくなり、真剣に解散・終刊が議論されたことがあった。

第60号の編集さなかの二〇〇四年十月、中沢茂、菊地昭、鎌田純一、西村信さんから札幌文学を支えてきてくれた有力な書き手を相次いで失って意気消沈し、「今後は私たちの後を継いでくれる書き手が出現するまでは発行日を定めず、いい作品が集まったときに随時発行したい」と編集後記に書いたものだった。

ところがその後、同人が急に増えだした。以前から「札幌文学は新人育成の場ではない。実力のある同人が優れた作品を発表する場」と言われてきた。それを、文学を目指す新人にも門戸を広く開放し、作品発表の場を提供するという編集方針を変えた。それが功を奏したのか、二十代の女性も加わり、男性中心主義的な札幌文学は彩り豊かな



札幌文学例会

発表の場を設け続けること

札幌文学

北海道という風土に向き合い、北海道でなければ生まれない作品を

同人雑誌に変貌した。そして在籍同人も二十五人を超え、二〇〇四年からは年二回の発行となった。発行日を決めると作品はそれに向かつて集まってくるものだが、それだけ書きたい思いの強い人が多いということ。発表の場を設け続けることは大事であることを、しみじみ感じさせられた。

最近、札幌文学への入会問い合わせが頻繁にくる。その多くは網走や北見、旭川などの遠方である。入会についての面倒な決まりはないのだが、会費を納め、例会に参加することが最小限の決まりであることを説明する。作品掲載の場合には分担金も必要になる。

入会していただくのはありがたいが、例会になかなか参加できない遠くの同人会よりも、近場にある同人会に加入し、みんな顔を合わせて刺激し合っていると、近場の同人会加入を勧めたりもする。「場」づくりは、大事である。近くに発表する場があれば作品を書こうということになり、読み合うこともできる。それが魅力的な作品を生み



札幌文学懇親会

出すことにつながるのではないだろうか。

厳しいが、以上をクリアされるなら…と、なって、文学を目指す新人たちを迎え入れて発表の場を提供することになる。そして純文学系の北海道の同人誌という誇りを持ちながら、北海道という風土に向き合い、北海道でなければ生まれない作品を書けよう——理想は高いが、しかしこれが六十年間続いてきた札幌文学の編集方針なのである。終わりにしたが、同人小南武朗さんの「花の星座」が同人誌優秀作に選ばれた旨の知らせを文芸思潮の五十嵐編集長からいただいた。これまで同人の小林和太さんが「後ろ影の無い男」で第五回銀華文学賞を得たが、札幌文学掲載作が受賞するのは初めてである。小南さんのプロフィールに書かれているとおり、古くからの同人である小南さんは優れた作品を数多く持ち、札幌文学のリーダー的存在の方である。本年末に札幌文学80号記念号を発行するが、すでに掲載作品を脱稿したとうかがっている。実はいま、それを読むのを楽しみにしているところである。

（札幌文学発行人／田中和夫）

札幌文学 千〇〇一・〇〇三四

札幌市北区北34条西11丁目4・11・209

電話011・746・5802（坂本）

私人

東京都

カルチャー教室からの創造

「私人」は朝日カルチャーセンター・新宿にある、小説教室の同人誌です。

場所はJR新宿駅西口から徒歩数分のオフィスビルの七階にあります。テレビなどで新宿というと必ずのように映されるビル群の一角です。近くに都庁や外資系のホテルがあり、街並みは整備されてきれいです。街路樹の種類も多く、春の桜や秋の紅葉だけではなく、四季折々に豊かな表情を見せてくれます。

指導講師の尾高修也氏は文藝賞を受賞され、日本大学芸術学部文芸学科の教授を長く務められた方で、谷崎潤一郎の研究者でもあります。

「私人」の創刊は一九九〇年一月です。基本的には年四回発行の季刊誌で、現在七七号まで刊行されています。同人は多い時には七〇人ほどに上ったこともありますが、現在のところ三〇人くらいで落ち着いています。

「私人」はカルチャースタールの教室発刊の同人誌なので、教室の受講生は誰でも参加することができます。教室にきて初めて小説を書くという方から、一五年以上もの文学歴を持つ方までいろいろです。同人の経歴も主婦や中小企業



指導講師・尾高修也氏

の経営者から元学校の先生や会社員など様々です。したがって「私人」に描かれる小説の舞台も、バラエティに富むものになっています。具体的には歴史小説を含む純文学作品からエンターテイメントまで掲載されています。教室の授業は二時間です。最初の一時間は尾高先生が取り上げる短編小説を朗読します。朗読する作品は多岐にわたり、次の一時間に合評する同人の小説に合わせたものが選ばれることもあります。一人の作家の作品を続けて三作ほど読むこともあります。

最近とり上げられた作品は次のようなものです。

- 「蜜の味」 田久保英夫
- 「月の光が明るい夜」 村田喜代子
- 「拳銃」 三浦哲郎
- 「善人ハム」 色川武大
- 「影」 黒井千次
- 「恋人」 野呂邦暢
- 「秋風と二人の男」 庄野潤三
- 「兵隊宿」 竹西寛子
- 「欠損家庭」 ウイリアム・トレヴァー
- 「ラス・ヴェガス」 アリス・アダムス

これらは知る人ぞ知る名作ですが、

作の役にたつことがたくさんあります。創作歴の長い人も改めて新鮮な気持ちを取り戻して、また新しい作品に挑戦しています。

教室が終わった後は、先生を囲んで昼食をとります。その時には、授業中には聞けなかった質問を先生にしたり、仲間同士で日頃の創作の悩みを話しあったりします。

長年の修練が実りつつあるのか、同人の作品が「文芸思潮」や「三田文学」、「文学街」に批評されることが増えました。とり上げられたコメントはコピーして教室の全員で読んでいます。教室以外の方から批評されることは、たとえそれが良い評価でなかったとしても大変な励みになっています。

最近自分の作品を「私人」に発表して満足するだけではなく、積極的に外部へチャレンジする人が増えてきました。懸賞小説を募集するところがたくさんあるので文学賞に応募しているのです。二次、三次選考を通過する人は結構いますし、大きな賞をとった人もちらほらいます。

これからも「私人」の同人は常に新しい書き手を受け入れながら、創作に励み、レベルアップを目指して勉強を続けて行こうと思っています。(芝本佐保／「私人」編集委員)

私人 テー六三・〇二〇四東京都新宿区西新宿二・六・一
新宿住友ビル 朝日カルチャーセンター
☎連絡先048・591・3940(森田利子)

バラエティに富む作品

このところ脚光を浴びることがなくなっている小説です。改めて読むと、それぞれの小説の表現されている世界は決して色あせることなく、読む者に鮮やかな印象を残してくれます。

教室ではこのような、埋もれてしまった作品を教材として取り上げてもらえ、受講者はそれを先生の的確な解説付きで存分に味わうことができます。

作家の傑作に触れて、自分など到底及ばないと打ちのめされたり、参考にできそうなところを発見して喜んだりしています。短編小説の朗読は受講生たちの創作意欲とレベルを高めることに役立っています。

後半は「私人」に発表した作品の合評をします。創作はあくまで自己責任という原則が守られていて、先生も作品の一字一句に事前に手を入れたり、自らの文体に染め上げてしまうようなことはしません。原作はそのまま「私人」に掲載され、発刊された後で先生、同人による合評が行われます。初めて小説を書いた人の作品と、十年以上も書き続けている人の作品が、同列で並ぶのが「私人」の特徴の一つかもしれません。

初心者の初々しい感性にはとさせられたり、自分も同じような失敗をしそうだという気付かされたり、同人の作品の合評は、創

授業後の昼食歓談



教室風景

女の表情は変わらなかった。女もすでに彼の心を読みとつて、話す機会を持つようと思っていたようだった。「どうもすみませんでした。お別れする時ははつきりと云つて、あなたの理解を得ようと思っていたのですが、あなたがあまりに私に、期待していらつしやつたので、口に出せないままあんなことになってしまったのです。」

実は、あの頃、私は原爆の後遺症になやんでいました。あなたと結婚して幸せな人生を送りたいという気持ちは、あなた以上にあったのですが、もし、結婚したら、子供ができるだろうから、原爆の後遺症で不幸な子供が生まれることが怖かったのです。ベトナム戦争でもそうですが、ドクちゃんたちのようなあんな奇形児が生まれはしないかという恐怖でした。

いつも私は、そのことでなやみながら結婚せずに来たのです。そして、いつもあなたに済まない気持ちは抱いて来たのです。

はじめて明かす、女の告白に彼はふと敗戦直後の米国戦略調査団が発表していた記事を思い出した。当時、調査団の報告が新聞紙上にも発表されたが、その中に、原爆をうけた長崎や広島では、二、三十年は草木も生えない状況の中で、奇形児さえ生まれる可能性が十分にあるというような報道記事を思い出した。女の明かす謎の部分が、解けて見ると、とらわれ続けて

いたものがすつと消えて行くような気持ちになったが、忘却のふたは、そつと閉じずに置こうと思った。

（「長崎文学」71号より転載）



向井十郎

むかい じゅうろう

1927 長崎市生まれ
戦時中は特攻隊員として高知部隊に所属したが、出撃前に終戦となる
戦後、電信電話公社に入社、定年まで勤め上げた
その傍ら、絵画クラブに入り展覧会には何度も作品を出品した

長崎文学には創刊号から同人としてペンを振り、長きに渡って多くの作品を書いて、今日に至る

※向井十郎氏は現在病床にあるため、野沢薫子氏にプロフィールをいただきました

同人雑誌紹介

長崎文学

長崎県

長崎文学余話

気がついたらここまで歩いてきていた……。

私が「長崎文学」の同人として「書く」ことに参加させてもらってから、瞬く間に二十年以上の年月が経っている。

一九八四年に十名足らずのメンバーらによって発足し、創刊号を出版したのが翌年。

当時の「長崎文学」は、キラ星の如く優れた書き手が揃っていた。

本の発行ごとに彼らの作品は、新聞や雑誌の同人誌評欄に複数が取り上げられて、高い評価を受けていた。

その数年後に同人となった私が、初めて合評会に参加した時の強烈な印象は、今も鮮明に記憶に残っている。

各自の作品について、同人らが順次に評価していくのだが、その語気の鋭さ、容赦のないきき下ろしように、初参加の私は驚き、委縮して、テーブルの片隅で小さくなっていった。

（後日、初参加の割には、お前さんの態度はデカかったよ、

長崎文学



第71号
長崎文学の会

2012年11月15日 発行

と他の同人から言われたが）

私の作品などは「まだ小説には、なっていない」とまで言われ、その場ではどうにか耐えたが、帰路のバスの中では涙がこぼれた。

「長崎文学」については予備知識もなく、メンバーから誘われるままに入会してしまった自分は、なんと無謀だったのかと、考え込み、溜息が出た。

ところが家に帰ってしばらくすると、同人の一人から電話が掛ってきた。

「寄ってたかって、あなたにキツイことばかり言い過ぎたのではないかと、反省しきりでな。それで謝まろうと思っ

厳しい合評会による錬磨

「電話したんだ」

「お気遣いなさらないで下さい。皆さんが私のためを思っていてくださる。おられたのは解っていますから」と、応じた私だったが、今にして思えば、よくもシャーシヤーと、心とは逆のことが言えたものだと思える。

だがそれだけではなかった。翌々日、少し年配の女性同人からハガキが届いた。

「厳しい評価は、あなたの才能を見込んでのことと受け止めて、めげないで、頑張ってください」

おそらく当日の帰宅後、すぐに書いてくれたらしい。その心に書いてくれたらしい。その心に書いてくれたらしい。その心に

「厳しいが温かい。それが「長崎文学」だった。だから、なんとかやってこられたと思う。

しかし物書きという人種は、当然ながら自己顕示欲が強く、我も強く、作品の批評をめぐっての対立は毎度のことだ。一触即発の場面には何回も遭遇した。その結果、大勢の同人が会を去るといふ、どこの同人誌も一度は体験する

初参加の人物が、メンバーを一渡り眺めて「『長崎文学』は美人揃いだな」とひどく場違いな発言をして、その場をシラーとさせたこともあった。

いろいろあった……振り返って、しみじみと思う日々、いきなり「芸芸思潮」の編集部から、「長崎文学」に掲載された二作品が「まほろば賞」の候補作となったという連絡をいただいた。

驚くやら喜ぶやらで、長きに渡って書いておれば、いかはこんなこともあるのだと、同人一同、感激の面持ちで言い合っている。

十年の間、この私に委ねられてきた本誌だが、どうかその灯を消さずには来られたもの、実態は「鳴かず飛ばず」であって、私に取り、この十年は自身の力不足を痛感させられた日々でもあった。

それがここへ来て、ようやく日の目を見ることが出来た。先に逝った大勢の同人たちの墓前に、やっと嬉しい報告が出来ることになった。

(長崎文学の会/代表・野沢薫子)

長崎文学の会 〒八五〇・〇八七四

長崎県長崎市筆通町一三五・四

☎連絡先 095・878・7385 (野沢薫子)



1991年の例会あと

という「修羅場」もあった。

やがて残った同人らも高齢となり、入退院を繰り返した筈句、次々に逝ってしまったが、そのいずれの人も「頭のてっぺんから足の先まで文学の詰まった人」ばかりだった。

遣された私たちに泣いている暇などなく、どうにか皆で力を合わせて書き続けて来たものの、風前の灯状態に陥った「長崎文学」を立て直すというよりも、現状維持が精一杯だった。

私が代表となつてから、すでに十年が過ぎたが、その間、多くの人が「長崎文学」に出入りした。

なかには「変な人！」と、こつちが首を傾げさせられた人物もいた。

「あなた方、純文学をやっている人は大衆文学を軽視しておられるが、大衆文学でも吉川英治などは文学史に残る大作家です」

そう言った後で、吉川英治について延々三十分以上も語った、二十代の若者がいた。そうかと思えば、三十九歳の

NO MORE HIROSHIMA The Testament of the Atomic Bomb Victims of Hiroshima 第2集

ヒロシマ青空の会

遺言

「ノー・モア・ヒロシマ」
— 未来のために残したい記憶 —

竹村伸生 大野逸美 武田恵美子

牛島富美子

美腕の刺客
仙台維新譜

某次・維新という時期と
東北・仙台という空間のクロスするところに
この美腕と刺客は成立している。
それは、私たちが置き去りにしてきた
文学である。
だからこそ、この歴史物語に
感動と期待を覚えるのだらう。

婦人文芸

東京都

世間の風にあらがいながら

私たちの会は女性だけです。最初、昭和三十年頃、当時女性の文化人と呼ばれた人たちが、消息の分かる人と呼び集めた経緯があるからです。そしてその頃は、今では考えられないほど、女性の活躍の場がなかったもので、男性に対抗心があったと、創刊当時の先輩は言っていました。

集まったのは、主に第一線で活躍していたジャーナリストたちで、会合を開くうちに雑誌を作ることになり、婦人運動家の神近市子が昭和十年から十二年まで発行していた商業誌「婦人文芸」の誌名使用の許可を得て、翌三十一年季刊として発行を始めたということです。

第一号には、「婦人とペンと時代」という議題で十返肇、小山いと子、板垣直子、壺井栄、神近市子といった錚々たるメンバーによる座談会が載っています。

以後、女性だけで運営と本誌の発行をしてきたので、いまだにそれが続いているというわけです。

受賞者が多い女性だけの同人雑誌

初期の頃は、会員の情報知らせ合う随筆が多かったのが、次第に文芸誌に移行して、小説、シナリオ、詩、短歌などが寄せられるようになり、会員も、第一線のジャーナ

リストから、文学志向の強い女性に変わってきました。こうした変遷が物語るように、現在まで特定の指導者を持たず、会としての主義は打ち出さず（これは初期の編集長の意志を受け継いでいる）、個人個人がそれぞれの分野、テーマを追求して、よい作品を生み出すという方針で、今日まで続いています。

現在会員が十七名、誌友（作品掲載可の賛助会員）二十三名と、かなり大所帯で、雑誌の発行は、大体八カ月に一冊を目標にしています。

掲載作品の事前審査はなく、合評会で出席者の意見を聞く、という方針で、作品の向上に努めています。以前は、合評会の批評が生ぬるいという評判が、他の同人誌関係者から漏れてきていましたが、実は、事前に、作者が自ら選んだ会員に作品を読んでもらってから載せる、という方式を取っていたのです。

そうしたことが功を奏しているのか、個人の能力なのかは分かりませんが、かなり高い割合で受賞者が出ていることは事実です。お互いに酷評したからといって、よくなるものでもない、むしろ、よいところを評価する方が効果的ではないか、というのが実感です。以前は、同人誌は三号までと囁かれていて、婦人文芸のように長く続くのは作文教室みただけからだ、と揶揄する人もいましたが、それは男性中心の型にはまった見方ではないかと思えます。

とは言うものの、事前審査がない分、どこかできちんと作品について吟味する必要があるのではということも、昨年からは、合評会を充実させるため、一作にかける時間を大幅に増やしました。このように、私たちも、会員の質と個性に合わせて、頻繁に作品向上の方法を変えています。

あとは、この作品たちをできるだけたくさんの人に読んでもらいたい、という願いがあります。そこで、有志が東京の書店回りをして、販売してくれる店を探した結果、ジュンク堂（渋谷店・池袋店）や神田の東京堂書店などに、置いてもらうことができました。

ちなみに、出版および掲載を伴う賞を受けた作品としては、「土踏まずの日記」高森一栄子・光文社第八回エンターテインメント小説大賞、「小児病棟」江川晴・第一回読売ヒューマン・ドキュメンタリー大賞で優秀賞、また、同賞第二十回では北山慈雨の「伴走夫婦」が入賞しました。

その後も、様々な分野での受賞、出版が相次いでおり、童話では、「吹きぬけの青い空」志津谷元子・第十四回小川未明文学賞の大賞があります。

なお、退会する会員はあまりなく、



「婦人文芸の会」同人諸氏

この会一筋四十五年という会員も何人かいます。この十年ほどは、いわゆる定年退職者世代の入会が多い、という傾向にあります。また、三十代、四十代、五十代と多彩です。

また一年に一度ほど、評論家などをお願いして、作品の批評をしていただいています。昨年の講師からは、「なぜ、女性だけでやっているのか」という質問が出され、それぞれが自問しているところです。考えてみると、男性中心の会は、旧来の型を崩したくないという同人誌が多いのではという気がして、やはり女性だけの方が、新しいことを実践できる自由度が高いように思えます。

なお、平成二十五年三月に、第九十三号を発行いたしました。

以上、運営は平等に、作品の批評は厳しくをモットーに、これからも延々と続く予定の「婦人文芸の会」です。

（婦人文芸の会 秋本喜久子）

婦人文芸の会

〒一四二・〇〇六二
東京都品川区小山七・一五・六
菅原方 ☎ 03・3782・7129

運営は平等に、作品の批評は厳しく

配をみせたが、まさか夫人にはついていかないだろうと思っ
た。翔司は夫人に自分のこれからの夢を教えてやろうと
思っているのか、しきりに耳打ちする仕草を見せた。夫人
はその状況を飲み込みながら、千加子の手前遠慮があるの
か、黙って動こうとはしない。千加子もそれを承知してい
る。別れ際に千加子自身で二人の様子にそんな気まずい状
況を作りながら、そしらぬ顔を見せていた。千加子は途中
惣業をかうつもりでスーパーに寄ったが、翔司のことが気
になり買物はず途中で切り上げた。

千加子は帰ってきたとき翔司が一人で奥の部屋に入って
いくのを見た。部屋は静まり返っていた。翔司は昨夜の疲
れですぐに寝入ったのかもしれない。

しかし千加子はさつきから、障子を開けたら、翔司と道
子夫人がそろって並び、千加子が翔司を懸命に探した気持
ちも意に介せず、笑いながら迎えるような気がしてならな
かった。

（「月水金」36号より転載）

月水金

神奈川県

「道場」の伝統

明大芸科

同人雑誌の創刊は約九十年前、昭和七年に遡ります。明
治大学芸科の学生たちと先生たちが共同で作った雑誌が
始まりということ。これは同人の瀬川正が言ったこと
ですが、氏はその芸科の出身でした。

「明大の芸科」といって、「月水金」なんだ。それぐら
い伝統がある。でも、そこから出た作家となると……、い
ないんだなあ。教えてくれた先生たちが偉すぎたせいかな。
ほくは萩原朔太郎の授業を受けたんだ。こんな風だった。

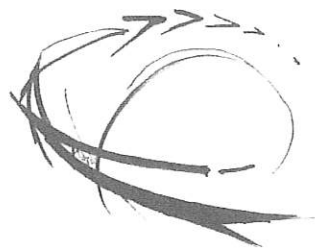
——理念とは、理念とは、理想的な念である。
いやあ、変わった先生だと思った」

芸科は昭和二十四年に文学部と名称を変えるまで続き
ます。ちなみに牧野信一の「浪漫的時評（昭和十年）『芸
8月号』の中に坂口安吾等の作家と並んで「明大文科の『月
水金』という文字が見られますので、雑誌が実在してい
たのは間違いないと思います。

現在手元にある一番古い雑誌は昭和三十一年発行の第二
次創刊号です。同人は三十名、その中に瀬川正、榎本武男

月水金

第三十六号



※この作品は榎本武男氏の遺作です。

榎本武男

えのもと たけお

神奈川県横須賀市生まれ
明治大学商学部卒業後、博報堂勤務
博報堂退職後は、同人雑誌『月水
金』に、年1回の発行に合わせ、短
編・中編小説を掲載
発表作の多くは『文學界』の同人雑
誌評に取り上げられている
著書『幻想の湖』『イマジナリーボ
ール』
2011年逝去



第2次創刊号『月水金』の表紙
昭和31年（1956年）

両氏（共に故人）の名前もあります。一〇〇頁に満たない
薄い雑誌ですが、規約には驚くべきことに「毎月一回発行」
と書いてあります。「ここは同人たちの道場の筈ではない
か。破綻を恐れる必要はないのだ」と編集後記にあり、熱
気が伝わってきます。

道場

それから第三次（昭和三十七年）になり、今日に到るわ
けですが、長老たちが健在だった十年前までは確かに「道
場」という雰囲気はまだ色濃く残っていました。合評会の
時など、ほとんどの場合、まず重苦しい沈黙が五分くらい
同人たちを支配します。顔の表情を見なくても、ため息の
つきかたや咳払いの具合で、否定的な評であることが予測
されました。ようやく一人が口を開きます。

「じゃあ、言うけどね。困るんだよ、こんなもん持ってこれられちゃ」

このあと、作品中の不適切な語句や陳腐な言い回しの指摘がしばらく続くのですが、こうして批判されるのはまだいいほうでした。もっと徹底した同人もいました。

「誤字などの類は原稿に書き込んである。あとで見ておけばいい。……感想？ 感想はない」

そう言ったとき、もう何も言いません。黙殺という言葉が形をとって、その場に立ちほだかる感じでした。

いまま思ふと、これはキビシイというのは少し違う気がしますが、強いて言えば、センチメンタリズムの完全なる欠如、もしくは拒否です。親睦とか絆とかいう言葉とはもつともかけ離れた世界なのです。酒のほいる二次会や忘年会でのスナップ写真は一枚もなく、同人会の定期的な小旅行などもありませんでした。今の時代から見れば、まさに時代錯誤の集団でしょう。携帯やスマホの世代には理解しろと言うほうが無理かもしれません。

即実践

この辺で編集方針について少し述べます。「月水金」は小説作法について系統的に勉強する所ではないので、同人になると即作品を発表することになります。作品に制約はなく、詩でも、小説でも、評論でも、エッセイでも、内容や長さをお互い、何でも発表できます。

書き上げたなら、同人分（現在四人）のコピーをとり、定例会の時に手渡すか、あるいは郵送して、一か月後の合評会に備えます。合評会で誤字等の確認をし、各同人の意見を聞いて、そのあと書き直したければ書き直します。そうやって完成した決定稿を次の定例会である編集会議に持参。同人全員で全作品の割り振りを決めて、会議は終了します。

つまり、特定の編集委員を持たない同人会では、各作品の合評をまず済ませてから、雑誌を発行するのです。発行後、あらためて合評会をすることはありません。このやり方がもう二十年以上も続いています。

断わるまでもなく、同人会へはどのような履歴の人でもはいることができます。毎年一回発行で、今年で三十七号を数えます。第一次を知る瀬川氏はすでに亡く、第二次から同人の榎本氏も鬼籍に入りました。そして、第三次の中心人物であった、アメリカ文学研究者にして新潮新人賞作家の須山静夫氏が逝去するに及んで、同人会の《道場》の雰囲気は限りなく薄れてきました。しかし、自由な発表舞台の伝統は今も受け継がれています。

「月水金」編集発行人／沢崎元美

月水金

〒二二〇・〇〇三二

神奈川県横浜市西区老松町二八・二・301

沢崎元美方

TEL 045・2551・3168

木下日眞子

木下日眞子

きのした ひま
兼業主婦の関係で
夫の仕事に滞在し
験を二国に持った
現在日本在住

エッセイ賞
入選

カカ

私は結婚してから、不思議な縁でロンドンとパリに滞在することになった。

これから始まるエッセイは、私の個人的思い入れ・思い込み・思い出の三点セットをまとめたものである。

文責はすべて私にあり、なるべく普通の紀行文・エッセイに載っていない話題を取り上げようと努めた。そして、選んだテーマは、カカ（フランス語で糞、この場合は犬の落し物）である。

初めてパリに行ったとき、道路に落ちている犬糞（馬糞という言葉があるからこれもあるか？）の多さに驚いた。歩くときは、足元を見なくては足の裏が大惨事になる、と心したのを覚えている。

犬糞をめぐっては、犬を連れだしたフランス人家族の姿が印象深い。

当時私が住んでいたアパートの前の通りで、飼い犬の散歩の帰りらしいフランス人の子供二人と彼らの父親を見た。私が夕方子供と公園から家に帰る時に、声を上げて楽しそ

うな彼らが私たちの前を歩いていたのである。

小さくてかわいい犬、小学生らしい姉と弟、父親の一团と犬糞に何の関係があるかというところ、大いにある。子供（姉）の足に、黄土色のソレが付着していたからである。

「ヤダー、〇〇（注／飼い犬の名前らしい）のカカがついちやったよー」

と姉が騒げば、弟と父が大笑いしていた。

ところで、どうすれば、散歩のときに飼い犬の糞がふく

らはぎの外側に付着するのだろうか。

犬が脱糞した上に姉が自らつまずいて転んだとか？ 優しい弟がふざけて姉を糞の上に突き飛ばしたのか？ 疑問は尽きないが、その理由は今となっては知る由もない。

脱線したが、ここで言いたいことは、犬の散歩に行くのにフランス人家族が手ぶらであるという事実である。

携帯電話と財布くらいお父さんのジーンズのポケットに入っているとは思いますが、日本ならお馴染みの糞撤去グッズ（ビニール袋、ティッシュ、用意のいい人はペットボトルに入れた水↑道路を拭いた後洗い流すためのもの）など見

小説と評論

カプリチオ

東京都

奇想曲・狂想曲

あやしくも、物狂おしい二十年

今年で二十周年を迎え、秋に発行する雑誌で38号を迎える。現在会員五〇人。「カプリチオ」の発行は不定期で、年二冊から三冊である。旧態依然としたこれまでの同人誌からの脱皮を図って、「リトルマガジン」的に特集に力を注いでいる。

古いところでは「タルホ感覚嗜好症」と題した稲垣足穂特集。「三島由紀夫と戦後アプレゲールの悪童たち」のタイトルで三島特集。近年では「私小説は誰を刺すか?」、「古本屋のアルケオロジ」、「新宿ゴールデン街が見ていた戦後日本」、昨年は、東北大震災を意識した「いまだからこそ再会したい夏目漱石」の企画を実現した。歴史探訪と称して、佐倉惣五郎や、「大菩薩峠」の裏宿七兵衛などを扱った。短編・エッセイ特集も、不定期に企画してきた。

小説・評論は、しばしば『図書新聞』、『週刊読書人』などでも取り上げていただく。かつての『文学界』では、何度も掲載作品が論評されたものだが、その同人誌評コーナーもいまはなくなってしまったのは、なんとも淋しいも



カプリチオ例会でのスナップ

小説と評論 カプリチオ

2009年冬 第31号



「下北沢路地裏ツアー」
華原克芳
「聞いている扉」
萩 悦子

のである。出発当時は、比較的若いメンバーと自負していたのが、この二十年の間、多少の新陳代謝をしながらも、腰を据えて書いている書き手は、すでに若いとはいえなくなった。もちろん、精神だけは依然として若いつもりであるし、二十代三十代の書き手も歓迎である。

雑誌発送は、時間の許す者が随時集まり、手作業で一冊一冊、丹念に封筒に入れ、宅配便のシールを貼っている。合評会はいまのところ、J R 田町駅近辺の会場で、出席者数は毎回二〇人前後。これはかなり白熱する。中には「合評会は、格闘技」などと称する不謹慎な者もあり、以前と比べて理論家が多くなった。一次会がそんな調子だから、アルコール混じりの二次会がどんなことになるかは、ご想像

像に任せる。一方では、世の中全体に、小説をじっくり書くこう、文学の香気あふれる密度高い作品を書くという、いい意味での「小説職人」が少なくなったようにも思えるが、どうであろうか。

雑誌名の「カプリチオ」は、奇想曲・狂想曲という意味のイタリア語 capriccio で、十七世紀の音楽用語である。「悪魔のトリル」で有名な天才バイオリニストのパガニーニの曲にも、斬新な奇想曲がある。最近「狂」の字が差別語だということで、音楽業界でも「狂想曲」という言葉は避けるらしい。しかし、こと文学の世界ぐらいいは、人間の内なる「狂」を、作品という形で表出すべきではないだろうか。「あやしうこそものぐるほしけれ」（『徒然草』）の境地を排せず、動脈硬化した日常を別のまなざしで凝視してこそ、精神の健康は保たれるはずである。雑誌『カプリチオ』は、内なる思いの、怒り狂いのたけを込めた多彩な小説が百花繚乱の妖しい花園でありたいと願っている。

（編集委員／谷口葉子）

小説と評論 カプリチオ

二部文学の会

〒115-0044

東京都世田谷区赤堤1・17・15・101 草原克芳

連絡先・事務局 〒150-0022

東京都渋谷区恵比寿南1・21・8

03・3713・7962 塚田吉昭

46号

46

季節風

東京都

早大文学部の友人が中心

ものを書くのは無償の行為

同人雑誌「季節風」は、早大文学部の友人が中心となり、卒業の翌年、昭和二十八年（一九五三）六月に創刊した。創刊号は、大平正巳、小沢正義、恩地延久（河村延久）、鈴木亮一、中里秋光、花村守隆、御舟朋夫（高井有一）、藻才修三、市尾卓の九名で、発刊した。

翌年には、岡島春枝、三原誠、茂木照夫が加わり、季刊を励行して志気も高揚していた。友人の集まりだから、当初から自由な雰囲気、その後、同人が入れ替わっても、加入の新旧を問わず、隔てのない、おたがいの遠慮のない交流は、この会の特長といえるだろう。運営はすべて平等におこなっている。毎月の会合は、実に激しい討論がかわされたものである。はじめのころ、私たちがしきりに言っていたのは、ものを書くというのは、無償の行為以外のなものでもないということである。

これまで、参加の主な人をあげると、高橋松夫、由良喬、石川邦夫、いけだみのる、岩佐利彦、三竹徹也、下林益夫、中村英雄、高瀬美代子、成清良孝、三谷博俊など、ほかに

魅力を感じなくなっているのに、しばしば戸惑うのである。作品のいのちということだが、これも時代環境や当方の感受性の変わりように問題があるのだろうか。かつての作品が、どこか魅力を失って興をよばなくなっているのは、否定のしようもない。ちかごろ、折にふれて気づくことである。時差を置かずには繰り返して読むことをしない、気ままな読者の当方に、その責めがあるのだろうか。

川端康成の、「月下の門」(昭和二十七年／一九五二新潮)に、つぎのような文言がある。

「永遠の文学などというものは、もう作れない時代がきたかとも疑える。私は、あまり読んでいないけれども、近ごろの翻訳される小説もそうなのではないか。書かれた時にしか、その短い時にしか生きて感じられないようなのが、今は小説の一つの傾きかとも疑える。嫌な疑いで、疑うことがすでに病弱であろう。しかし、時代の不安と分裂のせいもあるう」

この「書かれた時にしか、その短い時にしか、生きて感じられないようなのが、今は、小説の一つの傾きか」という言葉が、近ごろ、かつての作品を再読していて痛切に響くのである。

季節風

108

も今では、消息の知れない人たちもいる。最近は一、二回発行で、昨年十二月、一〇八号を刊行したが、現在、同人は、岡島春枝、小沢正義、河村延久、鈴木亮一、花村守隆、市尾卓の六人……。半世紀以上の歳月を経て、かけがえない同人をあいっいで鬼籍に送り、新たに加入の方があれば歓迎したいと思っている。

五十年を超える同人雑誌経験から、流通するおびただしい作品のなかには、作者の個性に親炙して懐かしく、感応の喜びに浸ったのを想いだす作品も少なくない。それが、時代や社会環境の変化とともに、近ごろ流通の作品は、著しく変質して、興味の持てない、縁のない作品がふえてきた一方、かつて、前記のように感応の喜びを得て、相應な関心を抱いて読んだ作品が、現在、読みかえしてさほどの



「季節風」同人

季節風同人会

〒一八五・〇〇〇三

東京都国分寺市戸倉三・九・七

市尾卓内 TEL〇四一・三三三・五四〇五

46号

46

九州文学

「文学賞」と「同人誌評」と良質の文学

福岡県

「九州文学」は、昭和十三年（一九三八年）九月に創刊され、紆余曲折を経て、二〇〇八年春、編集人・波佐間義之氏らによって、良質の文学を目指す第七期「九州文学」としてスタートし、今年で五年目を迎えた。

「文芸思潮」「全作家」「季刊文科」「三田文学」といった文芸誌や各新聞社の地方紙に「文学賞」や「同人誌評」が掲載されるのを楽しみにしている同人作家は多いと思う。

福岡県のひわきゆりこさん主催の「文芸同人誌案内」ホームページでは、各新聞社や各文芸誌の「同人誌評」が分かり易く一覧表で書かれていて楽しみに見て参考にしている同人も多いと思う。ご尽力に感謝している。

作品自体よりも「文学賞」の「受賞作品批評」や「同人誌評」の方が面白いのは、芥川賞や直木賞の「受賞作品批評」と同じだ。

評論家の「批評」を読んで、その作品を読んでみようと思う時もある。

「文学賞」や「同人誌評」に一喜一憂し、それを目標に頑



張って書いている同人作家は多いと思う。「文学賞」「同人誌評」に取り上げられることは、全国の大勢の方に作品を読んで頂ける大きなチャンスでもあるからだ。

「九州文学」では、季刊文芸誌発行毎の三ヶ月に一回、合評会を開催している。

毎回三十五人前後の参加者が、福岡のホテルの会議室に全国から集合し、三時間みっちり合評するのだが、この際「文学賞」受賞者や「同人誌評」に掲載された同人の記事は、赤い線で囲んで必ず編集人が全員に配ってられる。

波佐間義之

1942 福岡県生まれ しゆき
73「深夜の形相」で第10回総評文 賞
同年「水上街の美学」で第12回新日 賞
76「ツンドラの街」で第8回新潮新八頁吹部 賞
同年 北九州市民文化賞（文学部門）受賞
2004「三角山で」で九州文学賞受賞
09「どくだみ」で第3回まほろば賞優秀賞
12「イエスの島」で銀華文学賞佳作
著書『貌のない街の碑』（栄光出版社）『出発の周辺』（九州文学社）『鈍色の訴状』（あらしき書店）
第七期「九州文学」編集発行人



作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
飯田章（群像新人賞）・八党正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・小沢美智恵（蓮如賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞／インターネット文芸新人賞）
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。
あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩

1篇 3枚以内 3000円

エッセイ

1篇 5枚以内 4000円

10枚以内 5000円

小説

1篇 20枚まで 7000円

50枚まで 10000円

100枚まで 15000円

200枚まで 20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp

46号

当事者にとっては、大変名誉なことでも自信にも繋がりが大きな励みにもなっていると思う。他の人にとってもいい刺激になり、次は自分が受賞し、紙面に掲載されたいという、前向きな気持ちになれる。

同人作家は、作品がどのように評論家に評価されているのか、とても気になるものだ。いい「批評」に出会った時はそれが他人の作品であってもほっとし、嬉しくなる。良質の文学は、ちゃんと評論家に理解されるのだと。

「文学賞」や「同人誌評」に選ばれるような良質の作品を書くことが、「九州文学」の目指しているところである。

発表の場が広がれば、受賞や批評の機会も増えるだろう。東京の文藝同人誌「文学街」主催者の森啓夫氏（前全国同人雑誌振興会会長）の呼びかけで、今年もまた九月に「文庫本（7）」（全国の同人作家競作で読者ハガキ投票の「読者賞」有り）を発行して下さることになった。「九州文学」からも九名が参加し新しい文学の流れに期待し、今から「読者賞」などの「文学賞」や批評家の「批評」を皆楽しみにしている。森啓夫氏のご尽力に大変感謝している。

一昨年の二〇一〇年十月、「九州文学」は「富士正晴全国同人雑誌賞」の「大賞」を受賞した。とても名誉なことだと思ふ。

その副賞のお陰で、昨年春には「九州文学」臨時増刊号

し、全国規模の「文学賞」にも応募し果敢に挑戦している。そんな編集人の背中を見て同人たちは尊敬し、「文学賞」へと努力し、何をアドバイスされても素直に受け入れ、どんな力がついてくるのだと思ふ。

編集人の陰の無私の貢献に支えられて、編集委員以下同人一同、編集人を支えようとしている。こうして第七期「九州文学」は、復活を果たし、発展を続けているのだと思ふ。

「九州文学」は、情報化の波に乗ろうと、昨年十月一日に「九州文学ホームページ」を立ち上げた。「九州文学」の目次や同人作家の出版本を掲載し、ゲストブックへの読者の書き込みで、感想も聞けるようになった。

インターネットの影響は予想外に大きく、ホームページ上で紹介された本は、すぐに本屋さんや図書館や編集発行所に問い合わせがあり話題になる。情報伝達の速さに驚いている。既に延べ一万三千人以上のアクセスがあり、文学の世界もインターネットなしでは考えられない時代なのだ。



合評会風景

を出すことができた。年四回の季刊誌だけでは捌ききれない程の作品が集まり、本当に助けられた。とても感謝している。

また今年も北九州市の公益財団法人芳賀教育・文化振興会の教育・文化助成金を「九州文学」は前年に引き続き受賞し同人誌発行の為に役立たせて頂いている。光栄なことだ。

「九州文学」を一冊でも多く売ろうと地域の各有名本屋さん、努力して下さっている。各新聞社や各文芸誌で「九州文学」が度々取り上げられたお陰で、本の売れ行きは順調だ。今年七月一日に発行した第十八号夏号（通巻五四一号）は、現在各有名書店に並べさせて頂いているが、バックナンバーも発行所に在庫があれば購入できる。皆様に感謝している。

会員数は、若者も中年も熟年層も、入会希望者が後を絶たず、既に百人を超えている。

これもひとえに編集人・波佐間義之氏の作家の才能を見抜く力にあるように思う。

誰も気付かないくらい早い時期から才能を見出し、同人作家の何一つも否定せず自由に書かせている。目利きの編集人がいることが、「九州文学」の強みであり、良い同人誌の第一条件だと思ふ。新人発掘は重要事項だ。編集人は編集するだけでなく、毎回の様に作品を発表

と肌で感じている。

同人誌を取り巻く文学関係者や地域や個人の地道な努力が実を結んで、いつの日か全国に五百誌以上ある同人誌から、常に芥川賞や直木賞が出る時代が来て、お世話になった文学関係者や地域のみならずにご恩返しが出来たらとても嬉しい。

福岡県の火野葦平氏、岩下俊作氏、劉寒吉氏、長谷健氏、原田種夫氏らによって築きあげられた七十四年の輝かしい歴史と伝統のある「九州文学」の灯を消さないように良質の文学を目指して努力している。

（阿賀佐圭子「九州文学」編集委員）

九州文学

〒809・0028

福岡県中間市弥生一丁目一〇・二五波佐間方

TEL&FAX 093・244・8501

じゅん文学

愛知県

百号までは

今回「じゅん文学」七十号の「見返り仏」が同人雑誌優秀作に選ばれて、五十嵐編集長から「久しぶりにそちらの活動状況を知らせて」と言われた。そういえば、初めて「じゅん文学」が紹介されたのも四十五号に載った作品が優秀賞に選ばれたからだっただけだ。

あれから一作も選ばれなかったのかと気づいたり、二人も選ばれたのは嬉しいことだと思ったり、何やかや感慨にふけりながら、二〇〇六年秋号の『文芸思潮』を本箱から引っぱり出してきて、六年も経っていて、何を綴ったのか記憶が薄れかけている。

「一九九四年六月に創刊して今年十二月には五十号を出す」とか「同人五人、男性三人、女性二人」など、いろいろと書いてあったが、真っ先に、五十号記念号のことを懐かしく思い出した。

五十号は節目ということもあり、全員参加を目標に作品を募ったら、創作が二二、エッセーが五、短詩型作品が七、も集まって、三八〇頁の厚い雑誌になった。しかも、その



「じゅん文学」例会風景

号は第三回「富士正晴全国同人雑誌賞」の特別賞を受賞して真正正銘の「記念号」になった。二〇〇七年十一月には、五人の同人と一緒に徳島県三好市の授賞式に臨んだ。それまでの苦労が報われた思いと、同時にその後の励みにもなった。

それから六年、最新号は七月一日付発行の七十二号である。同人の数もあまり変わりなく、まずまずという感じではあるが、それなりの苦労や、多少の変化はあった。

全体的に年齢層が上がったのはもちろんだが、いちばんの変化は、今は顔も知らない同人が幾人かいることだろう。同人雑誌というのは会員の出入りが激しいもので、大抵は二、三年くらい書いて辞めてしまう。どこの同人誌で

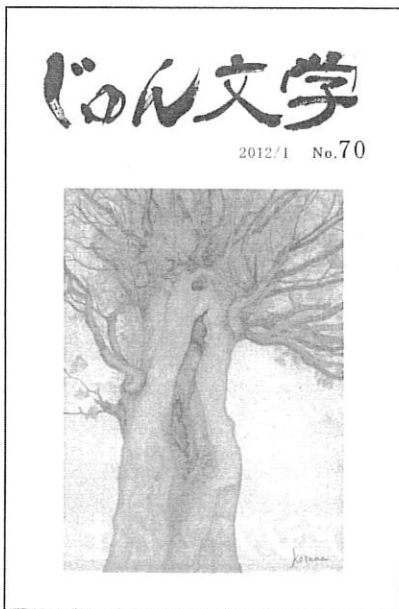
も、信念を持って続けているのは結局は十五人もいれば辛いというのが普通である。「じゅん文学」も五十号を過ぎた頃から少しずつ辞める人が出てきた。同人費だけは払っていても作品を出さない人も増えた。

私はインターネットで簡単なホームページを作って「じゅん文学の同人になりませんか」と呼びかけた。本当に入会希望者がいるとは思わなかったが、意外に反応があった。

しばらくすると何と、沖繩、鹿児島、熊本、岡山、京都、横浜、東京などの各地から問い合わせがあり、同人の申し込みがあったのである。おそらくは『文芸思潮』で紹介していたいただいたのをきっかけに、同人の多くが『全作家』や『文学街』や『季刊文科』で取り上げていただくようになったからだろう。

原稿はメール送信に限定し、同人費と掲載費さえ振り込んでもらえたら作品を掲載している。なかには推敲不足と思われる作品もあるが、送り返しても、皆さん、きちんと推敲し直し、誠実に対応してください。合評会には出られなくても、最初のうちは掲示板で同人同士の批評が飛び交って活気があった。私は作者がどんな人か詮索しない主義なので、気楽に入会できたのかもしれない。

今回の受賞者もネットを通じての同人で、私は今さらのことく、若草田ひずるさんがどんな人か全然知らないこと



とに驚いた。鹿児島県の住所とメールアドレスと携帯番号以外、判っていない。本名で男性であるとは確信していたが、年齢も聞いたことがなかった。

六年前の受賞者の古澤崇さんについては、学歴から経歴までほとんどのことを知っていたと言っても過言ではない。彼は大学生の頃に私の文章教室に入ってきて「じゅん文学」の同人になった。合評会にも積極的に出てきたし、二次会にも出席して地元同人の多くに慕われていた。

二人の同人の違いには、同人雑誌のあり方を考えさせられたりもするが、どういう情況が良いのか悪いのか、答えは出ない。いずれにしても「じゅん文学」が五十号以降の六年間も、一年四回の発行が維持できたのは、やはりホームページのおかげだった。

創刊して十八年。時代は刻々と変化している。最近はまだ少しずつ地



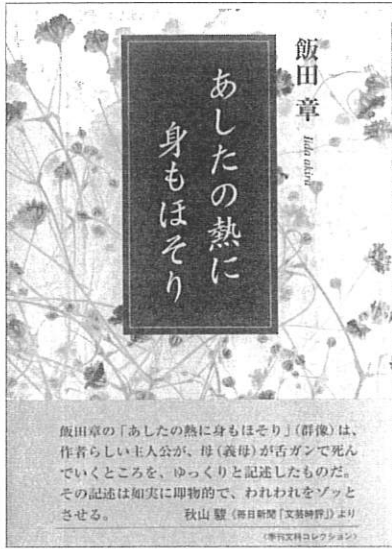
元中心に戻りつつあるようだ。今はブログなどでも小説を発表することが出来て、わざわざ同人誌に入る必要もないのだろう。ネットでの新入会者もなく、退会者も出てきた。顔の見えない同士のやりとりには歯止めが利かないし、不特定多数の「アラシ」に襲われることもある。掲示板での批評は不可能になったし、入会の方や、遠方、地元など関係なく、若い人は短期間で辞めていく。同人誌はプロ作家志望の人には役に立たないという認識もあるようだ。継続すれば良いというわけでもないが、規模などを縮小しても、もう少し同人雑誌の灯をともしていきたいと思っている。年齢的な限界はあと十年もあるかどうか？ できれば百号までは続けたい。

(「じゅん文学」主宰/戸田鎮子)

じゅん文学の会
千四五八・〇八二二
名古屋市緑区神の倉二・三三
戸田鎮子方 TEL052・876・5476

飯田章新刊 あしたの熱に 身もほそり

鳥影社 定価(本体一五〇〇+税)



飯田章の「あしたの熱に身もほそり」(群像)は、作者らしい主人公が、母(義母)が舌ガンで死んでいくところを、ゆっくりと記述したものだ。その記述は如実に即物的で、われわれをゾッとさせる。 秋山 賢(毎日新聞「文藝時評」より)

行き場を求める人間の不安を温かい眼差しで描く

週間読書日記

2月×日 唯川恵著「途方もなく舞は流れる」(新潮社 1500円)を読む。冬の歴史を舞台にしているが、目に入る浅間山は峻烈な美しさでそびえ立ち、文章はまるでやがて、展開する物語は温かみに満ちている。それでいて行き場を求める人間の不安を描き出す筆力はのびやかだ。今回は珍しく50歳前の男を主人公にして書いていて、彼の周囲を取り巻く女たちはたまたかながら、純粋で美しい。ただしその心の奥底には本人も気づいていない、毒のある花びらがちらほら見られる。そこが読者にとっては

作家 高橋 三千綱



まもなく懸念的だ。男がいつまでもやけていると心臓に絶望と戦慄が掌ち込まれるぞと警告している。もうひとつ、この長編には主人公としての悪い出来、女や、他者から高等遊民とみられるがちな余裕のあるひとりの暮らした生活の中で、人間の欲望とは無関係に生きるたくましくいられる無垢なロクという犬が介在する。作者の唯川さん自身も都内で大型犬を飼っていたと聞くと、だが飼うには難書く、そのためにかたがたは、井沢のほずれの吉民家、に越したという、長編小説の中で犬、浅間山が登場するのは二回とこの犬で。



途方もなく舞は流れる 唯川恵

日刊ゲンダイ 2012年3月12日(日)

仙台文学

宮城県

純粋な文学雑誌を

「仙台文学」の創刊は昭和三十九年（1964）一月なので、東京オリンピック開催の年である。この誌名での同人誌は、既に戦前に発行されているが、その後を「東北文陣」を主宰していた工藤幸一が引き継ぐ形となり、さらに同氏が現在の「仙台文学」を発起したものである。その背景として、工藤が「全作家」（1981・8）の「同人雑誌文壇史（宮城県の巻）」に風土性が潜んでいることを指摘している。引用は長くなるので省くが、宮城県の文学の不毛性を三つの特徴で捉えている。①仙台藩六十二万石の封建制から脱却できなかったこと②東京との距離が縮まり、中央的色彩が濃くなったこと③東北帝国大学以来のアカデミズム支配が色濃く、庶民感覚を受け付けないでできたことである。こうした中で「東北作家」「散文」「文芸東北」「現代東北」などの同人雑誌が声を上げ、「仙台文学」も加わるのである。

創刊号の編集後記には「文化都市と称する仙台に、純粋な意味での文学雑誌が見当たらないのが何となく寂しいと

たい雰囲気は漂っていた。

「地方的な存在価値と同人制の意義をはっきりさせていきたい」とも後記には記されたが、この創刊号の世評はどうであったか。地元の新聞「河北新報」は「最近の仙台文壇は加藤秀造の『凍った河』あたりを除いて沈滞ムードといわれるが、その意味で、純粋な文学雑誌をという旗印の仙台文学が誕生したことは期待される」とご祝儀的な期待感と作品の寸評を試みている。「朝日新聞」は「なぜふえる同人誌（下）欄で『仙台文学』の創作が、こんどの創刊同人誌のなかでは、もっともすぐれていたが、私のねがう、天才的シロウトは発見できなかった。当然である。たとえば、大江健三郎のような天才的作家は、そうざらにはいるわけではない」と、小松伸六が評した。なんと大江に匹敵する作家が期待されていたのである……。ところでこの時期、「なぜふえる同人誌」との見出しが設けられたほど同人誌界が盛況であった。

現在の同人は十七名。中央公論新人賞受賞、同作品が芥川賞候補にノミネートされた佐佐木邦子も健在で、作品の合評会などでの意見が切磋琢磨の源になっている。掲載費は自己負担制なので発行上には問題ないが、ただ、同人の高齢化がやはり今後の運営に赤信号を点し始めているのは事実である。それでも、書きたいものを書きたい時に書きたいだけ書く、という意欲で支えあっている現状である。

いう感じをうずめることができるかどうか。わたしたちは旗幟鮮明な主義主張を用意しているわけではない」と、発刊の意図が記されている。意図といっても、強烈な自己主張ではない。

同人の一人は、テレビ放送会社の取締役で、同人誌発行当初の資金は全て同氏の援助によるものであった。したがって、同人たちは費用の心配をせずに執筆できたのは有難いことであった。もともと、同氏がまもなく病床に臥すこととなり、援助は打ち切られたのだが……なにしろ当時、どの同人雑誌発行にも共通していたと思われるが、印刷費用紙代等への負担がのしかかっていたのである。

発行間もない当時の状況を、「宮城県芸術年鑑」は「昨今の困難な情勢のなかで創作を続け、発行を絶やさないことそれ自体が、地方作家の情熱にかかっているのである。昭和三十九年一月に創刊された『仙台文学』の刊行は右の意味で、まことに宮城県ばかりか東北にとっても重要な役割を果たしている」と記した。

当初の同人は十三名。そのうち、創刊から携ってきたのは現在筆者一人になり、過半は物故してしまった。

当時既に「南方移民村」で台湾文芸賞を受賞した濱田雄雄、「お小人騒動」でオール読物新人賞を受賞し、その後「黒白」で直木賞候補にノミネートされた柳田知怒夫等がいた。初めて同人会に参加した若造の筆者には、近づきが

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

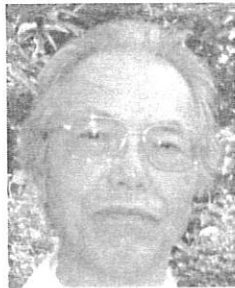
新鮮にして 重厚に
美しくして 妥協せず
花と小鳥と人間を
真实性を 味方にし
オリジナリティー磨くだけ
そして書くだけ 作るだけ
これが仙台文学

作品本位の 同人制
みな同格の結びつき
地方に深く 根をおろし
見果てぬ文学 追いながら
きょう一日を磨くだけ
そして書くだけ 作るだけ
これが仙台文学

仙台文学



79



（代表）牛島富美二

46

東京オリンピック時に創刊

仙台文学の会

〒981・3102

宮城県仙台市泉区向陽台四丁目三・二〇

牛島富美二方

☎022・372・7891

人だもの。自分の仲間に取り入れようとはかりする。もうあなたには頼らない。

結城に話さなければ。

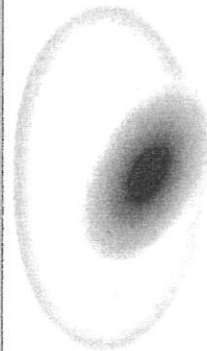
この子を産みたい。それでよければ、一緒に帰るわ。看護婦でもお手伝いでもなんでもする。あなたの妻にならなくてもいい。わたしは母親になるの。子供の父親は、はじめからいないもの。わたしだけがこの子の親になる。それでよければ三人一緒に、その島で暮らしましょう。

週末の休日が良いと真弓は思う。ようやく訪れた休息の朝に、十分に休んだ結城が床を離れる昼近く、ランチの前に話そう。

「これでいいわね」

真弓はタオルで丁寧拭いたお腹に向かい、声をかけた。マーサの去った部屋に、真弓の声が反響した。

（「南風」29号より転載）



南風

福岡県

書きたいから書く

「南風」近況——三十号発刊

文芸思潮二〇一〇年夏号「同人雑誌紹介」欄に「南風」紹介記事が掲載されて二年が経つ。この二年間での変化と云えば、編集と事務局の交替がある。引き継ぎもスムーズに進み、「南風」年二回発行を、変わらずに続けている。新しい編集は二十九号にはじまり、二〇一一年秋に三十号記念号を発刊した。特別な企画はなかったが、創刊号から在籍する発行人松本文世に「三十号発刊を迎えて」の記事を依頼し、合わせて創刊号より三十号までの目次一覧を掲出した。頁数にしてみると十枚ばかりに凝縮された「南風」の歴史だが、振り返ってみれば今日を築いてくれた諸氏への感謝の思いを深くする作業だった。

当地、福岡市には、毎年の文学活動の功績に対して贈られる「福岡市文学賞」というのがあり、二〇一〇年には「南

自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイザーとして、最良の本を作ります。

心に残る本を

200P 500部

ハードカバー

80万円上製本 並製 65万円

詩集並製 100P 50万円ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

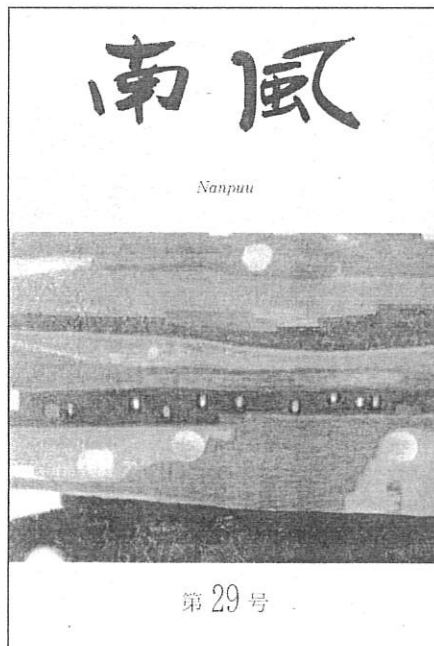
TEL03-5706-7848 五十嵐・里見まで



紺野夏子

こんの なつこ

1949 佐賀市生まれ
九州大学医学部附属看護学校卒業
福岡市在住
南風の会同人



風」二十七号「雨あがり」と二十八号「夕暮れのころ」の渡邊弘子が、継続的に発表する作品の質の高さを評価されてこれに受賞した。福岡市文学賞は第一回は白石一郎、二回目夏樹静子と続き、以後、杉本章子、片山恭一らを輩出した文学賞であるが、渡邊弘子に先立ち、年代順に記せば、松本文世、和田信子、紺野夏子も同文学賞を受賞している。「南風」二十年のこれまでに他の賞などの受賞歴や各紙からの評価などもあったが、作品は書きたいから書くのであって褒められたくて書くのではない、などと多少窮屈な青臭さもあり、ごく最近まではその手のことには後記でもふれず、読者へのご報告もしてこなかった。

しかし、考えてみるまでもなく、作品は読んでもらうために発刊するのであり、それを選者や評者が貴重な時間をさいて読み、取り上げて下さるのだから、この「南風」の姿勢はいかなるものであったかと考えるようになった。それで三十一号の後記には、三十号紺野夏子の「死なない蛸」が複数紙で評価を受けたこと、福岡の原発事故を題材とした三十号二月田笙子の「廃墟の月」を西日本新聞紙上で批評してもらったことなどを報告した。三十一号では渡邊弘子「道祖さん」が読売新聞、西日本新聞両紙に取り上げられている。渡邊弘子は昨年度北九州文学賞で「真夜中のシャボン玉」に佳作入賞も果たしている。北九州文学賞は居住地を問わずに応募出来る広域レベルの賞なので、佳作といえども快挙であった。

今回、二十九号紺野夏子「マーサの足音」が文芸思潮全国同人雑誌優秀賞に選ばれたことが一番直近のご報告となることを素直に喜ばしいと思う。優秀賞は「まほろば賞」の候補作ともなる。二〇一〇年に二十七号和田信子「ミッドナイトコール」が最優秀賞の「まほろば賞」受賞の栄をいただいたのはまだ記憶に新しい。

ところで、「南風」が長年例会に利用してきた貸会議室は、福岡城を囲む掘端のビルの六階にあった。春の桜、夏の睡蓮、秋の紅葉、堀端の景色はいつも私たちの目を楽しませてくれた。厳しい作品合評の帰り道など古い石垣と周

新しい会場の規約に、お酒と煙草は厳禁の一項があり念を押された。その点は全く問題ないですと答えた。場所をかえての発行ごとの乾杯には必ず何人かの、ノンアルコール！の声上がる。会員の半数がアルコール一滴も駄目……というの、いささか行儀が良すぎて、さびしくないこともない。目下三十二号へ向かっての作品が揃いつつある。

（「南風」編集人／和田信子）

南風の会

〒814・0014

福岡市早良区弥生2・2・8

二宮義子方

☎092・846・0736



合評会風景

辺の縁に慰められた同人も多いことだろう。今は千葉県在住の松本文世は堀端の柳の新芽をことに愛した。

二〇一二年六月、この会場が使えなくなるという通知が事務局に届いた。同人誌にとって会場確保はかなり現実的な難問の一つである。急ぎ福岡市の各施設をあたり、これまでの会場の近くの会館に申し込み登録をすませてきた。

登録の際、構成メンバーの年齢を問われた。六十五歳以上が何人かいれば賃料が減免と言われ、全員七十歳以上と答えたが、ひとりだけ六十二歳がいた。まさに高齢者団体である。しかし、最近の東京新聞紙上に「新人作家かなり晩成」の見出し記事もあった。その中で文芸評論家の勝又浩さんは「同人誌を読むと中高年層の書き手が増えていることが分かる。どんな世界でも裾野が広がれば新たな才能が現れる」と書いている。同じく同記事で、批評家市川真人さんは、「新人賞という枠でも年齢に関係なく作品を評価しようという動きが進んだ」と指摘されている。励まされる昨今である。

「南風」は二〇一二年六月現在同人人数九名である。これだけの人数で号を重ねていくには互いに支え合っていかなければ得ない。少数で心細いこともあるが、作品が印刷所へ渡る前に全員で互いの作品に目を通し、誤字脱字等の見直しができるのは逆にこの人数だから出来るメリットと言えるかもしれない。

胡壺・KOKO

KOKO来歴

福岡県

真摯な思いで書く

「胡壺・KOKO」は同人会も同人名簿もない同人誌である。創刊から八年。この間、自分たちができるやり方で続けてきた。

創刊のきっかけは納富泰子とひわきゆりこの出会いである。ある会で同席し、初対面であったがお互い名前は知っていたし作品も読んでいた。ふたり共に他の同人誌に参加していたが、何度か会ううちにふたりで同人誌を創ろうという話になった。自分たちの手で自由に新しい同人誌を創り出してみたい思いがあり、相手の作品に対する信頼が基になった。

新たに何かを創造するのは楽しい。無からの出発であり、誌名や装幀など夢見るように語り合った。誌面はカットや頁数も入れた原稿ファイルを印刷所に渡すので、印字のポイント数や題字とのバランスなど、何度も試し刷りして見比べた。しかし運営については、次の二点くらいだったと記憶している。

・それぞれが知人に声を掛けて投稿してもらおう。どちらかの推薦があれば無条件掲載だが、迷う場合はふたりで読ん

で話し合う。

・費用は発行毎に精算する。共通の費用以外は、それぞれが使用した頁数に応じて負担する。

それと、もうひとつ。購読者を募り、入金してくれた方へ本誌を届ける。発行時に送りたい人はたくさんいるが、むやみに発送しても迷惑と感じる人もいるかもしれない。そこでこの方法を取ったが、私たちの想像を超えた方たちが申し込んでくださった。少人数でやっているのに経済的にも助かるし、何より心強い応援である。

これらは「規約」という程のものではなく、忘れてはいけないので書き留めておいた。

三年が経ち、あるときHPを見たというメールが届いた。自分も小説を書いており、どこかに発表したい、とあった。それまでも何度かこのような連絡はあり、作品を送ってもらって、それぞれの感想をメールや手紙で伝えていた。しかしこの時は実際に会って感想を伝えることになった。

人様の作品を読んで、小説になっっているかいないかわからない、かろうじて判るつもりだ。しかし優れているかいないかの判断には自信がない。この時、私たちふたりは送られて来た作品を好ましく思った。

居酒屋の片隅で三人が初顔合わせし、ずいぶん長いこと話し込んだ。「あなた、もうKOKOにお入りになったら」

心ゆくまで楽しむ場だ。

昨秋、納富がKOKOを離れることになった。以前から健康面で過酷な状況が続いていた。KOKOという枠を離れても、それまでの人間関係が切れることはない。それならばと、枠の出入りをもっと緩くすることにした。メンバーとメンバー外の区別も取り払い、それぞれがやりたい事、できる事をやる。こんなことが可能なのも、お互いに対する信頼ゆえと思う。

その時どきでやりやすい道を選びながら続けてきた私たちが、決して手にできないものがある。長い歴史を刻んできた同人誌を手にする、脈々と受け継がれてきた伝統を思う。同人数の多い大所帯の切り盛りも大変だろう。

だが、私たちは私たちのやり方で進むしかない。もちろん、これでよいという思いは微塵もない。これでよいことなど、そもそもあり得ない。だからこそ不安定な試行錯誤を続けてきたし、これから先どのような変化していくかはわからない。

力量はともかく、真摯な思いで作品を書くという核の部分に誠実に守り続けていけば、「胡壺・KOKO」はきっと繋がっていくはずだと思っ



胡壺例会

文芸中部

愛知県

責任編集制の活力

同人雑誌って、長くやったりやいってでもんでもないでしょ。昔は「三号雑誌」といって、意気の合った同志が集まって喧々諤々、論争しあって、三号も出すと解散したようです。そしてまた、次の雑誌を創る。本来、芸術家の集団というのは離合集散があたりまえ。そもそも個なくして、なんの文学ぞや、そう思うのです。

といいながら、「文芸中部」は、その長くやっているのです。定見がないからでしょうね。

昭和三十四年九月、江夏美好、井上武彦を中心に堀井清、近藤許子たちが集まって「東海文学」を創刊したのが源流——もう半世紀も前のことになりました。伊勢湾台風の日が最初の合評会だったと聞いています。昭和五十六年十一月、八十号で終刊。ほぼ季刊を維持していました。実はこのころが同人雑誌がもっとも日の目を見た時期でもあります。江夏、井上のほかに上京した安達征一郎が直木賞候補、甲洋子が芥川賞候補。主宰の江夏は「下々の女」



北川朱実

きたがわ あけみ

1952年秋田県生まれ
20代後半より詩を書き始め
現在に至る
詩集5冊上梓
6年前より小説を書き始め
現在「文芸中部」同人

自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

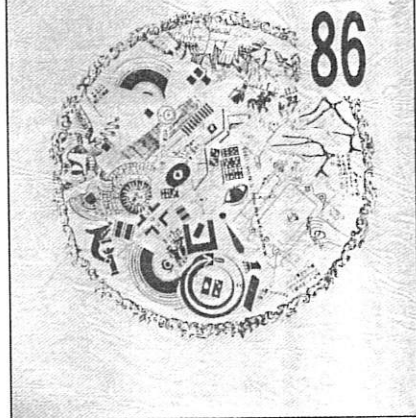
心に残る本を

200P 500部
ハードカバー
80万円上製本 並製 65万円
詩集 100P 50万円 ご相談に応じます
文芸思潮出版部へお電話ください。

TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで



文芸中部



(河出書房)で第十一回田村俊子賞を受けました。民俗学者・谷川健一も若き日、小説と戯曲を寄せています。あ、この人も直木賞候補だった。

最終後、残党が集まって「文芸中部」を創刊したが、昭和五十七年四月。井上を代表として出発。同時に責任編集委員制を採用しました。編集委員は井上のほかに福富奈津子、堀井清、堀江光雄、三田村博史、吉村登。これらが順に各号を責任をもって編集する。その後、加わった者に責任を放棄した者があって退会しましたが、おおむねこの制度は成功しているようです。というのも、長期にわたる主宰ひとりが責任を負うのは大変だし、どうも私物化する。しかも、主宰がなくなった後、継承がむずかしい例を

41

41号

見てきたからです。原稿集め、編集、校正、本の受け入れ、宛名書き、袋詰め、発送。しかも会計、印刷所、同人への連絡。書きたい主宰にとっては大きな負担。そこで「文芸中部」は輪番制にしたのです。そして編集委員は最初のうち毎号発行に際し、編集会議、校正にと集まった。年三回発行ですから合評会もふくめ年に少なくとも九回は顔を合わせた。編集会議や校正が早く終ると漱石、マルケスを論議しました。これは編集委員同士を結束させ、だれの編集であろうと比較的同水準の雑誌を発行する力を養ったと思つていす。そして現在は編集発行はほぼその号の責任者まかせ。それがまた各号の色合いをも生んでいるようです。

と、いうわけであえて代表をおく必要もなからうと代表制も廃止。井上が昨年十二月亡くなって、現在は名村和実が編集委員に加わって完全に輪番編集です。と、いって会計は福富、補助金(愛知県、名古屋市は同人雑誌への補助金制度があります)申請担当は堀井、発送と雑務窓口を三田村とトロイカ方式も併用しています。

者ですからうれいすね。またベテランの蒲生一三「再会」と堀井のエッセイ「無縁社会を考える」が準優秀作、はじめて参加の本興寺更の「跡目」も好歴史短編という五十嵐さんの評価ですから、なかなかのものと自賛してもいいかなと思つています。そういえば編集委員はいずれも中部ペンクラブ文学賞受賞者、他に北川、西澤しのぶも受賞しています。そうそう、名村は第一回まほろば賞をも受けています。



昨年夏の合宿 ▲ 渡し船の上で ▼ 坂手島小学校前で



毎回、原稿が集まるかなと心配もしていました。ところがなんのことはない、集まってくるんです。年三回発行は一度も遅れたことがありません。百二十ページを割ったこともありません。結構水準の高い作品が集まってきています。八十六号も二作が「文芸思潮」に転載と連絡がありました。それも朝岡明美、北川朱実とこの数年のうちの参加

最近、夏は合宿研修です。合評会のとゆつくり温泉の湯につかり、ドストエフスキーを、鏡花、秋声を、そしてこの夏は湯の山温泉で小島信夫を語るといふ企画です。昨年は鳥羽に泊まり、翌日は志摩の海を渡って乱歩の奥さんが勤めていた坂手島の小学校を訪ねました。いや、誌名が「文芸」ですから、堅苦しい「文学」ばかりではないのですよ。

同じ人がいつづけば同人雑誌はどうしても年々高齢化する。若者は若者で目につかないところで、「同人雑誌」という意識もなまままプリントアウトし、フリーペーパーにでもして配っているでしょう。それはそれでいい。わたしたちだつてそうだった。無理に若者を誘うこともない。一方「同人雑誌」だけに凝りかたまつてもありません。商業誌、同人誌の垣根を超えていい文学を生み出していきたくと思つています。少しばかりの自負と、大いなる意欲を持つて。まずは自身が納得できる作品を書く。これが難しいです。 (三田村博史)

●同人一八人、会員五人、同人費月一五〇〇円、会費五〇〇円、掲載費ページ五〇〇円

文芸中部の会

〒四七七・〇〇三三
愛知県東海市加木屋町泡池一・三二八
三田村方 TEL 〇五六一・三四・四五三三

諏訪哲史さん 囲んで

堅苦しく文学を語る会



80号記念バトルのあとで 前列中央諏訪哲史さん 中列右端朝岡明美さん 後列右より二人目北川朱実さん

彩雲

静岡県

「彩雲」と私

文藝同人誌の編集・発行人として、その同人の作品が受賞することは編集者冥利に尽きます。後述しますが、かつて私が文芸誌「荒土」を発行していた頃「文學界」誌の同人雑誌評の中で取り上げられる度に歓声を上げ、書き手と共に喜びを分かち合ったものです。丁度わが子が運動会で一等賞に輝くとか、描いた水彩画が校内に飾られた時の喜びに似ています。いや、運命共同体の意識の中で、老いた身に鞭打って文芸誌「彩雲」の表紙絵、巻頭詩、目次のカットなどのレイアウト等を一人で編集している身ともなれば、我が事以上の情感にひたりその嬉しさを会う人ごとに伝えたくくなります。

寺本さんと私との出会いは、芥川賞受賞作家の吉田知子氏が主宰する「遠州豆本の会」でした。寺本さんは平成四年の入会で私は一年遅い平成五年でした。豆本は一年に四回発行する。そのため同人が吉田邸に集い先生の指導のもと、三か月毎に原稿用紙三枚の校正をするのですが、寺本さんは金沢から浜松へ通うことが無理で出席しなかったらしい。だから私と会えるのは年に一回開催される「豆本祭

り」の時だけでした。寺本さんは私と会っても軽く頭を下げるだけで、自分から話し掛けてはこなかった。何時も片隅で大きな体を作務衣に包み何事にも動じないという眼差しで立っている姿は結構目立つ存在でした。一日中「豆本祭り」で同じ会場にいても私と一言も会話も無く別れたのは、今考えてみると寺本さんの雄姿が私には近づき難い存在だったのかもしれない。

「遠州豆本の会」に入会してから二年目の私に、吉田知子先生から力試しに「浜松市民文芸」に出してみたらと薦められた。試みに投稿すると三年連続で受賞しました。その時、先生が「私も寄稿するからこの機会に地方と中央の懸け橋になる文芸誌を作るのね」と言われ、名前を「荒土」と命名して薦められた。私は自分の未熟さも顧みず感激の余り自費で「荒土」を立ち上げることにしました。この話を知った寺本さんから仲間に入れて欲しいと便箋五枚に文学論を熱く書いた手紙が来ました。寄稿者としては先生に続く二人目でした。その後二十人余りの協力者があって正式に文芸誌「荒土」として順調に発足しました。その間、寺本さんの奥さんとの出会いがありました。第二七回泉鏡花賞を吉田知子先生が「箱の夫」で受賞され一九九九年十一月十三日の授賞式に私は車で金沢まで行ったのですが、受賞会場が分からず奥様の手を借りる羽目になったのです。私が詩の寄稿をお願いすると、詩人の寺本まち子

んは快く巻頭詩を寄稿するなど文芸誌「荒土」のグレードアップに力添えを頂いた。このように多くの人に支えられ文芸誌「荒土」は五年間で十号を出版する中で前述した「文學界」に十一の作品が取り上げられ一定の目的を達成して終刊しました。私はその後、文芸誌「荒土」と「遠州豆本の会」で書いた作品を自選集としてまとめ「酸性土壌」「おやじの背中」を自費出版しているうち二年が過ぎました。そんなある日、寺本さんから「今度は増田さんに負んぶに抱っこ」でなく我々も経費を出すから同人誌を立ち上げないかという手紙が届きました。これには文芸誌「荒土」に創作作品を寄せた方々や先生を退職した方、冬眠中の同志も積極的に賛同して年一回発行する事で「彩雲の会」を発足出来ました。平成十七年の暮れのことでした。

「彩雲」は試みとして三号から編集の仕方を変え、今まで同人が自主校正された原稿を私と一人のボランティアでやって来た校正を、五人の編集同人と同人の方々にも校正をお願いしたので、つまり、四号の例で言いますと、表紙を含めページから二二〇ページまでをパソコン上で編集し印刷会社に



「彩雲」合評会での同人諸氏

提出するフラッシュメモリーに入力します。ここまででは従来と変わりませんが、それを家用用のプリンターで印刷したものを、製本に開けた編集同人の方と手作りして五冊のダミー本を造り、それぞれの編集同人へ送り校正したものを更に同人へ回覧しダミー本を通して校正を進めたのです。すると本に対する愛着と同人間のコミュニケーションと潜在していた創作意識が目覚め高ぶり始めました。この試みは手間と時間と経費は掛かりますが、同人の様々な想念が同人誌に反映するという得難い収穫がありました。このように動き始めた会の雰囲気、今回受賞したことで更に加速して、五号の構想が次から次に浮かんできます。取分け表紙絵について具体的なイメージが私の頭の中で渦巻き始めました。今回の寺本さんの受賞を機会に文藝同人誌「彩雲」の質を上げ若い有能な同志を引き寄せる切っ掛けになれば有り難いのですが、そう簡単にはいきません。長い道程は覚悟しています。(増田一郎)

彩雲の会

〒431-2103

静岡県浜松市北区新都田二・二二〇

☎053・428・2892

渤海

富山県

編集者の仕事

この欄で「渤海」を紹介させて貰うのは二十四号、三十号に続いて三回目となる。当誌が、一九七四年（昭和四十九年）の創刊以来、作品を「書く」、同人が「寄る」、経費を「出す」を基本に続けてきたこと、富山県の文芸同人誌の環境にも触れさせて貰った。

先の二回では些か胸を張りすぎた観があるので、今回は編集の内情を書かせて頂きたい。同人誌に関わる姿勢を自らに問う形になるような気がする。多分、恥を書くことになると思うが、折角の機会を活かそうと思う。

編集と言っても、本誌「文芸思潮」のように、全体を眺め、読者との間に立って、工夫の限りを尽くすような苦勞をしたことはない。単純な仕事をしているに過ぎないと思う。卑近な例だが、同人誌運営の実情を伝え、苦勞を共有して頂ける方が全国でお一人でもおられれば幸いである。

「渤海」は、春季号、秋季号と年に二回刊行している。当然、年に二回の締め切りがある。編集の仕事の最初は、まず、



山口 馨

やまぐち かおる

1942年生まれ
文芸同人誌「渤海」にて小説執筆

「とやま文学」ほか地方誌紙にて小説、エッセイ、コラム発表
2008「風景—イヌイットの皮袋—」で第2回「まほろば賞」優秀賞

09「風景—月壺—」で第3回「まほろば賞」優秀賞

作品集に

『山口馨 01 - 03』

『山口馨 04 - 08』

小説集『風景』

富山市在住



風景 山口馨

それぞれに
人は、
森の奥に
水を湛えた沼を
ひとつ、
抱えている。

長畑にふさわしく
登場人物を嵐原
の中に閉くしつら
えたりとどろし
がなりのが、
（松本道生）

渤海



VOL. 59 2010・春季号

41

締め切り日に向かって同人の原稿を待つことから始まる。

しかし、約束どおりに原稿が集まることはない。原稿の入った封筒が余裕をもって届けられることは希にあるが、大抵は詫びの電話と葉書が届くことの方が多い。堪りかねて、締め切りに間に合わなければ次の号に回させて貰うと公言したこともある。しかし、仮にそのとおり実施すると、頁数の薄い雑誌を読者に届けることになる。それで、つい期限を切つて許してしまう。「読者が待っているのだから、何とか頑張ってみて下さい」と励ますことさえある。

次は、届いた原稿に目を通す。精読して書き手に感想を伝える。細部の表現についても忌憚のない意見を言わせて貰う。そして、二稿の期限を同人の方から申告して貰い、



2010.7月「渤海」県外研修
新潟県佐渡市下相川・「史跡佐渡金山」にて

また待つ。一寸した字句の訂正ぐらいなら、印刷された校で手を入れて貰うことにしている。
そして、二稿が届く。これはざっと目を通す程度だ。すでに印刷へ回す期日が迫っていて、三稿を求めることが出来ない場合が多い。

以前、「一番レベルの低い作品が、同人誌の水準を決定する」と聞いたことがある。滅多にこの言葉を使ったことはないが、心を鬼にして、辛辣に言うこともある。さぞ傷付けたことだろうと思うが、その言葉で奮起して貰うのも編集者の仕事だと思っている。

そうして、小説、エッセイ、詩、短歌などの作品が揃うと当号の掲載の順番を決める。小説が主体の同人雑誌だが、必ずしも質の順番とはしない。しかし、やはり読んでもらいたい作品を巻頭に持つていく。そして、小説の間に、エッセイや、詩、短歌を配していく。

それから、「編集後記」を書く。同人誌を受け取った人が最初に開く頁らしいので、自身の作品よりも丁寧に書いている。その号の作品に触れることはなく、もっぱら小説を書き続ける意味を問う、辛口の随筆を書くことに努めている。同人に反感を持たれかねないぎりぎりのところまで書いている。それでも、同人諸氏の目にはいつも厳しく映るらしい。

合評会の会場を予約し、懇親会の居酒屋の二階もお願い

心したいと思う。

今年で創刊三十七年、この春で六十一号を数えた。「規約」に謳っているとおり、そろそろ年四回、本当の季刊に踏み切らないかと提案するが、未だ同人の賛同は得られていない。

(杉田欣次／文芸同人誌「渤海」編集委員)

して、作品を印刷所に送る。パソコンのフロッピーディスクも添える。ほどなく初校が届く。パソコンがほとんどだから、印刷所の作業は早い。その初校を各同人に発送して、各自念入りな校正の後、印刷所へ送って貰う。そして、新しい号が編集者宅へ届き、日を決めてみんなで発送作業を行う。編集とは別だが、新年会の手配、夏季研修のだんどりの仕事もある。ここらは極めて事務的な作業である。そして、一ヶ月半くらい後に合評会を迎える。作品を載せている同人はほとんど揃う。県内の他の同人誌の方、やがて「渤海」に参加したいと思っておられる方も参加される。進行司会を決めて、順番に作品を評して貰う。

ある雑誌から、「日本文学の砦としての同人雑誌」というテーマで原稿を求められたことがある。「敢えて『砦』と言えるのであれば、それは真摯な合評会の持続ではないか」と答えた。皆、安易に他の同人の作品を褒めない。例え、厳しすぎて書き手の機嫌を損ねることがあっても、自分の感じたままを伝えることの方にみな心を砕いている。そうして、懇親会で次作品での奮起を期して貰い、編集者の一行程が終わる。

これで良いのか、まだやり方があるのではないか。いつも疑いながら役割を務めている。

同人の高齢化、捗らない若い書き手の発掘。いくつかの課題を抱えながら、まずは誇れる次号を世に問うことに腐



渤海

〒930・0916

富山県富山市向新庄町二丁目四・五

杉田欣次方

TEL 076・451・7770

絶えず頭の中を占めている不安があるものの、今日も一日が終わろうとしている。

風呂に入る時、今日こそなんとか風呂に入ってほしいという思いから、

「湯を抜いておく？ そのままにしておく？」と聞くことにしているが、答えはいつも、

「抜いておいていいよ」

やはり今日も風呂へ入る気はないのだ。

ドライヤーで髪を乾かしながら隣室の気配に耳を傾ける。パソコンを打っている様子だ。

これから朝までが息子の一日の始まりなのだ。

深夜毎日のようにコンビニへ行っている様子が、朝見るカップラーメンの空カップや袋菓子やジュースの空き瓶などの散らかっていることでわかる。

芙紗子は睡眠導入剤を飲みベッドに入る。朝から夕方までの不安感と気だるさがうそみたいに頭が冴えているが、明日の勤めのために眠らないわけにはいかない。

電気を消し、頭から布団を被り暗闇の中で、唇だけで「おやすみなさい」と呟く。

息子のエリアからはカシヤカシヤというパソコンの音がかすかに聞こえている。

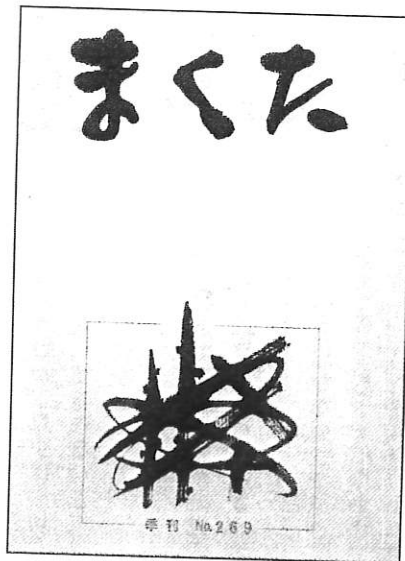
「まくた」31号より転載



平井文字

ひらい ふみこ

1942年生まれ 東京都北区在住
名古屋女子大 短期大学部卒業
同人誌「まくた」同人



まくた

「まくた」と私

平井文字

幼い頃からマンガを含めて本を読むことが好きだった私は、いつの頃からか、自分もこんな物語を書いてみたいと思うようになっていました。

五十歳を目前にしたある日、新宿の住友ビルの中に朝日カルチャーセンターというのがあり、その中に小説教室があることを知って、早速申し込みました。でも予約が詰まっていた、すぐには入会出来ませんでした。申し込んでから半年ほど過ぎた頃、空気が出来たという連絡があり、五十歳で初めて小説の書き方を学ぶ教室に入れたのです。

講師は駒田信二先生という中国文学の権威で、早稲田大学で教鞭を執っていたりしゃつたという、崇高で近寄りたいたい雰囲気を持った初老の紳士でした。

受講生は八十人くらい、年に四冊の「まくた」という同人誌を発行しており、二時間の講義で一作か二作の作品を、受講生の一人ずつが批評していくという、合評方式で授業が進められていきました。いろんな批評が飛び交い、授業は白熱して、あつという間に時間が過ぎていきます。

先生の批評は厳しく、泣き出す人もいます。そこに在籍していた間、私は六編の小説を提出しましたが、一作を除き、後は先生からも受講生からも手厳しい批

評を受け、自信をなくしていくばかりでした。しかし、とても勉強になったと思っています。

平成六年の暮、先生が急逝されたため、やはり有能な他の先生が授業を引き継いでくださいましたが、ちょうどその頃、私は一身上の都合で教室から去ることを余儀なくされたのです。その後の「まくた」については、紆余曲折を経て生徒たちだけで駒田先生の遺志を継ぎ「まくた」を存続させているということだけは耳に入っていました。

平成二十一年に私は十三年のブランクを経て現在の「まくた」に再入会しました。生徒数は三十名ほどになりましたが、懐かしい顔ぶれが揃っていましたので、古巣へ辿り着けたような感慨がありました。もちろん教室は朝日カルチャーではなく、表参道にある青山荘というビルの一室を借りての合評会です。

現在も年に四冊の同人誌の発行と、月に二回二時間の合評というやりかたは以前と変わりありません。相変わらず合評は白熱しており、充実した時間を持つことが出来ます。一年ほど前から、毎号ごとに文藝評論家の勝又浩先生に来ていただいていた一冊分の批評を受けるようになりました。

「まくた」は三十年以上もの歴史を持つ同人誌で、芥川賞をはじめ、大小、いろんな賞の受賞者を輩出しています。皆、歳を重ねてしまいましたが、五十年は存続させたいねなどと、全員で話し合っている今日この頃です。

ざいん

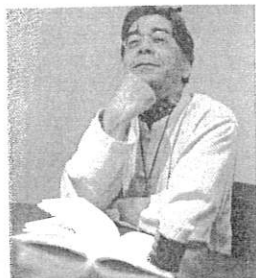
北海道

郷土から広がる

同人たちの闘志



発行人 光城健悦



同人 ことば きこう

●「未明」から「ざいん」へ

文芸誌「ざいん」（一九九七年創刊）は、「未明」（一九八四年創刊）を改題して発足した。共に北海道室蘭市が発行所になっている。編集人は井村敦で地元の印刷所経営者だ。これは強みで、何かと無理が効く。感謝している。

ここで「創刊号から「編集後記」を引く。文芸誌「未明」創刊号に後記はなく、二号になる。「二号ができた。」「ゴウウガデキタ」韻が良い。今まで文を書く作業は精神生活にとっても良いものと思っていたが、メロ調近、明け方までかかりの原稿書きは、不健全そのもの。完成が女神の微笑みならメロは肘鉄砲か」

「未明」から「ざいん」創刊まで一三年あまり。「未明」改題「ざいん（SEIN）」となった。存在する、移り変わる現在という意味のドイツ語である。振り返れば「未明」誌は十号の誌齢を越えた。改題十一号しようとの声もあったが、新同人の加入もあり、心機二転「創刊号」でと決めた」後記は

「未明」から「ざいん」創刊まで一三年あまり。「未明」改題「ざいん（SEIN）」となった。存在する、移り変わる現在という意味のドイツ語である。振り返れば「未明」誌は十号の誌齢を越えた。改題十一号しようとの声もあったが、新同人の加入もあり、心機二転「創刊号」でと決めた」後記は

こしばきこうは、舞台演出家。利賀演出家コンクール二〇〇四年に優秀演出家賞を受け、モスクワ芸術座で演劇研修。実験演劇集団「風神異人街」MS企画事務所主宰。東北北海道文学賞（小説）最終候補になる。北海道大学大学院修士課程卒。現在は国学院短期大学で講師をしている。

井村敦は、小説の腕は定評がある。「カンカン虫」を連載していた「諸願巡査」などは、地元を題材にして高い評価を得ている。地域文芸を支えていると、平林記念賞を贈られた。室蘭文芸協会や港の文学館の、緑の下を持ち上げている逸材なのだ。峠谷光博は、鋭い存在論を持ち北海道詩界で異彩を放つ。第三十九回現代詩手帳賞受賞。道内初である。筑波大学中退。小説は、浮遊する実在と存在を特異な手法で切り込んでいく。注目の若手になる。

守谷弘は、プロの作曲家兼指揮者だ。東京音楽大学卒で、現在まで日本フィル・東京フィル・都響・東京混声などを指揮する。音楽事務所「ツァイス」代表取締役。大田フィル音楽監督。交響合唱組曲「北のシンフォニー」で壮大な讃歌を仕上げた。全九楽章。エッセイの妙味はなかなかのものがある。

ただひとりの女性同人は、さとうじゅんこになる。小説は北日本文学賞（選者・宮本輝）で三次通過。家族のあり方や札幌に鋭い視線を投げかける。安定感のある筆致で、題材をすくい上げる。本誌のホームページと会計を担当。パソコンの巧者なのだ。

本庄英雄は、新同人。詩歴は長いが散文は別物で、熟達を待っている。初めての小説は本年にな

いずれも井村編集人の文である。

この改題に立ち会った先輩がいる。私達の精神的支柱になっている、芥川賞作家・三浦清宏さんだ。三浦さんは室蘭生まれの東京育ち。「長男の出家」で第九十八回芥川賞を受賞している。古里室蘭に年に一度は帰ってくる。帰られたら私達仲間と酒宴をする。改題の年、例のごとく三浦さん交えて新しい名前探しをワイワイして、決めた。少々悩んだのは、ドイツ語を使うか、和語なら仮名か平仮名か、だった。結論は「平仮名」の柔らかなさにした。いまでも気に入っている。

同人誌の目的は何だろう。井村編集人は「創作が個人の作業とはいえ、同人からの正直な感想は聞き捨てるものばかりではない。熟読してくれていることこそその評価である」という。同人同志がいちばんの熟読者は、うなずける。

私は「評価されて実力」の持論を続けている。同人の枠のなかだけで、内輪褒めやお山の大将になつては、もうそれまでなのだ。他流試合宣し、

るが、堅牢な支那きは承知しているので、期待がもてる。

海野渡は、エッセイも休みがちなので、こころの力をやりたいものだ。

最後は私、光城健悦になる。小説歴は二十年だが、詩歴はそうとう長い。詩集「人名伝」で小熊秀雄賞候補、北海道詩人協会賞受賞。前北海道詩人協会会長。詩集の他に舞台脚本と構成、「北のシンフォニー」作詩をする。これまで東京・サントリホールや浜離宮朝日ホールで演奏会をさせていただいた。「文芸思潮」現代詩賞奨励賞連続受賞。室蘭版画の会創立会員。

●壁を越える闘志

本誌は特段の旗印を持っていないが「清新で新しい作品」を求めてきた。これまで休刊はない。

この間、富士正晴全国同人雑誌賞で連続二年最終候補になってきた。北海道では当誌だけになる。同人は各人、室蘭園内を越え、全道区に、さらに全国区に挑戦している。

同人の個性は、仲間で採まれて培われ発見していくのを体感してきた。その事例を二、三上げてみたい。ひとつはリアリティの事だ。十三号のこしばきこう「冬の透視図（水槽の女）」は頭のなかの現実ではない。こしばが北大学院時代に体験したバイトが下敷きにある。彼の前作「帰郷」はホームレスを素材にしているが、その前年に舞台公演で東京に出かけたとき、新宿でホームレスに三日間同行したそうだ。事実の下敷きが、いかにリアリティを拡大させたかの事例になる。

次に触発がある。浅野清は、三浦清宏論を精力

●「ざいん」の仲間たち
ここで同人を紹介したい。同人は「同志人」と思っている。年齢順にする。

浅野清は、元公立学校校長で「三浦清宏論」で注目された。宮沢賢治研究者でもある。小説「遙かなる潮路／＼樺太逃避行」は三七〇枚の長編で、新風舎出版賞フィクション部門奨励賞を受賞した。本年度、評論「月に吹える論／＼地面の底に白い朔太郎の病気の顔」で第二十五回室蘭文芸賞本賞受賞。評論「三浦清宏」でコスモス文学新人賞も受賞。おだ多朴は、元市立室蘭図書館長。歴史小説時代小説ではない。に長じている。史実や実録に大胆な仮説を立て虚構の空間を組み立てる、希有な書き手なのだ。室蘭文芸賞佳作受賞。緻密に虚構を編みながら、リアリズムを構築していく。

的に展開してきたが、もうひとつ、金田一京助や知里幸恵に取り組んでいる。アイヌ文化の継承運動に参加を始めた。これは浅野が登別市に住んでいるのに係わる。郷土史実が根っこにある。地場素材ともいえるし、貴重な素材にもなる。本年、知里幸恵の記念館が登別に建てられる。特に近年アイヌ文学研究が熱を帯びてきた。それと間わり縄文アニミズムも注目されてきた。北東北から道南地方を一带にした「世界文化遺産」登録が現実味を増してきたのだ。

そして表現の壁がある。こしばのエッセイのなかに「小説の大きな壁にぶつかると。書けば書くほど、佳作」という条件を備えていない。表現の鮮烈さ、独自性がない。言葉が躍動感を欠いて、表現の新鮮さが持続されないのだ。何よりも表面的巧緻さばかり目立ち、物足りない空疎な作品になる」とある。だれもがぶつかる焦り、自信喪失、そして平仮名さだろう。「ざいん」の同志たちと（作品で競い合い、評価で讃え合い）たいものと念じている。

例会は「雑談会」だが、密かな闘志がチラチラ見えて、そこが楽しいのである。（光城健悦）

ざいん 事務局

〒050-0071
北海道室蘭市水元町二二七 光城方
☎0143-4611242

南風

福岡県

人間の姿に迫る

創作への衝動

「南風」は平成四年八月、当時、福岡朝日カルチャーの「小説とエッセイ」教室の講師をつとめられた故中村光至氏主導で創刊されたもので、会員は全受講生であった。

誌名については、当初、会員間でいくつかの候補があったのだが、九州という南の地から風を起すという気概から「南風」に決まったと聞く。「なんぶう」と読む。

創刊号のあとがきには、現在発行人の松本文世が「不安と期待を二つながら持って新しい雑誌を発売いたします」と書いている。そもそも物を書くということ自体が、常に不安と期待を孕んでいるので、創刊から十八年、今も毎号、発刊のたびにその思いが変わりはない。

こんな主題でいいのだろうか、この完成度で発表していいのだろうか、常に不安を持ちながら書き続け、どうにかここまで号を重ねることが出来たのは、仲間が一緒だったからに他ならない。喧々譁々の議論の末に、印刷所に渡して出来あが

り待つときめき、人の手に渡って評価を待つ高揚のとき、そうしたささやかな期待もなければまた継続は出来なかつたはずである。

創刊当初は、詩あり随筆あり小説ありだった誌面を、今は、ほぼ小説中心の同人誌として位置づけている。いつから……という線を引いたわけではないのだが、流動の多い同人の中から、小説というジャンルだけに絞って、真摯に小説に取り組みたいという仲間だけが残って今に至った。

仲良く作品が並べばよいという初期のころに比べ、年々、作品に対する批評は厳しくなっている。他人の作品に厳しいだけ自分の作品にもそうでなくはならず、自他の作品に対して責任ある姿勢が出来てきたということである。他人の長所だけが褒めていけば無難だが、それでは進歩はありえない。そのことを冷静に見つめ、そして批判する精神もまた台評の場で養われるのである。そうはいっても、作者は、それぞれ違った価値観を持ち、作品への愛着も思い入れもあり、そこから当然、

字どおり裏のときとポジティブに捉えてもよいのではない。

創刊時からこれまで、才能を持ちながら何らかの事情で去った人、夢を持ったままで亡くなった人、彼ら彼女らの築いてくれた礎の上に今の南風がある。それを忘れずに私たちはこれからも南風を継続させるためにしっかりとやっていこうと思う。

南風同人数は平成二十二年四月、二十七号発行時、十一名である。男女の内訳は、男三名、女八名で数の上からは女性が男性を圧倒している。福岡市在住九名、佐賀県鳥栖市在住一名、千葉県八街市在住一名である。人数からいえば決して多勢の会ではないが、熱気は中々のものである。締切の会では、間に合わなければ次号送り、待たない。そのため年二回、次号にチャンスはあるのだから無理をしないでと言っても、みんな目前の号に間に合うように提出期限を守る。とにかく発表したいのである。だから、南風に限っていえば原稿が締め切りに間に合わないということはほとんどないのである。

身銭を切つてようやく出すのは何故だろう。みんな表現したい何かを持っているのだ。そして書けるうちに書いておかないと若くはないのである。その待たなしの心意気、また良きかな、ではあるまいか。

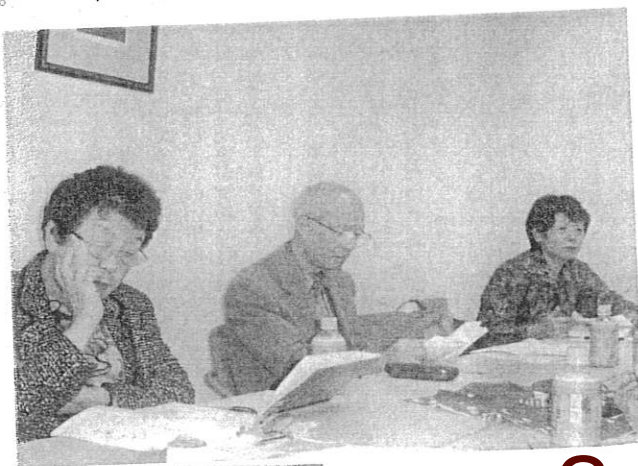
(編集委員 和田信子記)



意見、見解の違いが発生する。同人誌の合評会はやわな精神のものには居たたまれない席なのかもしれない。しかし、自分の作品を客観的に見つめ直す良い勉強の場になっている。南風が合評会を大事にする所以である。

当初、年一回発行だったが、より多い発表の機会をという機運が高まり、十一号平成十四年から年二回発行になった。その頃から何となくみんなの気合が入ってきたような気がする。発行回数が増えたことが、皆を追い立て、集中力が増したのだともいえる。年一回で、じっくり練って良い作品に仕上げるのが先決だとこだわる意見もあったが、時間をかければ必ず良くなるというものでもない。今では二回発行になって良かったと思っ

おかげで新聞各紙、文芸誌等で好意的に取り上げていただく機会も増えた。福岡市文学賞、市民芸術祭賞等の受賞者も数名いて、同人各位が確実に力をつけてきている。



36

36号

南風

作品を書いて発表するということは、ただ冊子として残すということではなく、大げさにいえば世に問う作業ともいえる。同人誌で書ける、作家を目指す時代ではない。みんなそんなことは百も承知の上で、ただひたすら書きたいから書くのだ。それが自己満足でなく、多少なりとも共感を呼んで読んでもらえているのか、他人の批評に堪えるものかどうか、その意味での問いかけでもあろう。

素人が書いた同人誌など、ひと様にお金を出して買ってもらうのは気がひけるのだが、それでもこのころは南風にも購読会員がふえた。そんな幾人かから、このころ本屋で売っている文芸誌の小人から、さっぱりわからないものが多い、あるいは話しみじみしない、南風の小説のほうがよほど身近で胸に迫るなどと言われる。百パーセント、真に受けるわけではないが、全く当たってはいなくもなると白黒目撃している。そうした顔の見えない読者からの感想などを預けると、もっと頑張ろうと思うのである。

どちらも同様のようだが、南風にも高齢者は多い。いや、長く続いているうちにみんなが、齢を取ったというだけのことである。齢をとると、若いときには見えなかった、人の心のあや、人生の機微、それらがよりしつかりと見えてくる。それは小説を書く上で、きつとプラスに働かずには同人雑誌に高齢者の多いことは嘆くべきことではないと、聞き直しても良いのではないか。書きたくても、まずは生きるために働くことを優先せざるを得なかった時を過ぎ、いまま多少、時間のゆとりも出来て、小説を書くことができる、それを支



〒814-0113
福岡県福岡市城南区
田島三一四三 小津和方
☎092-831-6653

南風 事務局

それから半年ほど経ったころ、知覧の桃山さんから小荷物が送られてきた。何だろって中を開けてみると、一冊の本が入っていた。何かの参考になればと思ってお送りしますという書状も添えられていた。題名は「ある整備兵の告白」で、著者は知覧で特攻隊機師の整備に当たっていた水田誠治という人である。私は興味を覚え一気に読んだ。

知覧飛行場へ配属された著者は、そこが特攻隊の出撃基地であることを知り身が引き締まる思いをする。やがて沖繩へ特攻攻撃が開始され、夜を日に継ぐ整備が始まる。彼は丹精を込めて整備した愛機に乗って出撃する特攻隊員を心が張り裂ける思いで見送る。しかし、そのうち資材の不足を来し、有り合わせの部品や材料を掻き集めその場しのぎの整備しかできなくなる。彼から見れば、それは手抜き工事と同じである。それにもかかわらず、特攻隊員には整備完了だと報告し、どうせ片道飛行なんだからと自分に言い聞かせる。彼の心は次第に麻痺していき、特攻隊員の悲壮な死にも動じないようになる。そして、口先では彼らの死を悼みながら、心の底では我が身の安全をほくそ笑んでいる己に気付く。そして終戦のときまで、彼は上官の片棒を担いで軍の物資をトラックで運び出す。

彼は最後をこう結んでいた。
学問もなく文章も拙い私が恥をしのんで心のうちを曝け出そうと思いついたのは、それが沖繩の空と海に散った特攻隊員に対する私の罪滅ぼしだと思っただけである。

この最後の一節を読んだとき、私はふとあることに思い当たった。死を三日後に控えた夜、林田さんは、これまで誰にも話したことがなくこのままあの世まで持つていくつもりだったという自分の過去を私に明かした。そのとき、私はそれを私に対する信頼の証だと思って聞いていたのだ。だが、よく考えてみると、それは私に対する信頼の証というよりも、戦死した中嶋泰志らに対する贖罪だったのではあるまいか。このことは、彼が最後に付け加えた「このままあの世まで持つて行ったら彼らに叱られるところだったでしょう」という言葉からも窺えるような気がする。そして、彼が中嶋泰志という名前を名乗っていたのも、おそらく同じよう

な気持ちからだったのではないかと思われるが、こちらの方は今ひとつ釈然としないものが残る。

〔後記〕

この作品のストーリーや登場人物などはすべてフィクションです。知覧のご遺族の方々や関係者の皆様には誤解を与えないよう、ここに記しておきます。

海峡



西山慶尚

にしやま よしひさ
1940年 愛媛県西予市野村町(旧愛媛県東宇和郡中筋村)に生まれる
1965 東京教育大学理学部卒
その後、愛媛県内の公立高等学校等で勤務する(2001年3月に定年退職)
1989 文芸同人誌「海峡」に参加し、小説を発表する

36号

●同人雑誌紹介

海峡

愛媛県

今治から発信する文学世界

活発な発表・出版

「海峡」十二年の歴史

明石海峡が開通し、今治と尾道を結ぶしまなみ海峡の開通一年前、平成十年四月に今治を発信地として幅広い世代や地域に呼びかけていく文芸誌を目指し、今治在住白石美保子が発行人となり創刊した。白石に賛同した斧文夫が編集、画家、長崎幸子の協力を得て創刊となった。同人は十六名集まったが創刊号に作品発表をしたのは、十一名である。

創刊号 平成十年四月
発行 白石美保子
小説 奈野純一、斧文雄 広海日花里
ショートショート 川崎敬子
詩 藤井信子、日野郁子
評論 山本美登子
随想 金森幸、h i r o m i
ノンフィクション わたなべキエ 白石美保子
表紙絵 長崎幸子

二号 平成十年十二月
発行 白石美保子
初掲載 尾川みどり、西信真規子、大亀藤英、藤井裕子

★同人消息
小松紀子「花火」が愛媛文芸協会賞を受賞。
長崎幸子 平成十年八月今治市河野美術館にて開催された「高階重紀とその弟子たち」展に、百号の油絵「憩える緑」を出品、好評を博す。

奈野純一 創刊号の掲載の「錨をあげて」が「週刊読書人」平成十年七月十日号の同人誌評に取り上げられる。
村上健二 親友村上景一氏との共著「南十字星への旅」を平成十年六月に出版。
渡邊ひとみ 愛媛新聞の「てかがみ」に「主婦とキャリアの間」が掲載される。

三号 平成十一年六月

発行 白石美保子
初掲載 小松紀子 田窪真二、渡辺立子
★同人消息
田窪真二 主催する「かげろう座」より「シネマ・エクスプレス」を出版、故澁川長治氏のシネマエッセイも掲載されている。
山本美登子 愛媛新聞「へんろ道」に「誕生祝い」が掲載される。

四号 平成十一年
発行 白石美保子

五号 平成十二年六月
発行 白石美保子
初掲載 白石恭子、越智義邦
★同人消息
金森幸 創刊号掲載の「ああ、満州」を加筆して出版。

六号 平成十二年
発行 白石美保子

七号 平成十三年七月
発行 白石美保子

八号 平成十四年一月
発行 白石美保子

事務局
〒799・1522
愛媛県今治市桜井4・2・18
藤井裕子
☎0898・47・3699

★同人消息
西山慶尚 七号掲載の「よじわの茂蔵」武蔵野書房発行の図書新聞に取り上げられる

九州文學

福岡県

「良質」の作品を目指して

「九州文學」は昭和十三年生まれだ。火野葦平さんや岩下俊作さん、劉寒吉さん、長谷健さん、原田種夫さんといった人たちが築きあげてきた老舗である。すでにその先人たちはこの世にはいないが、「九州文學」は健在だ。

しかし、近年の同人の高齢化、若者の参加の減少という傾向はわが「九州文學」においても例外ではなく、百人ほどいた同人数も一時は半数ほどにまで落ち込んで存続が危ぶまれた時期もあった。このまま立ち消えてしまったらどうしよう。先人たちの厳しい眼が天の上から針の雨のように降り注がれる。絶対に「九州文學」の灯を消してはならぬ。天の声は私たちの耳に痛いほど響き渡る。

先も見えず、気力も喪失したまま惰性的に続刊していた第六期を断ち切って、第七期を立ち上げたのが平成二十年の春であった。新しく出発するにあたり、編集委員たちが福岡に集まって、とにかく「良質」の作品を目指すことを

誓い合って意思を一つにした。
その第一号に発表した編集委員でもある江口宣の「イエスよ涙をぬぐいたまえ」が「文學界」の下半期同人雑誌推薦作になり、幸先のよいスタートを切る事ができた。これに弾みがつき、同人たちの創作意欲が増し、次々に話題作を発表するに至った。

その後、「文學界」の同人雑誌評の打ち切りという残念(?)な仕打ちにあったけれども、地方紙の「同人雑誌評」や「文芸思潮」「季刊文科」「三田文学」といった文芸誌の応援をいただいたことで、同人たちの創作意欲は衰えるどころか、ますます盛んになったのである。

そうなると思えないことで、どこからともなく若い人たちからの問い合わせがメールを通じて現れるようになった。これは樋脇由利子さんの「文芸同人誌案内」というホームページを通しての訪問である。「九州文學」もここで紹介されていた。同人になりたいがどうすればいいか、というのである。彼および彼女らはどこかの新人賞に応募し、何回も失敗した挙句、同人雑誌に発表の場を求めてやってくるのだらうと思っていたら、そんな人ばかりではなかった。その中の一人は、今の商業誌にあきたらず本屋さんで手にした同人雑誌を読んでいるうちに自分も書いてみたいと思ったのだという。そう言えばわが「九州文學」も近辺の本屋さんで置かせてもらっているのだが、どこの本屋さんで

も一冊も売れなかったという号は一度もない。一つの本屋さんで最高二十八冊売れたこともある。これには私たちの方が驚いた。この現象をどう捉えたらいいのか、私たちはまだ捉えきれずにいるのだが、潮が満ちてきたことだけは確かだろう。

同人数もようやく百人近くにまで回復し、皆無だった二十代、三十代の同人が最近ではさらに増え続け、四十代までを含めると全同人の一割を超えるようになった。直近では十代の人も加入した。本誌に転載の、同人雑誌優秀作に選ばれた林由佳莉もその若手の一人である。

「良質」の文学こそ「九州文學」の目指すべく方向である。

第七期「九州文學」は季刊で、現在、すでに九号(通巻五百三十号)を発行している。

〔九州文學〕編集人・波佐間義之



九州文學発行事務局
〒809・0028
福岡県中間市弥生一・〇・二五波佐間方

☎093・244・8501

35号

35

風の森

東京都

酔妄の梁山泊

新宿や銀座などの繁華街では、風の森という言葉は爽やかで上品なイメージを喚起させ、文化的な趣きを感じられます。温泉や喫茶店また日本酒や文化サロンなども親和性があるようです。しかし、北海道のブナやトドマツの原生林に風が舞うと、深い森林のざわめきが不気味な暗い予兆を感じさせるところがあります。

新宿ゴールデン街は世代交代の時期になっていて、若い人の飲み屋の新しい看板が目につき、団塊の世代はすこしずつ肩身が狭くなっています。学生運動の華やかな頃、薄汚れたカウンターで激しい議論の火花が散り、泣きながら立ち去る連中もいました。いまでは隣の席のお客と理屈を捏ね合うという雰囲気は希薄になっていますが、住職や映画監督あるいは絵描きや編集者などの出入りする酒場はやはりセピア色の香りが漂い、懐かしい時代の幻想に浸れます。



第10号
2009-10

両手を広げれば両側の軒に触れそうな狭い路地——十年ほど前に酒場・風の森が開店し、団塊の世代の常連が多く、文芸誌「風の森」はその名前を拝借しました。ウイスキーやリキュールが乱雑に並んでいます。酔えば奇声を上げる禿頭や、ポケットから小さな緑ガメを取り出す老人は出入り禁止になりました。カウンターで語り合う常連は穏やかな人格者で、文学の毒とは無縁です。風の森の同人は別の場所に徘徊しています。

主な書き手は六〇歳代で、美しくはない過去を引きずっていて、光と闇の対比に惹きつけられたのはずっと昔の物語です。思想に疲れ、感覚も鈍っていますが、言葉による

35号

35

表現には妙にこだわっています。小説と批評との識別から離れ、思うがままに書くという行為に惚れているのです。人間の心理や宇宙の神秘など、面白い事象は無限にあり、それを表現する試みはお酒を楽しむことにも通じているようです。

文学と社会あるいは文学と人間などは迷妄の視点であって、頭の中のイメージをどのように文章化するかが問題なのです。自分に似合った文章を創り上げ、つまり言葉の職人に徹することによってはじめて個性が生まれてくるのではないのでしょうか。昔の作家はひたすら原稿用紙に向かい、言葉の宇宙をさまよっていたのです。文学の社会的意義などは後付けの屁理屈にしかすぎません。マスコミは文学や絵画をひとつの文化事象として捉えています。そこに安住するのは敗北です。

文芸誌・風の森は精神の梁山泊であり、他者の視線に惑わされず、みずからの夢を追い、それが唯一の現実になっています。その手応えが未知のエネルギーを誘発し、道なき道を切り開き、そこには文体というものが生きています。文章による表現はすべて文体に収斂し、精神と肉体の意匠なのです。皆川勤は気配りの味わいに満ち、遠矢徹彦は不思議な迷宮をさまよっています。

常連の皆川勤は豊かな教養と知識を自在に操り、地味ながらも示唆に富む評論で多くの読者に支えられています。

説得性の高い論評は風格を滲ませ、図書新聞などで活躍していますが、突然、雄大な構想の思想小説を発表しても不思議ではありません。そういう気配は確かに感じられます。遠矢徹彦は団塊の世代よりも先輩であり、安保闘争や全共闘の荒波を掻い潜っていて、その経歴を独自の幻視の世界に昇華しています。泉鏡花記念金沢市民文学賞の受賞者です。精神の闇を精妙に描き、現実そのものは妖しい幻視の中に織り込まれ、闇の美しいメタモルフォーゼは存在するものに内在する原罪をも照射しているかのようです。商業誌や若い世代のはるか頭上を飛翔しているのです。

(編集長・東谷貞夫)



柳田暢子

「少女の祈り」

風の森編集室

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田三・一・三

☎0364576430

飛行船

徳島県

『飛行船』の目指すもの

『飛行船』は代表である竹内菊世の、文学へのあくなき憧憬から出発した。創刊号「編集後記」から抜粋する。

「『飛行船』。幼い頃、我家の上を悠々と、堂々と、慌てず急がず、音もなく横切り、だんだん遠く小さくなって行く不思議な乗物に、ずっと魅せられていた」

竹内は四十年來の「徳島作家」の同人であった。同誌は一九五八（昭和三三）年に田中富雄が創刊し、半世紀にわたって徳島の文芸界をリードし続けた同人誌である。同人には芥川賞候補になった岡田みゆき、直木賞候補の中川静子らがいたが、田中、中川が他界し、岡田も高齢のため書けなくなったとき、「これまでの栄光の輝きが失せぬ今、その幕を閉じよう」という提案がされ、二〇〇六年、五八号を出して終刊した。しかし、文芸の灯をこれからも点し続けたいという思いは、それぞれの胸の中にあつた。

二〇〇七年の年明け、竹内菊世は新たな同人誌の創刊を旧知の仲間達に呼び掛けた。『飛行船』。その呼び名が集つ



5号出版記念祝賀会 会員から大きな花束を贈られて喜ぶ竹内と、会員たち。前に座っているのが齋藤澄子。右端、作者の松崎。

た者の共感を得た。まさに互いの夢を乗せて飛立つのに相應しい誌名であった。創刊から参加したのは、元「徳島作家」同人の齋藤澄子、鮎合巧、松崎慧。歌人で「玲瓏」編集委員の松田一美、詩誌「逆光」主宰の宮田小夜子、「阿波の歴史を小説にする会」の藤本好浩、徳島ペンクラブの丁山俊彦の七名。竹内がこれと見込んだ同士である。

『飛行船』は、新緑の美しい五月、創刊を果たした。

「ぱんと膨らんだ機体は、夢がいっぱい詰まっているように、希望を託するにはうってつけのように思う。八人の夢を乗せて、悠々と優雅に飛んでほしい。声高に主張せずとも、しつかり存在感のある雑誌に育ってほしい」

それが、私費を投じて同人誌を創刊した竹内の思いである。小説六編、評伝一編、エッセイ三編。かくして一五〇頁の文芸誌が誕生した。巻頭作品は齋藤澄子の「風花」。他人の幸福を次々壊していく習性を持った女性の姿を通して、人間の心模様や生き方を描いている。竹内の「闇の入口」は老老介護の問題をテーマにしている。いずれも現代社会を反映した作品である。徳島県下の文学関係者からも、暖かい反響を得ることができた。

第二号では、第一回大阪文学学校賞を受賞し、現在チューターを務めている四宮秀二氏の、「夕陽に赤い帆」を招待作品として掲載。宮田小夜子が長編評論「倉橋由美子『夢の浮橋』—性と文学について—」を発表。以上の二編によ

って『飛行船』は、本格的な文芸誌の骨格が備わってきた。

三号では、齋藤澄子が「水葬—永昇丸沈没する—」を発表。この小説はアメリカの原子力潜水艦と民間船の衝突事件を扱った問題作である。あり得ないことがあり得たこととして描かれている点が話題となり、各誌で取り上げられた。齋藤は四号で「謎つばき女波町」を、五号では「消罪の寺」と力作を発表し続けている。「文芸思潮」「文学街」の同人誌評でも絶賛され、新米同人誌『飛行船』の存在を示している。七〇歳代半ばの彼女が秘めた文学的才能と書くパワーに、同人たちは勇気と希望を与えられている。

二〇〇八年発行の四号からは、大北恭宏が評論陣として参加。「吉本隆明論」の連載で、博学ぶりを披露している。また、松崎慧は「宮内鳩彦の誌友たち」と題して、戦後の徳島で、詩作に情熱を燃やしていた詩人たちの評伝を毎号連載し、関係者の好評を得ている。

以上、『飛行船』は順調に号を重ね、五号発行を記念して、「第一回飛行船文学賞」を公募した。これは、県下の文学を志す者への呼び掛けであり、後進育成の目的でもある。幾編かの応募があり、文学賞に該当作はなかったものの、「麦わら帽子の父」の佳品を優秀作とし、作者高木純を表彰した。六号からは高木も同人として作品を発表している。

竹内の文学への情熱に引つ張られ、協賛してきた会員は、

日本の新文芸交流の渦を！

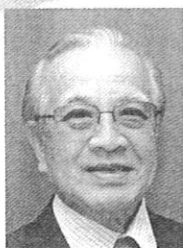
徳島県
三好市



富士正晴 全国同人雑誌 フェスティバル

2010

10月30日・31日開催



全国同人雑誌の文芸交流をめざして

全国の同人雑誌作家みんなで集おう

富士正晴生誕の地、同人雑誌のメッカ徳島県三好市で
ここから日本文学の新たな興隆を

- 第4回富士正晴全国同人雑誌賞授賞式 10月30日 1:30
- 特別記念講演「小説家の頭—アイデアを探せ—」
作家・日本ペンクラブ会長 阿刀田高氏 30日 2:00
名古屋で出会って5年、今年是三好市で!
- 第2回全国同人雑誌会議「同人雑誌という主張を広げる」
対話シンポジウム 勝又浩・松本道介 & 富士正晴賞受賞3者・徳島代表 30日 3:30
懇親バーデー
- 「作家&読者交流のつどい」全国同人雑誌振興会 30日 6:30
- 全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会
■大歩危オプショナル観光あり 31日 9:00

会場■徳島県三好市（甲子園でおなじみの池田高校の所在地）ホテル・サンリバー大歩危など

主催■富士正晴全国同人雑誌賞実行委員会・徳島県三好市・三好市教育委員会

後援■徳島県教育委員会・県立文学書道館・徳島新聞社・四国放送・徳島ペンクラブ・中部ペンクラブ・
全国同人雑誌振興会・三田文学・季刊文科・文芸思潮・作家集団「塊」・文学街

問合せ先／申込■三好市生涯学習課 TEL0883-72-3900（団体・グループ申込歓迎／個人参加も歓迎）

※参加申込先 中部ペンクラブ 〒461-0004 名古屋市長区葵1-16-31 サンコート新栄9F TEL052-931-5230 FAX052-931-5606
文学街 〒168-0065 東京都杉並区浜田山2-15-41 TEL&FAX 03-3302-6023
文芸思潮 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
右の団体でとりまとめ 受付をします。こちら にお申し込みください。

飛行船

同人雑誌紹介



多少の出入りを含め、現在十名。二〇一〇年五月には七号を発行する。会費なし、会則なしのつましい会であるが、唯一「書く」ことが会員の資格である。書けなくなったり、発表を怠ったりすれば、退会である。地道に書き続け、発表し続ける会員によって『飛行船』は支えられている。平均年齢の高い『飛行船』であるが、健康に留意し、勉強を怠らず、文学的興味を磨き、世間の動きを察知する努力をして、これからも弛まず勤しんでいきたいもの。「徳島に飛行船あり」と、文学を志す若者が憧れる存在となり、中央に通用する同人が育ってくれば嬉しい限りである。これが、代表竹内の目指すところであり、我々同人の向かっていく方向である。（松崎慧）

飛行船

連絡窓口●竹内菊世
〒460-0026 徳島市通町二・二
TEL&FAX 088-655-2074



徳島 阿波踊り

35号

クレーン

群馬県

『クレーン』エッセイ

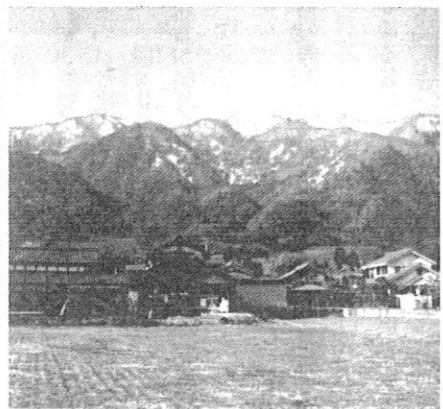
前橋文学伝習所事務局 和田伸一郎

一九七九年の創刊です。「クレーン」という誌名は、井上光晴著「虚構のクレーン」より、井上光晴さん自身に命名してもらいました。井上宅で、私たちが提案した「風嶺」に、「これでもいいんだけど、なんか俳句の雑誌みたいだな」と言っただけで考え、「虚構のクレーン」はどうかと井上さんが提案した。それを横で聞いていた井上夫人が、誌名に「の」が入るのはおかしいわよといわれ、「クレーン」に落ち着きました。

創刊時は、建設機械であるクレーンの一般的なイメージと文芸同人誌のイメージとのギャップがはなはだしく、説明するのに困惑してしまいました。

前年度の井上光晴文学伝習所前橋分校（後の前橋文学伝習所）の参加者の有志十五名が、創刊メンバーでした。二十代から六十代までさまざまな職種の人が集まりました。

クレーン 31号



35

初めて小説を書くという人が、半数以上いました。文学伝習所の師である井上光晴さん（井上さんはセンセイと呼ばれることを嫌っていた）に、毎号、合評会に出席していただき、厳しい批評を受けました。井上さんは、書くことと生きることとの関係を常に問い続けることの重要性を、私たちに訴え続けました。

その井上光晴さんも、一九九二年に癌で亡くなりました。それは私たちに、自立していくことを強いるものでした。私たちの多くは、自分で道を切り拓くことをこの次とし、受動的になっていました。今さらながら、井上さんが口癖のように言っていた、君たちは努力が足りないという言葉



中山茅集子

なかやま ちずこ

- 1926年 北海道札幌市にて生まれる
- 1944年 広島県立府中高女卒
- 1976年 「蛇の卵」にて中央公論第19回女流新人賞受賞
- 1977年より1997年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
- 1988年 同人誌「ふくやま文学」創刊、今年22号を出す
- 1997年より同人誌「クレーン」に小説を投稿、現在に至る



自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

心に残る本を

200P 500部

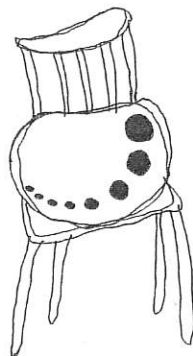
ハードカバー

80万円上製本 並製 65万円

詩集 100P 50万円 ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで



35号



上光晴さんが亡くなってから新メンバーの加入がほとんどなかったため、これは強力なメンバーとなりました。

二〇〇五年に、第二回富士正晴全国同人雑誌賞特別賞を受賞したことが、大きな励みになりました。

『クレーン』という誌名を群馬県内外の人たちに知ってもらえるよいきっかけとなりました。

年一回の発行(二〇〇部)で、『三十一号』となりました。『三〇号』は、井上光晴特集と「ハンセン病療養所入所者からの返信」が話題を呼び、完了しました。

現在は、会員十名で、五十代から六十代が中心です。群馬県内の

が身につまされたものです。その後、井上光晴という類まれなる強烈な個性の持ち主である師を失い、会員は少しずつ減っていきました。それでもぼくらひとりひとりの中に、井上光晴さんの生きざまがいろいろなかたちになって残っています。しばらくして、東京の『新文学伝習』が解散し、そのメンバーが『クレーン』に仲間入りしてきました。井

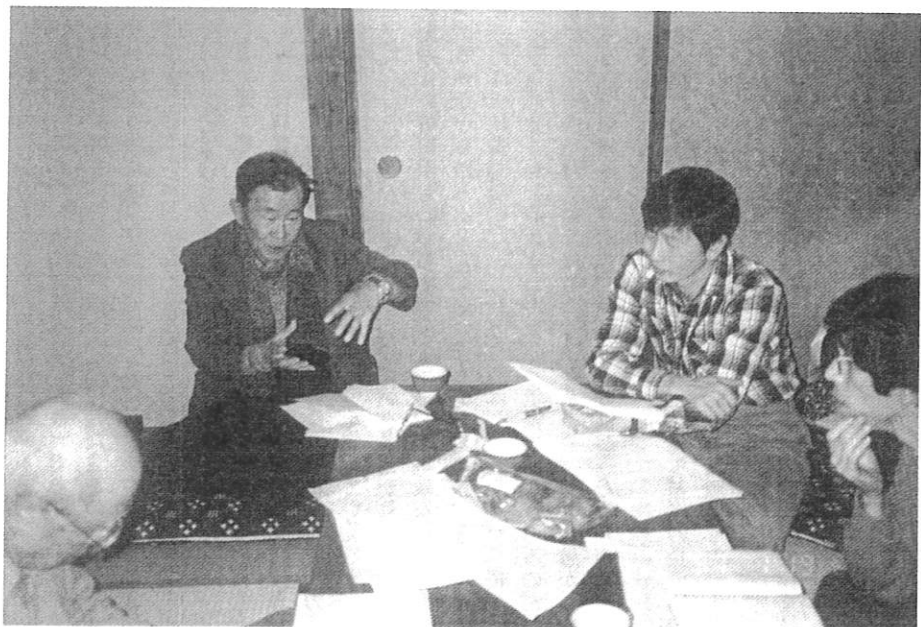
会員は二名となり、埼玉、東京、千葉、沖縄と分かれていきます。『一七号』以来、私の個人編集が続いています。同人誌といえども、自分自身が読みたい雑誌をつくりたい。まず自分が読者として楽しめる雑誌をつくっていきたいとおもってきました。

心がけていることは、開かれた同人誌とすることです。

同人誌はとかく内向きになって、部外者が読むことを想定した編集になっていないのが大半でした。そこで、『クレーン』では、執筆者紹介欄やイチョシ本コーナーを設けて、部外者にもとつきやすくしました。また、特集エッセイを組んで、会員以外にも広く原稿募集しています。そのため、会員以外の執筆者は毎号います。

マンネリ化を恐れて編集を交代することも考えましたが、井上光晴さんと懇意にしていた編集者から、持ち回りはよくないとアドバイスされ、とにかくやれるところまでやろうと決意しました。今後も、おおいに楽しみながら文芸同人誌の可能性にチャレンジしていくつもりです。

※ホームページ <http://www.geocities.jp/hiwakili/doujin/kakushi/crane.html>
「文芸同人誌案内」で検索。同サイトの同人誌一覧から「クレーン」をクリック。



クレーン

〒371-0035
群馬県前橋市岩神町三・一五・一〇
わたしんちろう方 前橋文学伝習所
TEL & FAX 027-2335-3999

北海道の同人雑誌の動き

札幌文学 田中和夫

八月に札幌文学の七十四号を出した。

小説十一編掲載の二百頁。今号は圧巻、という評(?)を中央の文芸評論家からいただいたが、平成十五年の六十二号以降は年二回の発行を続けているので、この七年間だけで十四冊の発行。小説は一冊に十編前後を載せているから実に百四十編ほどを生み出したことになる。

札幌文学の創刊は昭和二十五年(一九五〇年)で来年は創刊六十年。来年の七十五号は創刊六十年記念号とする予定で、いま思案中である。創刊号から七十四号までの総目次、物故者を含めた全同人氏名、各文学者受賞者一覧とか、梅田昌志郎、上西晴時、小楡山博、東直己氏ら活躍中の元同人の寄稿もほしい。札幌文学の代表作の再掲もあっていい……とプランだけはなかなか「圧巻」で、どんどん膨らむ。創刊六十年記念号は来年六月の発行を予定し、現同人の作品も通常通り載せるので二百頁は軽く超え、このプランでは三百頁の分厚いものになるかもしれない。

札幌文学はこのように、いまのところは順調に誌齢を重ねているのだが、他誌はどうなのだろうか。最近はどこも同人の高齢化が進み、同人が減少している状況にあるよう

だ。先行きが危うい所もあると聞いている。

そこで六月、江別文学や鉄道林の編集者たちの賛同を得て札幌地方同人雑誌懇話会なるものを立ち上げた。札幌地方で同人雑誌に関わっている人たちが交流を図り、それをバネに互いが元気づけられ、競い合って継続発行ができればと願ってのものだった。札幌地方に限定したのは、まずは足元を固めるためであり、いずれは北海道全域に、という思いがあつてのことである。立ち上げの趣旨に賛同し、会場の札幌市内のホテルに参集してくれたのは人間像文学会、山音文学会、蟹の会、昂の会、河の会、はりす同人会、文学岩見沢の会、北広島市民文芸協会、江別文学の会、北海道鉄道文学会、そして私も札幌文学会など十誌の代表とメンバーで約四十人。当日は出席できなかつたが、緒里尽文学会なども趣旨に賛同してくれた。

設立総会では各同人会の活動が紹介されたほか、今後の取り組みも提議された。同人雑誌フェアの開催や各誌の秀作を集めた作品集の発行、ホームページの開設なども提議された。当面は「懇話会」として、ゆるやかな交流を進めることを全会一致で決め、散会した。もちろん、二次

全国同人雑誌の動き

会、三次会有り、である。

第二回の懇話会は十二月五日(土)に開催することになった。合同フェアや作品集刊行、ホームページ開設のほか、来年十月に徳島県三好市で開催される第四回全国同人雑誌フェスティバルと第二回全国同人雑誌会議への参加などが具体的に提議されるはずである。

こうしたことが北海道の同人雑誌を奮い立たせる引き金になれば、という強い思いから、当日参集できる地域なら札幌地方にこだわらず呼びかけることにし、いま準備中である。

〔札幌文学〕編集人／北海道文学館報 2009.11.20
第79号より「私の『文学的近況』」を転載)

第二回 札幌地方同人雑誌懇話会 出席者

2009年12月5日(土) 11時

- 緒里尽文学会 佐藤玲子
- 鈍素同人会 中本俊生
- 文学岩見沢の会 堀 利幸
- 河の会 佐藤 允
- 蟹の会 栗山佳子
- 昂の会 蒲生ゆかり
- 中村久子

- 〃 〃 小野寺麻理
- 〃 〃 三浦誠一
- 〃 〃 佐藤京子
- 〃 〃 鈴木鶴子
- 〃 〃 梅津 其
- 〃 〃 小岸 昭
- 〃 〃 安高誠吾
- 〃 〃 加地幸恵
- 〃 〃 小林 隆
- 〃 〃 白石敏男
- 〃 〃 福島昭午
- 〃 〃 石塚邦男
- 〃 〃 入谷寿一
- 〃 〃 山岸 久
- 〃 〃 笹原実穂子
- 〃 〃 坂本与市
- 〃 〃 望月芳明
- 〃 〃 萩原英一
- 〃 〃 岡田芳明
- 〃 〃 今 洋子
- 〃 〃 佐々木正夫
- 〃 〃 坂本順子
- 〃 〃 山内香波
- 〃 〃 小野規矩夫
- 〃 〃 田中和夫
- 〃 〃 小林和太
- 〃 〃 木宮節子
- 〃 〃 熊沢静子
- 〃 〃 天川真佐子
- 〃 〃 須藤恭弘
- 〃 〃 池添しおり
- 〃 〃 林下英二

北海道鉄道文学会
札幌文学会

中西出版代表取締役

札幌地方同人雑誌懇話会 提出議案

2009年12月5日

1 ホームページ「北海道の同人誌」への参加について
 四年前、中西出版のホームページに「北海道の同人誌」欄が設けられ、現在八誌(鉄道林、人間像、文芸砂山、譚、ブレイメン館、風、江別文学、札幌文学)が取り上げられています。その後、更新されておられません。そこで今回、中西出版の林下社長にお顔いをして、これをいっそう充実させ、地域を越え、世代を超え、書き手の新たな出会いとなる同人誌紹介の場とすることとなりました。この機会に札幌地方同人雑誌懇話会参加の同人会は、ここにも参加を希望いたします。最新の同人誌と沿革などを中西出版の担当者へ送ってください。掲載には費用はかかりません。パソコンに「北海道の同人誌」と入力し、クリックすると閲覧することができます。

2 札幌地方同人誌フェスティバルの開催について
 二〇一〇年九月ころを目標に、紀伊国屋書店札幌本店(丁R札幌駅西口)一階インナーガーデンで札幌地方の同人誌の展示・即売会を開きたいと思えます。展示は同人誌のパックナンバールはもちろん、同人が出版した単行本など、にぎやかで人目を引く工夫をこらしたものを希望しています。各同人会の賛同を得られたなら、紀伊国屋書店札幌本店の

担当者と連絡を取り、日時を予約したいと思えます。費用はかかりません。

3 札幌地方同人雑誌推薦作品集(仮称)の刊行について
 二〇一〇年九月の同人誌フェスティバルの開催に合わせて「札幌地方同人雑誌推薦作品集(仮称)」を刊行したいと思えます。これまでの数年間に各同人誌に掲載した作品一篇をそれぞれの同人会で選り、推薦作とします。原稿枚数は三〇枚程度で、一五ページ以内。巻末には各同人会の沿革と近況を載せる。判形はA5判版で二段組み、一六〇〜一七〇ページ。発行部数は三〇〇部で、市内の主要書店に販売を委託するほか、マスコミに働きかけて一般への周知を図ります。

同人並びに同人会の経費負担はありませんが、作品掲載者には一〇部程度を定価で購入していただくことになるかもしれません。定価はおおむね一部一〇〇〇円〜一五〇〇円程度の見込みです。第一回(第一集)が成功すれば次の第2回(第二集)へ続くと思うので、その節には各同人会でも宣伝と販売に積極的に協力してほしいと思えます。編集・印刷・製本・販売・発送は中西印刷(株)、中西出版(株)が採算を度外視して行ってくれることになっています。各同人会の賛同が得られたなら六月に開催予定の懇話会までに推薦作を決定していただきたいと思えます。

4 第四回富士正晴全国同人雑誌賞応募について

同人雑誌とその活動を対象とする隔年実施の富士正晴全国同人雑誌賞の応募は、二〇一〇年三月末日が締め切りです。過去二年間に発行されたもので一誌一号の応募です。応募誌の送り先は徳島県三好市市教委の富士正晴全国同人雑誌賞実行委員会です。

5 全国同人雑誌フェスティバルについて
 上記の4と関連しますが、二〇一〇年十月三日・四日・五日に徳島県三好市で全国同人雑誌フェスティバルが開催されます。阿刀田高日本ペンクラブ会長による記念講演のほか、第二回全国同人雑誌会議(シンポジウム)、作家と読者交流の集い、全国同人雑誌賞受賞式、ま

ほろば賞公開選考会などが行われます。格安ツアーで高知、松山、道後温泉など「坂の上の雲」一帯を周遊しながらの参加、という計画はどうですか? 来年の話ですが、計画中です。

文学好き若者集まれ

同人雑誌懇話会が発足

札幌圏で初

札幌圏の同人誌関係者が13日、「札幌地方同人雑誌懇話会」をつくり、札幌市内の本場で設立総会を開いた。メンバーの高齢化が進むなか、文学好きの若者を引き込み、活性化させる狙い。札幌圏で同人誌の集まりができるのは初めてという。(上田豊子)

設立総会では同人誌「どこ」の活動を紹介。この中で「若者にはインターネットなどの作品発表の場があるが、文芸批評され意見を言いつつ、若者も新しい同人誌を作りたい」といった熱い意見も出ていた。今後の取り組みとしては、ホームページの

開催や各誌の秀作を集めた作品集の発行、ホームページの開設などの案が出た。田中さんは「多くの人が参加してほしい」と話し、北海道ならではの環境が生まれるような環境をつくりたい」と話している。参加の申し込みなどは田中さん(電話011-548008)へ。

第二回のお知らせ

関東同人雑誌懇話会(仮称)準備会

関東同人雑誌懇話会(仮称)準備会第二回を開催します。
 ●平成二十二年三月十四日(日)午後一時より
 大田区民プラザ会議室にて

関東申信の同人雑誌の方々ぜひ御参加ください。
 参加ご連絡は03-5706-7847まで
 全国同人雑誌振興会仮受付



同人誌の活性化に向け意見を出し合う参加者

「自分が小説を持ち寄って発刊したり、作品を発表したりして、田中さんによると、札幌圏の同人誌のピークは昭和30年代で、昭和30年代で、20誌を越えた。現在は10数誌で、中心メンバーの年齢は60代と高齢化しているという。

渤海

富山県の同人誌環境

二年連続で本誌から掲載同人誌紹介の依頼を受けた。しかしながら、二〇〇八年夏の二十四号に文芸同人誌「渤海」について、「書く」「寄る」「出す」の見出しで基本的なことは書かせて貰った。そこで、折角の機会なので今回は富山県の文芸同人誌を囲む環境について、編集部の手承を得て書かせて貰うことにした。

●地元での反応

当「文芸思潮」は全国で刊行されている文芸同人誌を暖かく見守り、支援して下さっているが、富山県内、北陸においても文芸同人誌に対する同じ暖かな視線を感じる。

我々が同人誌を刊行する度に、まず中央の文芸雑誌、読んで貰いたい作家、富山県内の文化関係者にお送りする。その際、地元の新聞社、三大新聞の富山支局などにも送る。そうすると、一週間から十日ぐらいの間の地元二紙、北日本新聞と富山新聞の文化欄に「渤海」の新しい号が出たことが紹介される。文化部記者の好みにもよるが、掲載作品の一作は読んで書いてくれる。その他の作品については、作者と題名が紹介され、問合せ先の編集部電話番号も掲載してくれる。こうして新聞に載ると、必ず一、二通の電話があつて最新号をお送りしている。

「渤海」ではこの刊行から一ヶ月後ぐらいの休日



2008年(平成20年)8月 / 「渤海」夏期研修
長野県松本市の「窪田空穂記念館」向かいの「空穂生家」にて

の午後合評会を行う。内輪の同人が大半だが、新たに要望があつて「渤海」をお送りした方も参加されることがある。

このあと同人は、またせつせと次回作に励むことになる。その後、北日本新聞は上半期と下半期に分けて、同人雑誌評を載せてくれる。地元の大学の先生が書いて下さる。富山新聞の方は年末にその年に出版した同人雑誌の評を載せてくれる。こちらは県内の同人誌のベテランの主宰者が書いてくれる。いずれも丁寧な読んで頂いている。なかなかの辛口だが、励みになつて頂いていることは間違いない。富山新聞系列の金沢の北國新聞社が刊行している季刊雑誌「北國文華」にも北陸の同人雑誌評が載る。金沢の大学の先生が丁寧な評をおられる。地元での反応はこういうところだと思ふ。

●県内の発表・応募の場

この「とやま同人誌会」が発足当時から北日本新聞社、或いは富山県芸術文化協会に粘り強く働きかけて、こういう暖かい環境が生まれたように思う。

そんな中で今新たな動きも見られる。それは、富山県の越中文学館構想である。この構想の推進には北日本新聞社も尽力しており、昨春秋に「越中文学展」を開催した。県出身、或いは縁の作家の直筆原稿などの資料を県民会館で展示し、予想を超えた賑わいだった。その文学展の盛況を追い風にして、目下県内の文学関係者の意見を聞きながら、構想の具体化に向けて研究が始まったところである。

●「隠し文学館 花ざかりの森」

そこで、この「越中文学展」の開催にも協力した小さな文学館を紹介させて貰いたい。私が個人で開設した文学館である。極めて我田引水になるが、「文芸思潮」編集部の手承というところでご了承頂きたい。

館名は「隠し文学館 花ざかりの森」と言う。文学館の冠の読みは「かくし」だが「ポケット」の意味を含む。ポケットに入るような「隠れた小さな文学館」ということになる。館名の「花ざかりの森」は作家三島由紀夫の第一著作集の題名である。館名の由来のとおり、当館は三島関係の文学資料を集集・保存・展示する文学館である。



2008年(平成20年)3月に開設した「隠し文学館 花ざかりの森」全景

こういう内容の文学館を個人で開設すること、また、三島の著作名「花ざかりの森」を館名とさせて頂くことについて、故三島由紀夫氏のご遺族にご案内とお願いをしたのは平成十九年九月だった。まったく唐突なお願いだつたにも拘わらず、ご理解を頂き、ご了承を頂いた。まさに天にも昇る気持ちだった。

その許諾を携えて、東京・駒場の日本近代文学館の中に事務局がある全国文学館協議会に正式に入会させて頂いた。同協議会には機会ある毎にこの指導を頂いている。

「三島由紀夫の文学に惹かれたきっかけは何か」と、文学館の開設取材に来た新聞記者によく訊かれた。「金剛寺」だと答えると、「それだけで何故文学館の開設にまで至ったか」と訊かれた。

「渤海」の夏季研修等で県外の文学館を訪ねるうち、自分の三島関係資料も、こうして展示して多くのの人に見て貰えるのではないかと、何年前から思うようになった。その思いは定年を目前に、より強いものになった。

そして、退職を一年後に控えた平成十八年一月から具体的な文学館の設計に入り、同十九年三月の定年退職を機に建築工事に入った。

建物は同十月に完成し、そのあと、「よみがえる三島由紀夫展」という開館記念展のテーマに基づ

次に参加している同人雑誌以外での発表の場、応募の機会もいくつか提供されている。まず、北日本新聞が掌編小説を毎月募集している。資格は県内在住か県出身者だ。枚数は原稿用紙十枚、夕刊で入賞、選奨作品が発表される。同紙では年一回北日本文学賞も全国展開で募集している。こちらは三十枚で正月の新聞に入賞、選奨作品が発表される。この賞はかなりレベルが高い。また、富山県芸術文化協会が「とやま文学」という雑誌を年一回刊行している。こちらには県内の同人誌作家に新作の発表の場を提供してくれている。県内の同人誌で研鑽を積んだ人が順番に発表している。この「とやま文学」では同時にとやま文学賞も設定している。

また、「北國文華」から、県内の同人誌作家に作品の依頼がくることがある。こちらに発表すると、目次で既成作家と名前が並ぶ。発表の場、応募の機会と言うことでは大方こんなところではないかと思ふ。

●「とやま同人誌会」と「越中文学館構想」
このように富山県の同人誌は大変恵まれていて、一挙にこういう状況が生まれたわけではない。

それを語る時、「とやま同人誌会」の存在を忘れてはならない。この会は、富山県芸術文化協会の発足と相前後して結成された。創作することは、本来個人の営為だが、お互い書く苦勞を語り合おうと発足した。年一回、十一月ごろに総会、講師を招いての文学シンポジウムを開催している。同日に各同人誌からの推薦作の合評を行い定着しているようだ。現在は県内の七、八誌が参加している。

いて、三島の生涯の仕事が一望できるように資料の展示を始めた。そして、平成二十年二月二十九日に「隠し文学館 花ざかりの森」の開館式を迎えた。式典には、山梨県立文学館館長、石川近代文学館理事長、金沢の泉鏡花記念館副館長など、文学館関係の皆様にもご列席頂いた。

約一ヶ月間の記念展には県内外から沢山の皆様が来館された。開館展を終えて、一旦休館したが、要望があれば団体、個人を問わず日程を調整して頂いて貸切バスも何回か迎えた。

今年、平成二十一年三月の開館一周年記念「新資料でよみがえる三島由紀夫展」の定期開館後も同じように予約が絶えない。四月には、インターネットのホームページや旅行雑誌で知ったと東京、千葉、金沢から、個人のお客様を迎えた。

余りにも衝撃的だった最期のため、また多くの作品が文学的な毒を含んでいるため、三島はこれからも色々な見方がされていくだろう。しかし、当館は三島文学を真摯に見詰め直す場として運営して行きたいと思っている。

富山県の文学状況を語るうち、当館の紹介に多くのスペースを割いてしまった。文学に対する熱意故とお許し頂きたい。

(杉田欣次 ● 文芸同人誌「渤海」編集委員・隠し文学館 花ざかりの森館長 富山市)

渤海
〒930・0916
富山市向新庄町二一四・五 杉田欣次方
☎076・4517770

30

徳島全国同人雑誌会議
プライベート
全国同人雑誌縦覧展
記念フォーラム「同人誌の現状と将来展望」



去る十月三日(金)四日(土)五日(日)、徳島ペンクラブの主催により全国同人雑誌縦覧展が徳島県徳島市の県立文学書道館で開催された。三好市の協力により、「富士正晴全国同人雑誌賞(三好市主催)」に応募された全国の同人雑誌を一挙に展示、同時に行なわれた徳島文学クイズなどを含め、たくさんの方の入場者で賑わった。

○冊、徳島県内同人雑誌一五〇冊その他一四〇冊、合計七四〇冊が日本地図を形どったボードの上に陳列され、あらためて日本全国の文学表現の大きな広がりを実感させた。「文学の原点が見えてくる」のサブタイトル通り、日本全国で創作活動を行なっている人々の情熱が浮き上がってくる展示だった。

五日の最終日に、記念フォーラムとして「同人誌の現状と将来展望」が行なわれた。徳島ペンクラブ副会長岸積氏の司会により、会長山下博之氏と、三好市市長俵徹太郎氏の挨拶に続いて、中部ペンクラブ会長・三田村博史氏の基調講演を元に、堀内守名古屋大学名誉教授、森啓夫全国同人雑誌振興会会長、五十嵐勉「文芸思潮」編集長、「飛行船」主宰竹内菊世氏などが、それぞれの関わっている同人誌や活動を軸に発言した。文藝春秋社の「文芸界」が同人雑誌評を中止することなどをめぐって、活字文化そのものが一つの曲がり角にきていること、視聴覚メディアの進歩によって活字離れが進行しているが、逆に同人誌によってな小回りのきく主体的なメディアの表現活動が、人間の思考力を保持していくうえで重要になっていくこと、どのように同人雑誌を振興させていく



ESSAY
夜桜

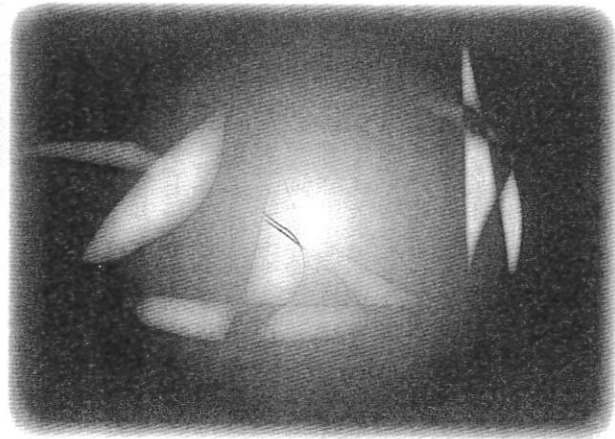


森崎房枝
もりさき ふさえ
大正14年生まれ
主婦
東京都在住

帰りの電車に揺られていました。私の胸の中には、真っ暗な灯火管制の夜があり、その暗がりへ、マッチの明りでふわりと浮かんだ枝先の花影がありました。私はそんな夜桜の下で、少年の面差しをした海軍中尉と、その側で懸命にマッチを擦り続けた娘の幻を、思い描きたかったのかも知れません。

私は今も彼らの健在を信じていて、あの頃、窮乏な軍艦の中で、死と向き合ってた暮らしていた若い彼らが、私の家の畳の上で、手足を伸ばして眠れるという、ただそれだけの事を喜び、ささやかなもてなしに感激した姿や、その笑顔を、悲しまずに思い出せる事のできるのです。

絶え間なく揺れる電車の音が、帰らない時を刻んでいました。若い頃の、思い出のすべてが、戦いつながってしまう切なさや、私の胸の裏を熱くしていました。



蘆溝橋 遠足の頃

東山昇 著

我が国には再びない中国北京での
少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋

定価 1300 円 (送料込)

東山昇 著

遠足の頃

千葉日報社刊

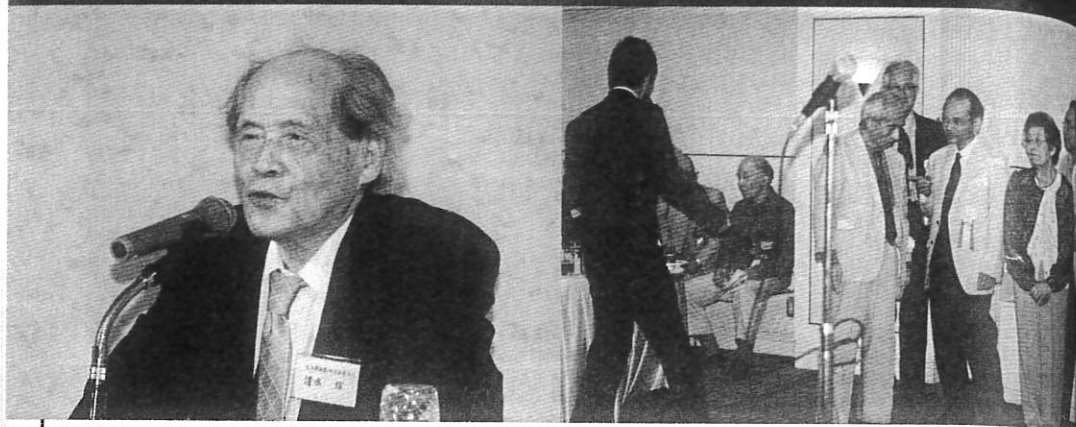
佐倉市中志津 1-13-2

注文先 アジア文化社 ※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

記念祝賀会



清水信氏の講演



中部ペンクラブ会長・三田村博史氏



名古屋大学名誉教・授堀内守氏



「宇宙詩人」主宰・鈴木孝氏

名古屋の月刊同人雑誌「北斗」はこの二〇〇八年九月にめでたく記念すべき550号を迎えた。また昨平成一九年度名古屋芸術奨励賞を受賞した。「人生の至難の業は持統の、継統の『精神』にある」という記念号の中の尾関忠雄氏の言葉通り、継統の精神が一つの結晶を見た。

これを記念して会場のルブラ山王に多数の人が集まり、550号を祝賀した。記念会として清水信氏の文学講演会があり、一つ一つ鉛の活字を組んでいた頃の苦労話や、文学や個人の思いを夜空の星に例えての話などで魅了した。中部ペンクラブ会長三田村博史氏、及び名古屋大学名誉教授堀内守氏「宇宙詩人」主宰鈴木孝氏が「文学の未来」について、それぞれの立場から示唆に富んだ提言をした。鈴木孝氏のフランスの詩の事情については、目を開かれる詩の新側面を示された気がした。

現在月刊同人誌は全国でも数えるほどしかない。月刊での550号の偉業を称えるほどの華やかな祝賀のうちに、さらなる継続をめぐらしてめでたい記念の宴となった。

おいても、書かれた当時に絶賛された『真空地帯』が今では色褪せたものになっている、という指摘がありました。また、柴田練三郎の『眼狂四郎無頼控』の見直しもされました。前回の座談会において、伊藤さんが大衆文学として文壇で顧みられなかった、中里介石の『大菩薩峠』を再評価すべきであることを言われましたけれど、これもそうであったと思いますが、作品は変わりません。しかし、時代が変化して読者の意識が変わって来ると、作品から受け取るものも変わってきます。その中で生き残っていく作品が本当に優れた文学作品だろうと思います。このことの確認が今日の大きな成果であったと思います。

今後は、「第三の新人」以後における日本文学の展開、また同人雑誌作家たちに戦後文学がどのように継承されているのかの検証などの問題を、皆さんと相談しながら座談会を続けて行いたいと考えています。

(中部へん) 15号より転載)

見解ばかりでなく、皆さんのセンス・好み・読書傾向・透徹度・意見のまとめ方・問の置き方・強調の仕方までを築くことが出来ました。

「戦後文学」といつても、その全体像を描き出すのは困難です。全体を統合する原理は失われ、現象は多岐にわたる、様々な多様性が次々に新奇なカタチで登場します。しかし、私たちが確かめてきたのは、どの作品にも「否定」という契機があることです。現代は「書くべき対象として」あるのではなく、書き手もまた現代に関わりかつ関わられ、とりわけ「あえて現代に関わり」という構えがあるということです。関わりつつ書くのですね。その作家の嗅覚力とでも言うべき何かを、どのように選ぶと自分に最も鋭く関わらしめることになるかを覚知する、そういう図柄が浮き上がります。もちろん、この図柄は読者たる私たちに当てはまります。

第三は、ちよつと奇妙に響くかも知れませんが、「近代日本」とは、義理・人情からの「個」の解放というさわやかなイデアを理想としていました。対照的に、どろどろした暗いイメージで仕立て上げられたのが封建遺訓です。それは、家義理・人情というどろどろしたものに仮託されました。私小説は、「個の解放」という理想を共有の神として存立したものでした。戦後の批評は、私小説の破産を宣告したのは「存知の通り」です。してみると、戦後文学の「神」とは何だったのでしょうか。それが「戦争」でした。戦争から帰った復讐者たる作家たちは「戦争」こそ、「他者」に語りかける契機になり、新たな読み手を創り出す媒介だと考えたのです。「戦争」というテーマを、

読み手をくぐいと惹き込んでくる現実には仕立てよう、それは、あらゆる表現方法を駆使して読者の目を醒ますテーマでもありました。

「民俗的な応答をしてくれる『神』ならいい。しかし、沈黙しているだけの『神』ならば、メビウスの輪のように、やがては自分とも思えぬ自分に対面せざるを得ません。『個』って何だ。『個』は解体して、塵墟を彷徨います。かくて、物語性を薄めて、意外さや追跡などのために仕組まれる『修業仕立ての作品』も現れました。これぞサルトルの言った「出口なし」や「不条理」です。他方、現実否定の契機として、「性」と「殺人」がありますが、そのテーマは、往々にして人間の不幸を見逃してしまいがちな「生命の誕生」という宇宙的規模のマクロなテーマとなったり、「DNA」というような並みの知識では了解不能なミクロの世界へと通じてしましますし、反面、嘘とおしゃべりを招くテーマでもあります。

第四は、「虚構」についてです。そもそも「リアルな表現」と評されるものも、しよせん言語によって構築される以上、ゲンジツをベタに書くことはしません。何を選択して、何をネグレクトするか、何を前景にし、何を背景に押しやるか——こういうゲシュタルトを抜きにしては、表現は不可能でしょう。「戦争に負けた。その日の夕焼けはとりわけ美しかった」——そういう記述は、出会う場合、その「とりわけ美しかった」という実感は、終戦の日から遠く離れた今日の読者でも、難なく共有できましよう。私たちは、特定の時にその特定の場になくても、こういう実感は追体験できます。それは、人間の言語のもつ象徴性のゆえで

です。ですから、「私はこの作品が出版された頃は、まだ生まれていませんでした」という前置きも意味を二重にします。①その言葉とおり、「この世に存在していなかった」ということ。②もう一つは、へにかかわらず、それゆえにこそ、よりよく読み解けた」ということ。③その文脈こそが大事です。それは、へにかかわらず、それゆえにこそ、という相反する局面を組み込んでいます。それを活用することです。

実は、これこそが「読む」ということの悦楽だと教えてくださったのは、始めに問題提起をしてくださった国司さんです。

まとめとしては少々長くなりましたが、皆さんの意見をまっとうに生かすためにも、いつも私たちを導いてくださる国司さんの活き活きとした問題提起をまっとうに生かすためにも、これが必要でした。本日は有難うございました。快き疲れを大切にして、また次回のテーマに挑んでいきたいものです。

駒瀬 これまで「戦後文学の再検討」を四回に亘って座談会として行ってきました。今日「第三の新人」と言われた人たちの作品を検討し、評価の直しをする中で、これまでの評論家たちの評価とは違った我々の結論めいた評価が出てきたように思います。その中には、この戦後文学の継承がプロ作家よりもむしろ我々同人雑誌作家たちの中で行われている、という指摘もありました。

また、今回の座談会のもう一つの成果は、堀内守さんから提起された読者論ではなかったか、と思います。ドストエフスキーの『白痴』の評価の変遷が例に出ましたが、今回の日本の戦後文学に

「久保先生、自分、これでありますが……」
ふいに声がかかり、振り向くと橋本が職員室を出ようとしていた。部員が二人しかない野球部を、根気強く指導している熱血漢だ。この春に大賞を出したばかりの新任教師である。

「お疲れ様。それにしても、たった二人を相手によくやってるね」
「生徒に引つ張られてるんですよ。何しろあいつら、休まないですから。甲子園って言葉も当たり前のように口にしますよ」

「あきらめてないんだ」
「そうみたいです。来年一年生が七人入ればメンバーは揃う。それがあいつらの計算なんです」
橋本は日に焼けた顔をほころばせ、

「じゃ、失礼します」
そう言って出て行った。一年生をあと七人。そして甲子園出場。本当は橋本の計算なのだろう。生徒こそは、橋本の熱気に引つ張られているのだ。

新年度を迎え、私は一年生の担任を受け持つことになった。そればかりか、生徒指導部として連日学年団を招集し、意見を束ね、指導方針を立てる日々を追われていた。問題は山積していたから、四月に入ってから、連日帰宅は遅かった。机の上を整理してから、ノートパソコンの電源を切った。そして戸締まりのために、一つだけ開いていた窓に向かった。いったん閉めかけて、思いどまり、窓外に顔を突き出した。グラウンドの向こうには漆黒の樹林公園が広がり、その向こ

うには街の灯が見えていた。
夜九時と言えば、N高定時制では野球部がそろそろ練習を始める時間である。一つしかない照明が届く範囲そのままの形に布陣して、部員がノックを受けるのだ。そのいびつな陣形が、グラウンドの闇に一瞬浮かんだ気がした。

野球部の顧問として、私も戯れにノックを受けたことがあった。高く打ち上げられたボールは、照明の届かない上空で一度消える。と、次の瞬間には数メートル先にまで来ている。結局間に合わず、私はボールを顔に直撃させたのだ。施設設備の問題だ。教育委員会はこの現状を認識できているのか。このままでいいんかい。かろうじて洒落を言っただけの鼻血を見たたん梅しくなって、私はまたあれこれと言ひ募った。それをしらべると見ていた生徒が言った。

「先生やお、あなたが言っただけで、いい加減覚えるよ。球見るんじやなくて、球筋見るんだよ」
球そのものを見るより、球の軌道を想像することのほうが大事なのだ。生徒はそう力説したのである。

四月になっても、金作からの連絡はなかった。私はそれを永遠に待とうとは考えていなかった。ただ、金作が嘘の背後に隠したものが、浜田が事実の後ろに隠し持っていたものが知りたかった。それは、全日製の鶏どもがひた隠す、涙の在りかを知ることでもあると思ったからだ。教師を続けようと思った。
窓枠に肘を乗せたまま、ふと思いついて息を吸い込んでみた。沈丁花の香りはどこにもなく、冷気の中に微かな土の匂いを嗅いだだけだった。

急に風が強くなり始め、顔が風になぶられた。春の風は、いつまでもそうされていたいほどに、心地よかった。

鈴木信一
すぎき しんいち
1962年埼玉県生まれ。横浜国立大学教育学部国語科卒業。埼玉県狭山緑陽高等学校教諭。著書に『800字を書く力』（祥伝社新書）がある。宮本輝氏選・第37回日本文学賞選奨、第18回東北北海道文学賞など受賞。



同人雑誌紹介

文芸東北

宮城県

仙台から日本文学に新風を吹き込む

月刊「同人雑誌」文芸東北は昭和34（1959）年11月25日に創刊第一号を発刊。いろいろ幾多の苦難とたがいのながら、平成20（2008）年の1月号で500号を記録。

当時詩を書き、エッセイストとしても活躍していた新聞記者の大林しげるは、敗戦前に台湾の中等学校の教諭でその作品『南方移民村』で台湾文学賞を受賞した浜田雄雄や、NHK仙台に勤務していた改造文学賞受賞の作家たちをはじめとし



挨拶する「文芸東北」代表・大林しげる

て、作品を発表する機関の必要を痛感していた詩人・作家・エッセイストたちと語り合っていた。

さらに東北大学文学部長で歌謡「群山」を刊行した著名な歌人である扇知忠雄教授、孫柳の号で俳句『嬰婁』を主宰し詩人としても活躍していた永野為武東北大学教授（理学博士）、詩人として活躍していた石井昌光宮城学院女子大教授（後に学長）の三氏も大林の熱声にも二もなく、最初の同人となって支援した。

『文芸東北』は昭和35（1960）年2月、第三种郵便物認可を受け、平成20（2008）年6月号現在で505号を迎えた。

この長い継続の中で教授たちは三氏ともにそれぞれの善行を褒められて無事安寧の大城に住み、多くの同志たちも善行を賞讃されて幸せの郷の住人になっているはず。会員諸賢の移動はあったものの、地方の文学誌としておよそ五十年に近い年月、欠かすことなく発行し続けたことは、文学の世界の人々の努力の研鑽と積善によるのだと思惟している。

また、文芸誌発行だけにとどまらず、平成元



（1989）年に『文芸東北』創刊30周年をよるこび、同人一同の大賛成でさらなるよき社会の創造をめざして、『東北文学賞』を創設。人間社会の文化と平和の世界と、すばらしい人間精神を築きゆく新人作家の発掘・育成、ひいては現代から未来へと、日本文学に新風を吹き込むことを念願、選考委員に八木義徳、宮本輝、青野聰の三氏を迎え、第1回目は東北6県在住者に限定して作品を募集した。

翌年の第2回より、伊藤桂一、大河内昭爾、三好京三の三氏を選考委員に、北海道の方々の熱意を受けて『東北北海道文学賞』と改め、応募条件を東北・北海道地域の在住者、出身者など地域に関係ある方々に広げ、今年四月に第18回の受賞者を世に送った。現在は第19回の文学賞の作品を受付中である。

第1回の文学賞受賞の渡辺毅さんは、その後、第12回坪田譲治文学賞を受賞し、さらに第8回歴

槐 kai

千葉県

カタツムリの如く遅々と、真剣に

創刊は一九八七年。二十一年前になる。今年六月に出た26号が最新号だから、いかにも遅々とした発行である。

初めは三人の女が、互いにそれまでいた同人誌をやめて始めた、おそらく極小の同人雑誌である。以後、遠野を除く二人が抜けて、昔の文学仲間だった男性二人が仲間に加わった。一人は今も「槐」を支えるメインの書き手、乾夏生、もう一人は異形の文学に注視する評論の書き手、伊藤和也であった。伊藤の本名は中里敏朗「大菩薩峠」で知られる中里介山の甥で、介山研究でも知られていた。子のない介山の財産を相続した伊藤はいわゆるお金持ちだが、風体を見れば先ずそうは見えない。一種の奇人であり貴人でもあった。この伊藤の紹介で詩人・丸山乃里子が入会。丸山は「詩人会議」新人賞を受けた後、同誌の賞の審査委員にもなったシュール系の優れた詩人である。この丸山の実妹である中里真知子が短歌の書き手として更に加わる。彼女は伊藤和也の妻でもある。天性の童女である真知子を加え、該博なる知識の持ち主、伊藤和也も健在だった頃の「槐」同人会は、まことにユニーク、かつ愉快であった。し



2002年3月
「槐」20号合評会時
ゲスト＝「三田文学」編集長・加藤宗哉氏
他に五十嵐勲氏、菊田均氏も出席

かし、伊藤は八年前に突然亡くなってしまった。今、「槐」は詩人丸山の夫君、江時久（著書複数あり）、遠野の知己である木下伊津子を加えた五人で、相変わらずカタツムリの如く遅き歩みで、しかし、真剣に発行を続けているのはある。
「文学界」の同人誌評が廃止となり、時々はそこで取り上げて貰うこともあり、大いなる励みであっただけに真に残念でならない。しかし、おそらくは商業文芸誌より歴史は古かろう同人誌は、商業文芸誌よりも初発の文学精神をより伝えて、今後も失せはしまいとカタツムリの遠野は考えている。「槐」のメンバーも六十代半ばから七十代にかかった人もいる。近代文学は終わったと言われているが、同人誌でこそ漱石、鴎外を初発とする近代文学精神は、残り続けると信じて疑わない。だが、「一年一発行ではねえ」と、心細くなる声も聞こえて来る。回数じゃない、中身だよ、と啖を切りたいが、その遠野自身が最新号では作品を降した。上手く行かなかったからだ。首をすくめつつ、この小さな同人誌をせめて30号までは出し続けたい願いは、「シカと、真剣に」あるのである。亡き伊藤和也も、トレードマークの黒メガネの奥から、見守っていて下さいな。（遠野明子）

槐

〒285-0846

千葉県佐倉市上志津一七六三

二〇・二〇九

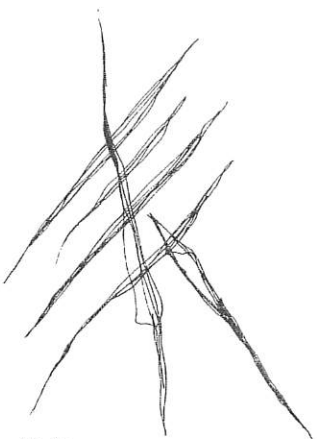
☎043-461-4726

文芸東北

502号

同人雑誌優秀作

賀状



鈴木信一

薄ぼんやりした蛍光灯のもと、十ほどある机には書類や教材の山があって、部屋の空気は相変わらず埃っぽかった。私は真新しい教科書以外は何も置かれていない机をもう一度雑巾で拭いてから、流しに立った。そんな私を注視している人物が、部屋には一人いた。椅子の背に体をあずけた格好で、先ほど何か言いたそうにしている。私は雑巾をゆすぎながら、次にどうすべきかを考えた。

「四十人でスタートしたクラスが、卒業時には半分以下に減る。まるで生き残りゲームですね」

「どうせならと思い、先手を打ってみた。浜田哲男は待ってたとばかりに、

「夕方五時から九時まで。それを四年間。大変な

五分刻りの白頭を掻きながら、身を乗り出して

きた。定時制高校に勤めて二十年目になるという老教師は、いつものように色褪せた茶のコーデュロイヤケットを着ていた。よれたジャケットとは対照的に、相手を物色するような目だけは今日も健在だった。浜田のそんな眼差しを避けながら、私は言葉を継いだ。

「社会人であるぶん、彼らにはけじめがあるだろうし、じつは定時制で良かったって思ってるんです」

「甘いなあ。社会人が夜間だけ高校生をやるんじゃないんだよ」

「……」

「逆だよ。高校生が昼間、仕方なしに社会人をやっているんだ。勤労学生なんてのは昔の話さ。全日制に落ちた子、全日制を辞めさせられた子。集まっているのはそういう連中なんだ」

四日前に辞令交付を受け、定時制勤務であることはそのときに告げられた。N高には、そう言えば各学年ひとクラス、計百名ほどが学ぶ定時制課

程が併設されていたのである。私は何の心の準備もないまま、その日のうちにこの埃っぽい部屋に案内された。定時制職員室は、校舎の隅に捨て置かれたような、薄汚れた部屋だった。

「でも、三十代と五十代の生徒がいるって……」

「例外だよ。ほとんどが十代の子どものさ。本当なら勉強だけやつてりゃいい時代だっていうのに、昼間は無理に働いてるんだ。歪みも出るわけさ」

「給料のほとんどを、全日制の生徒が持てないものにつき込むなんていうのがそれだよ」

「持てないもの？」

「久保さん、分からない？」

浜田の口癖だった。そんなことも知らないのかと言わんばかりに驚いてみせ、答えにもつたいをつけるのだ。

「見当もつきませんが」

「全日制の子が持てないものといったら、申しか

い出した。みつかにはいわなかった。ここでみる
 ひとだまは秋山くんではないのだから。
 その夜のみつかは、ソファをベッドにして休ま
 せたのだが、いつのまにか宮子のベッドにはいつ
 てきた。ごめんさい怖い。宮子にからまるよ
 うにして眠った。みつかの深い傷はまだなまなま
 しかった。宮子は眠れず、朝方少しだけまどろん
 で起きると、みつかはいなかった。台所に書き置
 きがあった。
 「きょう、山梨のおばさまが出てきます。万事も
 ろしく。三人でおいしいもの食べに行きましょう。
 FC・電話のそばのミイラはなんですか」
 宮子は声を出して笑った。みつかにはいつの日
 か蜘蛛助をみせたいと思った。ゆうれいと同じよ
 うに、怖いといったら困るが、それも面白いよう
 な気がした。宮子の脳裏には冬を越した蜘蛛助の
 卵囊が、春になって二つにわれ、次から次へと小
 グモが孵化してくる光景が、恐ろしいほどくつき
 りとみえているのだった。ああ、そのときのこの
 部屋はどうなっているだろう。次から次へとし
 て次へそして次へ……。燦々とした春のひかりの
 なかで、宮子は立ち尽くす。



谷口葉子

たにぐち ようこ
 1937年サハリン生まれ
 盛岡白百合学園高校卒
 シナリオライターを経て、「作家」同
 人のあと、現在「カプリチオ」同人
 第13回婦人公論新人賞佳作掲載
 『失語』で第17回作家賞受賞
 著書『葦の祀り』（有朋舎）『いよよ華
 やぐ』（有朋舎）『草の声』（創樹社）

同人雑誌紹介

カプリチオ

東京都

不定期構想とゼイタク感覚

一九九三年。まさに世の中は世紀末だった。
 名古屋で勇を誇っていた一つの同人雑誌の中心
 人物が亡くなり、組織が変わりはじめ、まだ落ち
 着かない状態のなかで、誤解からくるいくつかの
 軋轢の噂が尾を引いていた。それらと関係あるよ
 うのないような、四十代、五十代の数人が、他
 の同人誌仲間も集めていつの間にか読書会や講演
 会などの形式で会っているうちに、なにやら本で
 も出すかということになった。

そして、誰言うともなしに、同人誌上に自腹を
 切つて小説を載せるという行為は、土台、大変費
 沢な道楽なのだから、思い切つて贅沢をしないか
 となり、ただ文字だけをひたすら並べるような慎
 ましいものでなく、表紙もカットも編集上も存分
 にゼイタクなものにし、その上内容も、同人たち
 が気儘に書き上げた作品を溜めておいて、随時仲
 間が読み廻し、これならばと思った作品が適量に
 集まったところで不定期に発刊する。間違つても
 原稿が足りないと言つて、無理に書き上げるなど
 という愚行はやらない——てなことで話が纏まっ
 た。一九九三年十月。黒人の女性歌手がブルース
 を歌っている多色刷り表紙のカプリチオ創刊号が



編集委員のメンバー。前列左が谷口葉子

小説と評論 カプリチオ

2007年冬 第26号



古本屋のアルケオロジ.....田村 治芳
 蜘蛛の部屋.....谷口 葉子
 夕映えの時.....川口 明子

発刊。「カプリチオ」とは奇想曲、狂詩曲の意。
 発行は二都文学会（東京・名古屋）である。

一号、二号と続いた。誰もが続けようというベ
 クトルの考えを持っていなかったから続いた。ど
 の方向へ進もうと誰も考えない、勿論、年何回出
 そうとも、いつまで続けようという議論もなかつ
 た。ただ広告料をやや多く出してくれる熱意のあ
 る同人がいて、その金でいろいろな特別企画のベ
 ージがつくれた。これが雑誌をリトルマガジンに
 展開させた。時には、広告料が余つたのを蓄積し
 ておいて六七頁の特集タルホ感覚嗜好症「稲垣足
 穂について」を展開できた。（本体一四四頁）
 いつの間にか二十七号になり、同人も五十数名
 になっている。最初はじめたメンバーから一人消
 えた後には、みんな元気だ。

好きな時に好きなものを書き、皆の間を廻し読
 みして、それなりに作品が集まった時に出すとい
 う不定期構想は基本的にゼイタク感覚といつしよ
 に続けている。

あい変わらず、同人の誰も続けようとは思つて
 いない。原稿が集まらなくても心配している者が
 ない。不定期な本だからである。でも熱心に小説
 は模索している。
 （文責 関谷雄孝）

カプリチオ

熱心に小説を模索

二都文学の会
 〒156-0041
 東京都世田谷区赤堤一・二七・二五
 ☎03-3713-7962

渤海

富山県

「書く」「寄る」「出す」

創刊号は一九七四年（昭四九）十二月である。それまで続いていた「文学DARA」を発展解消しての「渤海」発足であった。DARAと言うのは富山弁の「あほんダラ」のダラである。一九七三年（昭四八）八月の「文学DARA」終刊号は十四号であった。十三号は同じ年の五月発行で計画的な解消であった。

したがって次の準備は早かった。翌年一九七四年の三月には「渤海」の設立総会が持たれた。集まった同人は三十名、富山県と石川県がほぼ半々で、関東、関西からの参加もあった。

すでに準備されていた誌名の「渤海」は中国の渤海王国に由来する。九世紀ごろ、渤海国の使節は主に北陸地方の海岸から日本に上陸している。それはこの地が大陸文化の玄関口であったことを意味する。その文化が京の都を初め、全国へ発信されて行った。「渤海」という誌名はその「全国発信」に因んでいる。

創刊号は石川近代文学館気付で発行された。当時の館長の後押しがあつて、暫らくは当館気付で発行させて貰った。しかしある時、新聞のコラムで「自由であるべき民間の同人誌が公の施設を気付にするとは何事か」と皮肉を言われた。そのころには、石川の同人が大分少なくなつていた。また、気付で届く郵便物が文学館の職員に随分手間を掛けていることも軽視できなくなつてきた。そ

こで遅ればせながら、一九九七年（平九）三月発行の三十三号から発行元を富山に移した。

規約では「日本海文化の歴史に根ざした芸術を創造する」と高い理想を掲げているが、なかなか難しいところである。号を重ねることに規約の趣旨に近付いていると思いたい。それは読者の判断に委ねなければならない。

当初は季刊「渤海」を銘打ち、年四回の発行を目指した。「季刊」は今も規約に残っているが、春季、秋季の年二回の発行が定着したのは一九九五年（平七）三月の二十九号からである。

その頃「書く」「寄る」「出す」の同人誌活動の基本を再確認した。節目となる年間計画も決めた。

まず、「書く」については年二回の締め切りがある。秋季号の締め切りは五月の連休明け、春季号の締め切りは十一月初めの連休明けである。当初は締め切り間近になると言い訳の電話や手紙ばかりが編集者に寄せられたが、最近は概ね期日が守られるようになった。締め切り日から二ヶ月近くの編集・調整の期間を持って、秋季号の原稿は六月末、春季号の原稿は十二月の末に印刷所へ回す。二度の校正を経て、春季号は三月十日、秋季号は九月十日付で発行する。実際にはその前月中に納まされており、四、五人が事務局で発送配本の作業をする。この周期で一年が動くようになって今年で七年になる。いろんな機会に、そろそろ春夏秋冬の四季発行に踏み切らないか、と編集者

から提案するが未だ同人の賛同は得られていない。

「寄る」とは、同人が集まって顔を合わせることである。そうでなければ同人誌の看板を掲げられない。「渤海」では年四回は確実に顔を合わせることにしている。一月の新年会から始まって、四月の春季号合評会、七月の県外研修、そして十月の秋季号合評会である。

合評会には同人の知人や他の同人誌の方の参加も得ている。合評会が終わると懇親会があり、合評会で聞けなかった感想や各人の次作への想いについて忌憚のない遣り取りをする。

県外研修は近県の文学探訪といった趣きで続いている。石川、福井、新潟はもとより岐阜、長野、山梨方面へも足を伸ばした。各県ゆかりの作家や歌人の文学館を訪ね、美術館、博物館もコースに入れて見聞を広げている。その土地の酒肴を賞味し、今では同人の楽しい年中行事の一つになっている。

新年会を含め何かに付けて親睦を深めているように見えるが、この年四回は程よい節目になっている。

県外ではないが「渤海」の二十号を記念して、一九八九年に「渤海、渤海国へ行く」という中国研修旅行を企画した。天安門事件で一年延期し、翌一九九〇年（平二）八月には十人の団体を編成して楽しい中国の思い出を作った。



2000年（平12）1月
「渤海」新年会（富山市内）



1990年（平2）8月「渤海、渤海国へ行く」
中国旅行中、遼寧省丹東市・鴨綠江河畔にて



2007年（平19）8月「渤海」県外研修
長野県湯田中温泉郷・「志賀山文庫」にて



2006年（平18）8月「渤海」県外研修
福井県東尋坊・「文学の散歩道」にて

さて、最後の「出す」については勿論お金、雑誌運営経費に充てる会費である。会費には二種類がある。一つは通常の会費でこちらは月二千元で年二万四千元になる。もう一つの会費は「原稿料」である。同人誌では常識になっているが、書いた枚数に応じて印刷の経費を負担して貰う。「渤海」では原稿用紙一枚八百円である。三十枚で二万四千元、五十枚で四万円ということになる。この会費と原稿料を合算し、年二回に分けて雑誌が発行される頃に会計に入れて貰っている。

感謝しなければならぬのは、原稿を出さないで通常の会費だけを納入し続けている同人もおられるということである。「渤海」を支援するために参加されているのである。

こうして同人誌活動を続けている。長い年月とともに各人各様の作風が磨きがかかり、それぞれの作品独自の味が出てきた。「図書新聞」「週間読書人」、そして「文学界」の同人誌評で、発行する度に「渤海」同人の名前を見かけるようになった。この三月の春季号で設立三十四年、五十五号を数える。

（杉田欣次／文芸同人誌「渤海」編集委員）

渤海

〒930-0916

富山市向新庄町二・四・五 杉田欣次

☎076-451-7770

うか。
老いてからの女は、しばしば、殺したいほどの憎しみと抱き合う愛の沸騰を遠い景色のように思ひ浮かべた。そして、巻き戻しのきかない多感な季節に灯りが点るのは、かつての仲間が一人また一人と更に遠くへ旅立つ時である。

「おおい、僕を忘れてへんか」
今の京訛りはセミツペだ。
「ごめんね、忘れたんじゃないの、忘れたかっただけ」
「同じことや、あの日の一番手柄は僕なんやからな」
「わかってる、わかっている」
女は辺りをばはかり声をひそめる。
セミツペは唐木俊夫のあだ名だ。彼もまた名誉ある死にぞこないの一人だった。在学中に海兵隊

に入り、敗戦で姉の嫁ぎ先であるこの町にやってきた。京生まれの京育ちの彼がなぜ京の実家でない備後の田舎町に、しかも姉の夫は全盲の鍼灸師だった。子沢山の姉の家で居候の身は絶えず空腹を抱えていた。あの季節、空腹は慢性の疫病のように国を蔓延し、今更飢餓のわけを訊ねる者がいないように、セミツペの事情を糾すものもいなかった。返ってくる絶望の深さを懼れたからだ。

「おおい、僕を忘れてへんか」
「ごめんね、忘れたんじゃないの、忘れたかっただけ」
「同じことや、あの日の一番手柄は僕なんやからな」
「わかってる、わかっている」
女は辺りをばはかり声をひそめる。
セミツペは唐木俊夫のあだ名だ。彼もまた名誉ある死にぞこないの一人だった。在学中に海兵隊

「びんびんしとる、もつとも周りはえらく淋しゅうなりよったが、死にぞこないが生き残る人も手柄のうちやろ」
「コンニチワ！」
「コンニチワ！」
突然声が掛かった。高く澄んだ童女を思わせる声。
「ようこちゃんだ。ピンクの水着に赤いキャップの少女は今も楢岡の浮き輪に寝かされ、前後をアシスタントにかしずかれてご機嫌だった。アシスタント嬢の健やかで魅力的な笑顔にも増して今日のようにこちゃんは女王様だ。浮き輪の輿からプールのみんなにご挨拶を送り続ける。
コンニチワ！
コンニチワ！

「あの日、大沼への山道にすぎたセミの合唱に誘われてひよいと口から出たものらしい。
「セミが殻を脱ぐんを辛抱して待つんや、ほんでな、脱皮したての柔らかいのを食うと、これがうまいんや」
「どういうわけか女の中で、彼が脱皮するセミを待ち受けて食うさまと、赤ん坊をわしづかみにして頭から食う西洋の大男が重なった。父の本棚から見つけた画集の中で見たのだ。父は少女だった女が勝手に本棚を探すのを嫌っていたから誰にも話したことはないが、「わが子を喰うサトウルス」は怖ろしい絵である。だから、若者たちがおびえて彼をセミツペと呼ぶとき、いつでも嫌な気がした。
「あの日の一番手柄は僕なんやで」
京訛りが抜けないセミツペが自慢げに言う手柄は、溺れる女を救ったことなのだ。抱えられている間じゅう、いや、それから長い間、水着を着けていないことへの羞恥にさいなまれた。
「いい加減に忘れなさいよ、セミツペ、そういう君はまだ元気なの」

同人雑誌紹介

ふくやま文学

広島県

草の命をさむく強く

今年三月、「ふくやま文学」は20号を発行しました。平成元年に創刊号を出してから年一冊の刊行を守り続けて二十年、小説、詩、児童文学、エッセイの四部門からなる同人誌です。現在、正会員、投稿および読書会員をふくめて四十人ほどの集まりです。

創刊のきっかけは、それまで月刊百号以上続いていた同人誌「文芸プラザ」が代表者の病没により廃刊、熱心な文学志向者の発表舞台が失われたことにあります。

福山市は広島県東部に位置するかつての城下町ですが、現在は大手の鉄鋼会社を有する人口五十万の中核都市です。井伏鱒二、木下夕爾、福原麟太郎、山代巴、近くは日野啓三など、風格ある文学者の故郷でありながら、草の根的な同人誌は至って寂しい状況で、「文芸プラザ」を失ったあとは瀕死に陥りました。

こうした崖っぷちの状況から立ち上げたのが「ふくやま文学」でした。当初は小説、児童文学、詩の三部門で、中でも児童文学は皿海達哉氏という中堅作家に支えられて活気づきましたが、身辺の事情で皿海氏が退場されてからは児童文学の書

き手もやめていき、代わりに小説部門が元氣になりました。

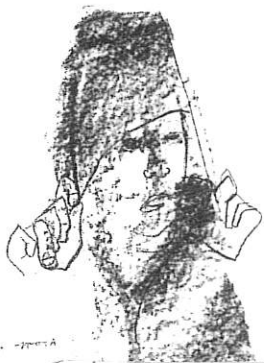
書きたい、自分の思いを今に留めたい、伝えたいの願いを想像力に託して試行錯誤を重ねながら、小説修行が始まりました。同人の溢れる思いが凝縮された創刊号を手にしたときの感激、誰彼を問わずに見せて誇りたいような気持ち、このあとも決して忘れることはありません。

勉強の方法としては、毎月一回部門ごとに学習会を持ちます。小説では、テーマを決めて五枚程度の短編を書きます。モチーフは「待合室」「穴」などの名詞や「走る」「落ちる」の動詞、或いは場面設定をしての状況からイメージを膨らませるというやりかたです。この方法は伝習所で井上光晴氏の授業から学んだもので、想像力を鍛えるのが目的でした。このようにして書き溜めた短編は結構な量になるので、時々手作りの短編集を作っています。

振り返ると、二十年という年月はやはり永い日々でした。この間には、亡くなった人、連れ合の転勤や引越しで抜けていった友、珍しく若者

ふくやま文学

20周年記念 第20号



が入ってきたので喜んでいて、思いが違っていた。その度に大小の摩擦を繰り返して、存続の危機に及ぶこともありました。書き続けたい一念で支えあい窮地を脱しました。
毎年三月一日が発行日。その日、手分けして本屋に並べます。店の人に「平積みにして下さい」と頼むこともようやく慣れました。ある程度の期間が過ぎると回収するのですが、どつと返本の時や、売り切れで追加の連絡がある時もあり、文字通り一喜一憂です。

なりゆきで、「ふくやま文学」は一度も広告を取ったことがありません。同人が印刷費を出し合って発行を続けてきましたが、近年は投稿が増えたので、貧乏所帯のやりくりも少しは楽になりました。しかし、本屋に置かせてもらうのは資金調達のためばかりではなく、見も知らぬ誰かに向けて文学の心を発信したいからなんです。売値は印刷代の半分にも満たぬ額ですが、本が売れると、

壮士が『名古屋文学学校』を開設し、地元の作家や教育者を講師に頼んだ。思想家の本荘可宗、哲学者の真下信一、評論家の丸山静、江戸文学の尾崎久弥、三好信義、「北斗」の木全圓寿、「作家」の小谷剛・曾田文子、短歌は浅野梨郷、俳句は山田麗眺子、随筆は岡戸武平など多彩な人たちがほとんど手弁当で協力した。会場は愛知県岸付近の水産会館で、文学好きの若者が群れるように集まり、小説サークルができ、いくつもの同人誌も生まれた。そんななか「新樹」（戦後すぐ名古屋で発行の雑誌とは異なる）と「草」という同人誌が合併して「弦」を創刊した。東京オリンピックの翌年、一九六五年のことである。ベトナム戦争が拡大し、ベ平連などの反戦運動の声を他人事でなく感じたころである。

一九四九年に戦後第一回芥川賞を『確證』で受賞した小谷剛が「作家」を主宰していた。作家同人の曾田文子が「弦」の指導者であったから、「弦」は「作家」の弟分のように見られていたが、我々は「作家」も「弦」も同人誌にかわりはないという誇りを持っていた。曾田は自身も芥川賞候補にのぼったこともある名古屋では気鋭の作家で、テレビドラマの作品なども手がけていた。明るく開放的で小さなことに拘らない性格は人の心を捉えるものがあつた。

同人誌は三号で潰れると、よく言ったものだが、「羅針」「熱風」「風」「未開地」「造子」そして「無名」という同

人誌が次々と消えていった。それらの同人誌の中からどちらかといえば取り残された人、それでも書かねばおられない人たちが「弦」に合併する形で加わった。曾田の「一緒にやってやりなさい」という明快な一言に仕切られた。

そのころから「弦」は閉鎖的にならず、外に窓を開いて志のある人を受け入れて一緒にやってやってきた。これが「弦」の特徴でもあった。曾田は一九八三年に病魔に倒れたが、遺志はその後四半世紀も続いているのである。「作家」を継いだ「季刊作家」が先ごろ休刊するという。事情はあるにせよ、そうなる前になぜ手を打たなかったのかと悔やまれる。同人誌の危機は、原稿が集まらないとか、事務局がなくなるとか、資金難などが原因となる。我々「弦」でも、一再ならずあつたが、そのたびに皆で知恵を出し合つて続ける努力をしてきた。

同人誌の中には自分らの書いた作品を合評するだけに集まるといふ会があると聞いて驚いたことがある。また、あつた詩を中心とする会では、自作を朗読するのが主で、批評は一切なしと聞いてさらに驚いた。活発な合評は視点を広げるのに役だつし、何よりも自己陶醉に鉄槌を下す神のような存在でもあると思つているからだ。

我々「弦」は毎月欠かさずに読書会を続けて四十三年に及んでいる。古今東西の小説から現代の話題の小説まで、

作品を決めて読んできて話し合うというそれだけのことが、各々の浄化作用とも活力源ともいふべき効用がある。同人が分け隔てなく意見を述べ合い、耳を傾ける。時代の風潮に流されない文学が見えてくる。たとえば若い、病、死に係わる現代の小説のテーマをどのように捉え、感じていのかを考えてみる。俗にまみれないで自分の文体で表現してみたい。自分史であれ、私小説であれ、とことん自分と向き合つてみたい。社会や環境のテーマであれば真がどこにあるのかを見極めたい。

小説を書くことはたとえ虚構の世界であっても、真実を超える力もあると信じていたのだ。同人はいつも数十人で全員が書き手である。メンバーは少しずつ代わってはきたが、この精神は受け継いで伝えていきたい。

文学は耕して耕して自分を創つていくものであり、自分がいくら愚鈍であろうとも、それでも書かないではおられない。まさに「初心忘るべからず」と、いつも創刊号を出す気概でいたのである。

(代表／中村賢三)

弦

代表・事務局 〒463・0013

名古屋市守山区小幡中三・四・二七

☎052・7943430



例会後の忘年会 2007年12月

ただけをちゃっかりゲットしている。だが自分といえばどうだ。自分の生き方を貫くと言えば格好良いが、結局は水の流れに乗れぬ不器用な魚ではないか。ぎくしゃくとぶつかりあって大事な恋人まで失ってしまったではないか。女一人、肩を張って生きて行くことの虚しさが怒りとなって身体中を突き上げる。美晴には自立を目指す女の敵はもはや男ではなく女のように思えて来た。それもその敵はほかでもなく自分自身の中にあつて弱さを武器として襲いかかり、身動きが取れぬほど自分を苦しめるのだ。こんなことに負けるもんか、美晴はしゃんと背筋を伸ばし歩き始めた。やつと今、この仕事についての喜びがわかった気がする。人生を賭けて仕事にかける情熱の意味を掴みかけたのだ。

突然、携帯が鳴った。立ち止まりバッグに手を突っ込んで手探りで取り出すと暗闇の中で着信画面を見る、洋だった。

「俺…」
「久しぶりね」
「俺、明日広島へ帰るんだ」
「そう…」
「元気でな、頑張れよ」
「もちろんよ…」
「美晴はいい女だよ…、美晴と出会えて楽しかった。」

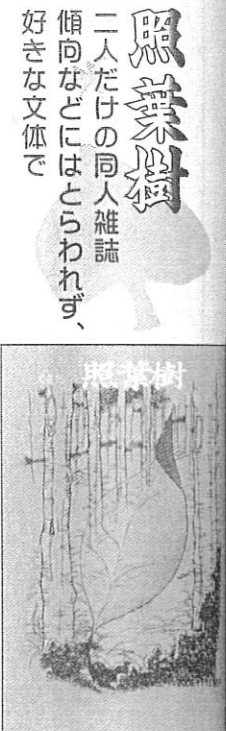


水木 怜

みずき りょう

1943年 福岡生まれ
西南女学院短期大学 卒業
音楽講師としておおよそ40年間の活動と併せて、福岡平和台球場から福岡ドーム球場での、プロ野球のオルガン奏者を約30年勤める。
音楽活動のかたわら文筆の勉強をする。

主な作品
「にぎやかなフライパン」 文芸春秋 2004年度ベストエッセイ集掲載
「緋色のリボン」 文芸社 ラブストーリー短編集 (2007年5月出版予定)
「夢のあと」 福岡市民芸術 38回市長賞受賞、
「蜻蛉」同 39回財団賞受賞など



二人だけの同人雑誌
傾向などにはとらわれず、
好きな文体で

照葉樹は、垂水薫、水木怜の女性二人だけの同人誌です。様々な葛藤を経て、同人誌以外には私たちの進むべき道はない、と昨年の春、創刊に踏み切りました。それまでを振り返ってみますと、二人とも、ただ書きたいという感情が先行して、無我夢中で走ってきた気が致します。

年々、若年層の進出はめざましいものがあり、市場に出回る本を手にとってみても、そこには私たちとは全く異なる文章の世界がひろがっており、私たちは自分の小説世界の在り方に悩みました。

それでも、書きたいという気持ちは強く、挫折することだけは避けたいと思い、日々、書き続けては、発表の場を見いだそうと、投稿も数知れず試みてまいりました。

しかし、懸命に書くことに専念する私たちのまえに、どうしても避けて通れぬ壁を強く意識し始めたのは、ここ二年前からのことです。

例えば投稿一つにしても、傾向と対策を考え、年齢の層を意識し、ニーズに合ったテーマや言葉を選びながら書く

ったよ、じゃあね」
携帯を静かにたたんだ。
見上げると暮れることを忘れた都会の夜空に淡い半月が滲んで見える。たまたま溢れるにまかせていた涙を拭いた。

「照葉樹」2号より転載

ということに割り切れぬ疑問を持ちました。私たちは、今までお互いに異なった人生を歩んできました。

垂水は学生時代より文章を書くことに強く憧れを抱いていました。しかし、学習塾の講師の道を余儀なくされ、年を経て、一応の区切りがつく年齢になったとき、諦めかけていた書くことへの夢が燃え上がり、もはやその想いに抗うことは不可能でした。現在も夜は塾の講師として、昼は非常勤ながら別の仕事を持ちつつ、限られた時間を小説世界に浸ろうとしています。

水木は今までの人生のほとんどは音楽の世界に身を置いていました。収入と生き甲斐が一体となった音楽の仕事は、身体の故障さえなければ恐らく一生続けたと思います。思うように音楽活動が出来なくなる焦燥感のなかで、手探りで辿り着いたのが文学の世界でした。書くということ、それは音楽に通じます。一つのモチーフを自分の感性で自在に組み立て、情熱を傾け我が子を産み出すが如くに創作する喜びを、文章の世界にスムーズに移行することが出来ました。

こんな私たちの人生経験をふまえて、傾向などには一切とらわれず、自分の好きなジャンルで、好きな文体で、思う存分書いてみたいという二人の気持ちが一致して、同人誌活動に踏み切った次第です。

文芸思潮夏期合宿 & 全国同人雑誌最優秀賞公開選考会

文芸思潮
夏期文芸合宿

夏期合宿係公開夏期文芸合宿に参加してあなたの手で最優秀賞を選んで下さい。

夏期合宿 & 第1回全国同人雑誌最優秀賞公開選考会

文芸思潮では、この夏8月18日・19日に吉川英治ゆかりの奥多摩で夏期文芸合宿を行い、そのなかで、全国同人雑誌最優秀賞を徹底的に話し合った末、投票で決定いたします。また文芸講演会もあります。こころゆくまで文学を語り合い、文芸の時空を楽しみませんか。

作家集団「塊」メンバー・文芸評論家参加

1泊2食付 25000円

どうぞご参加ください。

●お問合せ・お申し込みは下記へ

文芸思潮〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL&FAX 03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

奥多摩夏期文芸合宿

奥多摩御岳山「憩山庄」

8月18日10時青梅線「二俣尾」集合

吉川英治記念館見学

文芸講演会

全国同人雑誌最優秀賞選考会

懇親会

フリートキング & 小説作法勉強会

川合玉堂記念館見学

希望者にはオプションで他に鱒釣りなどお楽しみあり

あなたも最優秀賞を選んでください 選考会 8月18日

●全国同人雑誌最優秀賞候補作品はこれまで文芸思潮に同人雑誌優秀作として掲載された作品、およびこれから掲載される作品です。文芸思潮13号「どこかでなくした左の世界」(古澤崇/「じゅん文学」45号)、「壺中美人」(高下俊哉/「空飛ぶ鯨」6号)、および文芸思潮17号「乙姫通り」(宮崎真弓/「いかなご」2号)「エスプレッソが冷めたら」(水木怜/「照葉樹」2号)の4作と次号掲載予定2作の合計6作品です。

●選考会は8月18日(土曜日)に奥多摩の文芸思潮夏期文芸合宿会場で午後2時より開かれます。都合で参加できない方は、郵送などでも参加が可能です。

どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。

選考委員ご希望の方は全国同人雑誌最優秀賞選考委員申込書を文芸思潮にご請求ください。

選考委員申し込みの方に掲載号(有料)をお送りします。文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいただければそのまま選考委員になれます。お申し込みだけで、文芸選考委員となることができます。詳しくは次ページをご覧ください。

●詳しくは文芸思潮全国同人雑誌係まで参加要領をご請求ください。

同人誌を通じて、いろんな方との交流や、作品の合評の場を持つことが出来ました。同じ方向を見つめて熱く語り合う友人との出会いは同人誌に踏み込むことにより得ることができた何よりの財産と確信しています。

自分の作品が人の目に触れ、評価をいただくこと……。それが、これからの作品への確かな足がかりとなり励みになっていきます。

私たちを応援してくださる方々から多くのアドバイスを戴きました。

発行は年二回、春と秋を目指しています。編集発行までの作業は、二人が交互に責任を持つことにしました。

同人誌を発行したことで、私たちの前に一つの大きな道が開けたと強く感じています。

まず全国に、文学を愛し志す多くの方々がおられるというのを知りました。いままでも福岡の一都市で、孤独にこつこつと書いていた私たちにとって、それはまるでモノクロの世界から一挙にカラーの世界が開けた感がありました。



「照葉樹」のメンバー 左・水木怜、右・垂水薫

同人を増やしてはどうか、一人一作品のほうが良いのでは、等々、貴重な意見を賜りました。

私たちも慎重に考え、話し合いましたが、まず、長く同人誌を続けることを考えた場合、各々の異なった感性が摩擦を生じて本来の目的である、創作活動に支障をきたすのではないかとこの危惧を持ちました。作品の数についても、幅広いジャンル、スタイルに挑戦したいという二人の意見

が一致して、限定せずに自由な考えを持つことに致しました。

同人誌発行に踏み切るにあたり、その顔ともいうべき表題を随分考えましたが、試行錯誤の末「照葉樹」と致しました。

二人が九州に在住していることでもあり、九州に多くみられる緑濃い照葉樹の葉が、暖かな日差しの中で豊かに葉群れを成すように、私たちも確かな足取りで号を重ねて行きたいと願いを込めてつけたものです。

照る葉の艶やかさに次号創作の意欲を重ねて、一層頑張りたいと思っております。

いかなご

生まれをばかしの
手作りの雑誌

同人誌「いかなご」の創刊は二〇〇六年七月、六名の同人でスタートした。神戸新聞文芸へ応募の可能性を考えて、明石に住む重光寛子宅を事務局にする事となり、神戸名物の「いかなご」から同人が相談の上「グループいかなご」というネーミングになった。

発足間もないこともあり、同人の負担も考え滋賀在住の宮崎真弓が製本を担当することになり一冊百円で引き受ける業者を見つけた。作品は書式に関わらずワードで作成した小説（一二枚から一六枚程度）を関東に住む稲垣三和に添付送信、稲垣から書式を統一された作品が各自に返信されると、各自が必要に応じて校正、それぞれが四十部を印刷する。

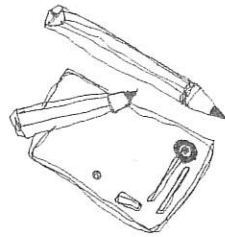
創刊号はテスト版、各自の枚数も少ないのでAサイズ両面印刷でなく真ん中折り、仕上げはA5判の形態、ガリ版印刷よりは高度な仕上がりととなる。作品順は逆五十音、表紙は重光寛子友人の作、無償である。二号からは枚数も三十枚になり書式が統一されたあとの作業は印刷所に一任することになった。

創刊号

寒卵	宮崎真弓
ボタン	松本匡代
桜降る道	藤野 碧
観音様	重光寛子
蔵の中	高野麻葱
ピユア	稲垣三和

第2号

山吹地藏	松本匡代
雪っこ鬼	藤野 碧
追憶(前編)	重光寛子
虎徹	さとう裕(新参加)
敷居	高野麻葱
風おこし	稲垣三和
乙姫通り	宮崎真弓



「いかなご」のメンバー

「グループいかなご」では代表を置かず、重光宅を事務局にするが、事務的な連絡については京都在住の藤野碧が担当する。会計は滋賀在住の松本匡代。松本以外の四名は滋賀において同人誌「ソレイユ」で活躍していたが、「ソレイユ」は代表の家庭事情から自然消滅となり「グループいかなご」が創刊される。創刊時に加わったのは松本匡代と京都に住む高野麻葱である。

創刊に続いて第二号が二〇〇七年一月発行された。そこには黒一点大阪府に住むさとう裕が加わる。

第三号は七月末、九月までには発行される。

同人は月一回、滋賀県大津市に於いて会合を持つ。米原から明石という東海道線の長さを思うと大津が一応真ん中なのだが、全員が揃うのは勤務の都合などのありなかなが大変である。

